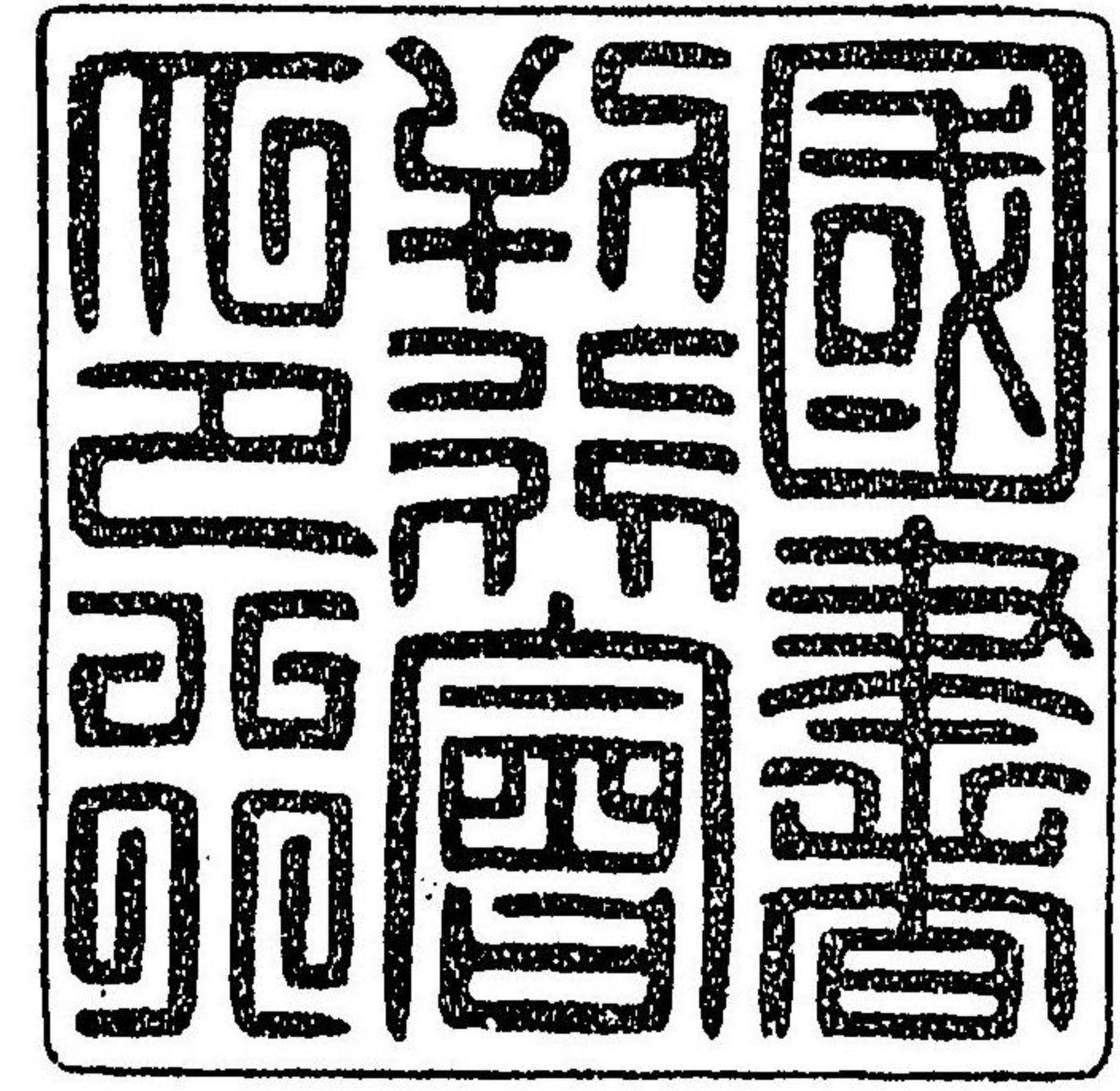
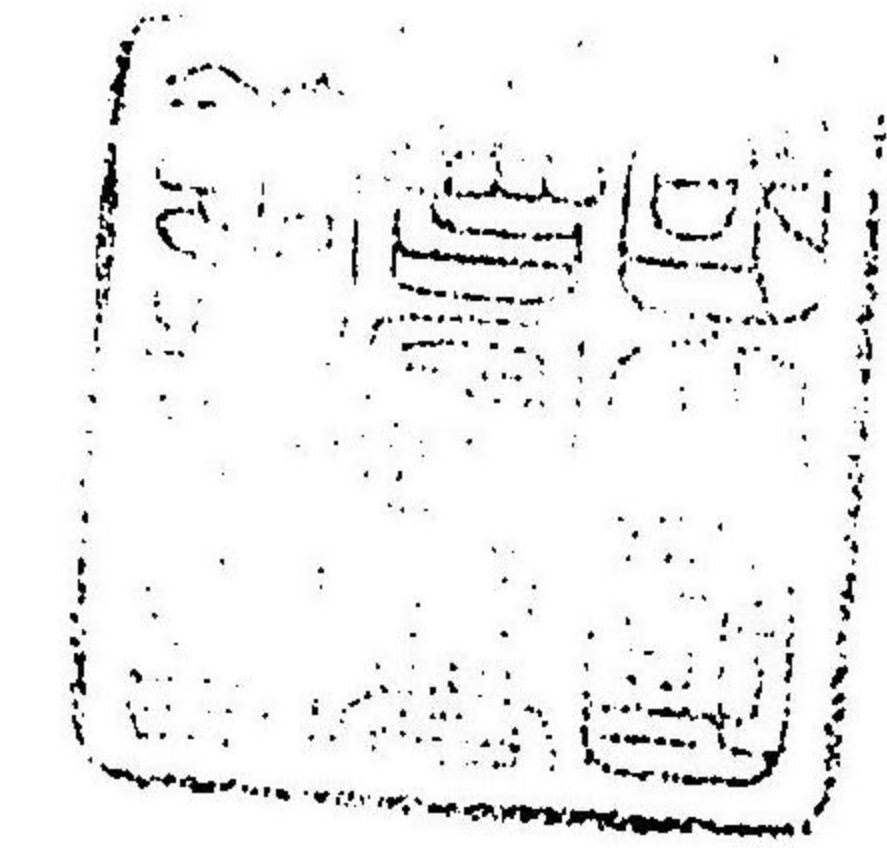


IA 5A 80

近世文藝叢書 第十一

910.8
Ki-249
K



213543

近世文藝叢書第十一 俚謠

緒言

一、本編には、古來民間に行はれたる俚謠の類廿部廿七卷を收む。

一、中古雑唱集一卷 伴信友の編纂にして、古物語及草紙に記載せられたる田歌舟歌今様小唄の類、並に神社及古老の口碑に存せる踏歌野曲神歌童謠の類を集めたるものなり。天保六年の撰なれど未定稿なるよし序跋に記せり。黒川氏藏春村自筆本に據る。

一、陸奥國田歌解一卷 寂蓮法師の眞蹟と傳へらる。田植歌の零殘を、天保十四年黒川春村の詳解せるものなり。紙魚堂所藏本に據る。

一、閑吟集一卷 室町時代に行はれたる小唄約三百首を集めたるものなり。卷末に大永八年卯月寫とあれば、此以前の編纂なるを

緒言

知るべし。靜嘉堂文庫所藏續群書類從原本に據る。

一、巷語編二卷 古來土佐國に行はれたる神樂歌田植歌盆踊歌等を集めたるものにして、天保六年同國人鹿持雅澄の編する所なり。卷首に總論一章を掲げて俚語の變遷を詳述せり。紙魚堂所藏吉村春峰自筆本に據る。

一、御船唄留三卷 御船唄は官船新造進水の時、又は將軍乗船の際、御船手のうたひしものにして、古來二種の傳寫本あり、一は官庫本を臨寫せる竹本隼人組本にして、一は向井將監家の傳來本なり。今二本を對照するに重複せるもの少からず。よつて官庫本を上卷として全篇を載せ、向井本を中下卷として官庫本と重複せるものは之を除けり。二本ともに傳寫の誤多く、殊に向井本には所々解し難き點あれども、類本を得ざるを以て校訂すること能はざりしは遺憾なり。官庫本は紙魚堂所藏蜀山人校訂本に據り、

向井本は黒川氏所藏本に據る。

一、吉原はやり小歌總まくり一卷 題名の如く寛文吉原遊廓に流行せし小唄集にして、寛文年間の刊本なり。文政二年琢玉齋翻刻本に據る。

一、津村節一卷 元祿の頃京阪に行はれし津村半九郎節を集めたる小冊子にして、開版年月を記さざれど、其版式によりて推考するに、元祿年間の刊行たるや疑なし。

一、今道念都をどりくどき一卷 貞享元祿の頃京都に於て流行せし盆踊口説唄道念節とも云ふを集めたるものなり。世事談に京に道念山三郎といふ興樗の音頭あり、貞享の頃盆踊口説といふ唄をうたひ出したり云々とあるもの即ちこれなり。本書に今道念とあるは、山三郎歿後仁兵衛二代目を繼ぎて、新に歌章を作りしによる。元祿年間の刊本なり。

一、色竹歌祭文揃一卷 寶永享保年間京阪に於て盛に流行したる歌祭文を集めたるものにして享保年間京都に於て刊行せられたり。

一、伊勢^{音頭}二見真砂一卷 題名の如く伊勢の川崎音頭を集めたるものにして、作者の名を署せざれども、世有を始め俳人の作多しといふ。之を聲曲類纂所載二見真砂目録と對照するに、全然別物なるより考ふれば、當時此音頭非常に流行して、初編二編と逐次刊行せしものなるべし。

一、尾張國船唄集一卷 本集は享保の頃尾州藩にて、藩主の乗船を送迎する際うたひしものと云ひ傳ふ。舊藩士田中氏の藏本に據る。

一、童謠集一卷 行智四十三歳編とあるのみにて其年代を記さざれど、卷末に願人坊が繪を廿四五年前までは、天神様くださいと

いふて追かけあるきしなり、其後はまかしよくと云、今はまきやがれといふ云々とあり。而して、虚實馬鹿語^{明和八年江戸印本}市中勸進修行者の條に、大山不動明王芝愛宕並に元三兩大師と唱へもてゆく、跡追て附まとふ小童等、佛神耳にも入れず、父母の如く慕ひ奉ればこそ、天神様ア下さいといふ云々。又寛政頃江戸の風俗を記せる「蘭の落葉」^{寫本}に、童等の天神さま下さいとはやせしも一昔にて、いつしかまかしよと名をかへて天狗の面をかぶり云々とあり。まかしよは江戸以外に絶て無き由諸書に記したれば、此集は寶曆明和年間江戸に於て行はれし童謠を集めたるものなるべし。頭註は柳亭種彦の筆なり。紙魚堂所藏柳亭舊藏本に據る。

一、御笑草諸國の歌一卷 題名の如く諸國の流行唄を何くれとなぐ集めしものなり。卷末の空紙に今夏上方よしこの流行云々の文あれば、天保頃江戸通人の編纂なるべし。吉田文庫所藏本に據

る。

一、浮れ草三卷 文政五年松井讓屋の編する所にして、當時京阪に行はれたる流行唄を集めしものなり。編者の傳詳ならざれども、京阪の所謂粹士なるべし。上田博士所藏本に據る。

一、地方用文章三卷 木遣音頭唄を集めしものにして、もと本所住大工の棟梁佐七が家に傳へしが、轉々して田中氏の手に歸せり。全部十八巻中に就き秀逸のもの三巻を選びこゝに收む。誤寫頗る多く通讀しがたき點もあれど、類本なきを以て止を得ず原本のまゝに従へり。

一、朝來考一卷 常陸の潮來より起りし潮來節を、古書數十部を引用して考證したるものなり。巻首に文化四年眞朴葛撰とあれど、こは匿名にして當時の考證學者村田了阿の撰なる事疑ひなし。帝國圖書館本に據る。

一、潮來風一卷 題名の如く潮來節を集めしものなり。紙魚堂所藏本に據る。

一、小歌志彙集一卷 文化二年より天保元年に至る、名古屋を中心として行はれし時花唄を、年代順に記載せしものにして、小寺玉晁の編する所なり。玉晁名は廣路通稱を九右衛門といひ、尾州藩家老大道寺の家臣なり。明治十一年九月廿六日歿す。

一、小唄のちまた一卷 小寺玉晁編。小歌志彙集の拾遺ともいふべきものにして、文政九年より嘉永年間に至る名古屋の流行唄を集めたるものなり。以上二書は帝國圖書館藏編者自筆本に據る。

一、庄内御町々盆踊文句一卷 出羽國庄内に於ける盆踊唄の一枚摺を集めしものにして、安政年間同地に於て刊行せしものなり。

明治四十四年十二月

朝倉無聲識

近世文藝叢書第十一 俚謠

目次

中古雜唱集	一
陸奥國田歌解	四六
閑吟集	五二
巷謠編	七〇
御船唄留	一二〇
吉原はやり小歌そうまくり	一六八
津村節	一七四
今道 念 都踊くどき	一七七
色竹歌祭文揃	一八八

伊勢二見真砂……………二二一
 音頭
 尾張船唄集……………二六五
 童謠集……………二六九
 御笑草諸國の歌……………二七四
 浮れ草……………二八七
 地方用文章……………三三八
 朝來考……………三六二
 潮來風……………三七八
 小歌志彙集……………三九二
 小唄のちまた……………四三二
 庄内御町々盆踊文句……………四六一
 鶴岡

目次終

近世文藝叢書第十一

俚謠

中古雜唱集

今様里神樂のごとき、何くれと品下りたるひなび歌といへど、昔のはしかすがに真心なるかたのをかしく哀れに聞ゆるに、又ことにあかし考むとせるすぢもあるにつけて、年頃書どもの中に見あたりたる間傳へたるを、をりくひとつふたつと書といめおきつるが、數つもりたるをはふらさじと取集めれば、かく一とぢとはなりぬ、たゞしはやく見すぐして寫しといめざるもありつとおぼゆれど、そはいかがはせむ、後に又見あたりたらむ時に寫しそへ、あらたに見つけたるがあらむには、繼々にかきへは入て、ゆくさき暇のひまあらむ時、ついでをとのへ書直してむ、さてこの歌をもにつけて、いはまほしき事と

ものあるをも、書注して見ばやと思ひをり、まづ其あらましごとを書つけおくなりなむ、
 天保六年うるひの七月十五日 信友

中古雜唱集目錄

- 京紫野今宮鎮花祭歌
- 司中公文抄所載踏歌
- 伊豆國伊古奈比咩神社歌
- 同國加茂郡山隨祠歌
- 同郡黃宮歌
- 同郡八幡村八幡宮歌
- 大和國春日祭若宮神樂舞歌
- 石見國濱田領高島神歌
- 尾張國熱田宮踏歌
- 陸奥國大沼郡高田村伊佐酒美神社神樂歌
- 同社御田植歌
- 陸奥國河沼郡小金塔村八幡宮神樂歌
- 越後國蒲原郡彌彥神社神歌
- 同國頸城郡諏訪明神神樂歌
- 越前國敦賀郡杵見村田植神事歌
- 枕草紙所載田歌
- 丹波國福智山邊田植歌
- 上總國菊間八幡宮神事歌

南都興福寺延年唱歌

披露詞 越天樂嚙物

開口詞 亂拍子

糸繪

白拍子 遊僧拍子 舞催歌 延年次第 連事

舞圖 近代諸物二種

綾小路俊量卿記所載五節次第并部曲

義經記所載今樣雜歌

會我物語所載諸物

源平盛衰記所載今樣

平家物語所載異體今樣

續世繼所載神歌

婦人養草所載水宴曲今樣雜藝歌

古事談所載今樣

體源抄所載今樣

梁塵口傳抄所載今樣

十訓抄所載諸物

古今著聞集所載今樣

吾妻鏡所載今樣

日吉山王利生記所載今樣

砂石集所載和讚歌

布衣記所載瀧口歌

後三年合戰記所載略頌

土佐日記所載船歌

後拾遺往生傳所載兒童歌

陰德太平記所載龍達曲節小歌

下野國宇都宮醫女唱歌若宮參玉手箱

鳥追歌

萬歲祝詞

右

中古雜唱集

○京紫野今宮鎮花祭歌

京紫野ノ今宮ニ鎮花祭アリ、春三月十日也其時ノ謠歌アリ

リ、神樂ノ早歌ノ類ト聞エタリ、其歌本寂蓮法師ガ

真蹟ナリ、今宮ノ社司某ガ家ニ藏メテ今ニアリ、祭

ノ時壁ニ掛クト云フ、寂蓮ハ藤原俊賴卿ノ子也、元

ノ名ハ定長ト云ヒシ人ナリ、建仁二年七月二十日

卒、其歌左ニ寫出ス、曲節傳秘アリ、

鎮花祭歌五句

高雄山おはれなりけるつとめかなやすらひはなと鶯

うつなり

謠六句

やすらぎたるやとしや

□□□□□□□□てや

はなやさきたるや

急二十六句

やとみくさのはなや

やとみをせはやまへ

やすらひはなや

やすらひはなや

やすらひはなや

やすらひはなや

やすらひはなや

やとみせはみたちの山に やすらへはなや
 やあまるまでやまへ やすらへはなや
 やあまるまでかちをこは、 やすらいはなや
 やちよにちよそへや やすらいはなや
 やこのとをやまへ やすらへはなや
 やこのとをおひぬのせきとやすらへはなや
 やいはひてやまへ やすらいはなや
 やいはひてちよふる神の やすらいはなや
 やみよとのにせんや やすらへはなや
 やさけなへこれや やみる丸もやすら
 やさけなへこれや やひくまろもやすら
 反歌十句
 やさかをたひに とりたつなりや
 たとりたへなりや かひにきてかひに來て
 ねなましかは やとりたへましや
 たへましや今あらそはて ねなましものを
 今おもひいて、あならし うらこひしや
 信友按に、百鍊抄云、久壽元年四月云々、京中兒女

備風流調三鼓笛、參紫野社世號之夜須禮、有勅
 禁止とあり、歷代編年集成には此年の條に、三月
 比有^二大夜須禮花事^一と記せり、鎮花祭は神祇令に
 云々ハナシツメノマツリと訓なれたり、公事根源
 にも鎮花祭の事あり、夫木集三に、高雄にてたはふ
 れによめる、西行法師、高雄寺あはれなりけるつと
 めかな、やすらひ花とつゞみうつなり、歌林拾葉拾
 二に此歌を注して云、やすらひ花の事、大徳寺のあ
 たりに荻野といふ所あり、三月十日其邊の祭なり、
 安樂花と名づく、其日賀茂上野村の里人ども、いろ
 いろの装束を着しつゝ、鼓笛を打吹踊りめぐり、神
 に幣などとりかけかざしつゝ、こゝかしこわたり
 て、其はやしもの、詞に、やすらひ花よあらよい花
 やといひて、拍子をうち渡りめぐる事あり、此事
 にやと覺え侍れども、高雄寺に由緒ある事を知ら
 ず、西行法師の歌なれば、いかさまにも其故ある事
 に侍るべし、重ねて尋べしといへり、此本書鴉うつ
 とあるは、鼓うつとあるをよみかねてかく寫した
 るものなり、上の句高雄山を高雄寺とあるは異傳
 なり、さて此高雄寺の歌、西行の歌とあれば、今宮

なる古書寂蓮が書るといへども時代は符へり、西
 行は建久九年に寂し、寂蓮はそれより四年ばかり
 ありて建仁二年に寂せり、されど西行の歌を寂蓮
 が書置たるは、似つかはしからぬやうなり、筆者の
 事は謬れる傳にても有べし、また寂蓮が筆述とす
 るときは、夜須禮を禁止せられたる久壽元年より、
 寂蓮の卒りたる建仁二年まで四十九年なれば、其
 禁止せられざりつる久壽以前に年若き頃書たるも
 のとすべし、さて又やすらひはな繪詞一卷あり、繪詞
は三位雅經繪詞は詞書に云、三月十日たかをでらの法
土佐光長なりけり華會といふ事おこなふ、京中の女のわらははべまう
 で、まひかなづ、いでたちてゆくをさじきあるい
 へによびとめてまはせみる、これをやすらい花
 となづくるなり、また、高雄の法華會にをとこをん
 なまわりあへり、以上詞書、山城四季物語二に、三
 月十日紫野の今宮にて踊の下、或説にむかし高雄
 の神護寺の法華會には、必障の事有ければ、賀茂今
 宮に祈念して、悪氣をなだめんとて踊をなしける
 よりはじまりけるとかや、さる故に高雄の法華會
 はやすらにはてよとはやせしを、いつの頃よりか

やすらひ花よあすな花よなどはやすは誤りなり
 とかや、又山城名勝志今宮の條にやすらひ花の事
 を、高雄寺縁起に云、紫野に人多くあつまりて、高
 雄は法華會やすらにはてよといふべきをかくは
 やすとかや、又高雄寺の條に伴の文を載て、夫木高
 尾山哀なりけるつとめ哉、やすらひ花と鼓うつな
 り、高雄法華會延應廿一正十九好さて以上の説どもを合
テ修之セル由濫抄ニ見ユ考るに、神祇令に、季春鎮華祭、義解に謂大神狹井
 二祭也、在^二春華飛散之時^一必有^二此祭^一、故曰^二鎮華^一、
 釋云大神狹井二處祭、大神者祇部謂^二受神祇官幣
 帛祭^一之、狹井者大神之倉御靈也、此祭之、華散之
 時、二神共散而行^一疫已爲^二心^一、此故祭之とある神
 事、今の京となりては絶たりときこゆ、しかるに日
 本紀略に、正暦五年六月廿七日、爲^二疫神^一修^二御靈
 會^一、木工寮修理職造^二神輿^一二基、安^二置^一北野船岡山、
 屈^二僧令行^一仁王經之講說、城中之人招^二俗人^一奏^二音
 樂^一、都人士女費^二持幣帛^一不^レ知^二幾千萬人^一、禮^二了^一送^二
 難波海^一、此非^二朝議^一起^二自^一悲說^一と見えたる、其巷
 説は三月の頃昔の鎮華祭のなごりをまねびて、疫
 神を懼ひたるにて、其時此ヤスライの歌をうたひ

たるなるべし、故に鎮華祭の歌ともいへるなり、さてそはもといはゆる巷説にて在り來りしを、正暦五年の六月廿七日より御靈會と稱して、朝廷より別に六月祭り玉へる由なり、その後長保二年五月九日、同三年同月日、疫神を紫野に遷坐御靈會行はれ、寛弘三年同月日御靈會行はれ、世に今宮祭と號ふ由諸神記に見ゆ、又其後永承七年五月廿九日、神託に依て崇敬せられ、弘安五年後四月廿二日正一位を授玉ふ由見えたり、さて今宮の御靈會は今も五月九日なり、やすらひ花祭は今も三月十日なり、大和の京にて鎮華祭のとき歌ふ歌のありしが、のこり傳はれるをまねびたるにやあらん、さて首なる高雄山云々の歌は西行の歌にて、後にそへて歌へるにて、諸とある以下やかへりて古からむ、さて此反歌に、とりたつなりやたとりたへなりやとあるたへはたつなるべし、しかれば首の歌鴉うつなりとある鴉は、鼓の誤にはあらで、たとりと云鳥のたつよしにや、うつたつ同體なり、和名抄に陸詞切韻云、鴉、和名多止利、一名鴉鳩、一名冠雉、小鳥似雉也とみゆ、攝壤集に鴉タドリヤマドリとよめる

をおもへば、山鷄ヤマトリの事にて、鴉を草の手に務など書たるが古びはけて、この字の如くにみゆるにやあらん、鴉から書にては山雞とはきこえざれど、こなたにてはその字とせるにやあらむ考べし、此やすらひ花歌、京穂井田忠友がり問ひやりたる趣、今宮中古よりいたく衰微して、紫野大徳寺領上野村といふに藪祠にて遺り、社司もなく百姓持にありけるに、元祿の頃新地御朱印等御寄附に付社再興、上野村の地頭大徳寺長春院の僕重の近江人なる長成したるを取立て佐々木氏と稱し、自餘の神人并に任叙して近江守と稱す、扱上野村歟佐々木氏歟に、やすらひ花の唱歌、慈鎮の書ありといへども、おほつかなき事とおもひてよくも證されど、予が尋によりてなほ正し見るべしと云ひおこせたり、天保十三年五月

○司中公文抄大神宮司ノ記録ナリ一冊アリ、錄中ニ長祿永享嘉吉等ノ年號見ユ、

一十五日氏神離宮院踏歌神事云々

ハムスイラク、センシウラク、ヘイアムニ、スコシツ、トミヲシテ、サ、ヨラフルマデ、ト三ツギニ

此神歌堅可秘之、他家不可見之、
離宮院詔刀案文

今年四月先申乃日乃朝日乃豐榮登利爾、掛恐鹿島坐武雷命、香取坐齋主命、平岡坐天兒屋根命、相殿坐姬神等乃廣前申給久、大神宮大司位階實名、殊別祭主宮司始、有官散位諸此人等導引率、是處仁宮處定留奉天奉留神寶者、御弓御太刀鈴鏡衣笠、御衣者明妙照妙違備奉天、御酒瓶乃邊奉、菜青海原物者鱈廣物與津藻邊藻仁至末天、種々乃物違備山乃如置高成天進留宇豆御幣、并御馬十列儼人等違調備天、恒如仕奉事乃由、平久安久聞食天、祭主宮司等始有官散位諸此人等加各身毛、平久安久夜守日守仁守幸給天、昔如久公卿大臣位天未、皇御神乃御德仁成昇天、皇真加朝廷仁伊加志三與八桑枝乃如仁且榮志女給止、恐美恐美毛定辭申給工止申、
御氣殿御裝束ノ物ツシ
幅曲尺ニテ八分弱、百木按ニ鯨尺ニテ長八寸二分五厘アリ

○伊豆國伊古奈比咩神社歌

同國加茂郡伊古奈比咩神社縁起神人藤井昌幸持、文化十一年

シンネン、アラタマンテ、タカラノ、御ホウテンニ、マキリキタリテ、カタシケナク、ヲカミタテマツレハ、クロカチノハシヲヨリタテ、シロカネノタルキヲカケ、コカネヲモテ、コ、ヘト、フキタテマツリタル御ホウテント、ヲカミタテマツルカナヤ、ワウワウ、
シンケンケアテイハク、
フクロモチノト申、
フクロモチイハク、ヨトモノト申、
シンケンケハク、百千萬アソウギノ御タカラモノ、ヨミアゲテタテマツレ、
フクロモチ、シンケンケノマヘニス、ミイデ、ヒダリノヒザヲツチニツキテ、ミギノヒザヲタテ、ミギノ手ヲカリギヌノ、タモトヨリイダシテ、フクロヲツチニツチテアソブ、
一ツニツ三ツ七ツ十ヲ百千萬アソウギノ御タカラモノ、カゾヘタテマツルト申、
シンケンケノイハク、
宮河ヤ、アナタコナタノ、ハシツメナル、ハナゾノニ、トミコソフレヤ、チヨヲヘルマデ、ト三

信友云、此縁起舊ハ正シキ傳説ナリケムト見ユルヲ、寛保元年ノ頃禪福寺ノ僧帖山ト云フモノ此寺自撰イタク佛説ヲ習合シ、舊ノ正説ヲ書粉カシテアラヌモノニ作リカヘタリ、本書ハ今傳ラズトナリシテ中ニ此歌ヲバ正シク載タレバ今寫シオケリ、サテ歌ノ前文ニ

清キ山ニ入テ水ヲ汲ミテ頭ヨリカ、リテ、サテ髪ヲ三ツニ分テ、左ノ髪ヲバ八所ニ結ヒ、右ノ髪ヲバ七處ニ結ヒ、背ノ髪ハ六處結、左ノ髪ニハ水ヲ八度ソ、ギ、右ノ髪ニハ七度酒ギ、背ノ髪ニハ六度カケ、サテ下冠ヲ着テ、上ニハ桑ノ木ノ根ノ直ナルヲ切テ皮ヲムキ、角ヲ二ツ立テ額ニツケテ、マサキノ葛ノ葉ノシゲキヲタスキニカケテ、凡夫ノ火ヲ不食ノ、上十五日ハ大明神后々王子ニ仕フベシ、下十五日ハ此裝束ヲ替テ凡夫ニナルベシ云々

樂人等可レ諷歌ノ事

一番聞ンヨリヨスル浪ニ所^ロヤサシケレヲノ下^ノスエハイツトタ、セヌヤ、二番^ツツト濱ノミドリノ影ニ立ヨリテ袖ヲカザシテゾ舞ヒ遊ブナルヤ、

三番ミドリウエテ我マキコヨト招カレテトソタレテ舞ヒ遊ブナルヤ、
四番ネリ出テヨスルナギサニアソブ時松ノ木末ニ風ヲ、ナリヨスル浪カヨリタルヤ、
五番今日ハマタ事コソヨカレ濱ニ出テイザヤサネウラ袖ヲカヘシテヤ、

是ハ拍子打ツ人ノ諷フ歌ナリ、袖タレテヨシヤ、イザヤ今ハアガランイザヤ今ハ歸ラン、

タカラニハ、ヤダシタハ、笠忘レタリヤ、殿原トノハラコソ、シロウモカナヤ、カサマツリアサケウシラザラソ^{○夫}、ソノトノバラコソシラザラメ、亦ナジカハシラザラン、笠マツリアゲウ、心ヤ、ナニアリヤ、タビノトノバラ、カセナリゾヤ、カサマツリアウ、

信友云、豆州志ニ、三島明神伊豆ニ遷ラセ玉フ時、笠祭ノ歌トテ此歌ヲ載セタリ、イサ、カ詞ノ異ナル處^{○印ノゴトシ}、又此歌東遊ノイハタシタエノ歌ト元來同類ト見ユ、ソハ別ニ考アリ、サテ萬葉十一の卷^{四十二}ニ、三島菅末苗ナリ時マタバ

着ズヤナリナン三島菅笠、豆州志ニ、三島笠縫里ニ菅田アリ、至^レ今歳々三度菅ヲ三島明神ニ獻ズ、井蛙抄ニ、三島菅笠ハ攝津伊豆伊豫ニ同名アリト、然レドモ上ノ所^レ謂ヲ以テ見レバ、萬葉集ニ所^レ詠ハ伊豆ノ三島ナルコト審ナリ、村老云、近キ世迄笠縫里ニテ菅笠ヲ造リシ、コノ頃ハ貧福トモニ此笠ノ外ハ着ザリケリト、質素ノ俗想像スベシ、伊豫攝津ノ三島邊菅笠ノ沙汰アルコトナキカズ

是ハ入舞ノ拍子、

サワレ、イヨ、ヤレ、イヨ、イヨ、イヨ、サハレ、イヨ、ヤレ、イヨ、イヨ、イヨ、イヨ、

是ハ大明神ノ御代官ノ舞マフ時ノ拍子打人ノ可レ諷歌ナリ、

玉ヲシ、玉ヲヤ、モロエイト、玉ヤ、アサメヤ、ネロ、ヨロ、モロネ、シマシヤサハレ、其陰エン國モテル、家ノミサキ(碓)、アサネ浦ミルニコケアヤナヘヤ、ナマケ

ニケヨル、何時ヤ參ラフ、元ヤナ、ハンヒロニマエ、イノハナカ、マシノハンヒロ、コ、マツ、人ヲニモ、ワレ、マコウ(兆)ヤ、ツカサ喉ウヤ、サ、サ、ケシヨシヤ、ハンヒロコマツ、チトケニモ、我マコウヤ、ツカサタ、ハリカヤ、

ツボタノ宮ノ舞ニ拍子打ツ人ノ歌

サワレ夫ノカケヨナ、申ツル神ハ、祭リヌ、明日ヨリハ、豊ノ富ヲウ、トヨノトミヲヲウ、アヤナ、エヤナ、マカ(悠)ウヨ、キカナ、スワウノ池ニ、エヤナ、住ム鳥ハ、エヤナ、アウタマ、カゴメ(鸚)、アウカノ善キ鳥、ヨナ、鶯ノメトリヤ、ヤ、山澤ニスムハ、ヨシノメトリヤ、ツン、エン、マコト(實)カヤ、シモヨ七度、君ニヲハ

(坐)ストナサナカリヲ、ヨストナ、

信友云、スワウノ池、豆州志ヲ按ルニ君澤郡江梨村ニ洲郷ノ池アリ、スガウト唱フ、コハ本スガフニテ菅生ノ義ニヤ、コノスワウハスガフノ書誤ナル歟、

八人王子ノ腹御前ノ舞ノ時拍子打人ノ歌

サワレ、夫ノ陰ヨシヤ、ヨシ、橘ヲヤ八總、フサネテ持ツト、メ見ツルナリヤ、ハツサイシイ、ソノキサキ

(其后)ニ、アヤナ、エヤナ、ニイノ、池ニ、住ム鳥ノ事
ハ、何時モツキセジ(不惑)恒ニツキセジ、
水戸ノ口ノ大后ノ舞ノ拍子打人謡
アヤナエナ、ミヨサトリヨナネ、ソノハラリノ、エヤ
ナ、ソノ山ニヨナ、アチモチカケテ、我レハアリ、エヤ
ナ、若カラハ、ワカカハスキテ、着ユルシヲイテコソ
モノワヤ、サシケレ、ヘン、エン、

天地今后ノ舞ノ拍子打ッ人謡

明行ハ、夜中過テミユル、エヤナ、其鳥々、夜ハツヤ
(遙夜)參ラン、エエメ^説カケ(駈)コマ(馬)、御舟ヲロ
ス(下)夜ル、何、シトリ山ノ、エヤナ、トノ葛、ヨシヤ
ナ、ヨニモツキセジ(不惑)、ヨヤナヨ、イツク(何處)ヨ
ヤナ、ワカクノ池ニスム鳥ハ、ヨナ、アラタマ、カゴメ
(鳥)ヤナサキハヤコノワルノヨヤナ、マタ今過タビノ
ミコ^コ、ヨナヤ、ツカフレバ、千年ノ松、ヨウ、万代
ト、ヨヤナ、明ケ行ハ、霞ミテ見ユル、ヨヤナ、夫ノ鳥
島、ヨナ、イツヤ參ラン、アユメカケコマ、

伊豆國加茂郡山隨祠歌

伊豆志、加茂郡山隨祠、富永氏ノ族人ニ山隨軒
俗稱 彈正ト云者、騎馬シテコノ村ヲ過テ、其臣桐小林

上野守適射テ居リシガ、乘馬ノ無禮ヲ怒リ其主
人タルヲ不知射ニ殺之、視レ之吾主也、即痛悔テ
自殺セリ、慶長十一年ノ事ナリ、山隨已ニ死テ甚
靈アリ、乃放光院殿靈雲功徳ト法諡シ、神牌ヲ報
本寺ニ安置ス、又爲メニ祠廟ヲ造リ、七月十一日
ニ祭ヲナス、其式圍尺餘ノ竹竿ノ首ニ旗ヲ著、八
人ニテ持庭中ヲ巡ル、唱テ云、

垣根ニ住カキリ^ス、燒キ玉ノ家ヲカラニ申セ、ハ
ヤセ子ドモラ、

榎木ニ住ハ玉虫、申セ、ハヤセ子ドモラ、
俄ニ竹重ウシテ勝ヘガタシト、コノ村今ニ至
ル迄弓矢ヲ執ラズ、

伊豆國加茂郡黃宮歌

伊豆志、黃宮^失一祠二坐、神名不詳古社也、
嘉吉二年ノ文ニ、政所統珠禰宜丹治重吉、ソノ裏
ニハ丹治守吉ト誌ス、此神ノ祭禮殊ニ古式ヲ存
ス、其大略ヲ言ヘバ、十月朔日ヨリ十五日迄酒ヲ
戒シム、社人齋戒甚慎リ、十一日幣ヲ岩崎溫泉ノ
上ニ立テ、翌日溫泉ニ投ズ、是ヲオハキト云、十
二日齋^ハヲ入間ノ濱ニ取リ、柯葉ヲ大倉山ニ採

リ、十四日ノ夜神酒ト共ニ惠酌^{ヒシヤク}保宇ト號スル祠^{神田}
祠門外ニ獻ジ、祭主社人ミナ神酒ヲ飲ミ、始テ酒禁ヲ
弛ブ、且日祭主神歌ヲ謳フ^{古雅甚}ト云
「ミカリスル、加茂カ岩殿、妻良妻浦ノ、ハレヨ、志賀
葉ヲ折ルト、吾見ツ、今年コソ、ハレヨ、コトシコソ、
スルヘノ稻ヲ、ワレ、シキニ摘マウヨ、ハレヨハ助聲^{儀馬}
多ク
見ユ
「ミカリスル、加茂カ岩殿、妻良妻浦ノ、ハレヨ、メラ
ン(妻良)ノ浦、ミヨシガ崎、ワタルハヤブサ(集)、鳥取
ラバ、ハレヨ、トリトラバ、オキソ(沖)ノトリ、玉藻ヨ
ルベシ、波ケサモヨルベシ、
「此殿ノ、園ノサスガネ(鏡)、三聲ナル、ハレヨ、三聲鳴
ラバ、君ガゴノ身ノ、ウツラゴロ 熟睡頃、ハレヨ、ウツ
ラゴロ、御前ノツメ(繩)、端ナル、鳥ヅウタフベシ、
「コノヨルハ、アケカ月夜カ、明ナラバ、ハレヨ、明ナ
ラバ、マル(手)モ參ラフ、アス、明日モ參ラフ、
○伊豆國加茂郡八幡村八幡宮歌
伊豆志、八幡村八幡宮木ノ宮ヲ配祀ス、祭ノ時酒
ヲ竹ノ筒ニ盛リ、白濱明神ヘ贈ル禮アリ、又相
傳、往昔海濱ニ神酒ヲ大甕ニ滿テ、霜月九日ノ夜

應舎ニ神官會シケルニ、一人白頭翁來リテ其酒
ヲ自飲ミ、神官ニモ盡ク傳ヘ受シメ、東雲ニ翁ハ
歸リケリ、其魏今ニ存ス、又其翁ノ傳ヘトシテ、
祭祀ノ時詠ズル哥ニ

「ミ引フネオハマ三返イホリ引ノ引ヤマノシカバ引ヲ引
レンケシハラ引ハレンケシイカリイスルヨミルメノ
イテオツレンシキスマレンケシヤシキ引スマレンケシ
コレ古ノ神樂歌ナルベケレト
毛轉^ハシテ唱ヘ觀マリシニヤ
○大和國春日祭若宮神樂舞歌
初の歌「君が代の久しかるべきためしには神も植けん
住吉の松、ヤ禮
之真拍子「春日山岩根の松は、いはねども千年をみどり
の色に知、^{〔前注〕後拾遺能因法師春日山岩根の松}
其年拍子の鼓と同じ「峯の風は音せねど万歳のひいきぞ
耳にたつ、
中の歌「みかさ山生添ふ松の枝毎に絶すも君がさかゆ
べきかな、ヤ禮 末榮べきかな^{之保留手} 榮べきかなや、
末の歌「色かへぬ松と竹との^{乎加由留} 末の代にいづれ久しとや^君の
みつと竹との^君の代にいづれ久しとや^君のみぞ見ん

初の歌「千代までと君を祈れば三笠山峰にも同じ聲聞ゆなりヤ禮聲きこゆなりやな本奉加之真拍子」松は祝のためしにひかるゝはかすがの山の姫小松八千代の玉椿、

鼓波之女同「いつぬき川に住鶴長井の浦にあそぶ龜、

〔頭法〕龍馬樂、建田のいつぬき川にすむ、鶴の千年なかけてあそびあへるかし。

中ノ歌「鶴の子のまた鶴の子のやしは子のそだゝん代まで君はましませ、ヤ禮

末ノ歌「宮人のくすれる衣にくくく留すれる衣にト由布太須支かけて心をやト、留誰によすらんくくくくトかけてト心をやト、

同初ノ歌「万代の松の尾山の蔭しげみ鼓乃太奉加之其毛呂拍子附舞乃手平加由留君をぞ祈るときはかきはにヤ禮ときはかきはにヤ禮之真拍子神明所にましませば一切諸願もよしなし、萬民うれへなければかんこもおきてなにかせん

中ノ歌上「吾宿の川竹ふしとほみトも行末のはるかなる哉ヤ禮はるかなるかなくくくくトヤ、末ノ歌「植て見る拍子ト植てあるの笹の竹の

くくくくト節毎に

「いやこもれる千代はくくく君のみぞみんくくく彌籠れるト千代はくくく君のみぞみんくくく右以春日若宮社務何某正本此校之以同一本朱校保二十二日

石見國濱田領高島神歌

石見國濱田の海中に高島といふ島あり、をさをさ人もかよはぬ島にて、世にあまねき佛の道さへ傳はらず、しかはあれど島人ひとせに一度其島の神をまつる事有、その時うたふうた、楠ねかれてもにほひ香はしやおやとりあれやこの宿のさのみはないそぎめされぞ、

尾張國熱田宮踏歌

正月十一日尾張熱田宮前にて卯杖舞を奏し、陪從竹川をうたふ、尾張氏踏歌の頌を唱へ、高巾子の神人非鼓を振侍るさま、いとくくくむかし覺えたり、そのかみより見なれ侍るも、今はた珍らしく、昇平の春ならでやは、いかでかかゝる神わざを見奉るべき、今宮人の歌詠あやまりけるとあるにや、其歌曲如左、

靈光くしびのひかり

本「あなあはれ、くしひの光うつしきて、末「みちたのしほに、エイめぐみわたれり

阿奈清冷あなさやけ

本「あなさやけ、五十鈴のおとの、エイあなさやけ、末「五十鈴の音に、エイ繁戸ひらくる、

以上二曲傳唱歌一失三曲節一方今不奏一曲今不傳其名可憐

右其社爲三神秘、雖然依戀志難三默止、書寫以貽焉、多罪々々、老人政文

同神社御田植歌十二段

一段「御しろ田の、林田は、高天原の宜所、二段「高い田や、安い田や、うゆる寶の樂しさ、三段「大明神の、御としろは、中の田のよい所、四段「大明神の、御手坪に、おろす豊の千たる穂、五段「そよと入レや、そよといれ、竹の永枝の、そよといれ、六段「しなびたや、く、秋のたり穂の、八束穂に、七段「大明神の、めさうとウて、高天原につないだ、八段「つなぎたや、く、あしげの駒をつないだ、

杖の舞「たけ川の橋のチつめなる花そのにわれてわれよやめさせそめけん「我をゆるせめさしたへての詠か」この宮は今ぞさかへんささくさの宮つくりせんささくさの下宮しせんせんにけるうにおほゆ

か「こまみや宮つくりせんく、翁子の舞「あさはなだこいはなだそめかけたりとせん

だのしやうしやかの老のしたり柳、かへし「玉てるやした光やせんたのしやうしやかのをのしたり柳、

陸奥國會津郡舊名也、今伊佐酒美神社神樂歌六曲

錦綺帳にしきのとばり

本歌「しきの戸張、こかねの御戸乎、押ひらき、エイ

末歌「八重、雲をわけて、照さむやてらさむ、エイ

真澄鏡まさかみますかみ

本「大御神の、御影をうつす、ますかみ、ます鏡、エイ

末「うちにくもりは、するじといめじ、エイ

安名手あなてあなて

本「あなたとし、此かむかくらの、おとは、エイ

末「おとは千よふる、をとは千世經る、エイ

以上三曲至今傳三曲節奏之

九段「しらあしげの、白の駒を、高天原につないだ、
十段「大明神の、めさうとて、葦毛の駒を、早引、
十一段「大明神の、めさうとて、繫置たる、御座船、
闕一段

信友按に、大竹政文寛政年中所著の武藏野月と
云る隨筆に曰、陸奥國會津郡舊名ナリ、今、長江郷高
田村伊佐酒美神社式内名、所傳神樂六曲ありて、今
三曲用ふ鏡安名樂、十寸、其中一曲として錦戸張一曲を
載て、此外の哥唱略之、催馬樂モ十二段傳ハレ
ルガ今一段ハ絶タリ、イツレモ秘シテ容易ニ見
セズといへり、また會津人佐藤安滿云、曲の名を
漢字に書たるは政文の私なり、舊は假字にて書
たりとぞ、さて此神社は陸奥第二の宮にて、延喜
式止雨請雨二百社の内なり、

○陸奥國河沼郡小金塔村又塔、八幡宮、式外天喜、神樂歌今
用之、催馬〔頭注〕政文云、神樂也
樂指子也
元日

「やあら面白や、うちならすしやうの、ひゝきの初音
を、ほめきこしめせや、玉の御戸の内、
「やあら面白や、よき事を初し、けふはかせふかで、風

ふかで、花の匂ひぞめでたかるらむ、
「やあらおもしろや、御いのりに千世の御神樂まゐら
する、ほめきこしめせや、玉の御戸のうち、
七日

「やあら面白や、春來れば松花よねを、打まきて、花の
にはひぞ、めでかるものを、
二月初午日十一月初

「やあら面白や、大しやうのかたに、かけぬるゆうた
すき、かけぬる人は、千世を經玉ふ、
〔頭注〕政文云、大しやうは、大
常歎、大常は神祇の舊稱也
八月朔旦神木御注
選惡神事

「柳葉や、立まふ袖の追風に、なびかぬ神は、あら
じとぞおもふ
〔頭注〕政文云、
撰集ノ古歌也
月次朔望

「やあらおもしろや、八幡をば宮とぞおがむ、前は海
後は岩尾、中は御在所、
〔頭注〕政文云、豐
前字佐宮ノ歌歎
臨時御遷宮

「やあらおもしろや、神の道は千みち百みち道七つ、

中なる道ぞ、神の通路、

以上

尤秘歌也不可忽者也

高田宮の古曲に比すればや、後世の風也、中昔
所製なるべし、
老人政文寫

右伊佐酒美神社神樂歌、同社田植歌、并小金塔
村神樂歌、陸奥國會津藩臣神道、藤原政文、字大竹
書寫所「秘藏」也、禁他見竊相傳書寫者也、
文政改元歲次戊寅年十一月廿六日 信友

○越後國蒲原郡彌彦神社神歌


越後國式内神社案内、越後國蒲原郡櫻井郷一宮
伊夜比古神社所傳神歌神事之時、正月廿六日ヨリ
三月廿六日ヨリ四月三日迄、有、神事、
六日ヨリ十一月三日迄、有、神事、
〔伊夜彦乃、於能禮、神佐備云々、萬葉十六卷ニ
ノセタルト同
「伊夜彦乃、神乃布本仁、今日良毛加、鹿乃伏良武皮服
著而、角附奈我良、
信友按に、此歌さびたる古風にておもしろし、
應神紀に三年の條の一説に、日向の諸縣君牛が
女を賣れる水午のさまを、以著角鹿皮爲衣服
古訓カクといへるに自ら似たる趣ありておもしろ

し、さて又下の句言をかへてうたひかへせるな
り、
佛足石の歌おもひ合すべし、

右越後國式内神社案内者同國三島郡石井十二社
神主藤原氏重天明七年所撰矣、

○越後國頸城郡諏訪明神社神樂歌
越後國頸城郡下箱井郡諏訪明神社司岩形春庵
所ニ口傳、當社相殿大汝少名彦二神を祀る、社家
の習俗大汝神をダイボと申し、少名彦をゾグと
申す、其故を知らず、當社創建いづれの時といふ
事をしらすといへり、
「しろかねの、こがねのゑがい、手にもちて、もりあげ
たるは、ちぎのかぐらよ、

此歌口傳のみにて書たるものなしとぞ、春庵が
うたふを聞て信友が筆記せるなり、春庵にうた
はせて予が心おぼるに朱もてふしをつけたるな
り、大凡申樂の諷物の上歌といふふしに似て少
異なり、さて此神樂に弓矢とチギと云ものとヒ
ラと云ものを持て舞ふとぞ、其弓は竹を割て麻
糸の弦をかけ、矢は紙の羽羽二を付る、弓の本末に

カイダレとして紙のしでを付る、此切やうにチギはならひあり神の森の木をとりて五尺ばかりに此形に造る、ビラは  など平めに木にて造る、一尺五寸ばかりなり、いはゆるダイボツゲの國を造り玉へる古事のまねびかとおぼゆといへり、

○越前國敦賀郡沓見村四月六日田植神事歌

「春くれば山田の氷げニヤワア、げニヤみゆかけて、苗代水を、わがとり苗は、四ツ茶にこそ、いはいには、田こそ植れ、げニヤワア、

「げにやみ植来て、一本植て、豊山谷に茶廣のあしヤアホヲハイヤア、

「來年も當家さくヤアホヲハイヤア、

此間ニオコナヒ事アリ

「頭注」德按に、今日此吉日は今日此吉日の訛なるべし、上にも下にも今日此吉日とあり、

「頭注」德按に、四ツ茶にこそ云々、此茶は葉の誤字にはあらじが、又茶廣のちし云々、此も葉の字なるべくおしほる、

「壹升柴幸柴木のねをいするや、やしじの娘にとくがついたみさいな、是三度

此間ニ猿田彦ノ面ヲ掛ケ、タチ付ヲハキ、トリ兜ヲ着、幣ヲ持舞事アリ、
「今日は此吉日ひがらも能事にて候程に、神の田打ま

しよ、若殿原やとひましよ、三度
「春田撫男の、打や始たりや、所よしやをよく、三度
「所よしや、其間長者撫や始たりや、所よしやをよよ、三度

「是より西に、山候が、山の名をば、福王田と、山、谷にたき候が、瀧の方に、木候が、其木の名をば、しいらや水木、木打なほせ、末打はやせ、元のつたをば、つきうすとも名付け、其又末をば、酒船とも名付け、其又末をば、水船とも名付け、其又末をば、おだいかひとも名付け、其又末をば、からすき千ぶる、其又末をば、くわぶち千ぶる、わりとりたまへば、是より西に、出雲の國の、かぢ(鏡治)候が、打鉄は、みみ六寸に、先六寸に、打たる鉄で、一鉄打は、日よりもよいよ、二鉄打は、ふたみが浦の、りよし(漁師)もよいよ、三鉄打は、三國目出たし、四鉄打は、世の中よいよ、五鉄打は、いつも目出たし、六鉄打は六國目出たし、七鉄打は、中田もよいよ、八鉄打は、山田もよいよ、九鉄打は、こゝらも目出たし、十鉄打は、所も目出たし、今日は廿吉日、ひがらも能事にて候程に、神の牛出しましよ、若殿原やといましよ、是三度

かしと見るほどに、郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心うき、

「時鳥、をれよ、かやつよ、をれなきでぞ、我は田にたつ、

○丹波國福智山邊の田植歌

桶窓自語所載、國人岩谷嵩臺話

「夕暮に、川邊をみれば、千鳥なく、なけく千鳥、聲く、アへしやう、ト歌ヒテとよのとう、トハヤ

○上總國菊間八幡宮神事歌

同社の神主根本河内がいふ、毎歲祭禮の翌日十六村中の老婆ども來りて、神前に盥に水をたたへ、腕をうけて竹にてその腕を打て歌ふ、これをハツセといふ、發聲の義なるべし、その歌

「めでたきものは、そはの花、はなさき寶なりて、みかどとなるぞうれしき、

○南都興福寺延年唱歌

興福寺延年舞式披露之詞

披露申セト候ハ、夫吾寺者佛法繁昌ノ靈場也、因内二明之鑽仰應闕ニ顯密練行之薰修牀穩矣、夫當社權現者、一天無双之明神也、一人萬乘之歸仰尤深、文武百

「頭注」德按に、今日此吉日は今日此吉日の訛なるべし、上にも下にも今日此吉日とあり、

「此牛はつきに三石三斗三升三合三勺三才くろふ牛にて御座候程に、皆寄とめて被下、三度

「此牛左の角を惣じて見て候へければ、廿餘のつくり物、古酒のかさがほかくとする、此牛の右の角を惣じて見て候へければ、惡魔ごふぼく(降伏)のつけつの、

「今日此吉日、ひがらも能事に候程に、神のこゑ出しましよ、若殿原やといましよ、是三度

「尾御戸明て、頭御戸ふさいで、すらね(髪)ぞくくつしり、

「尾みとふさいで、かしらみと明て、すらねぞくくつしり、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

「此苗代の水のすむまで、おらつむいてそうらへければ、七かせかせ出からつむいて候、

官之崇敬超餘哉、事之濫觴披瀝申事新候歎、抑當社造替者、毎々送卅餘廻、星霜、必成三新造之功、今般造躡遷宮雖經三年序、供養法事停滯、冥顯依有、恐任先規、遂其節、盡佛講經之梵筵、諸堂佛陀定垂三納受、絃管イ竹呂律之曲韻、三所神明隨喜給覽、眞諦俗諦兼行三神事法事、無闕、於今夜者賞兒童、可成延年遊宴之由評定候、

此披露詞者、康正之遷宮之時、與福寺清淨院光胤專信房僧都被草之畢云々、

貞幹云、康正ハ後花園帝ノ年號、此時ニ俗筆アルベカラズ、後ニ俗筆ノ曲ニ梅枝ニコソ猶ハ集テクヘ云々チカリテ詠ヒシヲラズ、此頃カ、ルツミヒモノアリシヲ、後ニ俗筆ノ曲ニトリモチキシニテコソアレ、

〔頭注〕一本ハ押紙ニテ貞幹ガ栗山翁ヘ書オクレルナリ、詠曲拾葉抄梅枝〔右〕云、此詠ヲ梅枝ト名付ル事、越殿樂ノ唱歌に、梅が枝にこそ猶は其なくへ、風ふかはいかにせん、花に宿る鶯とあるに本づきて梅枝とは云なりとあるをみれば、清長ガ云る如く、此唱歌ノ古キ事勿論ナリ

當辨

一人云松トモカ、園基ヲ打タト、サテ箱崎ノ松ハ、根ハハタリ手ヲ打テ候、

一人云何ハタリ手ヲ打テ候、サテ勝ハト申セバ、岩代

ノ松ト申候、何ニ岩代ノ松ハ勝ト申候、サテ春日山ノ松ハ園基ヨウ打トテ、生ノ松原シテ候、

メシニ引ケハ、物ノ數ナラズ、雲ノ上ニサク菊ハ、空ナル星ナレヤ、

越天樂歌物 本調子 盤涉調

△梅カエニコソ、爲ハスヲクヘニ反

△カセフカハ、イカ、セン、花ニヤトル鶯ニ反

△ヤラ、ヨシナノ、袖ノウツリカヤニ反

△霜コホル袖ニモカケハノコリケリ

露ヨリナレシアリアケノ月

開口之詞 春之事

楊柳風和ニシテ梅花句ニ鮮ナリ、松門影繁シテ斜日猶遲シ、シカ、ニ云々、鶯鶯ハ三雅ノ杯ヲ懷テ一樽ヲ持參シタ、餘寒猶アリトテ御銚子ハイマタ卅州ニテ、サテハ平調ノ樂ニテ候、太イ大食調カ傾杯樂シテ候、シカ、萬ノ降物聲物カ集テ、當世ノ風俗ナレハトテ、連歌ヲ仕テミン、ス、カケウト申ス、其コソ尤與有見物ナレ、サテ執筆ハト申セバ、時雨ノ空カカキクモリタト、サテ發句ハト申セバ云々

亂拍子一聲

△長生殿ノ裏ニハ千年春秋ヲト、メリ

不老門ノ前ニハ年ハ行ケレトモ老セス

△萬歳年經龜山ノ下ニハ泉ノフセケレバ

コケムス巖ニ松ヲヒテ梢ニ鶴コソ遊ブナレ

△諸法實相ト現スレハ峯ノ嵐モ法ノ聲

萬法一如トミル時ハ谷ノ巖モ花ノ色

△花ノ色ニ春開ハ岸ノ青柳窓ノ梅

櫻山吹岩ツ、ジ夏ニカ、レル藤ノ花

糸繪一聲

絲ヲ繪ヲモヨルト云フ日ノ暮ヲモヨルト云フ

クル、敷モナニカセンクルヨソ待コソ久シケレ

△玉籠珠簾第四絃五絃ヤ翠

藥玉念珠ニ至ルマテ皆是糸ノ徳トカヤ

△糸ヲヨル、織物ハ綾羅錦繡アヤノ文

色ナル糸ノ亂ル、ハ袖ニクスリノ玉ノ糸

白拍子ノ歌 金殿

△姑射山ノ裏ニハ嵐萬歳ノ名ヲ呼ハヒ南陽ノ軒縣カ

ノホドリ、ニハ水千年ノ徳ヲアラハス七ツ徳ヲホメ

ケルハ白雲黃竹ノ歌ノコエ

△屢仙ホツニタツサヘハヲノ、エ千度クチヌヘシ寶

山ヲカソフレハハマノ眞砂モ數ナラス白玉ノ椿ハ千代トモタ

遊僧拍子歌

やあら僧よや三笠山松吹風の高ければ、空に聞ゆる

萬代の聲、やれことうたふ萬代の聲、萬代の聲、

百敷の「大宮人はいとまあれや、さくらかさして」け

ふもくらしつ、

三千年に「なるてふも、のことしより、花さく春に

「あふぞうれしき、

君が代は「千世にやちよにさ、れ石の、いはほとなり

て「こけのむすまで、

白妙の「衣の袖を霜かとしてはらへは月の「光なりけ

り、

君はた、「心のま、のよはひにて、千代萬代の「數も

かぎらず、

霜こほる「野にもかげは残りけり、露よりなれし「有

明の月、

いかはかり「神もうれしと三笠山、二葉の松の「千代

のけしきは、

舞催歌

君ならで〜誰にかみせん「梅のはなそらよの色をも
かをも知る人そしるそらよの
わが戀は〜、よむともつきじ」ありそ海のそらよの
濱のまさごはよみつくすともそらよの

●延年之次第

寄樂 喜春樂

振鉢

○一番

東先

文珠院

西先

觀音院

○二番

東辨大衆

大慈院

最勝院

少將公

嚴心院

下松院

福壽院

安養院

成就院

正法志院

○三番

東舞催

舞催兒

自證院

大聖院兒

賢勝院兒

清淨院兒

寶珠院兒

阿彌陀院

西舞催

兒 花枝

妙光院兒

彌勒院兒

明星院兒

海青樂

假屋樂

中藏院

僉儀

披露中綱詞

觀喜院

添中綱

千手院

鼓

○十二番

遊僧

金藏院

奧藏院

明王院

假屋樂

千秋樂

○十三番

風流龜池

相亂拍子

福成院兒

淨名院兒

○十四番

遊僧

○十五番

福生院

證覺院

○十六番

火掛

德藏院

○十七番

白拍子

常如院兒

○十八番

當辨

常光院

西發心院

○六番

開口

慈尊院

射拂

寶寶堂院

○八番

間駝者

大明院

○九番

掛駝者

圓成院

○十番

連事

正知院

麻尼珠院

華嚴院

玉花院

西恩院

功德院

成身院

無量壽院

付物

越天樂

○十一番

絲綸

五大院兒

多聞院
○十九番脱

○廿番

答辨 安樂院
鼓 尺迦院

○廿一番

走 羅轉經院
惣珠院

散樂

長慶子 成光院
地藏院 妙德院

地謠

養賢院 寶掌院
常光院 證覺院
常光院 妙德院
金剛院 金藏院
尺迦院

延年連事并舞式

○如意寶珠連事

夫禪林風和ニシテ松葉ノ色ヲ増シ、定水波靜ニシテ

椿葉ノ陰ヲ浮フ、佛法繁昌ノ勝地ナレハ、讚仰ノ法灯ヲ吾寺ニカ、ヤカシ、法相擁護ノ靈幡ナレハ、和光利物ノ惠淺カラス、誠函蓋相應ノ砌トコソ存候エ、面々如何思召候やらん、

一人如仰只今ノ砌ヲ拜見仕候ニ、誠上古ニモ難有覺候、就其面々何物ヲカ御賞祓可有候やらん、一人誠金銀珠玉ノ珍寶ハサルコトニテ候エトモ如意寶珠ニスキタル寶ハアルマシイテ候、如何ノイシ如意寶珠ヲ感得可仕候やらん、一人如仰如意寶珠ト申ハ心ノコトク所願成就ノ玉ニテ候間、何物カ可如之候、面々心ヲ一ニシテ寶珠ノ難有様ヲ口スサマレ候エ、定而出現アラウスルニテ候、

○白拍子

凡如意寶珠ト申ハ、所願圓滿ノ名珠也、サレバ五障ノ龍女ハ玉ヲ捧テ成道シ、漢家ニ名ヲ得シ和ハ、玉ヲ磨テ德ヲタツ、是等ヲ聞ニツケテモ、玉ニスキタル物ソナキ、一人喜見城ノ内ニハ金剛藏ニ納ツ、龍宮城ノ内ニハ淨瑠璃壇ニアカムトカヤ、目出度カリケル寶珠ノ德カイナヤレ、
一人圓珠勝ニコソ存候エ、尙モ一拍子ヲ以テ口スサレ

候へ、

一人伽陀聲捧クル所ハ眞珠ノハナフサ、同音燕スル所ハ至心ノ香、沈水匂ヲマシエタリ、椿葉八千代ノ友モアリ、一人上千代マテモ、子ノ日ノ小松ヲ手ニトリモチテ、五絃ノ曲ヲソウスルハ、松風ヨルノ鶴トカヤ、聖代明時ニアキスレハ、ホウユノ雲モカスシケレ、ヲツマレリケル今ノ御代カナヤレヤレ、

一人圓掛ル砌ニハ管絃ニスキタルコトアルマシキテ候、中ニモ琵琶尤勝レテ候間、糸綸ト云舞ヲ尋被レ出、琵琶ノ緒ヲヨリカケラレ候ヘカシト存候、

一人然者ヲヨツテ御覽シ候へ、

一人上玉簾珠簾箏ノコト琵琶方磬ニ琴ノ樂玉、同音樂玉念珠ニ至ルマテ、糸ナクシテハ如何セン、一人弘微殿ノ細殿ニタ、スムハタレ、

同音コウキチンノホントノニタ、スムハタレ、
臘月夜ノ内侍ノカミ光源氏ノ大將ヤラ、ヨシナノ袖ノウツリカヤ、ニ返

清良云、右ノ詞中今ノ俗箏ノ曲ニウタフニヤ、ヤラ、ヨシナノ袖ノウツリカヤトハ、後世ノツクリサマナラス、是ヲ思フニモ庶正ノ頃、此延年舞ノ唱歌ノメナトニツクリ出タ
ルチ、後世俗箏ノ歌ニトリナシタル事知ルヘシ、

右延年連事平三品時章卿借給之間書寫畢

寛政紀元四月

橘朝臣經亮

寛政元年歲次己酉仲秋傳寫

貞幹

寛政五年癸丑仲冬撰奏

靜齋老人

寛政十二年八月傳寫

伴信友

南都興福寺延年舞唱物三反初重
二重三重

きみが代は、千代に八千代に、さいれいしの、いははとなりて、こけのむすまで、やれことおどふ、こけのむすまで、こけのむすまで、

右南都興福寺當職大乘院門跡家司多田長門守仲連傳古歌皆准
之唱也

寛政元己酉年六月下旬ノ時傳之、舞ハ興福寺一山衆徒等ニ傳フ、古風ニ今行レ之、勿論門主維摩會被勤之、尤勅使終而次ニ延年舞、一山之衆徒等并花枝ヲ持タル兒舞、同ハ御當職祝賀迄古式ナリ、

同寺延年舞歌

〔校訂者云、此延年舞の歌、前出延年連事の白拍子中寶珠の徳あなやれ、と捧ぐる所はの間に、千はやふる人の心なひけばそよ心なびくら

んとの一節ある外、他の文同一に付略之

○綾小路俊景卿記所載五節次第并部曲

五節間部曲事

一 丑日御

帳臺試事於子午廊、南上有后后廊、亂舞、大歌、了

阿音^{三反}發多々良^{三反}、

ひんた、らを^元、あゆかせはこそ、あゆる^イかせはこ

そ、あいきやうついたれ、やれ^ことうとう、^{就早發多々}

相替^{ナリ}

萬歲樂^{自下腐}

一 寅日^{叙位}

殿上淵醉事

今月三反

嘉辰今月歡無極萬歲千秋樂未央 此句必三反可秋之初

佳辰句第三反歡無極ヨリ淵醉

井作文等之時於晴所多誦此句

德是北辰椿葉之影再改尊猶南面松華之色十廻^{二反}

トクハコレホクシンチンエウノカケフタ、ヒアラ

タマリソンハナヲナンメンセウクワノイロトカヘ

リ入節ハ廿曲ハ十

四五番曲ハ二

今様

一 椿のかけは八千とせ松花の色は十かへり

一 みるにめでたき花のいろ千とせの松にふる雪

一 豊年のしるしは尺にみちてふるゆき

一 としのうちに咲梅紅にほひのうすゆき

一 ひかけの糸にむすはれをみの袖にをく霜

一 御まへの池の鴨とりうは毛の霜のしろさよ

一 つゐたてみたれは御はしの月のあかさよ

一 つゐたてみたれは神のますうち野の森のかけのた

かさよ

一 つゐたてみたれは御隨身のもちたるたてあかしの

しろさよ

一 ついたてみたれは衣かつきのおほさよ

一 ついたてみたれは舞姫のおほさよ

一 すさましくいふなるしはすの月夜を豊のあかりの

ひかりはめつらしくそおほゆる

水猿^{イ曲或號水}

水のすぐれて、おほゆるは、西天竺の、白鷺池、じむし

やう許由に、すみわたる、昆明池の、水の色、行末久し

くすむとかや、賢人の釣をたれしは、嚴陵瀬の、河の

みづ、月影ながらもるなるは、山田のかけひの、みづ

ヤ靈せむみやまのヤ五えうまつヤちく葉なりとそひ
とはいふ、われもみるヤちく葉なりともおりもてこ
むねやのかざしにヤまるさゝん、

萬歲樂^{自下腐}

一 於准后御休慮推參事

思之津^{五反}

おもひのつに、舟のよれかし、星のまきれに、をして

まいらう、やれ^ことうとう、^{うたふとさばとんと}

やれとはよびいたす言葉、こはその人をさす歎

とんとは富つなり、とつ五音相通也、

今月三反新豊^{三反}

新豊酒色鸚鵡盃寒清冷長樂歌聲鳳凰管中幽咽

新豊ノ酒ノ色ハ鸚鵡盃寒ニ清冷タリ長樂ノ歌ノ聲

ハ鳳凰管ノ中ニ幽咽ス

蓬萊山^{一反} 盛衰記卷十七及婦

ヤ蓬萊山にはヤ千とせふるヤ萬歲千秋かさなれりむヤ

松の枝には鶴すくひむいははかそはにはヤ龜あそぶ、

萬歲樂^{自下腐}

物云舞

一千世に萬代かさなるは鶴のむれゐる龜をか

とかや、若の下葉を、とづるは、みしま入江のこほり
みづ、春立空の、若水は、くむともくむとも、つきませ
じ、つきませじ、

伊佐立奈牟^{時立座}

いさたちなん、おしのかもととり、水まさらは、とくぞ

まさらむ、

一 御前試筆於昇廊北上有露臺亂舞大歌了、儀同^{二昨}

日、

一 御前召事於朝所南面庇有之^{西上}

今月三反新豊^{二反}鶴之群入^{一反}

ヤつるのむれゐるヤます山にヤ千世にちとせをかこ

ねつ、むやよはひは君かためなれやむあめの下こそ

ヤのとかなれ、

萬歲樂^{不肩脱自下腐}物之學^{名詞也自下腐}物云舞

白うすやうこせんし^{原染の紙まきあけ筆のともるか}

いたる筆のちく、やれ^ことうとう、^{五反七反}

一 仙洞推參事於公卿坐廣廂有推參之儀

思之津^{今月三反} 德是^{二反} 鶴之群入^{萬歲樂}

物之學^{自下腐} 物云舞^{自下腐} 水猿山^{伊佐立奈牟}

物之學^{自下腐} 物云舞^{自下腐} 水猿山^{伊佐立奈牟}

自下殿
 一 卯日標山國司以下供
 一 殿上洲醉事如昨日但今標
 一 辰日節會
 一 巳日節會如昨日
 一 清暑堂御神樂於昇廊被行之
 先音取 糴合 安知女於 柳 韓神上拍子 薦枕
 有音 篠波 千歲柳 早歌自鼓頭上拍子 星三首
 朝倉 其駒二反不
 一 御遊事
 呂調子 安名尊 鳥破二反 鏡山二反 鳥急三反
 律調子 伊勢海 萬歲樂十拍 五常樂急三反
 一 午日
 一 豐明節會始則舞姬參上正廳事大歌了、於昇廊南上
 有露臺亂舞如寅日、
 右以永德永享等嘉例註之
 一 小忌は下襲程に粉を可被付候、打はし候す候、其
 上に繪をかき候、寸法は前後の長闊腋袍程にて候
 べく候、一身うちたれば、單より小忌まで一寸おと
 しにて候べく候、此外寸法入候まじく候、御袖だけ

御袍に同候べく候、
 一 赤紐の長になに結候ての下八尺にて候べく候、廣
 は三分にて候べく候、赤蘇芳二筋黒二筋皆板引蝶
 小鳥をこふんにて繪に書候也、平緒をそめられ候
 べく候、
 一 綾小路殿手書寫此儀ヨシ文正元十一
 一 赤紐一筋蘇芳打上一筋濃打也、此紐二分許廣俄可
 裁取之條難叶之間、宗繼以今案二頗細く折者也、
 不可然、努々不可本、頗廣之條又有何事哉、
 中將實雅朝臣所用廣此定也、
 永享二十一年十一月かなにかくながさ一丈二尺ひるさ四ふん
 一 淵醉に御參目出候、御指貫平緒付色下緒勿論に候、
 廿四五才までは薄色腹白已下袴にて候べく候、御
 衣は御とのものを可被出候、先度被仰也、
 一 日蔭糸結様如此物一方四分入也
 一 日蔭糸但長一丈二尺色
 赤紐ニスデヲヒキカサネテ、二ニオリテニナニハ
 ムスブ也、
 長一丈四尺歟、濃打一筋蘇芳打一筋、廣三分バカ
 リニタ、ム、ニナニムスブ袖ノツケキハニツク

蝶小鳥ヲカク、結立二尺七寸バカリ、
 小忌文梅柳野筋小水小草蕨雉蝶小鳥、袖二ハタハ
 リヌヒメニカケテカク、後ニ三段或五段前ニ三段
 或二段、クヒカミ蝶小鳥、
 一 大嘗會小忌事、地白布ハキアケノ袍ノゴトシ、薄コ
 ヲ入テハルベシ、文ハウシロ五段前二段、ムネスソ
 二段、一身袖ノ付様シヤウエ(淨衣)ノゴトクカカ
 ヲコス三寸許、袖ノ下オクノヌイヤウヒタ、レノ
 袖ノ下ノゴトシ、下具ハソクタイノヲ用、小忌次ハ
 ソヒノランアルベシ、次下カサネ、次ヒトへ、袖ノ
 口下具ト一ハイニアルベシ、文ハ山アキト云物ニ
 テスル、ソレナケレハ何ニテモスル也、小忌ハタツ
 ノ日ヨリ着標山供奉殿上人用之、
 一 アカヒホ小忌ノ上カタニ右ニウチカクル也、カタ
 ノヌイメニトチ付ル也、前ウシロヘサカル、今度ハ
 カタヌキナキ間左ニ可付也、中一ムスヒノ下ムス
 ヒノ下ムスヒメ上也、次五次三也、
 一 心葉
 一 ヒカケノ糸
 一 裾カクル事、ヲミノヨクミユル様ニカクヘシ、ヒナ

カタアルベカラス、
 一指貫腹白事、十八九マテハ腹白ク、リヲ用也、廿斗
 二年タケテハ不用、公方事ハ不及申候也、
 一 衣冠直衣ニテ衣ノツマヲ出事、天下無事ニテ祝言
 之時出之、代アシキ時不_レ出、又公事少年之人ハ何
 時出テモクルシカラズ、歳廿四五ヨリツマワタウ
 スノト可_レ入、廿八九ヨリ中ホトニ入ベシ、アツ
 クモナクウスクモナク、又卅一二ヨリウスキヌヲ
 ハチャクセス、色々ノ綾織物又練貫コウバイナン
 トキル、此衣ニハワタハアツ、マトテワタヲアツ
 ク入ヘシ、人ノ心ニシタカヒテ卅ヨリウチモ織物
 ヲキル事アリ、年ヨリタル人ハ無文ノリウモンヲ
 ムラサキヲモチイル也、五節參仕人十六ヨリウチ
 ノ人紅打衣着用之時、雲ハクヲエリ袖身ニヲク、
 一指貫實入之時下袴之事、十六ヨリウチハフシカネ
 十六以後紅、又年タケテハ白、皆平絹也、イヅレモ
 指貫一尺ナカク沙汰御物也、
 一 小忌豊明節會大中納言參膳弁少納言
 一 小忌若也、近衛司大嘗會之時着之
 一 心葉金銀梅 日蔭糸 赤紐
 一 五節洲醉部曲人々之勘例

後小松院 木橋 綾小路 楊梅 兼邦朝臣 經良
 永德三 雅秋朝臣 信俊朝臣 兼邦朝臣 經良
 後花園院 木橋 永享二 雅藤朝臣 長資朝臣 有俊 經秀
 一后町廊亂舞
 永德三十一十四日丑日、於帳臺北面廊有亂舞、
 先任位次、各取脂燭、南上二行列立、次亂位次、
 鄧曲之輩立上、一前列立云々
 舞姬參上、重下仕、殿上人扶持之、舞姬殿上人南殿上
 人六位持之、攝政殿御分舞姬脂燭、信俊朝臣取之、
 一寅日御前試也、舞姬五人參上、殿上人脂燭又扶持
 之、几帳事上二ヶ處藏人持之、次三ヶ所女官持之
 云々
 午日同前御前試如例、舞姬參朝所之後、殿上人等
 於昇殿、北上鄧曲亂舞如帳臺試、
 露臺亂舞、今夜舞姬參入、正廳北面中妻戸信俊見
 之、自余舞姬等令參上中妻戸云々次殿上人等
 於昇殿、今夜亂舞如夜々、寅午日如例云々
 一永享二十一日十六日丑日
 一五節所 室町 茵文章博士在重扶持并脂燭 中將雅
 持并脂燭 前助解由次 几帳 舞姬扶持并脂燭 中將長
 持并脂燭 知俊朝臣 几帳 舞姬扶持并脂燭 中將長

二五節所 常茵式部少 童扶持并脂燭 在少將 下仕扶持
 并脂燭 侍從 几帳 舞姬扶持并脂燭 前助解由次
 三五節所 殿 所役同 一
 四五節所 殿 所役同 二
 五五節所 殿 所役同 三
 寅日午日以上如先
 一丑日十六日帳臺試 付后町
 位第一 中將長資朝臣鄧曲
 六 少將有俊鄧曲
 三 左少辨明豐
 五 右少辨政光
 九 藏人藤原懷藤
 同寅午日如先
 一寅日殿上燕醉
 室町殿御直廬推參
 御前試 付後
 御前召
 仙洞推參
 一卯日殿上淵醉
 二 中將長資朝臣鄧曲
 七 侍從經秀鄧曲
 四 權右少辨嗣光
 八 頭藏人原重仲
 十 藏人源為治

無童女御覽標山引之

廻立殿行幸

一辰日節會始其儀如例

一巳日節會

清暑堂御神樂遊

一午日豐明節會也

右當家說雖禁外見、依爲鄧曲門第免申

一覽之處剩被透寫者也於末代正本可

爲明鏡也

永正十一年六月一日 按察使俊景判

這本子細見于右與書了爲備後代龜鏡臨

之尤逸少贖本也可禁外見而已

永正十一年夏六月一日 羽林藤基規判

右綾小路俊景卿記以一本校合了

○義經記所載今樣雜歌

義經記卷五 二段靜吉野にて捨らる事、別して自拍子

の上手にてありければ、音曲もしうつり心も言

もおよばれず、聞人涙を流さぬはなかりけり、つ

ひにかくぞうたひける、

「ありのすさびの、にくきたに、ありきのあとは、戀し

きに、あかではなれし、おもかげを、いつのよにかは、
わするへき、

「わかれのことに、かなしきは、おやのわかれ、子のわ
かれ、すぐれてげにも、悲しきは、ふさいのわかれ、な
りけり

曾我物語七、わかれのことさらかなしきは、おやのわかれと子
のなげき、夫婦のおしと兄弟と、いづれなわきて思ふべき袖に
あまれるしのひねを、かへ
してと、むるせきもかな、

同卷 六段吉野法師判官辨慶をりふし舞たりければ、
大衆も引かねて是をみる、舞はおもしろくあり
けれども、をかしき事をぞうたひける、

「春はさくらの、流るれば、吉野川とはい、名付たり、
秋は紅葉の、ながるれば、立田川とも、いひつべし、冬
も末に、なりぬれば、法師ももみぢも、ながれたり、

義經紀卷六 七段靜宮入 ざるほどに鎌倉殿、三島
の御社參とぞ聞えける、八ヶ國の侍ども御供申
けり、御社參の御つれにさまの物語を
ぞ申ける、其中に川越太郎靜が事を申出した
ければ、各かやうのついでならでは、いかでか下
り給ふべき、あはれ音に聞ゆる舞を一ばん御覽

せざらんは、無念に候と申ければ、鎌倉どの仰ら

れけるは、靜は九郎におもはれて云々靜に舞まはせん事すかし、祐經が女房いまやうをぞうたひしらゆる所の文に、祐經が妻女も催馬樂をぞうたひける、堀の藤次が妻女も催馬樂をぞうたひける、磯のせんじも珍らしからぬ事なれどもとて、きせんといふ白拍子をぞかぞへける云々、我もうたひてあそばんとて、別の白拍子をぞかぞへける云々靜をすかして若宮入幡へはるかに日關て、こしをかきて出來たる左衛門尉藤次が女房もろともに打つれて、回廊にぞまうでたりける、せんじさいばらそのこま其日の役人なりければ、靜につれて回廊の舞臺になほる云々、靜は神前にむかひて念誦してぞゐたりける、先いせのせんじ珍しからねども法樂の爲なれば、さいばらについみうたせて、すきものせうしやといふ白拍子をぞかぞへてぞ舞たりける云々カ調都にてはないし所にめされし時は、くらのかみのぶみつにはやさされて舞たりしぞかし、神泉苑の池の雨請のときは、四條のきすはらにはやさされてこそ舞て候しか、此度は御不審の身にて召下され候しかば、つゝみ打などをもつれても下し候はず云

云、三人のがくたうは所々にておもひくに出たちけり、左衛門尉祐經はこんくすのはかまにとくさ色の水干に立えぼし、したんのどうに羊の革にてはりたる鼓の、むつの緒のしらべをかきあはせて、左のわきにかいばさみ、はかまのそばたからかにさしはさみ、上の松山廻廊の天井にひいどかせ手色打ならして、殘のがくたうを待かけたり、梶原平三は、こんくすのはかまに山ばと色の水干立えぼし、なんりやうをもて作りたるこがねのきくがた打たる調拍子にたくぼくの緒を入て、祐經が右のさじきなるなをりて、つゝみの手いろにしたがひて、すゝむしなどのなくやうにあはせすまして、島山をぞ待かけたる、はたけ山はまくのほころびよりさじきの體をさしのぞきて、別して色々しくもいでたす、白き大口に白きひたれに紫皮のひもつけて、折えぼしのかたくをきつと引たて、松風と名付たるかんちくのやうでうを持イオ、木の下木の下以下で異本にてうしをさわれれば、わうじきのおつのてにて種にぞありける、しばらくねとりすまして、は

かまのそばをたからかに引あげて、まくさつと引イあげつと出たれば、大の男のおもらかにあゆみなして、ぶたいにつとのほり、祐經が左の方にぞ居なほりける、名をえたるびなんなりければ、あはれなりとぞ見えにける云々、せんじカ也をよびて舞のしやうぞくをぞしたりける、白き小袖一かさね、からあやを上カに引かさねて、まきはかまふみしだき、わりびしぬひたる水干に、たけなる髪をたからかにゆひなして、此ほどのなげきにおもやせて、うすげしやうまゆほそやかにつくりなし、みなくれなるの扇をひらき、ほうでんにむかひてたちたり云々、靜その日は白拍子はおほく知りたれど、ことに心にそむものなれば、しんむしやうの曲といふ白拍子の上手なればイなり、心もおよばぬこわいろにはたとあげてぞうたひける云々、しんむしやうのきよくなからばかりかぞへたりける所に、祐經心なしとやおもひけん、水干の袖をばづしてせめをぞうちたりける、しづか君が代はとうたひあげたりければ、人々これを聞て、情なき祐經かな、今一

をりまはせよかしとぞ申ける、せんする所かたきのまへの舞ぞかし、おもふ事をうたはいやと思ひて、
 「しづやくしづのをだまきくりかへしむかしをいまになすよしもがな、
 「よしの山みねの白雪ふみわけて入にし人のあとぞ戀しき、
 とうたひければ、鎌くら殿みすをさとおろし給ひけり、かまくら殿、白拍子はけふさめたるものにてありけるや、いまのまひやう歌のうたひやうけしからず云々、しづのをだまきくりかへしとは、よりとものが世つきて九郎が世になれとや、あはれおほけなく覺たるものかなと御きしよくかはりければ、又おしかへし
 「よしの山みねのしら雪ふみわけていりにし人の跡たえにけり、
 とうたひければ、みすをたからかにあげさせ給ひて、かるくしくもほめさせ給ふ物かな、いふかさきもあり、
 同卷二 五段義經奥州 下野のむろのやしませよそに

みて、うつ宮の大明神をふしをがみ、行かたのはらにさしかり、さねかたの中將の、
「あたりの野邊のしらまゆみ、おしはりすひきしかたにかけ、なれぬほどは何にせん、馴ての後ほそるぞくやしき、

とながめけん、あたりの野邊を見て過ぎ云々、同卷七段北園 出羽のやがて御舟にのり給ふ、きよ川 羽のせんどうをばいやごんの守とぞ申ける、御舟しなくして参らせけり、水上は雪しるみかさささりて、御舟を上げかねてぞ有ける、これや此はかちうさのせうくしやうの、さうしまといふ所にながされて、

「月かげのみよするは、たなかい河のみなかみ、いな舟のわづらふは、しわづらもがみ河のはやきせ、そこともしらぬひばのこゑ、かすみのひまにまぎされり板、とうたひしも、今こそおもひしられけれ、

○曾我物語所載諸物

同卷七十一 五郎扇ひらき、かうこそうたひてまひたりけれ、

「君が代は、千世にひとたび、あるちりの、白雲か、

る、山となるまで、信云これとおしかへし、三べんふみてぞまふたりける、其まてうしをふみかへて
「わかれのことさら、かなしきは、おやのわかれ、子になげき、夫婦の思ひと兄弟と、いづれをわきて、おもふべき、袖にあまれるしのびねを、かへしてとむむるせきもがな、

○源平盛衰記所載今様

同卷の十七 福原遷都の後 後徳大寺の左大將實定は、舊都の月を戀わびて、入道にいとまをこひ、都へのぼり給ひけり云々、古京のあれゆくかなしさを、今やうにつくりてうたひ給ふ、

「ふるき都を、来てみれば、あさちがはらとぞ、なり平あにける、月のひかりは、くまなくて、あきかせのみぞ、身にはしむ、

と三べんうたひ給ひければ、宮をはじめまゐらせて、御所中に候給ひける女房たち、をりからあはれにおぼえて、みな袖をぞしほりける、

同本卷一九

「白うすやう 厚染紫の紙まきあけの筆ともゑかいたる筆のぢくやれととう、

「よろづの佛のぐわんよりも、千年のちかひぞたのもしき、かれたるまきくさもたちまちに、花さきみなるとこそきけ、(以下六章原番 卷数ヲ記セズ)

「蓬萊山にはちとせふる、萬歳千秋かさなれり、松の枝には鶴すくひ、いはほのうへには龜あそぶ、紙王 紙女

「君をはじめて見るときは、千代も經ぬべし姫小松、おまへの池なる龜が岡に、鶴こそむれるてあそぶなれ、佛

「佛もむかしは凡夫なり、我らもつひにはほとけなり、三身佛性ぐしながら、へだつる心のうたてさよ、紙王

「君があけこし手枕の、絶て久しくなりにけり、なにしにひまなくむつれけん、ながらへもせぬものゆゑに、紙王

「心のやみのふかきをば、とうろの火こそてらすなれ、みだのちかひをたのむ身は、てらさぬところもなかりけれ、

同卷九

「白露は月の光にて、黄土うるほす化あり、權現舟に棹さして、向ひのきしによする波、

「佛の方便なりければ、神祇の威光たのもしや、たけばかならずひらきあり、あふげばさだめて花ぞさく、(以上二章卷 數ヲ記セズ)

「さまもこゝろもかはるかな、おつる涙は瀧の水、妙法蓮花の池となり、弘誓の舟に棹さして、沈むわが身をのせたまへ、

同卷廿二 土肥焼亡舞の條、眞平佐殿の御前にて一時禮舞をぞしたりける、

「土肥に三つの光あり、第一には八幡大菩薩、我君を守り給ふ和光のひかりと覺、

○平家物語所載異體今様

長門本卷五、臺明寺法印に、俊惠坊阿闍梨と申くきやうの歌鼓の上手の有けるにうたはせて、少將今様をぞうたはれける、

「月もおなじ月、空もおなじそらの、いかなれば、こよひの空の、てりまさるらん、とをしかへし、ぞうたはれける、

○續世繼所載神歌

しきしまのうちき、いづれのいつきの宮とか、
人のまゐりていまやうたひなどせられける
に、すゑつかたに四句の神歌うたふとて

「うゑ木をせしやうは、然すませんともあらず、
とうたはれければ、心とき人などき、て、は、い、か
りあることなどやいでこむと思ひけるほどに、
くつ、かうなる、なめすへて、そめがみよません、
となりけり、

とぞうたはれたりけるが、いとその人うたよみ
などにはきこえざりけれども、えつる道になり
ぬればかくぞはべりける、この刑部卿とか人の
かたられ侍りしに、侍従大納言と申人も侍りし
か、さらばことわりなるべし、

○婦人養草所載水宴曲今様雜藝歌

水宴曲と云ものには當時知る人希なり、その譜
辭に曰

「水のすぐれて、おほゆるは、西天竺の、白鷺池、じん
しやう、許山に、すみわたる、昆明池の、水の色、行末
久しく、すむとかや、賢人の、釣をたれしは、嚴陵瀬の、
河の水、月影ながら、もるなるは、山田のかけひの、水

とかや、下葉をとつるは、三鳥入江の氷水、春たつ空
の、若水は、くむともく、つきもせじ、つきもせじ、
とうたふなり、曲節口傳あり

今様といふもの、辭に云

「や春のはじめのや、梅の花や、よろこびひらけてみ
なる花、

「おまへの池なる、うす水、とけたるやた、今かなろ
たるたるた、今よりこむる、

「蓬萊山には、ちとせふる、萬歳千秋、かさありん、松
の枝には、つるすくひ、岩ほのそばに、龜あそぶ、靈山
み山のや、五葉松や、ちく葉なりとぞ人はいふ、われ
も見る、ちく葉なりとも、折もてこむ、ねやのかざし
にや、まろさゝん、

とうたふなり、曲節口傳あり、

雜藝といふもの、辭に云

「ひんた、ら、あゆかせはこそ、ゆかせはこそ、あいき
やうついたれ、やれ、ことうとう、

「おもひのつに、ふねのよれかし、星のまぎれに、おし
てまるらう、やれ、ことうとう、

「いざたちなん、をしのかもとどり、水まさらば、とくぞ

まさらん、やれ、ことうとう、

「白うすやう、ごせんし紙、まさあけのふで、巴かいた
る筆のぢく、やれ、ことうとう

右二人してうたふことも有と聞たり、是を助音
といふ、曲節口傳あり、

○古事談所載今様

恵心僧都金峯山ニ正シキ巫女有ト聞テ、只一人
令向給フ、心中ニ所願ツラナヘトアリケレバ、歌
占ニ

「十萬億ノ、國ハ、海山隔テ、遠ケレド、心ノ道ダニ、
ナホケレバ、ツトメタイタル、トコソキケ、

ト占ケレバ、啼泣シテ歸給ト云々、
○體源抄所載今様

「しなのにあるなるきそぢ川、君におもひのふかけれ
ば、みなはに袖をもぬらしつ、あらぬよをこそすぐ
しけれ、

「たけのよなかはあはれぬる、ふしもさだめずおきる
つ、人に知られぬ戀をして、とりのなくまでねもい
らず、

「よしなのわれらかひとりねや、かばかりさむき冬の

よに、ころもうすくて夜はながし、たのめし人はまて
どこす、

「こゝろのうちにはしのべども、色に出にけりわがこ
ひは、ものやおもふとみな人の、あやめていかにとと
ふまでに、

○梁塵口傳集所載今様

「像法轉の時にては、薬師の誓ぞたのもしき、ひとた
び御名をきく人は、よろづの病なしといふ、

「四大聲聞いかばかり、よろこび身よりもあまるら
む、我らは末世の佛ぞと、たしかにきつるけふなれ
ば、

「熊野にまします権現は、なくさの濱にぞおりたま
ふ、わかものうらにましますば、としはゆくとも若王
子、

「ちは、やふる神、かみにおはし、ますものならば、あは
れにおほしめせ、かみもむかしは、人ぞかし、

「はるのはじめの梅の花、よろこびひらけてみなると
か、みたらし川のうすごほり、こゝろとけたるたい
まかな、

「みねのあらしのはげしきに、木々のこのはもちりは

て、
「松のこかげに立よれば、ちとせのみどりは身にしめども、梅が枝かざしにさしつれば、春の雪こそふりかかれ、
○十訓抄所載諸物

「周防のむろつみの、なかなるみたらし井に、かせはふかねども、
「實相無漏の大海に、五塵六欲の風はふかねども、隨縁真如の波のたぬときなし、
○古今著聞集所載今様

「藥師の十二のせいぐわんは、衆病悉除たのもしき、一經其耳はさておきつ、皆令満足すぐれたり、
「ませのうちなる白菊も、うつろふみるこそあはれなれ、われらがかよひて見し人も、雪となりつうれし、
○吾妻鏡所載今様

「をさまりなびく時なれや、一天四海のうちのみか、ひとのくにまでひのものと、もうこしがはらも此ところ、
○日吉山王利生記所載今様

「そよや、祝なれば、松の枝には、鶴こそ、巢をばくへ、いはほの上には、龜あそふなり、やれ、
とか申、かくのごとくうたひてしこうするなり、
○後三年記所載略頌

「鐺の音を、きかじとて、耳をふさぐ、剛のもの、紀七高六、宮藤三、腰瀧口、末四郎、
（近來荷田在滿が合條の略誦も此調なり）
○土佐日記所載舟歌

舟子かちとりはふなうた歌ひて、何とも思へらず、其うたふ歌に
「春の野にてぞ、ねをばなく、わかすきにて、手をきるく、つんだるなを、親やまもるらん、しうとめやくふらん、かへらや、夜べの菜を、そらごとをして、おきのりわざをして、錢ももてこす、おのれだにこす、これなみに
おほかれどかゝす、これらを人のわらふを聞て云々、
○後拾遺往生傳三善爲所載兒童歌

曰、女弟子源氏、洛陽人豐前守有輔女也云々、
死ノ事有ニ一男一女云々、其後有ニ一人子、夢見ニ

日吉山王利生記繪詞なり文永の末建治 叡山陰陽堂の僧都慶増が作れる今様
「大宮權現は、思へば教主、釋迦ぞかし、一たびこの地を、ふむ人は、靈山界會の、ともとなる、
○砂石集所載和讃歌

「藥師御前の、御誕生、心ふとにぞ、似たりける、すりこはちに、さし入て、板の木のまたにぞ、置にける、
或人語りけるは、寔に奇特不思議なれども、和讃の事はいとよろしからず、信心もさむる心地せり、靈佛のみめわろきに斗張をかくる如く、此和讃も箱の中にをさむべきやと云々、
○布衣記所載瀧口歌

後醍醐天皇日中行事に、下格子の後殿上人のなだいめんの事あり云々瀧口つるうちしておののなのりをとなふ、瀧口の戸よりまかり出て、問籍のさきおひちらして、所々の問籍、御湯どの、はさま、殿上の口などにて申あぐる云々、かへりあそびに歌うたふ事 布衣記に瀧口歌うたふ、
其生所云、有鐘堂、以瑠璃一成之云々、啓母宇治御堂如、此歟、母云、何故如此問乎、子曰、兒童歌云、
極樂カ不審者宇治乃御寺乎禮ヘトイフ
故也、母云、工巧雖盡美、不可似生本云々、
夢覺了、
○陰徳太平記所載隆達曲節小歌

陰徳太平記七十 林吉兵衛入道京都より下向して、三原の城へ参しけり、黄門殿景今頃何かはやると問給へば、龍達が小歌の中に、
「面白の春雨や、花のちらぬほどふれ、
と中歌をこそ、男女僧俗八十の老翁三歳の孩兒までもあまねく歌ひ候と申、黄門歌の語意の面白きぞや、汝踏て輝元卿へ此歌うたひて聞せ申べし、まだ若く坐せば、如何に賢に御坐共、萬事の翫び偏なる事もぞ有べき、面白の儒學や、武備の廢らぬ程すけ、面白の武道や、文事の忘れぬほど嗜け、面白の歌學面白の亂舞面白の茶の湯や、身を捨ぬほどすけとこそ、歌はまほしけれ、如何なる善事も中の一字を過ぬほどすきたきものなる

り、諸道の祝唯唱歌の一言以て蓋之、返すく
輝元卿によく聞せ申せ、老臣奉行等にも、此歌を
會得せよと云ひしとなり云々、

○下野國宇都宮にて替女がふるくよりうたひ傳ふる
歌

若宮参り

「との(殿)人を、さき(前)に立て、若宮まゐり(餅)を、
まうせ(仕)ば、若宮の、ばんばさき(馬場)で、ごしよ
ば(御書通)を見つけ(得)た、かたより(傍)倚て、明て
見たれば、いちぐんによ(二郡)しふにぐん(十二郡)
を、賜はる、おなめでた(甚愛)、若宮まゐり(餅)の、ごり
しやう(御利生)、

玉手箱

「いとしちを(最愛少女)の玉手箱の、寶物は、何々、し
ろみ(白鯛)の鏡が、な、おもて(七面)にしきをり(錦織)
が、やた、み(八匹)白かね(銀)の、竿指して、こがね(金)
つるべ(錐)を、く、らせう(括弧)げ(實)にまこと、ちや
うじや(長者)のじん(七)とも、よば(稱)る

信友按に、をこのをは少女のをに同じく、こは本
朝文粹菅大相國の詩の自注に、俗謂ニ貴女ニ爲

御、蓋取ニ夫人女郎之儀也、後撰集にたいふの
ご、閑院のご、大和物語に伊勢の御若狭の御ひが
きの御などいへるこの意か、陸奥仙臺人は、娘子
をおこといへりとぞ、

鳥追歌

「やんらめでたや、やんらたのしや、せちやう(千町)や
まんちやう(萬町)の、鳥追が参りて、福神を祝ひこめ
(納)米、しらげ(榎)もよん(善)世にあらふ(洗)在、ましら
げ(眞榎)もよん(善)に洗ふ、かしやうには、福と徳と
まゐり(來)入て、宿借らうと申す、宿借りさむらへ(候)
ば、殿も榮えさふ(候)よのふ、町も榮えさむらふ(候)榮
えてかしやうには、おほみかど(大御門)こみかど(小御
門)、おちやうじや(御長者)のみうち(御内)に、おとする
(音)は誰やらふ、右大臣(右大臣)に左大臣に關白殿の鳥
追、いにこれまのとりお(然)らばおへ(可)追、さかふ(欲
聞)よふ、きこしめさば(い)うけた
西田もよせんちやう(四千町)、東田もよせんちやう(四
千町)、坪の中の町のゆき(雪、經緯)をば、にちやうじや
と定めて、一年の月の數を、數へくまれば、十月
に餘る二月、しうにぐわち(十二月)の月をば、おとうづ

き(弟)と定めて、しやうぐわち(正月)の月をば、たら
うづき(太郎)といはふに、長者様へ大つごも(字ナシ)
(晦日)がござ(御坐)りて、松飾をする(爲)とのふ、飾り
しものは何々、遠山の裏白、奥山の青椏葉、さ、い(在
佐木)山の姫小松、伊勢のやうだ(山田)の千代さけが注
連繩、しち(七)さん(七五三)となひさげ(経垂)げ、やしや
んとかさらせ(金飾)、長者様へ、さん(三)日(三)日(三)日(三)
りて、三ヶ日の間に、飾りしものはなに、いち(一)
に(お)昆布(昆布)、に(三)な(菜)に、さ(三)に(だい)こん(大根)、
よう(四)たうふ(豆腐)、ご(五)いりまめ(炒豆)、ろく(六)
芋、しち(七)うと(獨活)に、はち(八)蕨、く(九)くだち(垂
立)に、じう(十)午房、じうに(十二)さう(雜煮)の中より、
いち(一)をとるはくろごめ(玄米)を、かし(炊)やうじ
(煮)やうだき(煮焚)、せんまい(粉巻)やひらき豆や、つ
がひ豆を参らしやう、としとく(歲徳)のえはう(吉方)
より、年男が参りて、さい(幸)のよね(米)をまい(飯)て
は、ふくいけ(福池)に立寄りて、若水に向ひて、おてう
づ(御手水洗)なんぞすまい(洗)て、おこ(御心)に任
せ、よもて(表面)をねろ(徐歩)か、とのて(外面)をねろふ
(徐歩)か、ねりてかしやうには、これよりえはう(吉方)

に、旭輝く百坪の御坐敷、高麗縁の疊と、錦べりのた
たみと、敷きや双べさうよのふ、御一門に、御兄弟、く
るまぎ(圓世)にゐなび(居並)て、末廣の折敷に、裏白を
しかせ(令敷)て、まいか(み)み(前鏡餅)といはふた、朽葉
色のかはらけ(土器)、御盃と定めて、長柄のてうし(注
子)に、和泉のごしゆ(御酒)をだぶ(溢)くとつがせ
たり、一獻参れさふよのふ、二獻参りさふよのふ、
五度も十度もまゐるころは、ごいはひ(御祝)、長者様へ
お肴をまゐらしやう、山の物にとりては、山鳴田鴨、
峯を走るさをしか(牡鹿)、谷をかくる(翔)う(兎)たのき
(狸)、けん(雄雞)ちゆほろ(腹羽)に、ほろ(振)腹羽(雄)う
つはきじまる(雄千鳥)、上ない豆うて(散)ば、あのこ
鳥もさうよのふ、ときはのくに(常世國)は秋は來て、鶴
もどる(鶴)雁の妻鳥、かやうなものまでも、おツとり
(押取)揃へておさかなをまゐらしゆ、川のものにとり
ては、よど川(よど川)のふな(鰻)、桂川(桂川)のあゆ(鮎)、あい(鮎)
とき(魚名)やう(鮎)と、伊勢鯉と、すいきと、ごよ(御
代)はめでたい(鯛)ます(鱈)のい(魚)なんぞ、おツと
りそろへて、おさかなと参らしやう、海のものにとり
ては、いそつ(小鯛)にし(小幸螺)に榮螺に、鮭に鮭に、

髭長の海老まる、脚長のかざみ(搦舞)、鳥賊のくるみ、
 蛸の手、いかの手も八つあれば、たこのてもやつあ
 る、あはせまうして、十六の御手を、おつとりそらへ
 て、おさかなとまぬらしゆ、三ヶ日も祝ふて、五日も
 過ぎさふ、な(七種)がござりて、つむな(探菜)は
 な(く)、ござやう(玉形)、たのくさ、すいぐさ、はこ
 べ(紫巻)、春田のなつな(舞)、かやう(如)此なわかな(新
 菜をつみあつて(菜集)さうらう(候)て、福池にす、い
 (洗)で、徳板にのせて、高麗庵丁、日本のとり(鶴)と、
 たう(唐)のとりと、わたら(鴨列)ぬさき(以前)に、てし
 りてう(手尻廻)と祝ふた、七種もいはうたが、十五日が
 ござりて、あかのかゆ(赤小豆粥)をたく(煮)とのふ、濃
 き様にさうらう、四斛入の上釜に、しらけ(糖)のよね
 (巻)とだいなごんのあづき(赤小豆)と、くぶんめ(九分目)
 にゆり(流)たてよの、さう(雜)木でゆたく(寛)とに
 たて(煮)にたてのはつう(初穂)をおとしかみ(御歳神)
 にさしあげ(捧)、鞍馬の午王をくらもと(庫下)におす
 (糖)とのふ、大峯の御札をかともと(門下)にはる(糖)と
 のふ、せとひ(春門)まはり(廻)て、ならす(不生實)木に
 は、花がさけば實もなる(生)、うます(不産)女のこんに

やうばうしやう(小女房菜)、はらむめ(孕婦)こむめ(可産
 子)、ござんなれ(御産有)や、さんなれ(産有)、さきはとつ
 き(十月)とひらき(開産)、御代のさかり(繁榮)とは、これ
 さんま(當所機)のおいはひ(御祝)。

○萬歳祝詞

「あらたのし(く)、今日いはひ給ふ御家は、鶴にもすぐ
 れ龜にもまさり、弓(手)には八千代を經、女手には萬
 年、千代萬年までもさき榮えける、とくわか(當若)に
 御萬歳とは、御家も榮えてまします、せいん(やう)あら
 玉の、としとるはじめのあしたには、りやう(やう)こ
 が、玉のかむりをかうべにめし、あやが太刀をはい
 て、はぐん(破軍)、やの(調)せきじんが刀をこしにさし、
 ゆづりはを、口にふくみ、五やうの松を手(持)て、た
 からの君の、げんじの門についたてば、なんしなん門
 おしひらき、お(し)イヤは、がうて候へば、た(ん)具
 な(ナル)所で候はず、えんもんだい(圓淨地)より久しく
 て、いちこつしやうと(一越淨土)にと(ま)まる(止)や、東
 はこお(さん)しや(降三世)、南はぐん(たり)や(し)や、西
 は大いとく、北にはこんかう(や)しや、丑寅は多門(天)辰
 巳はじこく(天)未申は増上天、戌亥はこうもく(天)、天

には日月、しもに堅牢地神、五大龍王、五りうおん、し
 ゆごせしめ給ひ、そよ(や)や(難詞)こん(此)の君は、いつ
 天の穩やかに、にほん(世)は(イ)ナ あんのん(安穩)に、さ
 んお(ま)もる、四まんはお(それ)まします、五(こ)が
 じやうじゆして、ろく(し)よ(六)衆に和合する、七福生
 じて七難なし、八方にそ(う)いなく、きうねん(九年)の
 蓄へは、十あ(く)はぶ(じ)う(豐)にて、百界蓮華もさ(と
 り)えず、せん(や)う(千)葉が蓮華を咲いて、億千歳とも
 さかえくるは、ま(こ)とにめでたう候ひける、

△九まんぼん(此)の御たから、十萬お(く)ども榮ふる

は、ま(こ)とに云々、

以上青陽の部といふ、

「さ(左)青龍の東には、富の小川のながる、そのみな
 かみ(水)を舞れば、う(き)にのりしは、ちやうはく、
 雲の波がさか(逆)を(の)ぼ(上)る、霞に橋を渡すらん
 や、天の川原へつ(く)らんや、龍門の波を高くし、は
 つひきくすい(八功德水)流る、そ(よ)い(や)、(難詞)こ
 (此)の君の、御(世)の久しかるべき、池の波を立つる
 やうは、夜(う)つ波は、こ(う)金(が)う(銀)る(り) (難詞) 遊(う
 つ)波は、よ(き)事(事)募(ら)んと、打ち(や)重(ね)、とう(なん

(東南)が玉柳、春の風にひ(く)、波にあ(や)文(を)織りか
 くる、せい(ほ)く(西北)は松の枝、川風にひ(く)き、ま(い)
 しのね(音)はを(し)ら(べ) (調)る、深き淵に舟をやり、淺き
 瀬には橋をかけ、は(し) (階)のもと(下)のし(や)う(ぶ) (警)
 は、夏によつて開いて、水をあ(ぐる)は水車、な(ぎ)さに
 見ゆるはみ(よ)つく(し) (深)名月(が)や(ど)れば、し(や)う(せ)
 ん(小)鮮(が)浮(き)出(て)、流(の)末(も)久(し)く、君(が)御(代)に(こ
 と)なら(ば)い、

せん(前)朱雀の南は、しん(し)よ(真如)の池を清くほり、
 妙法蓮華の種をま(き)、お(そ)い(お)しん(よ) (真如)に月
 し(ま)ば、池(の)なか(の)島(々)、植(え)ける木(の)名(は)何(々)、き
 んめ(う)が玉(椿)、南(天)竺(には)り(ん)ち(や)う(き)、い(ば)らし(や
 う)ぶ、か(は)らし(や)う(ぶ)、し(を)ん(せ)き(し)や(う)き(ん)ぎ(ん)
 てう、か(う)べ(て)う(が)あ(や)め(ぐ)さ、か(る)が(難)枝(に)と
 び(う)つ(る)、孔(雀)鳳(凰)が(む)れ(來)て、お(き) (澳)に(か)こ(め) (四)
 が(た)は(む)れば、な(ぎ)さに千(鳥)が(舞)を(ま)う(て)、ふ(つ)き
 (富)世(長者)と(さ)へ(つ)る、た(か)ら(の)君(の)み(う)ち(は)、佛(法)
 わ(う)い(とも)こ(た)へ(た)る、き(げ)ん(喜)見(長者)と(こ)れ(を)い
 ふ、

う(右)白虎の西には、花(の)えん(を)ち(か)く(し)、り(う)じ(や

(龍壁)に油をさして、しまでもちをながし、驛路の鈴が、よもすがら、聲をそろへて和合する、近國のあき人が、こなたをたづねきたりしが、ひましにたつたる市なれば、君がのきばにたちならび、よろづのたからを買いとりて、夕べになればしづまりけるは、賊にめでたう云々、

後玄武の北は、とくしや(徳者)ふくしや(福者)山を高くし、岑に霞むもいひ(霞)の烟、谷の水、酒は泉、澤を走るさを鹿の、梢を傳ふえん(後藤)の、千秋とよぶごとに、萬歳とふくは風、雨は土をうごかさい(不動)で、風は枝葉をならさい(不動)で、しんめいはつてう(八町)十六町に堀をほり、くでん(宮殿)六角にたて(建立)んとハヤ(離間)地を曳いて繩をほり、あく(悪)の地をそと(外)へ割り、福の地をばせんざい(千歳前幾)てう(町)ど、まんなか(真中)にわりて、ちやうどをさめたるまことにめでたう云々、

以上を四方がためと云

「かゝるめでたい所へ、大ばんしやうしゆ(番匠衆)が、三百三十三人参りて、木をあつめかね(金曲尺)をあて、すみ(墨斗)をうつてさげすんで、しやうばんじやうし

ゆ(小番匠衆)が請取つて、まかんがてうな(手ぎ)で、はんにやがかな(龜)で、はらむていかのみ(墨)を持って、せんざい(善哉)くの、さし植を腰にさし、四角に打ちや割り、八角にしらぐ(細削)れば、打つかてうな(手ぎ)のおんこゑ(御聲)に、かみはもつてむねんじやう、しもはろくじやうしやうきやうでん、ほけ經のいちの巻の、きやくらいほうせつ、たいさい、ちんめい、二にせいそう、しゆうしやういんにやう、くりやうく、ぶつぼうそんじく、三十せんざいくの、けづり揃へてよろこんだるは、しやく(錫)の杖を御手にもち、じぎやう(地形)なんぞを割り給ふ、出で入り口をまん中に、四町まき(四町)についち(築土)をついて、庭にだいはごんのいさご(砂)をしいたれば、光りはかやくくんごんじやうど(金銀淨土)にことならず、とうふくりうのすみよりも、八人の龍王が、くんひやうにて、一本の柱は、いこんがらどうじ、二本の柱は、二せいたか、三本の柱は、さん(山)王こんげん、四本の柱は、四天王、五本の柱は、こづ(牛頭)天王、六本の柱は、六八まん、七本の柱は、ななをの天神、八本の柱は、やはたの八まん、九本の柱

は、くまの、ごんげん、十本の柱は、十らせつ、十一本の柱は、十一面くわんせおん、十二本の柱は、樂師の十二神、三十六本の柱は、三十六どうじん(道神)と、九十六ほきりくちやうど、水晶の柱は、瑪瑙の石の上に、ゑいやつと云うて建てられたるは、實に云々、

けたばり(拵)などにとりては、からき(唐木)などを集めさせ、上げ堅め候へば、しろがねのめさす(雄杖首)に、こがねのをさす(雄杖首)に、せいめいがむなぎを、四百八のめたるき(雄杖)で、五百八のをたるき(雄杖)、えづる(雄杖)繩にとりては、だいはんにやは六百卷のみひも(御紐)とき、法花經八卷、十らせつの劔をといて、えづる繩をさだめ、葎板などにとりては、我朝の板を、かるめの板をとり、きらいのけ候へば、東天竺へ渡り、たうかんがとつたる板を、一二萬たん揃へて、所の鎮守は、いたねをはやしてあげ給へば、葎手の人夫は誰々、天ちくてらよりも、廿五のぼさつ、天降り給ひて、いぬわのすみよりも、しろかねの橋を架け、ゆらりざらりとすつとのほり、ふいてまはり候へば、不動の劔をば、釘と定め、同じく内から外へ打つたる釘には、こん(此)のみうち(御内)の所へ、よせんまじき

(不可避)ものは、これてんげのじやうと、ないげ(内外)の悪事、ひしゆと、

災難と、けち(飢饉)と、えきれい(疫癘)と、にか風に はにか(龜)水、釘の先へさしかけ(龜)て、七里けつかい(結界)、ぬけんくぎ(不拔釘)と打つたるは、内へ打つ釘には、福徳とさいはい(幸)と、毘沙門のちしやうの福と、十五てうの御福とよ、ごりやうじ、ごりやうわう、近江の國なるや、かもの長者殿の、そうやう(徳縁)の御福と、たんだ(具)こなたの(此方)みうち(御内)へ、するりと引入して、をさめくぎ(納釘)もしめくぎ(結釘)も、てうと打つて堅めたる、むね(棟)の伏せやうは、おもしろくも候へ、死伏(死せ)と定めて、いよの國のいよがはら、さぬきの國のさん年瓦、河内の國で買取つて、めがはら(此瓦)にをがはら(社瓦)、まんざいかうち(萬歳小路)のつ(角)瓦、りやう(兩方)のはふ(每風)の鬼瓦、山にも一千歳、川にも一千歳、沖なる海にも一千歳、三千歳を経たるせいはい、大蛇の龍王かな(龜)、やはらかにしなやかに、まねきとらせ給へば、海にながらへたる、龜の甲を表して、すま(隅)の方にうちけづりて、てく

らてんとゆりはめ(挿入)て、はふくち(標風口)に置いたれば、朝日させばにぎく、夕日させばかやく、是を見てようやく神、やうやく神はこれを見て、七里けつかい遁げ給ふ、うが(稱魂)の神は御覽あつて、よろこばせ給ふものは、實に云々、

みろく(彌勒)十年辰の年、諸神のたてたる御家は、雨がふれどもあまけ(雨)もせず、日はてれども日まけ(負)なしイ火チタイテ、ヨ火ゴトナク、風がふけどもイ祟る風なしとや、つたほど、はるかにイカヘテイカヘテ千早昔、千五八十萬年のごゆはひめでたう云々、

これより才藏とかけ合にて、いはさまたりたることなし、といふ、又かけ合になりて後、

三度ナヤ(難調)、さんと、さんどつるの舞は、あだな舞で候はず、むかし後白河の法皇の御時に、内裏へ参内の申す、烏帽子の風口に、なぎの葉を一枝さしかけて、御とき、内裏の敷の御門が、いちどにはきりと申す、きりくりにきり、きり、まつとひらいた、

といふ事ありとぞ、

此萬歳の祝詞、もし書傳へたるもあらんかと、よくたづね見たれども、三河國の中にはなきさまにて、只口傳のみなるに、皆訛りに訛り來たる上

に、中にはさかしらに改めたるさまの事も多く、又た、與あらんやうにとて、近世の流行歌めきたる事を加へ杯して、さらにとりどころなき物の如くなりたり、又上に記たる外にも異同もあるさまなるは、後に校合などもすべきなり、さて上に記たるは、二人の萬歳にいはせて記せり、中にはたしかにかゝらんと思はるゝ事もあれども、今おのが心もてはおしただめず、彼等がいふまゝにものせり、又思ふに才藏とかけ合になりても、馬の牧の名などの事もありつれど、それらの事も又後にものせんとて今はもらしつ、さるは夜もふけなどしたればなり、

文政十三年庚寅十二月朔日

中山美石

いにしへ今のうたい物はさらなり、はかなき童謡のたぐひさへまで、あまねく類聚せむのあらましにて、年ごろ何くれとなく書つめおきしを、このごろ伴のをちとぶらけるついでに、ふとこの事おもひ出て、

しかぐと聞えければ、われもさるふみつゝり見むとて、はやくよりつとへおきぬと、此ひと巻なむとうでられたる、ひらきみるに、めづらかなる諸ひ物多くて、又たぐひあるカへき書としも覺えず、かくてまた老翁いへらく、われかくまでは物しつれども、なほもれたるもおほかめるうへに、何くれと事わざしげくて、事ならむ事たやすからぬを、その心ざしこそほいかなふわざなれ、いでもてゆきてたゞし考へ、かつもれたるをも補ひそへよと、いとまめやかにかたらわれぬ、かゝりければこひもてかへりて、いまやうは今様、田歌はたうたと、まづおほかたにツイでなしで、ひとわたり書きよめつ、ただしわがあらかじめつどへおけるを、これに今まじへいれむは、あまりにわたくしのしわざなめれば、そは續集ともなづけてもとて、是にはひとつもくはへ物せず、

天保十四年後九月

黒河 春村

中古雜唱集終

陸奥國田歌解

寂蓮法師の眞蹟とて、陸奥國の田歌といふ物かける一ひらあり、元祿八年に鑿定家^{古筆}の極札あるを、今の了伴翁よりかりもて見つるに、その墨蹟のいみじきのみかは、唱歌はた優美にして、いひしらす尊とくめでたし、さるを其さうかの中には、ちと聞がたき詞どもなきにもあらねば、ちうさくしてをなど、或人のそゝのかすまに、なまじひにふんでとれども、こはたいかりそめのすさびなれば、僻事のみにこそおほかりぬべけれ、

天保十四年六月

黒河 春村

陸奥國田歌

- やかいたにてもや みつかうへにてもよな
- やまろすきははい ねぬべかりけりよな

- やげにとつとうや みつかうへにてもよな
- やまろすきははい ねぬべかりけりよな
- やおもはぬなりや とこそみえたれよな
- やとふべきをりや とはぬおとこはよな
- やげにとつとうや とこそみえたれよな
- やとふべきをりや とはぬおとこはよな
- やおもふとねてや とりのなかぬはよな
- やなをすぐせのや ふかきなりけりよな

陸奥國田歌

○こははるけき諸物を、何くれと書つらねて一卷とせられたりしが、切をこなはれて残れる物と見えたり、其故は紫野今宮に、やすらひ花の唱歌といふ物一ひらありて、社家鈴木近江守所藏し、又何ともしられぬ唱歌ひとひら、京の何がし所藏せり、これらその摹寫せるをみるに、いづれも同筆同やうの物にて、いさゝか疑ひなきかの聖の眞蹟なれば、此田歌また同種といふべし、また京高辻醒が井な

る住吉の社にも、同筆の唱歌一葉ありときけど、そはいまだ寫しをも見ず、

○田歌は今いふ田植歌にて、朝野群載卷三文筆下傀儡子記云、今様、古川様、足柄、片下、催馬樂里鳥子、田歌、神歌、棹歌、辻歌、滿周、風俗、咒師、別法士之類、不可勝計云々、藻鹽草卷十六^{六十四}歌の部に、田歌など載せ、又徹書記の歌に、旅人はさおりの田歌國により所によりて弊ぞかはれる、^{和歌分類引續}撰吟など見えたり、但しこは古き世の手振と見えて

枕草子、ことに人にしられぬもの、段に、賀茂へまうづる道に、女どものあたらしきおしきのやうなる物を笠にきて、いとおほくたてりて、歌をうたひ、おきふすやうに見えて、たいなにするともなく、うしろざまにゆくは、いかなるにかあらむ、おかしと見るほどに、郭公をいとなめくうたふ弊ぞ心うき、ほととぎすよ、をれよ、かやつよ、をれなきてて、われは田にたつ、とうたふに聞きもはてす云々など見え、又榮花物語御裳着の巻にも、其うたひけるさまども見えたり、
やかいたにてもや

○上のやは發語なり、東遊暖河歌に、
也^{ウツハ}宇止者末余引^{スルカ}須留加奈留宇止者末余引云々
綾小路俊景卿^{正二位權中納言、永正十五年七月十日薨、年六十八}記の今様に、
や^{ウツハ}靈せむみやまのや^{スルカ}五えう松やちく葉なりとぞ
人はいふわれもみるやちく葉なりとももてこむ
ねやのかざしにやまろさん、

ヤ蓬萊さんにはヤ千とせふるヤ萬さい千秋かさなれりむヤ松の枝には鶴すくひむいはほがそばにはヤかめあそぶ^{尙あれど}略しつ
今宮やすらひの唱歌に、^{これも寂蓮法師の眞蹟に}今もなほ本社にあり
上略やとみくさのはるや やすらいはるや やとみせ
とみせばなまつ やすらいはるや やどみせ
をせばみくらの山に やすらいはるや やあま
るまてなまつ やすらいはるや下略
など、此外にもこれかれ見えたり、又うたひ物なら
でもいへるあり、靈異記下卷十七條に、
驚^{ウツハ}彼沙門^三叩^三室戸^三曰^三咄^三大法師起應^三聞^三之^三矣^三
釋咄夜と見えたり、
後拾遺集釋教大納言道綱ノ母の歌に、^{蜻蛉日記}
おもひ出ること^{時時}もあらじと見えつれど

やといふにこそおどろかれぬる

古今著聞集卷十六廿三に、

醫師時成がむすめ備後とて候ける、佛師雲慶がむすめ越前とて候けるに、ある日越前が額に疥の出でたりけるを、びんごにむかつて、やおつぼね、此かさみてたび候へ、さすが御身ぞしらせ給はん、といひたりけるを云々、

など、猶あれどもらしつ、

○かいたは垣田か、また峽田にて、山間の田をいへるか、又會丹集九月中の歌に、山里はかいとの道も見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり、此歌詞花部にはゆき、の道とおとあるかいとも又同語にて、もほしていれられたりし峽路の轉語などにや、又友人加藤瑞園云、かいは代をかくのかくにはあらぬかといへり、今案に此説に従ふべきか、堀河百首早苗仲實こなきつむ澤田のしろはかきてけりいそぎて植よむろのはやわせと見え、又古今六帖第二卷の田におりたてば身こそをぼつれ春の田のふみかくとも今はやめなんとあるも、踏搔に文書をかねたりと聞ゆ、和訓栞に、田をかくは耕なりといひ、ある信濃人は、今善光寺邊

にて、代かく馬を田かき馬といふともいへり、○下のやは所謂ながめのやにて、伊勢の海や、榊葉やなど歌によめるに同じ、催馬樂篠波に、佐々奈美也、志加之加良左幾也、見之彌川久、乎見名乃與佐々也、會禮無加名、加禮毛加名、伊止古世仁世牟也などいと多し、上の今宮祭の唱歌をも見るべし、

みつかうへにてもよな

○みつかうへは水の上なり、

○よなは嘆息の辭にて、かうやうの唄物にそへていふ事、いにしへよりの俗習と見えたり、明の全漸兵制の附録なる、日本風土記卷五八皇國の童謡を擧たる中に、霽西之法之禿、捏的發奈路々外、垣蕩島溪骨篩那、密辭薄乃立搖那、霽西之法之外、勿達單皮所六格、革里氣尼法乃挨、殺鷄蘇路隔搖那、猶あれどなどあるよのも同語なり、又催馬樂の眞金吹に、末加彌不久、支比之名加也萬、於比余世留、奈與也、良伊之奈也云々

同じく山城に、

也末之呂乃、己末乃和太利乃、宇利川久利、奈與也、良伊之奈也云々

とあるなよやも又同語と見ゆ、

やまろすきあは、

○麻呂は男子の通稱にて、みづからの詞にも、下輩に打對ひては、我んといふ事を、麻呂といふが通例なり、すべて古文の體を考ふるに、獨り言には我んといひ、上様にむかひてはおのれといひ、下に對してはまろといへり、己は拙者といふにあたり、まろはオレといふにあたり、たいし此まろすきあはばは、又すこし用ひさまかはりて、れこは女の詞にて、男をさしていへるなり、アノ男カノ男などいふが如し、轉りたる詞なり、かく用ひたるもふるき事か、風俗歌の知々波々に、知々皮々加、加止仁宇曾不伊、末呂古曾太天禮、天宇止乎比佐介天、奈止加波也、太天利之毛世佐良牟、於乃禮加也、伊止古世乃加止仁、天宇止乎比佐介天、とあるも、女の詞に男をさして麻呂といへるやう

に聞えたり、

○すきあはは好合ばなり、すくは物喰ふ事なれども、又轉りて好色の事にいへる事多し、源氏物語帚木卷湖月抄に、この若もいと物うくして、すきがましきあだ人なり云々

同夕顔卷五十一に、

惟光をかこちけれど、いとかけはるれ、氣色なくいひなして、なをおなじごとすきありきければ、いと夢のこゝちして、もしずりやうの子どものすきくしきが、頭の君にをち聞えて、やがてゐてくだりけるにや、とぞ思ひよりける云々

など猶いとおほし、

ねぬべかりけり

○寝ぬべく有けりなり、

やげにとつとうや
○けには實になり○とつとうは囃詞なり、此語あだし諸物には、皆とうとうと見えたり、催馬樂角總に、安介萬支也、止宇止宇、比呂波加利也、止宇止宇、

左加利天禰太禮止毛、萬呂比安比介利、止宇止宇、加與利安比介利、止宇止宇、

風俗歌彼乃行に、

加乃由久波、加利加久比加、加利奈良波波禮也、止宇止宇、加利奈良波、奈乃利會世末之、奈乎久久比奈利也、止宇止宇、

また綾小路俊景卿記に、

ひんだゝらをあゆかせばこそ、あゆかせばこそあひきやうついたれ、やれことうと、

おもひのつに、舟のよれかし、星のまぎれに、をしてまいらう、やれことうと、うたふときはとうと

既之 やれとはよびいだすことば、子はその人をさす

か、とんとは宮つなり、とつ五音相通なり、

など、猶これかれ多かり、又催馬樂の葛城などに、於之屯止、於之屯止とあるも同語にて、とうと、

とんとう、とつとう、皆ひとつ詞にぞ有ける、さてかやうのうたひ物は、すべて左右應答の格ありて、まづこなたにて、

ヤかいたにても、ヤみづがうへにてもよな、ヤま

ろすきあはい、ねぬべかりけりよな

とうたひあぐれば、又かなたにうけとりて、

ヤげにとつとうや、みづがうへにてもよな、ヤまろすきあはい、ねぬべかりけりよな

とうたひかへすならはしなり、是を神樂には本方味方といふ、今この田歌などは、うるはしきうたひ

ものならねど、猶さりけりと思はるゝ歌のさまなり、又此一段の唱歌の意は、彼男の同心に好あひな

ば、などひかいたの泥の中にまれ、水の中にまれ、二人一所に寝ぬべきなり、と女の情をいひのべたるなり、

やおもはぬなりや とこそみえたれよな やとふべきをもや とはぬ男はよな

○此ころは問ふべき折りにとはぬ男は、我を思

はぬなりと見えたりと、女の歎ていへるなり、

○とは句のかはに付たれどもてにをはなり、日本紀覽宴歌に、

いさをしく、たいしき道の、おもかしき、とてぞ

わが名も、君はたまひし、をす國の、のりたれ給

ふ、おほみよは、難波の長柄、とこそ聞ゆれ、

など、かうさまのいひなし、世々の歌に多く見えた

り、 やおもふとねてや とりのなかぬはよな やなをすぐせのや ふかきなりけりよな

○これは次に、げにとつとうや、とりのなかぬはよ

な、やなをすぐせのや、ふかきなりけりよな、とい

ふ四句ありしが、切れたるなり、意は、おもふ男と

ねて、いまだ鶏のなかぬは、いよゝ宿世の深きな

りと、是は女の前よこびてうたへるなり、思ふと寝

てとは、思ふ男と寝てといふ意なり、萬葉集卷十四

左に、には鳥のかつしかわせをにつすともそのか

なしきをとなたてめやも、とあるも同格にて、かな

しきをとは、かなしき男をといへるなるを、かよは

してしるべきなり、

天保十四年六月十八日稿

陸奥國田歌解終

閑吟集

こゝにひとりの桑門あり、富士の遠望をたよりに庵を結びて、十餘歳の雪を窓につむ、松吹く風に軒端をならべて、何れの緒よりと琴の調をあらそひ、尺八を友として春秋の調をこゝろむる、折々に歌の一ふしを慰み草にて、ひまゆく駒にまかする年月のさきざき、都鄙遠境の花のもと、月のまへの宴席に立交はり、一色をもろともにし老若半ば古人となりぬる、懷舊の催に柳の糸の亂れ心とうちあぐるより、あるは早歌あるは僧侶佳句を吟する廊下の聲、田樂近江大和ぶしになり行く數々を、忘れ形見にもと思ひ出るに従ひて、閑居の坐右に記し置く、是を吟じうつり行うち、浮世のことわざにふるゝ心のよこしまなければ、毛詩三百餘篇になすらへ、數を同くして閑吟集と銘す、この趣をいさゝか雙紙のはしにといふ命にまかせ、時しも秋の螢にかたらひて、月をしるべに記す事しかり、

閑吟集

「花の錦の下紐は、とけて中々よしなや、柳の糸の亂れ心、いつわすれうぞ、寐亂れ髪の面影、
 「幾度もつめいゝにのわかな、君も千代を摘むべし、なをつまで澤に根芹や見ねど、いたどりしかのたちがくれ、
 「木の芽春雨ふるとてもく、なを消がたき此野邊の、雪の下なる若菜をば、今いくかありて摘まゝし、春立つといふ斗りにや、三吉野の山も霞みて、白雪の消しあとこそ路となれく、
 「霞分つゝ小松ひけば、うぐひす野邊にきくはつ音、
 「目出たやな松の下、千代もひく、ちよ千世々々と、
 「しげれ松山しげらふには、木かげにしげれ松山、
 たが袖ふれし梅が香ぞ、春にとはゞや、物いぶ月に逢ひたやなふ、
 「只吟可臥梅花月、成佛生天惣是虛、
 「梅花が雨に、柳絮は風に、世はたいうそにもまるゝ、
 「花をなへだてぞ垣ほの梅、さてこそ花の情知れ、花

に三春の約あり、人に一夜をなれそめて、後いかならむうちつけに、心空に奈良紫の、なればまさらで、戀のまさらむくやしさを、

「それをたがとへばなふ、よしなの問はず語りや、
 「年々に人こそふりてなき世なれ、色も香もかはらぬ宿の花盛りく、たれ見はやさんといかりに、人めぐり来て小車の、我とうき世に有明の、つきぬや恨みなるらん、よしそれとても春の夜の、夢のうちなる夢なれや、

「吉野川の花筏、うかれて焦れてよのく、
 「葛城山にさく花候よ、あれをよとよそに思ふた念斗り、
 「人の姿は花うつばやさし、さしておふたくやうそのかはうつば、
 「人はうそにも暮す世に、なんぞよ燕子が實相を談じ顔なる、

「花の都のたてぬきに、知らぬ道をも問へばさまはす、戀路など、通ひ馴れても迷ふらん、
 「面白の花の都や、筆で書くともおよばじ、東には祇園清水、落來る瀧の音羽の風に、地主の櫻はちりち

り、西はほうりんさかの御寺まはらで、まはれ水車の輪の、りせむせきの河波、柳は水にもまるゝ、ふくら雀は竹にもまるゝ、都の牛は車にもまるゝ、野邊の薄は風にもまるゝ、茶うすは引木にもまるゝ、げにまこと、忘たりとよ、きこりこは放下にもまるゝ、木伐りこの二つの竹の世々を重ねて、うち治めたる御代哉、
 「花見の御幸と聞へしは、保安第五のささらぎ、
 「我々も持ちたる尺八を、袖の下より取出し、しばしは吹いて松の風、花をや夢と誘ふらん、いつまでか此尺八、吹ひて心を慰めん、
 「吹くや心にかゝるは、花のあたりの山おろし、更くる間を惜むや、稀に逢夜なるらん、此まれに逢夜なるらん、

「春風細軟なり西施の美、
 「吳軍百萬鐵金甲、不敵西施咲裡刀、
 「散らであれかしさくら花、散れかし口とはなごゝろ、
 「上林に鳥がすむやらう花がちり候、いざさらば鳴子をかけて花の鳥追う、
 「地主の櫻は散るかちらぬか、見たか水汲、ちるやら

散らぬやら風こそ知れ、

「神ぞ知るらん春日野の、奈良の都に年を経て、さかりふけゆく八重櫻く、散ればささそふ誘へばぞ、散るは程なく露の身の、風を待つ間の程ばかり、うきこと、けなくもがなく、

「西樓に月落て、花の間もそひはてぬ、契ぞうすきともし火の、残りてこがる、影はづかしきわが身かな、

「花ゆへくにあらはれたよなふ、あらうの花や卵の花や、

「御茶の水がをそくなり候まつはなまいなふ、又こふかと問はれたよなふ、なんぼこじれたい、しんぼちこころぢや、

「新茶のわりたち、摘みつ摘まれつ、ひいつふられつ、それこそ若い時の花かよなふ、

「新茶の茶壺よなふ、入れての後はこちや知らぬこちやしらぬ、

「かれくの契りの末はあだ夢のく、面影片そひねして、あたり淋びしき床の上、涙の波は音もせず、袖にながむる川水の、あふ瀬はいづくなるらむく、

「面影斗り残して、あづまの方へ下りし人の、名はしらくといふまじ、

「さて何とせうぞ、一めみし面影が身をはなれぬ、

「いたづら物や面影は、身にそひながらひとり寐、

「あぢきないぞぢや、枳棘に風戀すまばこそ、

「梨花一枝、雨を帯たるよそほひのく、太液の芙蓉のくれなる、未央の柳の緑も、是にはいかでまさるべき、げにや六宮の粉黛の、顔色のなきもことほりやことほりや、

「かのせうくんの黛は、みどりの色に向ひしも、春やくるらむ絲柳の、思ひ亂る、折ごとに、風もろともに立ちよりて、木蔭のちりを拂はんく、

「げにやよはきにも、亂る、物は青柳の、いと吹く風の心ちしてく、夕暮の空くもる、雨さへしげき軒の草、かたぶく影を見るからに、心細くのゆふべかなゆふべかな、

「柳の蔭に御待ちあれ、人間はいなう、楊枝木伐るとおしやれ、

「雲とも煙とも見定めもせで、うはの空なる富士の根にや、

「みすはたいよからう、見さりやこそ物を思へたい、

「な見さひそく、人のすいするな見さひぞ、

「思ふさへこそ目もゆき顔もらうるれ、

「今から豊田まで日が暮るか、やまひかたはれ月は宵のほどぢや、

「あらうつくしのねりつほ笠や、これこそかわち陣みやげ、えいとろえいとえいとろえとな、湯傷口がわられた、心えてふまひ中こら、えいとろえいとえいとろえとな、

「世間はちろりに過るちろりく、

「なにとともなやなふく、うき世は風波の一葉よ、

「なにとともなやなうく、人生五十古來稀なり、

「たい何事もかごとくも、夢まぼろしや水の泡、さゝの葉にをく露のまに、あぢきなの世や、

「夢幻や南無三寶、

「くすむ人は見られぬ、夢のくく世をうつ顔して、

「なにせうぞくすんで、一期は夢よたい狂人、

「しるてや手折まじ、おらでやかざ、ましやな、彌生の長き春日も、猶あかなくにくらしつ、

「卵花がさねなめなさすぞよ、月にかいやくきあらはる、

「夏の夜を寐ぬにあかぬといひ置きし、人は物をや思はざりけん、麥つく里の名には、みやこのふが里の名あらじなの涙やなう、逢はで浮名の名とり川、川音もさねの音も、いづれともおぼへず、在明の里の子規、郭公聞かんとて杵をやすめたり、みちのくにはたけくまの松の葉や末の松山、ちがの鹽がまく、衣の里や壺の石ぶみ、うとの濱風々々、更行く月こそふく、いと短き夏の夜の、月入る山もうらめしや、いざさしをきてながめんや、

「わが戀は水にもへたつ笠く、物いはせせうしほたる、

「磯すましさなきたに、みかい、戀となる物を、

「影はづかしき吾すがたく、忍び車を引しほの、あとに残れるたまり水、いつまですみはいつべき、

「野中の草の露ならば、日影にさへもうすべきに、是は磯邊により藻かく、あまの捨草いたづらに、朽まさり行く袂かな、

「桐壺の更衣のてぐるまの宣言、葵の上の車あらそ

るきにいたましも、月の影もすさまじや、誰かいつし
蘭者の花の時、錦帳のたもとほ麻山の雨の夜、草庵の
うちぞ思はるゝ、

「ふたりぬるともうかるべし、月斜窓に入曉寺の鐘、

「今夜しも郷州の月、閨中たゞひとり見るらん、

「清見寺へ暮てかへれば、寒潮月を吹て袈裟にそゝ

ぐ、

「残月清風雨聲となる、

「身は浮艸の根も定まらぬ、人を待正躰なやなふ、ね

うやれ月のかたぶく、

「雨にさんとはれし中の月にさんなう月によなう、

「木幡山路に行暮て、月を伏見の草枕、

「たき物の、こがらしの森いつる、こすのとほそは、月

さへ匂ふ夕暮、

「都は人目つゝましや、もしもそれかと夕まぐれ、月

もろともに出てゆくゝ、雲井も、しきや、大内山の

山もりも、かゝるうき身はよもとがめじ、こがくれて

よしなや、鳥羽の戀塚秋の山、月の桂の河瀬舟、漕ぎ

ゆく人は誰やらんゝ、

「夢路より、幻に出るかり枕ゝ、よるの關戸の明く

れに、都の空の月影を、さこそと思ひやるかたの、雲
井は跡にへだゝり、暮渡る空に聞ゆるは、里近げなる
鐘のこゑゝ、

「東寺のあたり出にけりゝ、昔誰がつくり道ゝ、

さて鳥羽殿の舊跡、さなきだに秋の山風吹すさみ、憂

き身の露の袖の上、末はよどのゝまこも草、かれゝゝ

なりし契ゆへ、ならばぬ旅のわが心、みつの牧の荒駒

を、さゝがにの糸もてつなぐとも、二途かくがる人

心、たのむを愚かなりけるゝ、

「殘灯廊下落梧の雨、是君を思ふにあらずとも、鬚斑

らなるべし、

「宇津の山邊のうつゝにも、夢とも人の逢はぬもの、

「唯人は情あれ、夢のゝゝゝ、きのふは今日のいに

しへ、けふは明日の昔、

「よしやつらかれ中々に、人の情は身のあだよなふ、

「憂やな辛やなふ、なきけは身の仇となる、

「情ならではたのます、身は數ならず、

「情は人のためならず、よしなき人になれそめて、い

でし都も忍ばれぬほどに成にけるゝ、

「たい人には孤まし物ぢや、なれての後にはなるる

るるるるか大事ぢやる物、

「浦は松葉をかき、としよりの風を、今朝はとりか

き聚めたる松の葉は、たかぬも煙る成けるゝ、

「鹽屋のけぶりゝよ、たつ姿までしほるまじ、

「しほに迷ふた磯の細道、

「なにとなる身の果やらん、しほぞより候かたし貝、

「しほくませあみひかせ、松の落葉かゝせて、憂き身

ほかす崎や、波の夜晝、

「汀の浪のよるのしほ、月影ながらくまふよ、つれな

く命ながらへて、秋のこのみのおちぶれて、やいつま

でくむべきぞ、あぢきなや、

「からでもはこぶ濱川のゝ、鹽うみかけてながれ、

あしの世渡る業なれば、心なしともいひ難し、あまの

の里にかへらんゝ、

「舟ゆけば岸うつる涙川の瀬、枕雲かやにれば月はこ

ぶ、うはの空の心や、うはの空かやなにともな、うた

へやゝゝうたかたの、あはれ昔の戀しさを、今も遊女

の舟遊、世を渡る一節をうたひて、いざやあそばむ、

「棹の歌、うたに憂世の一節をゝ、夕波千鳥聲そへ

て、友よびかはす海士乙女、恨ぞまさる室君の、行舟

や暮ふらん、淺妻舟とやらんは、それは近江の海な

れや、我もたつねゝて、戀しき人にあふみの海、山

もへだゝるやあぢきなや、浮舟の棹の歌をうたはん、

みなれ棹の歌うたはん、

「舟はあふみ舟かやしなでこがるゝ、

「人買舟は沖をこぐとも、賣らるゝ身をたゞ靜に漕

上船頭殿、

「身はなるを船かやあはで焦るゝ、

「沖のとなりで舟漕は、阿波の若衆にまねかれて、あ

ぢきなや櫓がゝゝゝをされぬ、

「沖の鷗はかちとる舟に足を舐にして、

「磯山もしばしいはねの松程にゝ、たが夜舟とはし

ら波に、梶音斗りなるとの浦、靜なる今夜かなゝゝ、

「月はかたぶく泊り舟、鐘は聞えて里近し、枕をなら

べて、おとりかちやおもかちにさしませて、舳でを

夜露にぬれてさす、

「又港人舟が入やらう、から船の音がこもりからり

と、

「つれなき人を松浦の奥に、もろこし船のうき寝よな

ふ、

「戀も可なり、夢の間の露の身の、逢ふとも宵の稻妻、
 「今うきに思ひくらべていにしへの、せめては秋の暮
 もがな、戀しの昔や、たちも知らぬ老の波、いたく
 雪の眞白髪、長き命ぞ恨みなるく、
 「恨は数々おほけれども、左候申まじ、此花を御法の
 花になし給へ、
 「恨になにはに多けれど、又はわごりよをあしけれど
 更に思はず、
 「葛の葉く、愛き人は、葛の葉のうらみながら戀し
 や、

「四の鼓は世、中にく、戀といふ事も恨といふ事も、
 なきならひならば、ひとり物は思はじ、九の九の夜半
 にも成たるや、あら戀し吾つまの面影にたちたり、嬉
 しやせめて、げに身がはりに立てこそは、二世のかひ
 もあるべけれ、此櫻なる事あらじ、なつかしの此籠
 や、あらなつかしの此櫻、
 「そふてもこそ迷へく、たれもなふ、たれに成とも
 そふて見よ、
 「そひそはされ、なごうらくとなかるらう、
 「人氣も知らぬ、荒野の牧の駒だに、これはつるに馴

るゝもの、
 「我を中々はなせ山唐、とてもわごれうのくる身でも
 なし、

「身は破れ笠よなふ、着もせでかけておかるゝ、
 「笠をろせ、笠もかさ、濱田の宿にはやるすげのしろ
 ひとかり笠を、めせなう、めさねばお色のくろげに、
 「色が黒くばやらしませ、もとよりも鹽焼の子で、
 「ひくくく」とて鳴子はひかで、あの人の殿ひく、
 いざ引物をうたはんや、いざひく物をうたはん、春の
 小田には苗代の水ひく、秋の田には鳴子ひく、名所都
 に聞えたる、淺茅原の白眞弓も、今此御代にとめ
 た、淺香の沼にはかつみ草、忍の里にはもちずり石
 の、思ふ人にいかで見せめや、あねはの松の一枝、鹽
 籠の浦は雲晴れて、たれも月をまつ鳥や、平泉は面
 白、いとひまなき秋の夜は、月あるまでとひく鳴
 子、いさゝらをきて休まむく、猶ひく物をうたはん
 やく、浦には魚どり、網をひけば鳥とる、鷹野に狗
 ひく、何よりもく、契りの名残はあり明の、別もよ
 ほすしのゝめの、山しらむ横雲はひくぞ恨みなりけ
 る、

「忘るなど、たのむのかりに友なひて、立別行都路や、
 春はさらひで又をち、
 「里へは露の身よ、いつまでの夕なるらむ、
 「身はさび太刀さりととも、一度とげぞしようすらふ、
 「奥山の掛木になう、一度はさやになしまうしよなし
 まうしよ、
 「ふで、一度いふて見う、いやならばわれもたれそれ
 を限に、

「うら枯の、草葉にある、野の宮のく、跡なつかし
 きこゝにしも、其長月の七日の日も、けふにめぐり來
 にけり、物はかなしや小柴垣、いとかりそめの御すま
 む、いまでも火たき屋のかすかなる、光は我おもひうち
 にある、色や外に見えつらん、あらさびし宮所、あら
 さびし此宮所、
 「野の宮の、森の木枯秋ふけてく、身にしむ色の消
 かへり、おもへばいにしへを、何としのぶの草衣、き
 てしもあらぬ假の世に、行きかへるこそ恨みなれ恨
 みなれ、
 「犬かひ星はなん時ぞ、あゝおしやおしやおしの夜や
 なふ、

「やさしの旅人や、花は主ある女郎花、よし知る人の
 名にめで、ゆるし申なり、一もと折らせ給へや、なま
 めきたてるをみなめしく、うしろめたくや思ふら
 ん、女郎とかける花の名に、誰借老を契りけん、彼邯
 鄲のかり枕、夢は五十年の、あはれ世のためしも誠な
 るべしやく、
 「秋の時雨の又はふりく、ほすにほされぬ戀のため
 と、

「露時雨もる山陰の下紅葉く、色添ふ秋の風まで
 も、身にしみまざる旅衣、霧間をしのぎ雲をわけ、た
 づきも知らぬ山中に、おぼつかなくも踏迷ふ、道の行
 衛はいかならむく、
 「名残惜さに出で、見れば、山中に笠のとがり斗り
 が、ほのかに見え候、
 「一夜なれたる名残惜さに出で、見たれば、奥中に舟
 のはやさに霧の深さよ、
 「月はやまだの上にあり、船は明石の沖をこぐ、冴よ
 月、霧には夜舟のまよふに、
 「うしろ影を見んとすれば、霧がなふ朝霧が、
 「秋はや末になら坂や、このてがしはの紅葉して、草

の枯る、春日野に、妻戀ひかぬる鹿の音も、秋の名残と覺へたり、

「さよ／＼／＼ふけがたの夜鹿の一聲、

「めぐる外山になく鹿は、逢ふた別か逢はぬ恨みか、

「逢夜は人の手枕、來ぬ夜はおのが袖枕、枕あまりに

床ひろし、よれ枕こちよれ枕よ、まくらさへにうとむ

か、

「一夜窓前芭蕉の枕、涙や雨と降覽、

「世事邯鄲枕、又懷瀧瀧灘、

「清客不落邯鄲枕、殘夢疎牀半夜鐘、

「人をまつ蟲枕にすだけど、淋しのまさる秋の夜すが

ら、

「山田つくればいほねする、いつしか此田をかり入

て、思ふ人とねらすらう、寢にくの枕や、ねにくの庵

のまくらや、

「とがもなひ尺八を枕にがかりと、なげあてゝもさび

しや獨寢、

「一夜こねばとて、とがもなき枕を、たてならけに横

ならけに、なよな枕なよなまくら、

「引よ手枕木枕ともおとつ、よ手枕、たかをのわしや

うの／＼手まくら、

「くる／＼／＼とは枕こそ知れなう、枕物いはふには

勝事のまくら、

「戀の行衛を知るといへば、枕にとふもつれなかりけ

り、

「衣々の砧の音か、枕にほろ／＼／＼と、うれを

したふは涙よなふ／＼、

「君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつ／＼とも、夢をもせ

めて、など思ひ知らずや恨めし、

「爰は忍ぶの草まくら、名残りの夢なましましぞ、都の

方を思ふに、

「千里も遠からず、逢はねば尺も千里よなふ、

「君を千里にをいてそふも、酒を飲でひとり心を慰め

ん、

「南陽縣の菊の酒のめい命もいく、藥七百歳をたもち

ても、齡はもとの如くなり／＼、

「こへさに人のうちかつ／＼、ねりぬき酒のしわざか

や、あちよろこちよろ／＼よう、腰のたぬぬはあ

人のゆへよなふ、

「きつかさやよせさにしきひもお、

「赤きは酒のとがぞ、鬼となおぼしぞよ、おそれぬは

で、我に逢ひ馴れ給は、けふがるなどおぼすべし、

われもそなたの御姿、うち見には／＼おそろしげな

れど、なれて強いは山臥、

「況んや竟宴の砌には、なんぞ必ずしも人のすゝめを

待たんや、

「あの鳥にてもあるならば、君が行衛もなく／＼も、

などか見ざらむ、返々もうらやましの庭とりや、げに

や八聲のとりとこそ、名にも聞しに明過て、今は八聲

も數すぎぬ、空寝かまさ寝か、うつ／＼の鳥のこゝろ

や、

「愛きも一時嬉しきも、思ひさませば夢候よ、

「此程は人目をつゝむ吾宿の／＼、垣ほのすいき吹風

の、聲をもたてず忍び音に、泣くのみなりし身なれど

も、今は誰をかはいかりの、有明月の夜たりとも、何

かしのばん杜鵑、名をもかくさで鳴く音かな、なく音

かな、

「篠のしの屋の村時雨、あら定めなのうき世やなふ、

「せめて時雨よりし／＼より、ひとり板屋のさびしきこ、

「せめて思ふふたりひとりねもかな、

「ひとり寝しよの憂やな、ふたり寝をめて憂やなひと

り寝、

「人の情のありし時、など獨寢をならはざるらん、

「ふたり寝し物、ひとりも／＼ねられけるぞや、身は

ならはしよなふ、身はならはしし物哉、

「ひとり寝はするともうそな人はいやよ、心はつゝひ

てせんやなふ、世の中のうそか、いねかしうその、

「たい置て霜にうたせよ、夜ふけて来たがにくひ程

に、

「とてもおりやらは、よひよりもおりやらで、鳥がな

くぞ／＼いか程あぢきなや、

「霜の白菊うつろひやすやなふ、じやたのむまじの

花ご／＼や、

「霜の白菊いなんでもなやなふ、

「君來すば小紫、わがもとゆひを霜は置くとも、

「索々たる緒のひゞき、松の嵐にかよひ來て、ふけて

は寒き霜夜、月をこさんに送るなり、

「霜ふる空のあかつき月になし、さてわこれらはかへ

らうかなふれて、

「雞聲茅店月、人迹板橋霜、

「跡ををしらるゝは、人迹板橋の霜のゆへぞ、

「はしへまはれば人が知る、淡の川のしほがひける、

「橋の下なるめゝじやこだにも、ひとり寝じと上り下る、

「小川の橋を、背には人の、あちうきわたる、

「都の雲井をたち離れ、はるく來ぬる旅をしぞ思ふ、

「哀の憂き身の果ぞかなしき、水ゆく川の八橋や、蜘蛛手に物を思へとは、かけぬ情の中々に、なるゝや恨みなるらむく、

「鎌倉へ下る道に、竹へげの丸橋を渡ひた、木が候ぬか、板が候ぬか、竹へげの丸橋をわたひた、木も候へど板も候へど、憎い若衆をおちいらせよとて、竹へげのく丸橋を渡ひた、

「面白の海道下りや、何と語るとつきせじ、鴨川白川打渡り、思ふ人に粟田口とよ、四の宮河原に十禪寺、關山三里を打すきて、人まつもとにつゝとの見渡せば、勢田の長橋野寺藤原やかすむらん、雨はふらねどもる山を打過ぎて、小野の宿とよすりはり嵩の細道、今宵は爰に草枕、假寝の夢をやがて醒が井、ばんばと吹けば袖さむ、伊吹嵐のはげしきに、不破の關守きさ

らぬ御代ぞめでたき、

「曆の中へ身をなげばやと思へど、底の邪がこわい、

「今朝の嵐はあらしではなげそ、すそよの大井川の河の瀬ぢや、げにそよなふ、

「水が氷るやらん、淡河がほそりすよなふ、我らも獨寝に身がほそりすよなふ、

「春過夏闌て、又秋くれ冬の來たるをも、草木のみ只しらするや、あら戀しの昔や、思出は何につけても、げにや詠れば月のみゝてる、鹽がまの浦淋しくも荒はつる、跡の世までもなほし見て、老の波も歸るやらん、あら昔戀しや、

「したへども願へども、甲斐もなきさの浦千鳥、音のみ鳴く斗りなりく、

「逢はで歸れば、朱雀の川原の島なた川、有明の月影つれなやくなう、つれなで逢はでかへすや、

「須磨や明石の小夜千鳥、恨みて鳴く斗り、身かな身かな、ひとつうき世にひとつ深山に、

「深山鳥のこゑまでも、心あるかと物さびて、靜なる靈地かな、げに靜なる靈地かな、

「鳥だに憂世いとひて、墨染に染めたるや、身を墨染の浦浪のたちるに思ひ候もの、

「田子の浦浪、浦の浪たぬ日はあれど、日はあれど、

「石の下の蛤施、我と世樂せいとなく、

「百年不事まず、變強過し、

「わごりよに心づくし、弓ひくぞつよの心や、

「とり入ておかふやれ白木の弓を、夜露のをりぬさきにとりいれそなふ、

「さまざまへより松山のしら鹽、去語神變たよ、弓いりかたにゆへたりう、あら神變た、

「いと物細き御腰に、大刀をはき矢おひ、虎豹を踏、御脚に糞香をめされた、くればかさとなり候、賤が柴垣えせ物、

「いや申やは、たゝゝゝうて、柴垣にをしよせて、その夜はよますがらうつなや、

「うはの契やはなだ帯のたいかたむすび、

「神は偽ましますじ、人やもしも空色の、はなだに染し常陸帯の、契かけたるや、かまへて守り給へや、ただたのため、かけまくもくかたじけなしや、此神の恵もかしま野の、草葉における露の間もおしめたい、戀の身の命のありてこそ、同じ世を頼むしるしなれ、

に染めたり、

「丈人屋上鳥、人好鳥示好、

「音もせいでおよれく、鳥は月に鳴ぞ、

「名残の袖をふりきり、さていなうすよなふ、吹上の真砂のくすさけはなふ、

「袖ぞ名残をおし鳥の、連て立たばや諸共に、

「風に落水にはさかふ花紅葉、しばし袖にやどさん、涙の露の月の影く、それかとすればさもあらで、小篠のうへの玉あられ、音もさだかに聞えず、

「世間は後よなふ、笹の葉のさらさらと降るよなふ、

「凡人界の有様としては、思推して見ればくわいらい棚、道にひりを争ひまてる、いつれの所ぞや、忘想乾儼夢まぼろしの世の中に、あるをあると思ふらむ、

「申たやなふく、身が身であらうには申たやなう、

「身の程のなきもしたふもよしなやな、あはれ一村雨のはらくとふれかし、

「あまり言葉のかけたさに、あれ見さいなふ空行く雲の早さよ、

「芳野川の、よしやと思へど胸にさはがる、田子

「まことの姿はかけろふの、石に残すかたちだに、夫とも見えぬつたかつら、くるしみを助け給へと、いふかと思えて失せにけり」

「水にふる水、芝生はいはじ消へきゆるとも、

「ふれく雪よ、宵に通ひし道の見ゆるに、

「夢かよふ道さへ絶ぬ吳竹の、伏見の里の雪の下折と、詠みしも風雅の道ぞかくげに面白や、わか竹のはり竹の、さゝらならば、夢の通路たなまし、千秋萬歳の榮華も、破竹のうち樂みぞ、あぢきなの愛世や、夢さへ見はてざりけり、

「見るかいありて嬉しきは、契りし今朝の玉章、除目の朝の上書

「しやつとしたこそ人はよけれ、

「げにあひ難き法にあひ、受け難き身の人界を、うくるみぞとやおぼすらん、はづかしや歸るさの、道さやかに照る月の、影はさながら庭の面も、雪のうち芭蕉の、偽れる姿のまことを見へば、いかならんと思へば、鐘の聲諸行無常となりけり、

「おほとの人孫三郎が、織手をとめたり織衣、牡丹唐草獅や象の、雪ふり竹の籬の桔梗と、うつればかは

る白菊の、おほとの人竹の下、うら吹風もなつかし、さすやうでさぬおにきと、など待人のごさるらん、

「人の心はしられずや、眞實心はしられずや、

「人の心とかた田の網とは、夜こそひきよけれ、よるこそよけれ、世は人目のしげれば、

「みちのくにのそめいろの、宿の千代つる、つるかかほは、見めもよひかかたちもよいか、人だにふらぎなをよからう、

「うきみちのくの忍ぶの亂ぞ、思ふ心の奥しらすれば、浅くや人の思ふらん、

「忍ぶ身の心に隙はなけれども、なほ知る物は涙かな、涙かな、

「忍ぶの里に置く露も、我等が袖の行衛ぞと思へども、色には出じと斗りをく、心ひとつに君をのみ、思ひこしちの海山の、へだては千里の外なりとも、人の心のかはらずば、又かへりこむかへる山の、秋の夕のうき旅も、こにうははかくはづかしからじ、

「しのば、目でしめよ、言葉なかけぞ、あだ名のたつに、

「何よ此しのぶにまじる草の名の、我には人の軒はならん、

「龍のは今は名はもるゝとも、

「忍事もしあらはれて人々に、こなたは数ならぬ身、そなたの名こそ惜しけれ、

「忍ぶれど色に出にけり我戀はく、物や思ふと人の問ふまで、はづかしのもりける袖の涙かな、實や戀すてふわが名はまだき立けりと、人知れざりし心まで、思ひしられてはづかしや、

「をしからずのうき名や、つゝむも忍ぶも人目も恥も、よい程しかの事かな、

「おりやれく、おりやりそめておりさらねば、おれが名がたつ只おりやれ、

「よし名のたゝばたて、身は限ありいつまでぞ、おそばに寝たとて皆人の、談話ちや名はたつて詮なやな、

「よそぢきさらね、契らぬさへよ名のたつ、

「流轉生死を離れよとの、御とぶらひを身にうけば、縦其名はなのらすとも、受けよろこば、そののみぬしとおぼしめせ、回向は草木國土までもらさじ、なれ

ば、わきて其ぬしにと心あてあらば、それこそるかうなれ、うかまではいかであるべき、

「只將一縷懸肩髪、引起塗蹄宜刀盤、

「ひいらあやでこもひよこたま、

「今ゆた髪がはらりと解けた、いか様心もたそ、とけた、

「わがまたぬ程にや人のござるらう、

「まつと吹けどもうらみつ、吹けどもへんないものは尺八ぢや、

「までも夕のかさなるは、かげに初かおぼつかな、

「まてとて來ぬ夜はふた、び肝に消し、更行鐘の聲、そはぬ別をおもふ鳥の音、

「また待宵の更行鐘の聲、聞ばあかぬ別のとりは物かはと詠せしも、戀路の便の音信の聲と聞物を、

「この歌のごとくに、人めましくもいひたつる、人は中々わかためは、愛宕の山臥よ、知らぬ事なのたまひぞ、何事もいはしや聞かじ、白雪のく、道行ぶりの薄氷、白妙の袖なれや、櫛が原もふる雪の、花をいざやつまふよ、末摘花は是かや、春もかへきなば、宮こには野邊の若菜つむつらや、

「つほひなう、せいしやうつほひなふ、つほやねもせひてねむかるらう、

「あまり見たさに、こと隠れてはして来た、先はなまひならはなして物をいはさいなふ、そらういとしよう何とせうぞなふ、

「いとおしうて見れば猶又いとおし、いそ〜とかひ行垣の緒、

「憎げにめさるれどもいとおしひよなふ、

「いとしうもなひ物いとおしひといへとなう、あゝ勝事かしやしや、さらばわごれうちといとおしひよなふ、

「いとおしかられてあとにねより、憎まれ申して御そくねう、

「人のつらくはわれも心のかはれかし、憎むにいとおしいはあんはぢや、

「かくひふりかるあのふりを、する人はひすおれがする、

「いとおしいといふたら、かなばふす事が、明日は又讃岐へくだる人に、

「我は讃岐のつるわのもの、阿波の若衆を腐觸れて、

あゝよや腹よや、つるわの事も思はぬ、

「羨やわが心夜盡君にはなれぬ、

「ふみは遣たし詮方なかよふ、心の物をいへかし、

「こかのとこと外々でおとひたとなふ、あら何ともなの文のつかひや、

「おせき候ともせかれ候まじや、淀川の浅き瀬にこそしがらみもあれ、

「こしかたより今の世までも絶せぬ物は、戀といへる曲者、げに戀は曲者くせ物かな、身はさら〜さらさら、さら〜更に戀こそねられぬ、

「詮なひ戀を志賀のうら、浪よる〜人により候、

「あの志賀の山こへをはる〜とねたふなれつらふ返す〜、

「あぢきなと迷ふ物かな、しどろもどろの細道、

「爰はどこ石原嵩の坂の下、足痛やなふ、駄賃馬に乗たやなふ、殿なふ、

「よしやたのまじ行水の、早くもかはる人のこゝろ、

「人は何ともいは間の水候よ、わごりよの心だににごらずば未までよ、

「戀の中川うつかと渡るとて袖をぬらひた、あら何と

もなのさても心や、

「宮城野の木の下露にぬる、袖、雨にもまさる涙かな、涙かな、

「紅羅の袖をばたがぬらしけるかや〜、

「花見れば袖ぬれぬ、月見れば袖ぬれぬ、なにのこゝろに、

「難波堀江のあしわけば、そよやそゝろに袖のぬれ候、

「泣くはわれ、涙のぬしはかなし〜ぞ、

「折々は思ふ心の見ゆらん、つれなや人の知らず顔なる、

「よべのよばい男、たそれよもれごきかこにけつまづゐて、大黒ふみの候〜、

「花籠に月を入れてもらさじ、これをくもらさじともつが大事な、

「かこかな〜、浮名もらさぬかみなかなふ、

雖其斟酌多候、難去被仰候間、悪筆を指置如
本書寫畢、御一見之已後には可有入火候也、
比興云々、

大永八年戊午卯月仲旬書之

巷 謠 編

總論

古への俗間のうたひもの、起りを尋るに、日本紀に載られたる童謠と云ものも、大略古への常の雅歌に歌句異ならねば、論ずるかぎり非ず、萬葉集十六に乞食者、詠二首とて載たり、これは乞食者の作ると云にはあらで、乞食者が人の家の門に立て、謠ひて物乞ありく其詠と云ことなり、歌の字を書ずして詠とあるに心をつくべし、さて乞食者を保加比々止と云よし、和名抄に揚氏漢語抄を引ていへり、何故に保加比人と云ことならんと、予わか、りしほどいふかしく思ひしに、よくきこえたることなり、保加比は大殿壽酒齋など云壽なり、乞食が徒は、件の萬葉集を思ひ合するに、古へより人家の門に立て、くさくさの壽詞をうたひて、物を乞ありくを主とせるなるべし、さるは人ををかしく興がらせて、其の代に物をもらへるなり、されば其の徒を保加比人とはいへるなり、今の世にさる者ありて其を保米と云は、即ち壽ひ

贊る謂の稱にて、全古への遺風なり、清少納言のいはゆる尼法師の乞食者のうたへる歌、これと同趣なり、さてかの乞食者の詠二首とあるは、萬葉に載たれば、今更とかくさたすにおよばず、人のよくしりたるところなり、しかるにその歌詞は、少しは戯めきてをかしきことなどをまじへたるのみにこそあれ、全く古への雅たる長歌に異なることなし、されば古への歌よみの作たる歌詞をきつたへて、乞食者がとりて謠へるものか、又は乞食者のうたひありくがために、をかしくよみてあてへたるにもあるべし、いかにまれ法格は雅歌に異なることなければ論に及ばず、又十九に遙開、新江船人唱歌とて、朝床爾聞者遣之射水河朝已盡思都追唱船人とあるその船人の唱と云ものは、雅歌なりしか又は俗歌なりしか、詞を載ざれば知べからずといへども、よの常の歌なるべく思はるゝは、歌は今の世のごとく作のみにはあらで、なべては古へは唱ふを主とせることなればなり、又歴史を考るに、諸國より風俗の歌舞を奏まつると云こと往々見えたる、其の歌詞は載られざれば、いかいありけん詳にはしるべからずといへども、肥前國風土記

に杵島郡有孫山、名曰杵島、閩士女每歲春秋登望、樂飲歌舞、歌詞曰、阿良禮符縷者資熊加多壘馬嗟峨紫彌苦區縫刀理我泥底伊母我堤岡刀縷、是杵島曲とある、この杵島曲の類を風俗の歌舞とは記されたるなるべし、さらば全く雅歌なり、この歌は萬葉集卷三にも出て、そのもとは古事記に載て、速總別王女鳥の王と倉崎山を越賜ふ時によみたまへる歌を、所々詞を換て杵島曲に用ひたるなり、又萬集十六に、豊前國、白水郎歌、豊後國、白水郎歌、能登國、越中、國歌などと載たる、その歌詞に少しは戯のきたることのまじれるところもあれど、全くは雅歌なり、これもかの風俗の歌舞といへるもの、類なるべし、今の世に傳るところの風俗歌は、全く件の歴史に見えたる風俗の歌舞を奏るとあるを取あげ、えらばれて傳へたるものなり、されば東遊歌、駿河歌、陸奥歌、常陸歌などとて載るにてしるべし、さてかの風俗歌譜には、東國の歌をのみ載て、西國の歌をば載ざるはゆゑあることなり、紀氏が土左日記に、西國なれど甲斐歌などいふとあるは、即ちかの風俗歌なり、西國なれば西國のにも、折につけて似つかはしき歌いくらもあ

るべきなれど、かの頃風俗歌は曲節を付てうたふことを常にせる故に、事とあるをりにはまづ風俗歌をうたふことなればいへるなり、清少納言が雙紙に、歌は云々、風俗よくうたひくるとあるをも思合べし、さてかの風俗歌譜の中には、歌句のよのつねのに異れるもあれど、まづは常の雅歌を以てむねとせり、歌垣と云もの古事記下卷清寧天皇の條に見ゆ、日本紀には武烈天皇卷に見えて、歌場此云宇多我岐とも注されたり、其は歌の曲節に應れて舞踏せしことにて、そのさまも大略しられ、又歌詞も載られたれど、其も歌垣の歌とて別にあるにはあらで、折にふれて作て歌はれし趣なり、攝津國風土記に載たる雄伴、那歌垣山、常陸國風土記童女、松原、嬬歌之會を即ち歌垣とも云しと見えて、そのありしやうもみな記紀に見えたる類なることしられたり、扱は萬葉卷九に載たる筑波嶺の嬬歌會亦これなり、しかるを續日本紀卷十一に、天平六年二月癸巳朔、天皇御采雀門一覽歌垣、男女二百四十餘人、五品以上有風流一者、皆交雜其中云々、等爲頭、以本末一唱和、爲難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀬曲八雲刺曲之音、令都中士女縱觀、極歡

而罷、賜奉歌垣男女等祿有差とある、この頃に
 いたりては格式もそなはり、歌詞も定だまりたる趣
 なれど、なほその歌は常の雅歌にて、又時として新
 に作て用ひられしと思はるゝは、同卷三十に、寶
 龜元年三月庚申、車駕行幸田義宮云々、三月辛卯云
 云、六氏男女二百三十人供奉歌垣、其服並着青襟細
 布衣、垂紅長級、男女並分行徐進、歌曰云々、其歌垣
 歌曰云々、毎歌曲折舉袂爲節とある、類聚國史卷
 七十七音樂部歌垣條にも載られたり、其の時の歌ど
 もはみな新によめる詞なるにてしるべし、かくてそ
 の後同卷卅一に載られたる童謡に、葛城寺乃前在也
 豐浦寺乃西在也云々とあるぞ、よのつねの雅歌とは
 異にして、七言五言と歌ひ出したる、これ雅歌の他な
 る體なる歌の、物に見えたるはじめにて、中昔の今様
 の歌の祖ともいふべきものなり、此の歌はやがて催
 馬樂譜にも取載られたり、そもく短より長に行は、
 揚る形にて勢の増る理なれば、五言より七言にうつ
 ること神代より歌の常格なり、長より短に行は、低る
 形にて勢の減る理なれば、七言にはじまりて五言に
 うつると云ことは、さらにあることなかりしを、この

頃より童謡などに、七言五言と歌ひ出すことのはじ
 まれるは、漸く世の勢の低れる故なるべし、草木など
 の形状を思ひ合せてもしるべし、五尺のもの、七尺
 にうつるは、長榮ゆる形にて勢の増る理なるを、七尺
 のもの、五尺になるは、ちみ枯る形にて勢の減る
 理なり、されば後までも雅歌は上古の格をまもりて、
 五言七言に歌ひ出すことに定れるを、なほ俗間の童
 謡などには、時の勢につれてかく句を次第ること
 なるなり、さて其後かの伊呂波歌、世に傳ふること
 くもし空海の作ならば、件の童謡などにもとづきて、
 七言五言と歌ひ出したるものにて、これぞ正しく今
 様の歌やとぞ云べき、その後は土左日記に載たる舟
 人の歌に、春の野にてぞ音をばなく云々とあるなど
 これなり、かくて今様の歌と云ものはそのはじまり
 をしらすといへども、紫式部日記に、琴笛の音などに
 はたどくしきわき人たちのとねあらしひ今様ども
 も所につけてはをかしかりけり、頭書、紫式部日記、わかや
 かなる君たち今やう、枕雙紙に、歌は杉たてる門神樂歌も
 歌うたふも云々、枕雙紙に、歌は杉たてる門神樂歌も
 をかし今様ながくて曲つきたる風俗よくうたひた
 る、頭書、紫式部日記、わかやかなる君たち今やう、枕雙紙に、歌は杉たてる門神樂歌も
 歌うたふも云々、うたひたるといふは、さしき聲にてうたひてすべし、

とあるにて見れば、そのころもはらもてあそびしと
 見え、その今様と云名も古へのてふりにかはり、時の
 勢につれて今めかしく作りうたふより、其の行はれ
 けるほどいへる稱なるべし、さてそれよりはるかの
 後、近衛天皇の頃に資賢少將など云ける人、このすぢ
 に堪能にて、もはらさかりにもてあそばれしより、世
 にあまねくひろまれりとおほゆ、頭書、百鍊抄承安四年に、
 今様合、近衛天皇より後
 な、かくてかの雙紙に載たる尼法師の乞食者のうた
 へる歌どもは、よのつねの歌にもあらず、今様のふり
 にもあらず、今一とふりのものにて、詞いやしげには
 きこゆれども、今の世の里誦の類にとりみだしたる
 ものにはあらず、年中行事秘抄に載たる鎮魂歌は、後
 のものにはあらずとおほゆれど、それはたよのつね
 の歌を連ねて、あやふしを加へて歌へるものにて、異
 なる詞にはあらず、梁塵秘抄口傳集に、大曲權舊古柳
 今様物語田歌などて載たる、いかなる詞ともこと
 ごととはしらねど、物語と云は古事記に載られたる鑽
 火の詞、出雲風土記に出たる國引の詞などの類その
 宗にて、かの語部のかたり傳へたる古物語と見ゆ、語
 部は延喜式弘仁式江家次第北山抄等に見えて、大嘗

祭の時古詞を奏す、其の音祝に似又歌聲に涉なども
 見えたり、昔より世にある物語書は、かの語部の語る
 古物語を傳へうつして作れるものなるが故に、いづ
 れも詞をかしく興あるさまにもしたり、後鳥羽天
 皇の御時、信濃前司行長と云人平家物語をつくりて、
 それに曲をつけて、生佛と云ける旨法師にをしへか
 たらせしと云が、かの平家も件のごとくも物語書
 にならひてつくれるものなるゆゑに、その心してか
 きて語らひけるなり、頭書、四條院の御宇に、性佛僧正とて山
 の御弟子なり、此僧正壯年にして、兩眼しひ盲人となれり、依て僧正を
 申かへ當道の檢校になる、性佛檢校當道のきやうといいたすべき道を
 しめし給へと、口吉の社へ三七日參籠して祈誓ありし
 かは、平家物語に節をつけて唱へしと御告あり、すべて物語
 にふしを付て語る事は中絶たりしを、生佛がうまれ
 つき聲のよきにまかせて、再興して語り出したるな
 り、今の世淨瑠璃てふ物語を語るは、詞も心もさわが
 しくこそなれ、其を語ると云はなほ古への遺風な
 るべし、されば萬葉卷三に出たるし志斐の唄が強語
 も、たゞに告にはあらで、曲節をなして語れるをいへ
 るなり、さればかの資賢少將の頃も、なほその物語に
 曲節をつけてうたひ語ることをならひつたへて、そ
 をやがて物語とはいへるなるべし、田哥は止山氣宮

儀式帳に田舞とある、それなるべし、頭書、天智天皇紀十一年五月に奏田舞
 これはやがて田夫のうたふ歌をとりあげうたへるな
 るべし、榮花物語御着裳の巻に載たる田舞を見れば、
 詞はなほよのつねの歌なり、さてその田植の時、田樂
 といひて、あやしき鼓腰に結付て、笛ふきさゝらとい
 ふ物ふき、さまぐの舞して、あやしきをのこどもう
 たうたひ、心ちよげにはこりて十人ばかりあり云々
 とあるを見れば、北條家の時にもはらもてあそびし
 田樂は即ちそれなり、さて白拍子と云ものは、鳥羽天
 皇の御時、鳥の千歳若の前と云二人の妓女舞始しと
 云磯の禪師靜、平入道の寵せられし佛妓王妓女など
 云もの皆白拍子なり、かれらが舞の手に和てうたふ
 歌は、みな今様なれば異なることなし、さて又早歌と
 云もの、兼好が徒然草に、或人子を法師になして、學
 問し因果の理をもしれとをしへけるに、法師のむげ
 に能なきは、佛事の後酒などす、むるをりに、檀那す
 さまじく思ふべしとて、早歌といふことならひけり
 とありて、その早歌の詞は體源抄に載せたるを見る
 に、これ又一種のうたひ物とはしらるれど、あまねく
 世に行れしことをさかす、又散樂と云ものは、貞觀儀

式踐祚大嘗祭儀の中に御巫猿女見え、相撲節儀に散
 樂人とありて、體源抄にも散樂見えて、新撰鞠は目出
 度舞なり、而近來偏に實には不習て散樂に成にけ
 り、淺猿事なりとあるを見れば、その樂をば昔より
 いやしめけるにや、枕雙紙に、をこのうちさるがひ
 物よくいふがきたるは物いみなれど入つかしと見え
 て、すべて滑稽興することとをさるがふと云ること
 の多き、そのさるが散樂と云ふことを用らかしてい
 へること、さきこゆれば、その樂も戯れ興することとを
 むねとして、いやしめけることしられたり、頭書、文獻
 樂、野人爲樂之善者、非部伍之正聲也、三代實錄三十八に右近衛内
 藏宮繼長尾末繼俊善、散樂令入大吟所唱呼人近之印本には唱
 呼を唱呼に作れり、今は古本を以て引く、傳三十二、西宮記
 四卷相撲のくだりに左見蛇樂、散樂、右犬吉干とあり、蛇樂は蛇のま
 れ犬は犬のまねをせしならん、吉干はしらす、今世の諸曲を猿
 同記に散樂侍臣五位六位童相校走井弄玉、今世の諸曲を猿
 樂と云、其は遙の後に作れるものにて、古の散樂にな
 らひたるものにはあらぬことはさるものながら、猿
 樂と云名は古への散樂にかたどりたるものなるべ
 し、さてかの後京師紫野今宮社司の家に、頼朝將軍の
 頭より、寂蓮が書つたへたる花鎮祭の自躍て歌ふ諸
 あり、これ又一種のものなり、又水猿曲と云もの一名

水白拍子ともいふよし、これは正しく今様の歌の詞
 の長きものにて更に論なし、そもく古へは雅歌の
 他にうたへる里歌といへども、その詞いやしからず
 きくからずして、拍子まばらにして、ことごとくに
 古雅の趣を存したりしを、近き世にはそのうたふ物
 ごとくに詞もいやしく、聲もいそがしく、きくにく
 なるは、そのもと他ならず、これひとへに三線と云
 琴の罪にぞありける、或説に、文祿の頃石村檢校と云
 琵琶法師、罪ありて琉球に流さる、石村後に罪ゆるさ
 れて、彼國より三線をつたへて歸朝し、虎澤と云もの
 に傳へ、虎澤柳川と云ものに傳へて世上に流布せり
 といへり、三線は彼の國の樂器なりとかや、頭書、大河
 鮮物語慶長四年の所に、三味線を脱しと見え、内秀元が朝
 たり、其比あまれく世に行はれしにやあらん、和名抄音樂、部
 に出たる阮咸と云もの、遺製なりと云は然もあるべ
 きにや、頭書、和名抄、樂家有阮咸圖一卷、今按樂器中無此器名、
 按圖一決、阮咸謂云、清風調興、阮咸、權所造歟、
 香調同音、今按琵琶之其類不曲也、其製琵琶に類したると
 ころあれど、琵琶より其の形こよなくいやしくして、
 其を彈さまは又きはめて見ぐるし、頭書、事文類聚續集、
 塚得三銅器、似琵琶、身正圓、人莫能辨、行中曰、此阮咸所
 作器也、命以木弦之、其音雅矣、樂家遂謂之阮咸、しかれ

ども其音俗の耳に入易く、拍子いそがしくうき立
 やうにして、僅に聲を發すれば俄に人の淫心を引起
 し、放逸佚情なるにいたらしむ、いやしき器といへど
 も、かく奇妙なる音をそなへたるからに、かく淨瑠璃
 の物語はいふにやおよぶ、なに歌くれ歌など名づけ
 て、長き短き折にふれ事にあたりては、其の音に和
 せて歌曲をつくり、淫聲にかなふやうにふしをつけ
 てうたふこと、なれるより、都會の人はさるものに
 て、はるけき田舎の賤の女にいたるまでも、これをま
 たなき弄なりと思ひてうたふこと、なれるより、い
 つとなく來しかた概びこしうたひもの、歌はすたれ
 にくたり、婦人小子はさるものにて、丈夫といへども
 淫したる方には心のうつりやすきならひなるに、か
 かる淫樂の世上にひろまり、こゝかしこにもてはや
 さるゝこととなりてより、田舎わらはのうたふ歌ま
 でも、月に日にいやしくいそがはしくなりもてゆく
 は、げにうべならずや、三線と云ものはじまらざり
 し前は、雅樂の他といへども、曲節ゆるやかにして拍
 子まばらなりしこと、今世に盲法師が平家を語りて、
 琵琶うつさまを見聞てもしるべし、こゝにわが土左

の國にて、その社いゝの祭など云ものに、や、古くよりうたひつたへたる歌あり、其の他遠き境なる樵夫田農などの徒が、昔よりうたひつたへたる歌の類也、もとよりかゝる歌は、諸國にてもめづらしからぬはさらなり、さてその詞みやびたりとはあらねども、今の世にあまねくうたふ歌にくらべ見るときは、さすがに聞にくからぬは、かの三線の糸せ音の出来ぬさきにて、彼の音にあはすべくかまへてつくれるものにあらざればなり、又うたふの間にもたはれたる音のまじらぬは、是又かの淫聲の出来ぬさきにうたへるがまゝなればなり、されば婦女に嬉奔をすゝむるうれひもなく、父子兄弟の中にもまゝにくからず、官位ある人の前にもいやしからず、少しは品上りたるうたなれども、婦人小子はきかぬものともせざるは、かの淫樂の聲にしみつきたるがゆゑなり、さてその神事いゝの祭式などてうたひならふにも、さる今めかしからず古代めきたることは、わかき者などは中々にはぢらうことになれるは、冠と沓と所をかへたるわざなりとも云へし、されば今よりあまたの年月経なば、後つひにはこれをうたひ傳ふ

るものだになくなりて、歌章もやうくすたれゆきなんと思へば、いと口をしくあたらしさに、せめては其詞をだにも不朽につたへまほしくおもひて、今其の歌曲を聞にまかせて蓄あつめおくになん、出雲、國杵築、宮にうたひつたへたる御祭の歌などはさらなり、下野、國宇都宮につたへたる若宮の歌、或は近江、國犬上郡にうたへる茶もみの歌など云類は、諸國にも多からんを、其にことごとくに聞得るたつきなく、また他國にてはさる方に心する人もあるべきなれば、まづさしおきて、わが土左の國なるをのみ書あつめつるなり、

天保六年乙未六月二十二日

藤原太郎雅澄識

巷 謠 編 目 次

- 安藝郡土左をどり歌
- 同郡吉良川村八幡宮御田祭歌
- 香美郡垂生郷虎松踊
- 同郡披山郷神祭次第四季歌
- 土佐郡じよや
- 同郡神田村小踊歌
- 吾川郡森山村小踊歌
- 同郡猪野村神歌
- 同郡東諸水村神祭歌
- 同郡森山村神祭ナバレノ歌
- 同郡猪野村神祭
- 高岡郡仁井田郷窪川村山歌
- 同郡同郷同村囃子田一名大鼓田歌
- 同郡田植歌
- 同郡多野郷賀茂大明神御神役歌囃子
- 同郡半山郷三島大明神祭禮花鳥歌
- 同郡久禮村田植歌
- 同郡仁井田五社大明神祭禮萬歳樂

- 同郡左川郷玄蕃踊歌
- 同郡同郷横倉中、宮祭禮神歌
- 同郡大野見郷花鳥踊
- 同郡日下村小村天神祭神歌
- 同郡高岡村神歌
- 同郡新居村神祭ナバレノ歌
- 幡多郡入田村伊勢踊歌
- 同郡井田村神祭小踊歌
- 同郡入野村八幡宮祭禮花鳥歌
- 同郡上川口村豊後踊歌
- 同郡楠山村田植歌
- 同郡田歌
- 同郡上山郷茶摘歌
- 補遺

巷談編卷上

○安藝郡土左をどり又は山など凡四十八番花より地歌チ合テ番

安田野奈半利ノ村々アタリニテ往昔ヨリ踊ル、安田村東島ト云所ニ祇園社マシマス、六月七日祭日ニヨリ、六日ノ晩ニ盛ニヲドルヨシナリ、盆祭ノ手向ニモヲドル、ソレヲ入をどりト云、

かへり踊扇子ヲタ、シテ踊ル
大鼓大サ巨響尺八寸位、四ツ
踊子扇子ヲ持、是

○山をどりかへり踊

△一夜とかはのく、ひとりねる夜のさぶしさは、君になさけをかけて見よ、

カケサイヨナサケヨヲハンヤ、ヲンコロリハンヤ、ヲンコロリヨイ、ヨイノシヤキリニハンヤ、シットロく、シットロトニト以下八章シ

△二夜とかはのく、ふたりのうぶのあひにねて、思ひし事も語り盡せじ、

△三夜とかはのく、みるよに戀がさめもせて、みるよにこひがまさるよしなや、

△四夜とかはのく、四日の月が出るまで、しどろもどろと夢にこそみた、

△五夜とかはのく、いつかこせんでむすほれて、秋風た、ねばとけやほどけん、

△六夜とかはのく、むつごでむすんだ玉づさは、戀風吹ねばとけやほどけん、

△七夜とかはのく、なにかにもすりすて、いぬる姿がなごりをしや、

△八夜とかはのく、やしき一ツに目がくれて、諸國まわれれば我身かなしも、

△九夜とかはのく、古郷此世はかりの宿、らしいよたのみぞみだのおんやくし、

△十夜とかはのく、おどしたり、

△十一夜とかはのく、おもしろや

を十三ぼろりとおどしたり、

△十二夜とかはのく、おもしろや

△とら松殿のめしたる駒の毛色は、ばんどう名馬かとらつきげ、きんぷくりんのくらおいて、明珍ぐつわにあやの手綱をゆりかけて、駒もいさんでお立ある、

△とら松をどりはしとやをどりおもしろや

△とら松殿のけさのいくさを見てあれば、兵庫がまへのすゝがもが、浪をけあげて立どくとく、

△とら松をどりはしとやをどりおもしろや

○まきが島扇の手

△まきが島へもいて見たが、ひるは布つくぬのさらす、よきりはこのごにひまもらう、

△わしは酒屋の酒ぼそよ、中をいはれてかどにたつ、

△わしは酒屋のさかびしやく、ひるはひまないよさござれ、

△わしは酒屋の一つをけ、中のよいのは人はしらぬ、

△わしはびせんやのさびがたな、おもひなほしてとぎなほせ、

○月まちかへり踊

ヨイヤコリヤトントントンヤキリキノシヤキリサアヲンコロリシインチヤシヤキリキシチヤヲチャヲチヤシヤアキリキシヤキリコノシヤン以下七章シ

△とら松殿のかたなは何とこのました、二尺七寸浪の平、三尺下緒にそりかへそらして、こしのしなよとさくしたり、

△とら松殿をどりはしとやをどりおもしろや

△とら松殿のやりよは何とこのました、たつまきにひるまき、すゑをば、かねのせにまきまき、

△とら松をどりはしとやをどりおもしろや

△とら松殿の馬よは何とこのました、ところぐはとをつがひ、つるをはげふのせきつるよ、

△とら松をどりはしとやをどりおもしろや

△とら松殿のかぶとは何とこのました、しぶとしがにたつがしら、大將くはがたおどしとしとやおどし、

△とら松をどりはしとやをどりおもしろや

△とら松殿のぐそくは何とこのました、上ミ六だんはから紅、下モ七だんは紫一ト重に、あやのはつし

△そこなひめごは何をまつ、そこしとのごにねとら
れて、廿三夜の月をまつ、やままつくと、人のた
めにはつまをまつ、

月のまぢのをどりををどろよ引ヨイヤソリヤヨ
イマダシヤキリキニヨイマダシヤキリ
キニヨイマダシヤキリキニヨイマダシヤキリ
ンマダヨナマダシヤキリキニヨイマダシヤキリ
ロリンシインチャントヨイマダシヤキリ
キニトントンマダシヤキリキニトントン
シヤキリコトマダシヤキリキニトントン

△いとしのごのおびをくけるには、ぎんやじやか
うをくけこめて、こしのまはりがいごと、
月のまぢのをどりををどろよ引

△いとしのごの水をくむには、をけもよい桶よい
ひしやく、しみづのうはすみを、
月のまぢのをどりををどろよ引

△にくいやどの水をくむには、桶もやぶれをけやぶ
れひしやく、こまのけあげのたまり水、
月のまぢのをどりををどろよ引

△いとしのごのこざるみち、さがねぼとけが

お寺をどりををどろよ引

△おら^カしきごろりとのぞいて見れば、十六七のあ
ねさまが、おんさやうあそはす有がたい、
お寺をどりををどろよ引

○からいじん^{五章} 整云、からいじんは
高麗なるべし、
△ういもつらいもからいじん、よるは野にふし山に
ふし、ひるはゆきさびにひまがない、
ヨイヤソリヤトントントンヤキリキニトントン
トシヤキリキニハンヤランコマリニシインチャ
ントンヨイマダシヤキリキニハンヤランコ
リニシインチャントントントントシヤキリコ
シヤン^{以下四章}
アゲ同之

△ごきちよといふてまはる、ごきちよなかまへ
せきがきた、うらみながらも城をもつ、
△おさかといふてまはる、花の都もおさかなる、
△こよひてんまのはしにねて、聲をとられた川風に、
△おさか天満のはしにねて、さても見事な川舟や、あ
しきなごやが花なれば、たとへようしゆくでしを
ろとも、をりて一ト枝わがさとへ、

○石川^{三章} 三章

かへり跡

いらくくと、そのひかりにくるもよし、
月のまぢのをどりををどろよ引

△にくいやどのうせる道には、さるがさかもりをす
るがよな、それに見られてくぬがよい、
月のまぢのをどりををどろよ引

△たふといお寺を門から見れば、門もこがねお口も
こがね、りんかかねをだしやみなこがね、
お寺をどりををどろよ引ゼンゼコゼンゼコ
セセンソリヤハツテマタマタルテコテシ
ンハツテコテヤアハツテマタマタルテコテシ
ンハツテコテヤアハツテコテヤアハツテコテテ
テ^{以下三章}テコテコテヤアハツテコテテ

△このてらで、いかなる大工がたてたる寺よ、お
んあまみづもたれと所おんちらす
お寺をどりををどろよ引

△かくれんそろりとのぞいて見れば、からのちやう
すが七から八から、引ケやしんぶつまはればちや
うす、こまかにまはればこまのおんちやうす、

△おれは石川にごりはせぬが、人がにこせはなんと
せう、サンソリヤ、空の七夕おいとしゆござる、川
をへたて、戀をめす、
エトント^{以下二章}
アゲ同之

△わしは石舟おもひにしづむ、戀にういていて、
△うらの御出ゑんでちよとなりそめて、今におもひ
がたねとなる、
○川中^{四章} 四章

△川中へかなわをすゑて火をたくとも、ふたみちか
けるとのはいや、ストウトストウトヨイヨ、しかの
しほがま身をこがす、
△あしだをはいて、枝なき木へのぼるとも、スト
トストト、しかのしほがま身をこがす、
△あらやおみあらやおみ、つなき身をつなぐとも、
さあいやよな、ストトストト、しかのしほがま身を
こがす、
△すみをすりて、ながれる水へ字をかくとも、さ
あいやよな、ストトストト、しかのしほがま身をこ
がす、

○かごしま^{六章} 六章

△かごしまのおばのかたから、ほそぬの一たんへてきて、白でまればよこれめがつく、かちんのめいろはびすしう、

ヤアランコロリマクランコロリヨイ〜〜シ
ヤキリキニシヤキリキトシヤトリコニヨイヨイ
ヨイシヤキリキニシヤキリキニシヤコニシヤン
以下五章シ
アゲ同之

△これこでそめてたもれ、そめるはやすいが、ありまのしやくのかうかく、かたをば何とつけます、かたすそにはぼたんから草、こしには兵庫のつきじま、

△むねとくだりこしりさきには、さいこく船が浪にゆられて、ともづなとつたる所、
△うはがいのこつとまはなは、秋鹿がこつとまはなたる所、

△したがいのこえりさきには、霧の聲はすれども、姿は見せん所、

○山かげかへり踊

△こは山かげもりどのしたよ、月夜の鳥はいつもなく、

ハイヤヨウツサカンヨウソリヤナミタツエレタツ
ツンヨウソリヤナミタツ
以下五章シ
アゲ同之
△おもひはすれどもわすれはすまい、あの若様の御なさけ、

△水になりたやむらどのみづに、くまれたいぞのおらんさま、

△橋になりたやもりどのはしに、ふまれたいぞのおらんさま、

△はたになりたやもりどのはたに、おられたいぞのおらんさま、

△なくなない磯邊の千鳥、今に初めて立浪よ、

○ぶんごかへり踊

△ぶんごの國のなにかや、あねが妹のしやくにでる、

ぶんごのをどりををどろよ引ヤアシツヤンチ
ヤンノヤンヤンをどろやれヤアナラシヤルナロト
△ぶんごの國のなにかや、かごで水くむこれや名しよ、

ぶんごのをどりををどろよ引以下同上

△ぶんごの國のなにかや、こはんおもてにもみの

うら、

ぶんごのをどりををどろよ引以下同上

△ぶんごの國のなにかや、あさぎおもてにもみのうら、

○とのごやかへり踊

△とのごはじよろやにおさかもり、尺八をたもれとなつかひ、うちやひしやけて火にはくべると、エイエイエイソリヤヨイ、やるまいとのごにしやくはちを、ヤアコリヤコチラへせ、

△こいしはへらだに大こうつ、エ、うつやとふえのねがする、かねのねをきけ、エイエイエイソリヤヨイ、心はそらの浮雲、

△のますかしくはせはいしく、ちやうしをかるになつかひ、ねしてあたりや花舞に、エイエイエイソリヤヨイ、ひやくでしやくがとらりよかよ、ヤアコリヤコチラへせ、

△山ちかけれどももみちばな、花はおさかなり花はおさか、なにもひとつきこしめせせ〜と、ヤアコリヤコチラへせ、

○かまくらかへり踊

△かまくらのげばのはしもとで、十三小じよろがあやおる、おるあやがめにはつかいで、十三小じよろがめについた、

あやたをどりをひとをどろヨイヤソリヤトント
ントシヤキリキニトントントシヤキリキニハン
ヤトントントシヤキリキニシヤキリコノシヤン
以下四章シ
アゲ同之

△めにつかば一チ夜ごされよ、一チ夜まらばやすきをろへて、小じよろはどこにおりやるぞ、

あやたをどりをひとをどろ

△東きりまどそのしたで、小じよろはてばこを枕に、あやたをどりひとおとろ

△ころの七チ月ぼんのころ、あはの中にもねてみたが、粟ははしかし夜は長し、小じよろがねやのさぶしさ、

あやたをどりをひとをどろ

△たにのねふちがかねの小松をしめるよに、わしもこなたをしめまじよぞ、

あやたをどりをひとをどろ

○おほろかへり踊

△おほろ月夜は山のはもほろくと、戸をいづるおにさま涙のむらさめ、

エイヤソリヤ以下三章 アゲ同之

△四百舟かよ君まつは、五百舟かよ君まつは、かぢをしづめて名のりあふ、

△しめてねた夜のあさときは、だいてねたよのあさときは、はなれがたないねみだかに、

△かよほそみち夜は長き、忍ぶほそみち夜は長き、思ふきまににあひたるよ、

○あきなひかへり踊 五章

△きまのたれをまつやらくると、アイヤ、つまつま〜いと、

ヤアコリヤコチラへセモヒトツセ以下四章 アゲ同之

△せび(舞)のはごろもみをすれば、アイヤ、つまつま〜つまつま〜いと、

△をぐるまの〜、まはせばくるまのわのと〜、アイヤつまつま〜つまつま〜いと、

△よこそねられぬさよふけて、アイヤ、つまつま〜つまつま〜いと、

△こひしくば〜、たづねござれよわがやどへ、アイヤ、つまつま〜つまつま〜いと、

○あきなひかへり踊 四章

△あすは吉日しもくだろ、思ふよつまのいとまごひ、あきなひをどりをひとをどろヤアシイタカセサ

アヨイ〜マダシヤキリニトントントンヨ

イ〜シヤキリキマダシヤキリニトントントンデ

トントントントロ〜トヲシツタカセマダシツタ

カトニト以下三章 アゲ同之

△こは寺かよ竹しやうちでよ、てなにしよにやよいしやうぢ、

あきなひをどりをひとをどろ

△こはあふみのくにさかひ、名所々々を見すまして、うは荷おろしてあきないしよ、

あきなひをどりをひとをどろ

△見事あきなひしすまして、國へもどりてかたるべき、

あきなひをどりをひとをどろ

○山ぶしがかへり踊 三章、元有 四章、今共二章

△山ぶしがとけいす〜かけけさころも、

山ぶしをどりをひとをどろサアヨイ〜ノシヤキリキマダヨイ〜ノシヤキリキトントロ〜トントロトヲシツタカリヤアシツタカトニト以下二章 アゲ同之

山ぶしをどりをひとをどろ

△山ぶしがむねいるすがたもはたとわすれ、山ぶしをどりをひとをどろ

○りん扇の手 六章

△りんのうつりかなつかしや、にほひこがる、といはいととき、みとわれとはみはかのかみみでみてとつた、

△よしやうき名は君故よ、みはかのかみみでみてとつた、

△おれが子で候孫で候、まこと子なればおやにとへ、みはかのかみみでみてとつた、

△あさの中にもねてみたが、麻が物いはねば名がたたん、みはかのかみみでみてとつた、

△そばの中にもねてみたが、そばはさむらひかどら

しい、みはかのかみみでみてとつた、
△いそのこまいしなみなれて、しゆら〜こがる、とのはいとし、みはかのかみみでみてとつた、

○かうりんかへり踊 五章

△お寺へまわりて御門んを見れば、見事なたくみやまきばしら、

いざをどろお寺をどりをいざをどろヨイヤソリ

ヤトントントシヤキリキニトントントマダシヤ

キリキニトントントントデ〜トントロトント

ロトントロトヲシツタカトニト以下四章 アゲ同之

△御寺へまわりて御寺を見れば、ぶつだんとかく八ツ棟づくり、ひはだのしぶきあら見事、

△御寺のまへのふきあげこすな、だがふみちらした、御寺のけいごがふみちらす、

△七人けいごはどれ〜どなた、こうだの山へたかすゑて、

△御寺のまへのふきあげこまく、だがみすかしただがみすかした、御寺のけいごが見すかした、

○しがぶねかへり踊 六章

△あれへ見ゆるはしがぶねか、しがへござればのせ

ていこ、のせていくのはやすけれど、人のよめごはいやでそろ、

ホイヤサンソリヤエ、トントニト以下五章シ

△よめごなれどもかぢをとる、かぢをとりてもいやでそろ、

△しかくばしらがかどらしや、かどのないこそそひよけれ、

△なまけないぞやもんのきど、風になりたやひらかいで、

△松のみどりさや戀をする、高きそらから身をなげ

△からするよどりや戀をする、こひにやつれて色くろい、

○しうとめかへり踊四章、元有

△おれがしうとめのきぶいゆき、けさくんだ水をふりふて、まだけさ嫁が水くまん、

しうとめをどりををどろよ引ヨイヤソリヤトントシヤキリキニトントシヤキリキニシ

インチャントヲトヲトヲシツタカトシツタカセトヲシツタカトホニト以下三章シ

△おれがしうとめのきぶいゆき、けさはいた庭へちりをまき、まだけさよめが庭はかん、

しうとめをどりををどろよ引

△おれがしうとめのきぶいゆき、岩をはかまにたちぬへくと、岩をはかまにたちぬふならば、わごれはまなこを糸によれ、

しうとめをどりををどろよ引

△おれがしうとめのきぶいゆき、みづないさとを舟のれくと、みづないさとを舟のならば、わごれはあたごの山をのれ、

しうとめをどりををどろよ引

○れんぼかへり踊四章

△ひとつごしめせたぶくと、ことにおしやくは花むすめ、

レエ〜ツノレエニシツヲヲ、ヲ、ヲニシセウ以下三章シ

△佐渡で越後の鐘をきけば、えちごこひしやおどやと、

△さどで越後だすぢむかい、はしをかけよぞや船はしを、

△橋の下なる鶺鴒の鳥が、鮎をくはへてはねをのす、はねをのさねばしほがない、

○まきやう山かげかへり踊四章

△まきやう山かげもりのした、つまをまつにはよいところ、

アリヤヨイヤソリヤトントントシヤキリキニトントントシヤキリキニシヤキリキニシインチャント以下三章シ

△まちかげじよろの情には、こひ玉ぶさは雨のあし、

△けさの出船いとこはしり、阿波かさぬまかふくしまか、さては尾上かたかさごか、

△わか殿さまはどこにかさなる、からだの山にたかすゑて、

○月ともかへり踊八章

△月ともほしともおもひしほさぶのかたべら、

ヲイヤサンサンソリヤエ、トントニト以下七章シ

△京からをひげ、さかひからかけごう掛香、ますとたもれなつそを、なつそはやつそのかみしもでそろ、

△なれ〜なすび、せんど昔戸のやのなすび、ならぬとよめの名のたつ、

△こい〜子じよろ、かみをゆ結てとらしよ、みかづきなりにゆてとらしよ、

△三か月なりはおちんのおそれ、かこのいわげにゆてとらしよ、

△十六七はとだいのいねよ、うたねとこしがしなやかに、

△しなやかなこしへなるこ鳴子をかけて、をんごるたびにがら〜と、

○かいのいとやかへり踊四章

△かいのいとやのせん太郎は、みめよき娘をもちたとして、ことしすぎれば十七よ、

おわかいしうのをどりをひとをどりヨイヤソリヤトントントニシヤキリキニトントントシヤキリキニランコロクニシインチャントントニシヤキリキニシヤキリキニランコロリニシインチャン以下三章シ

△よかる日を見てかねをつけて、京へのぼしてえんにつけよ、

おわかいしうのをどりをひとをどり
△のぼるしやうぞく見てあれば、うはきひとへはひ
とへもの、

おわかいしうのをどりをひとをどり

△あひのつがひのひきでもの、かみ六だんはからく
れなる、しも七だんは紫一ト重に、あやのはづしを
十三ほろりとおとしたり、

おわかいしうのをどりをひとをどり

○わかとのさまかへり踊
六章

△わかとのさまへせいりよがまるる、一トくみまる
る二くみまるる、十三おくみがみなまるる、

ホイヤサンサンサ、レンチンテヤノチャン
以下
五章

△若殿さまの御もんのかへりを見てあれば、見事な
たくみがまきはしら、

△若とのさまの御馬屋のかへりを見てあれば、七け
ん御馬屋に七ひきたて、七人のけいごがかみを
まく、

△若殿さまの御庭のかへりを見てあれば、こがねの
ひしやごがあしにつく、

△若とのさまのやしきのかへりを見てあれば、しら
きの弓が千本に、くろゑのやりが千本に、

△若殿さまのおくのかへりを見てあれば、大手のか
へがせにすだれ、

○ゑんたかへり踊
四章

△ゑんた何をいやゑんたとは何ぞ、ゑんたおまへ
のふりそでよ、

イヨエヤアコリヤサイヤモヒトツセアリヤシツ
テキシンチキイヤコチラヘモ
以下三章
アゲ同之

△えんでひこじりやさとのほはかわい、たもれいた
だくおんこのふりそで、

△えんがうすいとはゆめく知らず、ゆめくしら
ず、

△えんちやつまぢやとさだめてからには、いかにび
じんでもめにはつかん、

○くきのお松かへり踊
四章

△くきのお松がたてる茶はうまい、しんちやこちよ
かよ、あまぢやからぢか、さてはおまつがたてがら
か、
サアヘンシ〜ヘンシモ〜ミツ、イクツンコ

エ、ヤアリヤシタコリヤシタヨイトコトコ〜
ナアゲ同之
以下三章

△くきのお松らが髪をゆたごうせ、まいてまきあげ
て月の輪のごとく、中にはおもひれをまきやこめ、

△くきのお松らがはたおるごうせ、七ツびやうしに
八ツびやうし、よざりはこいとのいれひやうし、

△くきのお松らがつはり薬はなに〜、いそでそも
の山でとうやく、みかんかうじたちはな、

○みづくみかへり踊
五章

△くんだ清水でかけを見れば、わがみながらもよい
をなご

みづくみをどりをひとをどろヤアソツコデセイ
ヤモヒトツセア、シアトロ〜
以下四章
アゲ同之

△つるべ九ツ身はひとつ、つるべこきあげてつまを
しきねに、

みづくみをどりをひとをどろ

△いとしこの水をくむには、桶もよいをけよい
ひしやく、しみづ〜のうはみづを、

みづくみをどりをひとをどろ

△にくいやどの水をくむには、をけもやぶれ桶やぶ

れびしやく、駒のけあげのたまり水、

みづくみをどりをひとをどろ

△鮎は瀬に住む鳥は木に住む、人は情のかけにすむ、
みづくみをどりをひとをどろ

○ねぶつ
四章

△あつもりが〜、おいせのやぐらへふえ(雷)す忘れ
て、とりにもどりとござや、お船にのりやはづれ
る、

ねぶつをどりをどろよ引チン〜チカンカン
以下三章
カアゲ同之

△わがおやが〜、佛になるとは夢にもしらす、南無
阿彌陀佛なむあみだぶつ、

ねぶつをどりをどろよ引

△わがおやが〜、こきやうこのよにあるといは、
墨のころもにすみのさしがさ、南無阿彌陀佛なむ
あみだぶつ、

ねぶつをどりをどろよ引

△天竺のあまの河原の星のかす、よんでもかいても
心つきせぬ、南無阿彌陀佛なむあみだぶつ、
ねぶつをどりをどろよ引

○はかた扇の手
六章

△はかたそぎをひけ、かけこに文やいれて、

△目もと口もとさくら花、みめと姿と青柳の色、

△博多せばたで船をおせば、けさの船の手はようら
ちそら、

△けさの出船はどこはしり、よさのときまりはゆきの
しまもと、

△博多小女郎が出てまねく、まねくあらせの船のは
やさ、

△船のやぐらでよころをおとした、海は十九ではち
をかくまい、

○しんじつ扇の手
三章

△しんじつ思ふてうちふりしやんと、

△志賀唐崎、松もつれなやよき人や、

△しんじつ思ふてやりとる文は、よさりは来いとの
ござれとの、まだも来いとの文がきた、

○つばくろ
六章

△つばくろが、瀬田の唐橋擬寶珠にて、喜びをかえて
巢をかけて、

つばくろをどりをひとをどうヨイヤソリヤトン

トントニシヤキリキニハンヤランコロリニシイ
ンチヤントンシヤキリキニマダシヤキリキニシ
ヤキリコノシヤン以下五章シ
アゲ同シ

△橋の下なる大蛇めが、十二のかいこ(鯛子)をも
(巻)として、橋の柱をきり、やりんとまひあがる、

つばくろをどりをひとをどう

△そこでつばくろ歎きには、助け給への大蛇どの、お
んみは子をばそだてぬか、

つばくろをどりをひとをどう

△そこで大蛇き、わけて、橋の柱をきり、やりんと
まひさがる、

つばくろをどりをひとをどう

△そこでつばくろよろこんで、

つばくろをどりをひとをどう

△十二のかいこをうみそだて、親諸共になつ、常盤の
國へはら〜と、

つばくろをどりをひとをどう

○おぢよかへり扇
三章

△おぢよがきたれども、まだ〜そはぬ夏の夜に、
おぢよをどりをどうヨソリヤシヤキリキニ

シヤキリキシヤソリヤトントニシヤキリ
キニヨイ〜シヤキリキニトント
ロトントントンヤキリコニシヤン以下二章シ
アゲ同シ

△おぢよがかけた襷のあやの、糸かけてまはれば

富士の山、
おぢよをどりをどうよ

おぢよをどりをどうよ

○かこかへり扇
四章

△めせやかごのおやどり、かごのうちでのあそびご
とツイヤ、かごのうちでの遊びごと、

△ツイヤヨイヨロヤヨイ以下三章シ
アゲ同シ

△ツイヨ鶴の鳥のソリヤおや鳥、かごのうちでの遊
びごと、

△ツイヨ眼白の鳥のソリヤおや鳥、籠のうちでの遊
びごと、

△ツイヨ鳴の鳥のソリヤおや鳥、籠のうちでの遊
びごと、

○うきよ扇の手
四章

△うきよごころは物忘れ、オイヨセマダモセハイヤ、
おふみ思へばおとになつ、

△うきよごころは物忘れ、オイヨセマダモセハイヤ、
まをの帷子さらおろし、着てはおよれど身にそは
ぬ、

△うきよ心は物忘れ、オイヨセマダモセハイヤ、りう
すの帯がみよまはる、しめてまはればよまはる、

△うきよ心は物わすれ、オイヨセマダモセハイヤ、さ
よの寐覚も淋しかる、夜のあけごろにはねはだか
よ、

○おはらぎかへり扇
三章

△おはらぎは〜、おはらぎかわいのにくろき見さ
いな、

チヨウリヨニハウリヨウリヨウリヨニシウリチ
ヤウヨニウリヨウリヨ以下二章シ
アゲ同シ

△麻のなかなるひとへよもぎ、おやちや子ぢやとて
よれつもつれつひきよけつ、

△ごろの今宵はと〜と寐た、あづま今宵はか〜と寐
た、と〜よりか〜がおいとしや、

○なすび
近代強不歌、
仍僅存三章

△なれく／＼なすび、背戸のやの茄子、ならねと嫁の名のたつに、

ヤアコリヤコチラヘセ

△これから近江が見える、近江の笠はなりよて着よふて、緒がみかう短て、

ヤアコレヘノホレエ

○ちうたかへり三章

△かさやのお船に女郎がのる、おせやこび船、うきつの森をめあてに、

アンソリヤチウタアリヤヨイトコヨイサツサコ

リヤシタア、モヒトツマ以下二章アゲ同之

△うきつの森がちがふたら、沖をのるとけいの船をめあてに、

△沖をのる船がちがふたら、白鷺の巢かけの松をめあてに、

○やくしのまへかへり五章

△薬師の前の色よきつ／＼じ、あの色もちて、あのさまがほしうござる、

ノヲファンヤレア、ヤレコリヤヤレコリヤヨイトマセ以下四章アゲ同之

○十二や三かへり三章

△十二や三はわろびとおしやる、ねござをのべて待がわるひとおしやる、

アリヤシタコリヤシタア、ヨイトコヨイトコヨイトコナシツトロシツトコトホニシヤンソリヤヨイ次章アゲ同之

△あの君さまを見まいとすれば、真紅の房で眼がついた、

○たるいちかへり三章

△たるいちが部屋にはだれと／＼ねよ、だれとだれとねよ、

シアゲ失レ之、次同

△おきよになれく、とちのきふねのぼげたにしよ、

○こざかへり三章

△こざのなかの隠れ鶯、壁で聞きしれ名をよぶな、シアゲ失レ之

○こめんじよ近代強不歌、仍備存一章

○花とり地歌

△花とりは七日のしやうじおとすな、しやうじイヨせいごせサア、せいごせはどこのせいごせにしや、

△踊らしよと思ふて笠まで買ふて、はや子ができてとよばれよふか、

△とよばれよふか、とよばれよふか、身はせんすいののんやれ、

△思ひの種をやせ地に蒔いて、あだ花咲いて、つひには實がなるのんやれ、

△思ひの種を笹舟にのせて、思ひにはしづむ、戀には浮ていてのんやれ、

○川なべかへり三章

△川なべの橋の下なるおほくひめが、われをもおもしろやたんだ、

ヲサ、ノトンタカセマダヲサ、ノトンタカセシツタカトツタカトツタカセサアトントンタカトホニ次章アゲ同之

△まへはだいがは流れる水は、うしろだいいやが岩をまく、

○すみよし近代強不歌、仍備存一章

△さても見事な奈良の観音、見事な所にお立ある、シアゲ失レ之

どのせいごせサア、もり／＼とあがりて見れば、名こそもり山よサア、谷そこの人はじやけんなど、おやより子よりじやけんなど、春さく花はうつげうの花、オンヤレサアモヲやめませう、やめてしさろぞオンヤレ、

右土佐踊一名山踊井花どり地歌ヲ合テ四十八番ハ、予天保三年壬辰秋、田野浦旅館ニアリシ程、盆祭ノ節毎夜町中ニテ踊レニヨリ、ソノ踊子チスル者ヲ呼テ詞章ヲ尋見シニ、或ハ本ヲ覺エ居ルモノハ未チアスレ、未チ覺エ居ル者モ本チアスレナド、全備シテ覺エ居タルモノナシ、去ニ依テソノヨク覺エ居タルモノチコ、カシコ尋ホシトコロ、同村大野里長平ト云農民、年五十二ニアマレルガ、先年ヨリ右踊ノ音頭ナルモノニテ、コレニ過テヨク覺エ居ルモノナシトイフニヨリテ、右長平チ竊ニ旅館ニ呼寄セ、官務ノ間數日チ經テ漸ニ聞テ記シ留メツルナリ、

○同郡吉良川村八幡宮御田祭歌三箇年ニ一度五月三日祭禮執行アリ當社勸請ノ年歴未レ審、明應五年以來ノ棟札アリ、祭禮ノ次第ハ始メニ殿ト稱スル者、大編笠ニ羽織ヲ着、出テクワシヤ／＼ト呼、其時クワシヤノ役假面ヲ着テ出ツ、殿ヨリ練ヲ出セト令スレバ、クワシヤ承テ、練出ヨトイヘバ練出ルナリ、

練六人 麻ノ袴ニ黒キ羽織ヲ着、
四手付タル大笠ヲ着、

付太鼓打一人 同持人一人

女猿樂二人 マスキ掛、假面ヲ着、大笠
ヲ着ルコト、練ニ同シ、

付太鼓

三番叟二人 大口直垂烏帽子ヲ着、翁ノ假
面ヲ着、扇子ニ鈴ヲ持出ル、

付地謡十二人 麻上下脇指ニテ、
扇ヲ持出ス、

牛一人 牛ノ頭ヲ紙ニテ作り、其ヲ人カッ
ギ、猿糞牛ヲ着、道ナガラ出ル、

付牛牽一人 冠着、

田打二人 烏帽子直垂長袴ニテ
練ヲカツキ出ル、

エブリサシ一人

田植六人 障ガケ、練ト同シ、笠ヲ着、左方ノ
手ニ扇子ヲ持、田植ルヲ學ブ、

付太鼓

酒絞一人 水桶ニソフケ枇杓ヲ入戴キ出、酒
絞ラントスル時安産ノ體ヲナス、

付取揚婆一人

田刈二人 裝束田打ニ同シ、
鎌カマヤ出ル、

穂拾ヒ十二人 童子ナリ、假面ヲカ
サリ或ハ赤糞モアリ、

小林一人 赤熊小林假面、具足大小、後
ニ唐團ヲサシ、長刀持出ル、

付地謡十二人 裝束三番叟ノ
時ニ同シ、

魚釣二人 釣竿ニ魚ヲ付ケ持出、
上ル體ヲナス、

地堅一人 赤熊地堅ノ假面、具足大
小、腰ニ唐團サシ出ル、

太刀踊六人 緋半ニ赤白ノ袖裏カケタル
袴ヲ着、棒ヲ手毎ニ持出遊フ、

○三番神の歌曲 三番神三度ニ出
三々九度舞

△奥山外山かおくのゆづりは、去年の人も迎へず、今
年の人も迎へず、命ながらへなんのゆづりは、ふき
といふも艸の名、めうがといふも艸の名、ふつき自
在徳あり、冥加あらせ給ひし、

○三番叟の歌曲 同上

△大夫とう〜たらり〜たらり〜たらりやらかとう、
ワキちりやたらり〜かりやらかとう、大夫當宮
八幡大菩薩の御前に這たる玉苧、ワキなどかはかさ
しにこきらん、大夫とう〜たらり〜たらり〜大夫とうと
うたらり〜らちりやらかとうワキちりやたらり
たらりらちりやらかとう、大夫たいとう〜には弓
遊び、ワキ柳が裏葉を的にたて、大夫上手かためたる
馬矢のなれば、ワキ百矢は射れどもあた矢はなし、
大夫とう〜たらりら〜、ワキちりやらかとう、
大夫地よりも筑後へ通ふ道、ワキせんか、やのほら
龜が淵、大夫とう〜、ワキちりや、大夫干とせを經

△田歌のうむには〜、山田のうはしの下行ば〜、
鯉かなうむか、ふなか鮎の子どもやヤヨヤ、

△川きしむのう〜、めしろのう柳もあらはれて
あらはれて、いつかや阿君と枕定めてヤヨヤ、

△しらはゆるやゆりやはなるや、どんとろたく
なるやどんとろたくなるや、どんとろめくなるや、

○田刈の歌曲

△都なるらんもゑは、都なるらんがみに、めいをます
時は、しもに時をうたうとりや、子の日の松にこが
くれて、若葉も年をふるとかや、にやく太郎にやく
次郎か、田刈などを見参らん、刈初め刈納て、所よ
しぞ目出度〜、

○小林の歌曲

△大夫是は抑小林の幽靈是なり、ワキ三尺八寸の重代
の長刀をくき長に取の〜、あぶみふんばり鞍
がさにつ、立、大音揚て名乗れたり、大夫扱こそ
小林かつ、けの守、ワキ今日はいくさにさきかけ
さきかけ、大勢に名乗て割て入所に、二條の宮なれ
ば、大夫左は、ワキ岩神、大夫右は、ワキくわんのちや
う、大夫前は、ワキすれ石、ワキ思へばさながら神い

んとや姫小松、大夫いろはふかうやらかとん〜、
ワキあげまきやらかとんと、大夫東を遙に詠れば、春
の景色にて、さも目出度ウて覺へたり、南を遙に詠
れば夏の景色にて、目出度ウて覺へたり、西を遙に詠
むれば、秋の景色にて、目出度ウて覺へたり、北
を遙に詠むれば、冬のけしきにて、さも目出度ウて
覺へ候、立廻り〜諸方をよく〜かんするに、峯
に若松、澤に鶴と龜との齡には、幸門に任せたり、
あれはなしよかおきなども、ワイそよや何處がお
きなども、千年の鶴萬年の翁、年くらべをせんとい
う、大國の御寶を敷へて参らせよ、清近の殿原、事
の能キ序に〜さし舞よ、はやしてたべや、清近の殿
原、翁やささまつやささとぞはやされたり、

○田打の歌曲

△さい花は珍らしや、いつも花は珍らしや、吉野の奥
に作ありして、馬ふれば花に宿とる都人とや、さつ
きまつくすげの笠を傾けて、聞けども鳴ぬは時鳥、
すくわか持をのこの、打やはじめうちや納め給ひ
し所、よしぞ目出度〜、

○田植の歌曲 三反

くさなれば、敵かくればかけ合く、引けば追かけ、半時が間にじや、大夫さてこそ小林名人なれば、ワキ多くのかたきは打もの業にて、弓矢の名を揚たり、

右ハ先年南部殿雄が筆記セルヲコ、ニ記ス、

巷謠編卷下

○香美郡韭生郷虎松踊

同郷柳瀬村八幡仁井田天神殿相祭禮九月五日也、

同四日夜コノ踊アリ、

音人一人

拍子太鼓、鼓、

踊人男女人数不定、

△虎松殿はどこそたち、鞍馬の山の寺そたち、まだ十五にはならねども、親の敵を打むとて、小太刀を一つとたしなめて、

虎松踊ハシトヤオドリオモシロヤア、ヨイヨイヤア、シアギリキノソリヤモヒトツセ、

△虎松殿のけさの軍を見てあれば、へうごがまへの鈴が森、浪をけあげて立ごとく、

シアゲ同上

△虎松殿の刀はなにとこのました、二尺七寸の浪のうへ、三尺下緒にとりかへとらした、うらのし付とさした、

巷謠編卷上終

シアゲ同上

△虎松殿の鍵をばなにとこのました、たつまきにひる巻に、末は黄金のせにまき、

シアゲ同上

△虎松殿の弓をばなにとこのました、七人ばりに九つがひに十つがひ、弦をばけふのせまきづる、

シアゲ同上

△虎松殿の馬のけいこを見てあれば、坂東栗毛にとりかすげ、けん覆輪の鞍おいて、明珍轡に綾の手綱をゆりかけた、駒はいさいて御立ある、

シアゲ同上

△虎松殿の具足はなにと好ました、かみ六だんはから紅の、下七段は紫一と重、綾のやつしを十三ぼろりとぼといたり、

シアゲ同上

右文政二年己卯四月八日、韭生郷柳瀬村柳瀬五一郎貞重家ニテ、其地ノ老民ニ問テ手ノカラ記シメ、

○同郡被山郷神祭次第四季の歌

四季くれば四季をぞうたふや、此頃は年たちちもどり、春來れば春の景色を見せふとて、門に門松注連飾る、

正月七日に若菜を摘むとかや、柳も芽だつたつもはる、だつはまづさく、桔梗刈萱女郎花、牡丹から松、五葉の松、五葉しちくに今年竹、吉野の奥なる八重櫻、かいしにさいて御前へまいるや、面白や二月ささらぎ、鶯の谷渡し、谷の水に薄氷、三月三日桃の花、しが(西)りさふにちの卵の花、五月五日石菖蒲、六月祇園夏山、しげきかもの溜り水、夜の螢とあらはれる、七月しなべの鹽をかく人は、千年のいのちをまつとかや、八月おほじやうこんには小枕、駒に打乗りながむれば、なびかにかたをばかつかた、九月九日の菊の花、八重菊かさねして、いんざやきりくすの聲、面白やとつねわたす、十月扇金、都の袖の上にあやをはやふ、錦を並べてござとふましやふ、あらめでた、霜月鎮祭が申シに逢ふとて、岑の榊葉もをりあそぶ、冬來るくと誰がつげし、山めぐり奥山外山が奥から、きのふは初雪けふは時雨、時雨も雨もふらばふれ、西が海吹來る風のはげしさ、やまと開いて戸を開いて神迎へな、神清淨には、天竺天頭註、幸盛云、天竺天とは高天原なるべし。へは遠くして、伊勢へ參るや、面白や伊勢や小島に寝て聞けば、うてども鷗がたばこそ、よき船によき梶かけ

て、船子揃へてあふみふまして、くつわづきして、手網々々はゆりかけて、これ天づくでかくが音、中てんちくで太鼓の音、下天づくで笛の音、笛と太鼓とがくとちやうしと、六ちやうしにはやされて、神は舞臺へまうでおひる、佛はゆがきにおり遊ぶ、神道はしんみちもくみち多けれど、中なる道が神の通ひ道、上ミ坂越えておはしませ、上ミ坂遠しとおほさば、下モ坂に越へておはしませ、下坂遠しとおほさば、ちふりてんのうせの小風のうち吹けて、とびのほのほと飛んでわしませ、祝ふかうへで神はそふだれ、いやりやアとんど、また此三千十六天へ、まだ入りたぬ神ならば、とびのほのほと飛んでわしませ、いはふかへで神はそふだれ、いやりやアとんど、

○土佐郡じよや

農民ノ田草ヲ取ルニウツタヒシ歌ナリト云、寛
 曆ノ年間マデハ歌ヒシニヤ、其故ハ予若年ノ
 時隣家に老農アリ、ソノ老農ナド若年ノホド
 ハ專ラウツタヒシトナリ、ソノホドハウツタフ者

右ハ彼山郷ナル岡内京善堂ガ記シテ見セニオコセシマ、
 ナ記寫シツ、

モ曾テナカリシカド、昔ウツタヒシサマヲ尋ネ
 シニ、ソノ歌ノフシヲ二曲三曲ウツタヒテキカ
 セシコトアレバナリ、じよやト云ハ或説ニ唱
 野ナリトイヘリ、又或説ニハ序破ナリトイヘ
 リ、今ソノ歌曲ノ音ヲ思ヒ合スルニ序破シガ
 ランカ、傳云土佐郡瀧本村ノ民はげ次郎ト云
 シモノアリテ、作リテウツタヒ出シト云、又瀧本
 非由齋ガ作ナリトモ云リ、非由齋ガ調ヲツク
 リテ、家人はげ次郎ト云者ニ歌ハセシヨリヒ
 ロマレルカ、

△年を申せば四十四になる、これのお山へ参り〜
 て二十一年、諸社寺の佛ををがまん身こそつらけ
 れ、
 △きよ水のてしゆの櫻に花咲て、見たか水汲、水汲は
 水をこそくめ、花の散るちらぬは風こそしれ、
 △一ツ二ツで親はなれ、五ツ六ツから鹽をしめて、七
 ツ八ツから鹽をこらせ、福とひしや〜と歌に
 られて、ひしやく給はれ桶給はれと、寄て給はれ沖
 の白なみ、
 △くまのをからちやうしひしやきが三ツくだる、五

日子の日の酒のもりそめ、

△白鷺の立チがよいとて國さわぐ、本の古葉へ祝ひ
 めでたさ、

△おれが殿子は、ことし九ツ夜水をひきそめ、おれが
 とのごはことし九ツ夜水を汲みそめ、廿日がひで
 りが廿一日、沖に立たる黒雲が、よんよさめと成
 て、畦をこせがなぞろ〜と、せめてこさすと花の
 露ほど、

△鳥も通はぬ野根山を、親にまさりて今日ぞ道こえ、
 もと山はせめすその日の冬ごろに、筆を揃へ書く
 ともつきせん讀むともつきせぬ、やがて其日のほ
 りの埋草、

△わしの尾の松のひまよりながむれば下場、土左
 の名所は浦戸種崎、入ぞ釣舟五艘ぞろり五艘ぞろ
 り、

△花のれんだい、心のとまるは土佐の清水、

△本は一本、末弘ごりの根ざくら、つばの根ざくら、

△池に蓮下のつゝじに咲いて、せと風吹ばなびけか
 りやす、

△たけの山の茄子一本誰が植た、めがのをわりにし

しが植た、
 △山ばたの作りあたらのよりこ草、粟になるとは人
 のいひなし、

△はいせ山のさくらさかむねはふ藤の花、かへく
 や鶯遊べや鶯、花ふみこぼすな(谷の)鶯、
 △朝露にぬりの小鉢を手にするて、茶摘むお方の背
 の低さよ細さよ、

△鮎の白ほし日本トのしほを、あらせじと、あらせ、
 松とよも風、(こよ)ひの月は有明の月、

△種崎を名所と申せども、後を三とう四方浪、東を見
 れば入るは釣船、二艘ぞろり〜、

△潮江を野根の煙で焼たて、なんぎ長濱木塚蓮池、
 まだもござる戸波の湯の本、

△瀧本はよそで見ればほそ寺、入て見れば名所大寺、
 △面白の藤白峠が峯見れば鹿はしる、上り下りの舟
 のよび聲、

△あの山の松の二郎がな三ツ二ツ、とのご待夜のあ
 かし松、

△加茂川のさらす布かな尋は尋、殿子待夜の力帯、
 △池水の底の心は通ふとも、岩にせかれて得こそか

よはぬ、

△十七が瀧にあまりて黒髪を、墨田川原のせきのせき草、

△これのお方の髪さしは、信濃じちくを、信濃がろくにけづりてほり物、何かほり物、磯になみ松波に浮舟、是がほりもの三ツのほりもの、

△笠をめせく、めさねば顔が黒い、

△牛くはのへり手引手を得知らひで、彌陀の淨土の父ご戀しや、

△かたひらのからのつぎめを得知らひで、彌陀の淨土の母ご戀しや、

△今年あいく夢を見て候、何と見て候、もどのすはうの筋の袴を着ると見て候、南無妙法りやうかう、やがてその網にかゝりて候、

右ハ予若年ノホド、隣家ノ老農ニ問テ書付タルナ、又其後南郡殿男が或人ニ問タリトテ、補ヒ記シタルマ、チ書ツ、

○土佐郡神田村小踊歌

神田村總鎮守権現

○いれは

エ、さあ〜みさ〜、おれはサせきゆう寺のてら

子ども、しんきサ〜が三ツござる、朝はサお坊主の起し聲、晝は手習の横眼する、晩はサせんちやうしきれてしんき、しんきサははれをやれさはれをやれ、沖サの鳥々を見てなりそ、エ、ざん〜と入るは江ぶちの、入るしをいろやれひこやれの、入れしをるの入れしを、拍子、橋の下なる鶺鴒の鳥を、がうらいの鮎をくはへて羽根をのすよの〜拍子、

○ねぎかへり踊

宮へ参ロオ一ノ宮、宮へ参れば禰宜そろよ、白いでたちで鈴をふる、拍子、宮へ参ロオ二の宮へ、宮へ参れば禰宜そろよ、しろいでたちで鈴をふる、拍子、宮へ参ロオ三ノ宮へ、宮へ参れば禰宜そろよ、白いでたちで鈴をふる、拍子、禰宜の踊はこれ迄よ〜拍子、

○えびす前踊

爰は關所よ若松越えよ、えびすの前にはやら目出た〜、拍子、装きて通へや笠きて通へや、ござこの路は雨よさり〜、拍子、おれらがそんには弓矢はとらずや、たてつく嫁はいやでそろ〜、拍子、えびすの踊これ迄よ〜拍子、

○ごもんかへり踊

こなたの御門を見てあれば、御門は白銀扉は金、あふきは赤銅やら見事々々、拍子、こなたの馬屋を見てあれば、七間馬屋に七ひき立テ、七人番衆がかみをま〜、拍子、こなたのていを見てあれば、弓千挺鉦千本、さるかは鞠千五百〜、拍子、いざ戻ろう吉野もどろふ、三尺妻戸をほそ戸にあけて、待ぞ吉野へいざもどろ〜、拍子、御門踊はこれまでよ〜、拍子、

○うしわか前踊

東山から月がさす、月かと思ふて出て見れば、月ではなふて牛若殿のめしの駒々、拍子、牛若殿は馬を何と好まれた、白銀柱に金のたる木、八ッ棟づくりと好まれた〜、拍子、牛若殿はじようろに御前を忍ばれて、忍ぶ女郎は十四なり、牛若殿は十五なり、十四十五の事なれば、そばおよも愛らしや〜、拍子、牛若殿はどこそだち、鞍馬の山の寺そだち〜、拍子、牛若殿はこれ迄よ〜、拍子、

○玉つるかへり踊

伊勢の山田の六えみ殿の乙姫は、伊勢路や一サとさされた〜、拍子、十三か〜して亂れたすきを打かけて、見事な茶園でお茶を摘む〜、拍子、お茶摘む姫子

にひし格子、玉の御簾をかけある、拍子、やがて次の間を見れば、諸國の侍集りて、弓鎗稽古うた連歌、大どう小どうの調べをよしれて、太鼓の樂うつ人もある、拍子、大内踊は是までよく、拍子、

○こたかかへり踊

いちげん小鷹がゑぐひする、せりようまさりとゑぐひする、拍子、二ばん小鷹がゑぐひする、弓矢をみようかゝとゑぐひする、拍子、三ばん小鷹がゑぐひする、いなばがはちくとゑぐひする、拍子、小たかをどりはこれまでよく、拍子、

○ぐそく拍子飛をどり

おれがおと、の虎松殿は、まだ十五にはならねども、小太刀をいちじとおたしなむ、拍子、甲はなにとおどされた、五枚さがり四方しろにふきかへし、大しように、はかたおどした、拍子、おぬしの具足を見てあれば、惣毛のよろひと打見えて、やうしろの板は白がねそろよ、前なる板はこがねでおぢやる、上六段は紫糸よ、下七段はくれなるぞろよと、あやのはつしを、十三ぼろりとおどした、拍子、さてもちやりを見てあれば、もとは白がねなかひばく、うへは

ひの日はまた、二ツふるづくさいたもうれしき、是もうきよのをどりかや、さらばこをどり、拍子、三日の日はまた、三ツみづくさいたもうれしき、これもうきよのをどりかや、さらばこをどり、拍子、四日の日はまた、四ツよたかをさいたもうれしき、これもうきよのをどりかや、さらばこをどり、拍子、さいとりをどりはこれまでよく、拍子、

○てぬぐひ前踊

七里かよひし手拭を、ヤア、どこで落した覚えな、い、や、てぬぐひ踊はひとをどり、拍子、もしも拾ふた人あらば、肌の木綿にかへましょ、拍子、はたの木綿がいやならば、や、うはぎの小袖にかへましょ、是ヨリ拍子、手拭踊はひとをどり、拍子、うはぎ小袖がいやならば、や、もろこしがたなにかへましょ、拍子、手拭踊はこれまでよこれまでよ、拍子、

○ごとうかへり踊 拍子飛をどり

ごとうしぐれて雨ふらば、ちよがなさけとおほしめせ、か、や、かな、さかや、なかの酒屋のひめ

こがねのをひるまき、拍子、具足をどりはこれまでよく、拍子、

○ぶんど臨踊

豊後の港をけさだして、ヤア、いまは備後の輛へつく、拍子、備後のともをもけさだして、ヤア、今はしわくの濱へつく、拍子、しわの濱をもけさだして、ひとをどり、拍子、しわの濱をもけさだして、ヤア、今はうたづの濱へつく、拍子、豊後のをどりはひとをどり、拍子、うたづの濱をもけさだして、けさだして、ヤア、今は播磨の室へつく、拍子、拍子、豊後のをどりはこれまでよく、拍子、

○しゆらごかへり踊

しゆんこどの、若殿は、十所まいたるとりの弓、まん中よりてふりかたげ、はや、鷹野にお立あるお立ある、拍子、上は松原松林、下はひはだのかけづくりかけづくり、拍子、しゆらご踊はこれ迄よく、拍子、

○さいとりかへり踊

ひとひの日はまた、一ツひよ鳥さいたもうれしき、これもうきよのをどりかや、さらばこをどり、拍子、ふたこひし、拍子、わしは酒屋の酒ばやし、中をいはれて門にたつ、拍子、わしは酒屋の一ツ桶、晝はひまないうきよざれ、しようのきりきし菊の花、をよびござらぬ見たばかり、拍子、ごとうおどりはこれまでよく、拍子、

○やかたかへり踊

めでたい春の初夢に、扇の要に松植て、松の縁にたかすて、やかたへ参ると夢に見た、拍子、さアて館へ参りては、やかたのかゝりはやら見事、うしろは山で前は川、四方四面に蔵建て、錢米積でやら見事やら見事、拍子、やかたをどりはこれ迄よく、拍子、

○八しまかへり踊

ところは四國八島にて、源平兩家のた、かひに、むれ高松の松原へ、物見に出たる大將の、御出立の錦やかさ、拍子、鍬形うつたる甲をめされ、赤地の錦のひた、れに、紫すそこの鍬着て、たげなる馬にぞ召され給ふ、拍子、さアて其場の見物は、那須の興市があぶきの的の、要を射されば扇は海に、其名は天下に揚にける、拍子、八しまをどりはこれまでよこれまでよ、拍子、

○よいちかへり踊
拍子飛などり
 興市々々にほれたも道理、足は白がね身は水晶、をよる姿は萩の花、拍子、笠をたもらば三がいたもれ、雨のふり笠ひでりがさ、花の興市のしのびがさ、拍子、こゝろふでうの殿もちて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕様へ八月参々々、拍子、よいちをどりはこれまでよく、拍子、

○しうとめ前踊
 おれがしうとめはきぶいの、けさはき庭にちりまいて、まだけさ嫁が庭はかぬ、是ヨリ拍子、なんぼしうとめのきぶいの、拍子、おれがしうとめはきぶいの、岩をはりまにたちぬへと、わごれはまなこを糸によれ、是ヨリ拍子、なんぼしうとめのきぶいの、空飛ぶ鳥のはねをよめ、わごれは天なる星をよめ、是ヨリ拍子、なんぼしうとめのきぶいの、拍子、おれがしうとめはきぶいの、水なさいの、拍子、おれがしうとめはきぶいの、い島へ船をのれ、わごれは愛宕の山をのれ、是ヨリ拍子、しうとめをどりは是までよく、拍子、

○かたなかへり踊

○かまくら前踊
 鎌倉どの、板じきは、がらりとふめばかねの音、むかふの山をながむれば、五葉の松が三本ある、うちには鶴が巢をかけて、本には白藤はへかゝる、拍子、きのふ生れし龜の子が、けふはさきりすの池にすむ、拍子、御代はめでたの若松様よ、枝もさかへる葉もしげる、

右文政十三年庚寅閏三月八日ニ、南部殿男が寫シ置ルマ、
 ナコ、ニ記シツ、

○吾川郡森山村小踊歌

八幡宮祭禮毎年八月十五日ナリ、其節行ハルルカ重テ可レ舞、
 △牛若殿の馬屋は何と好まれた、白銀に金のたる木に八棟造りと好まれた、
 △牛若殿はどこぞだち、鞍馬の山の寺ぞだち、
 △牛若殿の召たる鏡見てあれば、崩黄威の鏡きて、鍬形打たる甲を召し、その出立のはなやかさ、

右ハ先年成人ニ問テ記ス、

○吾川郡猪野村神歌

猪野村鎮座榎本大明神祭禮九月十九日、波川

巻頭編巻下

きようで九貫のうち刀、三貫さげを、さしきけて、八貫ぬきをまきこめて、娘をおもは、舞にやれ、拍子、もしも娘をさるならば、刀をそへておもとしやれ、拍子、刀をどりはこれまでよく、拍子、

○御寺前踊

御寺へ参りて御門のかゝりを見てあれば、御門のかりはやら見事、白がね柱にこがねのたる木、この門見れば寺繁昌、拍子、お寺へ参りてお庭のかゝりを見てあれば、御庭のかゝりはやら見事、せんぼん小松がはへ廻る、其枝に四十がらがす、すをかけて、この子がそだ、ば寺繁昌、拍子、御寺へ参りて花だんのかゝりを見てあれば、花だんのかゝりはやら見事、石菖花にこがねがさいて、この花見れば寺繁昌、拍子、お寺へ参りてお茶の湯所を見てあれば、お茶湯所はやら見事、白がね茶桶にこがねのひしやく、すてんもくに黒竹茶せん、十三ちごにぞふらせ給ふ、拍子、御寺へ参りて佛檀のていを見てあれば、ぶつだんのでいはやら見事、青葉の笛にふくりんかけて、十三ちごにぞ吹せ給ふ、拍子、お寺踊はこれまでよく、拍子、

河原に神幸アリテミンギアリ、ソノ神幸ノ道
 スガラウタフ神歌ナリ、

△イカみし千みち百みち多けれど、いなんぼ中の道こそ
よふち、とほくと、頭山、古老ノ歌ニ、神小
 神の通ひ路イカ、かみしよふち、路千道百道多ク中
ノ道コソ神ノ通ヒ路トイフカ本歌ナリ、ナンホ道クト云ハ問ノ
又下ノ句神ノ通ヒ路ト云、詰メテハ節ツギアシキニ、路チ
ミナニカハ、上ノ句五文字イヒ
モドシタルモノナリトイフ、

右先年祭禮ノ節行テマサシク問クトコロナリ、既ニ月部
 其照翁録川筆話ニ載レリ、

○吾川郡東諸木村神祭歌

當村鎮坐正八幡宮、八月十七日祭禮ノ節神司ノ唱ル歌ナリ、
 △君をいはふやしらはまの、おりぬる鶴をもろとも
 に、ころもかんじよ秋草を、結ぶばかりになりたまふ、

右ハ先年土人ニ問テ記ス、

○吾川郡森山村神祭ナレノ歌

入幡宮祭禮ニ行ハル、カ、
 △ちりへつぼうさくらやとくまかはり、しんでん又
 ちやうまんてん、

右ハ先年土人ニ問テ記ス、

○吾川郡猪野村神祭歌

天神祭禮九月十八日、神幸ノ時道ニテ神輿を
昇者異口同音ニ謠、

△ちりへつぽふさいれ石、いはほとなるまで祈るな
り、

右ハ或人ニ問タルマ、ヲ配ス、

○高岡郡仁井田郷窪川村山歌

山民常ニツタフ歌ナリ、

△戀しくば尋ねてござれよ信田が杜の葛の葉、

△戀しくて尋ね来たものあはしてたまれ葛の葉、

△木も茅もよせよ卵杯もたれ中頃はおいとしい、

△おとしの盆のよさに、いとこに袖をひかれた、

△夫やおまへいともども、また袖引たびにおいと
しい、

△この苗をまいたよさは、善悪二人り寝たげな、

△さておまへ寝たりやこそやれ、無理やりいふてわ
れた、

△くぼ川の酒のおまへにながる、水はよい酒、

△よい酒にさくをちらして、おもふの酌でよま
い
て、

△實にこゝははれの海邊よ、さかれやきぬの下妻、

△下妻に石をつゝんで、石より堅い約束、

△約束はかたかつたれど、迂論なやどで違ふた、

△あの山はおやのたて山、見上げて見ればなつかしや、

△梅七つ枇杷のふさをりこりよ、廿一にことづけふ、

△おひつけやあとの小邊路仁井田の五社にまろよろ
ふ、

△もし自然それが違ふたりや、足摺山でまちよろふ、

△今一目見うとしたれば、早山ばなをゆきこす、

△ありや見よ川の瀬を見よ、早瀬にもくりはとまら
ぬ、

△友達はうつげうの花咲たるのちはちりく、

△日もくれる歌もはみてる扱そひのくや友達、

△引ヲ引木まはれ小茶臼、ばんばとおろせ小茶臼、

右ハ或人ノ書付タルヲ寫シヌ、

○高岡郡仁井田郷窪川村囉子田一名太鼓田歌

田植歌ナリ、ソノ業ハマヅクハシロトテ鉄ニ
テ代ヲナラシ、次ニ牝馬敷足立ナラベテ追立
追立代ヲカク、其アト田行司笠ヲ着杖ヲ持テ
早乙女ヲ指揮ス、早乙女モ皆笠ヲ着歌ウタヒ

なりや、

△朝霧ふる夕ぎりすが野にや、きじやこそなげや、け
んげほろゝとや、

△ひるまもなや、をぢが田植にや、きわひ草ノ名かと
てや、蜘蛛おさへたよ、

△ひるまもちがくるやら、白イ帷子で、びらりしやら
りと、白イかたびらで、

△よひどふこや、すいみどふこ、是にみどふたてい
で、

△津野殿がめしたる甲に、咲たる花は何花、

△くろみやうおくる日はいつくまでぞよ、なさけの
ゐとて兵庫までぞや、

△おく山のとゆる窪川の方言に大瀬を、たれ引て通るは
源氏平家ともへば、たれ引て通るは、

△おどろの下や、くろふなるまでや、まだや、やらぬ
かや、寝太郎どてや、

△おく山のとゆるで、火がチヨン／＼口、鮎とる火か
や、小鮎とる火かや、

△まつのよいてばや、さばひよるこぶや、そりやさひ
とれや、花ぞふとめや、

サ、ラスリニ三人、
サ、ラ長サ一尺許、

△うすもとよりや、おくを見たればや、そりやかくら
のや、ねほひとのばらや、

△此頃のお山へいてもごろせ、花は色々で鳥かや
戀々なくや、

△朝聲をならせや、ならさぬ聲はねへこゑやつ
づみうちや、

△どふなる聲はしぎよなる、我心もや、しやぎ／＼と

早乙女一田ニ七十人ヨリ三十
人マテナリ、皆笠ヲ着、

夕チウド 早乙女ヲ遣フ役ナリ、
始終ノ作能入也、

太鼓打二(人ノ字脱敷)十四五歳ノ子供ナリ、ウシロダスキカ
鉢巻ヲ爲タリ、背ニ五六尺許ノ笹ヲ立ルアリ、五色ノ
紙ヲ
付ル、

テ植ウ、又太鼓打太鼓ヲ首ニカケ兩手ニ撥ヲ
持、植オクレタル所ニユキ身ブリシテ拍子ヲ
トル、拍子ノ盛ナル時ハ太鼓打ノ背水ニヒタ
ル許ニソレナリ、早乙女ハ太鼓打ノ近ヅクヲ
耻トシテ手早ク植ツ、苗ヲクバルモノ共ハ早
乙女ニタ、扣サセジトスキ間ナクナゲ與フ、
イヅレモンノ手業ノ早キカギリナシ、

△苗代はこもりか田よ、もたよりきたよ、われも子も
ちおらも子もち、もたよりきたよ、
△鼓こそ七重の臺七ツばち、返して打ならせ、
△つらみ聞やほくくとなるや、わがいもや、しやき
しやきとなるや、
△つらみ打は遠くなる、歌はしげくなる、其聲をやめ
てたもれ、たんちり兵衛どの、
△地頭さま田こふちへ四石蒔た、苗はいつ取上す、四
石蒔た苗に、
△朝とる苗や、三ツ葉咲たりや、よつるはんじよと
や、殿榮よひや、
△なかくふや、とまらば宵の内に、露は落とも、
△けさいふちかふさや、出いろとのこしいち笠かを、
菅笠十八文と千鳥笠百貳十、植々五月女、笠買ふて
きせまじよ、
△やれうれしのしよてんや、晝は笠にきらやれ、夜
は抱てねよれ、
△五月女のみめよいは、笠買ふて来ふぞ、ひとりしら
りと笠買ふて来ふぞ、
△女郎ふのうけ笠、こちは菅の笠かふて、いまさりの

白い菅笠、
△田よは立とも日笠をあふせ、あやの緒着たちよつ
ぼねがさ、
△近江のかさや、見たるもよいや、よたるもよいや、
取替もよいや、
△播磨のミせ有白イ菅の笠、我等にも買ふてたもれ、
白イ菅笠、
△笠買ふて着よふとて、笠の直をおもへば、やらひす
にかねの聲、笠にもいらぬ、
△越後の糸や、加賀の白糸や、其白糸や、しなやかに
よれや、
△筑紫船下ると云かよ、仰に付てよ、却船はどこへこ
そとまらぬ、久禮が江にこそとまらぬ、
△何やら船頭さんさらめふく、宇賀の神よりあひ、其
外土佐廻り、土佐は彌勒世の中、
△世の中七年よふか、花よふかくれなるよふか、くれ
なる下緒、サア下さしよ、
右ハ或人ノ書付タルヲ寫シツ、
○高岡郡田植歌
多野郷ノアタリノ田植ニモハラツタフニヤ、

重テ可ノ詩、
△津野元殿のめしの甲に咲たる花は何花、八重菊に
小橋イキ、花さく芹生にまさる八重菊、
△津野殿の出し其日の晝程に、物の哀をゑら戸波郷岩
戸利エラ
也でとどめた、
△我殿はきのふ陣立、けさ卯の刻にうたれた、討ッ殿
元高は廿五で候、討る、殿春高はついはたち、うた
る、は時の災難、弓矢に冥加のないけに、
△長かれとなげし黒髪、大井の關のしがらみ、しがら
みに懸らりようとは、今朝出る朝日おもはぬへ、来
も来たり待ちも待たり、たぶさに露のふるまで、
△大野見の小深瀬にこそ、八重玉章は浮よれ、玉章は
八重に結んでながす、下の瀬でとれ、
△思ふ殿子が都にあれば、都へ枕がかたぶく、早ふお
きておもかりあれや、都へ朝日がさすまで、さすや
らく、沙がさすやら、綱とる手もとの早さに、
△吹風は身にはしきひで、いちじゆの詞が身にしむ、
身にしまば抱てねしよれ、
△いとほしや戻すまいもの、夜深かに殿子をもとし
た、

△日もまはる露も廻る、いかにかり寝がながるる
う、夜明の鳥がきめてなき候、
△我との朝日の山の草の奉行にはられた、三日月
鎌で刈るとも、
△日もまはる露もおちる、いかにかり寝のながる
ろう、
△十七八のあねさまの脇ほころびは、二十四五なる
殿原の手かよい所よ、
△朝聲をならせく、ならさぬ聲は寢聲、なまけさは
きりの最中、夜半のきりに迷ふな、
△鎌倉のあこや御前に、くのにはとりうとうたりや、
うたふた鳥の音のよさ、
右ハ南部殿ガ寫シモタルヲ記ス、
○高岡郡多野郷十一箇村總鎮守加茂大明神御神役
歌囃子、
祭禮十一月中西日臨時祭式
馬長馬童子二人シテテ被リ、
馬長馬ニ乗モノヲ云ナリ、
田カキ馬
エブリ持二人
太鼓打四人

鉄持二人

晝飯持酒糟ヲ入持テ也

サ、ラスリ二人詞、けふの晝飯持は何として遅う候ぞ、

神職 三人馬ニ乗、馬場ノ末地藏堂ノ有所ヨリ來ル、惣

馬場半へ神主大夫四人迎ニ出テ神歌ヲウタ

ヒ、夫ヨリ押岡神田ノ者シタヒ、其跡ヲ多野郷

ノ者神歌ヲウタヒ宮地へ至リ、宮前マデ神歌

ヲウタヒ田ヲカキ、夫ヨリ晝飯持酒糟ヲ四方

へ投ル事雪花ノゴトシ、

△いざやさらばとのばら、賀茂の宮へ参りて、神のみ

ゆきををがまん、實もさり〜、

△各御幣を指上げて、祈る〜はかもふなりやそよ

そよ、

△上 神の初には、下萬民に至るまで、永樂をまうせ

ば、國もしづかなりけり〜、

△賀茂の御田のたい中に、さすやのいかにとふた

れば、君心さかシ、いたりや〜、

△各様へとり通持待て、十一萬町を植ふよ、たからを

ふらす中賀茂の、五月の御田をはやさん、實もさ

り〜、

△月は明行浦かげの、納る御代ぞ目出たき、月も久し

くおふシ、ためしには、爰住吉の賀茂宮、千秋萬年

の不老門をたてふよ、其身はよもにくと、日なくよ、

都へ参たまへば、けふせいせいとましますば、

△あの日をさごろせ、山はいのへかゝつた、明年も十

いとよき、明年も十いとよ、こゝなる松は、けふなる

松かな、本は只一ツ、中はほのどはまんざいらく、す

るひろごりよ、

△橋の上におりたる鳥は何鳥ぞ、時雨の雨にぬれし

鳥りや、さゝいさきはし、いのを渡した、

△いさりの上へかもか池のをし鳥、水まさば徳をま

す、

△白はまにおりる鶴のもろともに、都にまします

君を、祝ふもろともに、

△秋草は結ぶ斗に成にけり、いさ〜きりす衣がへ

せう秋草は、

△秋田を刈置行ばつゆしげし、いなばの露に袖はぬ

れにけりや、シナひきやうかりやそよ〜、

△五葉の松の縁には、千年の鶴もは来りて、萬歳樂を

うたふよ、鶴と龜との祝には、君の御代ぞ久しき

く目出度事は菊ノ花、千代をかさぬる目出度さよ、

△山御所と申は、いじまをつらいたりや、此歌イ

△日も入相の鐘きけば、とは山に入ひおとしの、よろ

ひには甲をい上にかついで、ぬひたる太刀は持月

ちの、月毛の駒に打のりて、はしの上にあみわた

は、つづくつばもの誰々ぞ、かまくら氏のやと丸

や、花ちらばこかげを御ををよ、

△ゆきの下に鶴のいがわむす、松風の山御所と申

は、ふく所のとまりなりけり、

△御手洗川は、いづみ酒〜、

△上一神の初には、下萬民に至るまで、永きを申せ

ば、國もしづかなりけり〜、

△賀茂の御田のたむ中に、さすものいかにと問たれ

ば、君こゝろいさきにさいたりや〜、

△各様へとり通持待て、十萬町を植ふよ、たからを

ふらす中賀茂の、さつきの御田をはやせん、實もさ

り〜、

○高岡郡半山郷姫野村三島大明神花鳥歌

此ノ神ハ山ノ内藏人藤原經高、延喜十三年ノ

頃此地ニ下向アリシ後、伊豆國ヨリ勸請アリ

シト云傳ヘタリ、祭禮九月十九日ナリ、種々神

ワザナドヲハリテ、社ノホトリニテコノワザ

アリ、ワカキヲノコ十四五人バカリ集リ、トリ

ドリ劔ヲヌキ鎌ヲ持、拍子ヲ合セ歌ヲウタヒ

テソノワザスル、イト目サムルココナス、ソノ

ウタフ歌、マツ地歌ト云テ念佛ヲ三反バカリ

歌ヒテ、次ニ歌ヲウタフコトイヅレモ同ジサ

マナリ、床鍋村ノ花鳥ハコ、ニ太郎官者トイ

フモノアリトゾ、

○いりは

△こゝあけよ、よう山の、とりけぞあけすは、ほんの

ほり、はねこゑで、見ればよもきす、こちよれ、ほん

きぬの、つまさせう、きそめぬきぬのつまより、き

そめた地しろが、ひやくましよ、

○えつり

右ノ北條敏録ガ書付タリシナ、後ニ或人ノ書付持リシナ南
部殿男ガ校合シタルヲ寫、

△花どりは、七日せうじよ、なく夜のしめを、やよひく、

○とんぼう

△とのさまの、召したる甲に、さいたる花は、なに花や、他郷ニテハとのさまの津野殿のト云、コ、ニとのさまと云ハ、此郷津野氏本領ナリケレバ、サケタイフナルベシ、

○わきはらひ

△おれどもが、うひの花どり、わるくとよいと、おしよあれ、

以上四種劔ヲ持テアドル

○ひとつぎり

△戀しくば、わたればんせう、くらくばとばせ、かなくつ、

○きりわき

△ありよみよや、川のせをみよ、はや瀬にもくが、とまるか、

○うしろつき

△あの山に、おもひ花さく、戀するものに、見せまい、
○もちり

△松風は、おろすよもそろ、おろさであかす、よもそろ、

○まねき

△こい〜と、まねきよせて、のばらにだいて、およるか、

以上六種劔ヲ持テアドル

○たちもちり

△しんじつに、おもへきやうだい、稱こそかはれ、おとどひよ、

○えだし

△十五夜の、月はまどから、しのびのとはうらから、

○ひとつひざ

△十三で、かねをまるにや、十五になれば、よびそろ、
○くるまたち

△花さいて、なれや山榊、お寺のもの、にほひ木、

○ひきは

△ようひけひき木、まはれ小茶春、ばんばとおろせ、
こばの茶、

以上五種劔ヲ持テアドル

右ハ文化十二年乙亥九月十九日祭式ヲ見物ニ行テ、親ク踊子ニ詞ヲ問開テ書付來レルナリ、

○高岡郡久禮村田植歌

久禮村鎮座八幡宮毎歳八月十五日祭禮ニ歌フ、

△京からきたよふしくろの稻は、いね三ばいや米八石や、

△神のまへでは御しめ〜はる、佛の前ではりんの音する、

△八幡の神の御田に、みそぎの風がなつかし、

高聲アゲゑひとなく〜三反唱、

右ハ先年久禮八幡宮神官奥代重清が書付テオコセシトコロナリ、

○高岡郡仁井田五社大明神祭禮萬歳樂

祭禮毎歳九月十九日

御代もゆたかに治まりける、扱もたつとき日の本の、大宮社堂のはじまりは、昔暗夜の其ときに、伊弉諾伊弉册二人の御神の、天ぢくよりもあまくたらせ給ひて、天照太神たてについて、始て日ほんを取立給ふ、その後神功皇后の御たいしん御太神カ、退にはほうらいカ三かん責ほろほし給ひて、八幡山にて跡をたれ、弓矢神とぞ祝はれける、ありがたかりける、か、

る目出たき折からなれば、都の聖護院の大衆入の、けいこふにん下向御祈禱の其ために、まはらせ給ふとこふ〜何處何日本六十六ヶ國残りなく、山伏の通りけるには、行萬の山伏にては候はず、こふ公せつき家あきとふ御祈で、山伏の召れるには、しやく八の金剛杖をたてについて、はじめて貝をぞ吹れる、扱大夫さん〜、國々からめいしゆが参りました、□何そのめいしゆとは何と□□もものだ、□□野道通ればかきてかうちよいとまねく、しかもおはなの唐くれなる、なにがやれこりやちよいとま、しゆん(巻)にまじれば、しゆんのまへの音曲、まつかえの小謠ひ、大鼓につ〜み、手つ〜みはのちごととに、なごしゆのいとくにや、またたはむれあそべ、ヤアソセ、治る御代じやアトとねなく、わがくつが替りて、せとにはせとまつ、門には門松さつきは〜、

是は仁井田五社祭禮の節、宮船にてまひかなづる萬歳樂のうたひものなるを昔より口づからに傳へつゝあるを、此度とち巻としてしるしおかまほしくおもふとぞ、されどいひあやまりきたがへるもわるな、ものしり人にとひあきらめたりして、しるしおかまほしくおもふとぞ、
右奥書トモ南部殿男が寫シタルヲ記シツ、但奥書ハ誰ノ書ルナランシラズ、

○高岡群左川郷玄蕃踊歌

毎歳六月十五日左川村々ニテヲドル、扇子ヲヒラキ拍子ニシテウタヒヲドル、横倉権現ノ祭ルタメニヲドルトゾ、但シ横倉権現祭禮ハ九月八日九日定日ニテ、其日行ハル、神事トハ別也、

△こゝかゝ佛崎はこゝか、こゝよくほとけ崎はこゝよ、

△大さき玄蕃どのは、十七たちをかたいた、弓をこそかたげ、たちをこそかたげ、たちはびせんたち、さやもなしのたちうち、さやのことはまめいふな、さやはこちにかまへた、

△今なりかはらにふねをまぢる、これんで此ノ大川で引ふねがよそろや、

△よいしよくのゆゑんなる、硯箱のよりあひあれかくしごん、

△どのはしがどのにしましよ、よひのしまる福は、こよひこゝでおとまり、

○神樂

△天の戸を、明けそめしより高々と、みかげ照そふ日の本や、みかげうるはふ天が下、いつゝのたなつほに人さかゑ、都もひなもつみうち、笛ふきうたふかんうたの、天のうすめの神遊び、あら面白や神遊び、千とせの鶴も天まへば、萬代の龜海に遊べり、かゝるめでたき神と君とのみぐみは、天地にこそ満にけれ、

○治御世

△朝日影、豊さか上る春日々々、匂ふ平の都風、もろこしまでもうらやすに、治る御代ぞめでたかりける、

○高岡郡大野見郷花鳥踊歌

右武市半右衛門或人ヨリ借録シタルロシニテ、見セニ贈リタルマ、チ記シツルナリ、今考ルニ此ハ中古ノ末賀村ナル世ノ詞メカズ、ヨシハ近キ世ニナリテ好事ノ者潤色シテ歌ハサレタルモノニアラザルカ、重テクハシテ正スベキモノナリ、

△おかたの手にはなにをもみつけた、こいくれなるの花もちつけた、

△やろぞ八月にやろぞ、八月のたのみは正月のまつと思やれ、大崎茶園まにかき色の帷子、これよりさきはべに入のかたびら、あさくらに一人弘岡に一人、うづらさかまたにはそうた、

△かけ浦のしまどの猪の、尻でうたれた玄蕃どの、きかれたら、やさら事は行まい、

△さてもぬふたり木綿はかま、さつまばりに土佐糸、手もとよしのぬはれた、

△踊りくたびれて、どこでやどとろぞ、さいをのく京のさいけの、はまの町でやどとろぞ、

○玉産靈

△久かたの、天のみなか主の大御神、大みごゝろを種として、高みむすびの大御神、神むすびの大み神、二柱の神の大御神の、みむすびにより、大みをいざなぎの大御神、大みめいざなぎの大み神、おのころ

神祭ノ節執行フナルベシ、今須崎郷ニテモウタフヨシ、

△大野見玄蕃頭南郡十七八ちよかたいたき、ちよこそかたげ、かけうらのしまいもを、猪のし、がくらふた、玄蕃殿が見られたりや、しやな事はあるまい、

小村神社祭禮、正月三日五九月十五日ナリ、神興ヲカク者ウタフ、

△ちイりへつぼうはりしんでん、さゝらやとくわかはりしんでん、

○高岡郡高岡村三島大明神神歌

△ちやうまんてんやほりしんでん、さゝらやとくわかはりしんでん、

○高岡郡新居村神祭ナバレンノ歌

△よろづわがめいや、さゝらやははりしんでん、

○幡多郡入田村御伊勢踊歌

右或人ニ贈タルマ、チ記ス、

入田村ノ邊ニテ神祭ニ踊ル歌ナリ、カノ村ニ
カギラズ、スベテ常郡ニテハ所々ニ此踊アリ、
ソノ踊ルツマ装束ハ平常ノ體ニテ扇ヲ持テ踊
ル、

△伊勢のようだ(山田)の神まいり、むくり(祭吉)こく
り(高麗)を平らげて、神よ君よの國々まで、ちさと
の外までゆたかなら、老若男女おしなべて、まゐり
げ向のめでたさや、お伊勢踊ををどりく、て、なぐ
さみ見れば國もゆたかに、千代もさかえるめでた
さや、お伊勢踊のめでたさや、

△天の岩戸の神かぐら、月に六度のかぐらより、せん
く萬くの代々かぐらより、老若男女おしなべて、参
り下向のめでたさや、

△東は關東のおくまでも、老若男女おしなべて、参り
下向のめでたさや、お伊勢ををどりく、て、なぐ
さみ見れば國もゆたかに、千代もさかえるめ
でたさや、

△南は紀州の三熊野のさと、するくまでの人まで
も、老若男女おしなべて、まゐり下向のめでたさ
や、お伊勢ををどりく、て、なぐさみ見れば

國もゆたかに、千代もさかえるめでたさや、
△西は住吉天王寺、四國つくしの人までも、老若男女
おしなべて、参り下向のめでたさや、お伊勢踊をを
どりく、て、なぐさみ見れば國もゆたかに、千代も
さかえるめでたさや、

△北は越前能登や加賀、越後信濃の人までも、老若男
女おしなべて、参り下向のめでたさや、千早振ちは
やふる、ごへいにさかき奉り、踊り喜ぶ人はみな、
こゝろのまゝにぞねがひこみ、とやはひとせわた
もつなり、榮えさかふる目出たさや、老若男女おし
なべて、参り下向の目出たさや、お伊勢ををどりの目
出度さや、

△お伊勢踊ををどりく、て、なぐさみ見れば國もゆ
たかに、千代も榮える目出たさや、おいせををどりを
をどりく、て、なぐさみ見れば國もゆたかに、千代
も榮えるめでたさや、

右幡多郡入田村醫生大黒後祚が書付テ見セニオコセタル
マナ記ス、

○幡多郡井田村天神宮祭小踊歌
天神祭禮九月九日、今藤乘伯祭禮七月十七日、

がりは、しばをまくけふがりおもしろや、
○うたひ歌

△弊きけばりんの初聲、姿を見れば八重菊、八重菊と
ことへられても、猶まだ心ぼそなや、

右南郡殿男が筆記ニアルヲ記ス、

○幡多郡田歌

此ハ平常田植ニウツタフ歎、又ハ土地神祭禮ニ
用ル歎、重テ可ノ尋、

△門田をつくれや、門田へこふぞ、いにやかりやまし
や、して門田へこふぞ、

△沖の田で笛吹はたれ、太郎どのか、おららにも只い
とこさいの太郎殿、

△奥山轟て、火がちよろく、鮎とる火やら、小鮎と
る火やら、

△田るじどのが、田にたちや、てる日なれども、夕日
か、や、照日なれども、

△菊も柳も門田へこふぞ、枝も榮えてかど田へこふ
ぞ、

△去年より今年は、門田の松が高は、高こそ道理よ、
年の數がまさはし、

コノ兩度小踊アリ、

△日向の小濱へ松植て、何につけても大松戀し、

△日向の小濱へ菊うるて、大菊こひし、

右先年予幡多郡ニ遊ベルホド、井田村土人ニ問テ記ス、

○幡多郡入野村八幡宮祭禮花鳥歌

祭禮毎歲九月十六日

△鎌倉の御所の御庭の八重櫻、八重にや咲いで九重
にさく、

右先年予幡多郡ニ遊ベルホド、入野村土人ニ問テ記ス、

○幡多郡上川口村豊後踊歌

八幡宮祭禮九月九日小踊花鳥アリ

△もくり(祭吉)こくり(高麗)をたひらげて、千代も榮
えん目出たさや、

右先年予幡多郡ニ遊ベルホド、土人ニ問テ記ス、

○幡多郡楠山村田植歌

土地神祭禮ニ行ハル、カ又ハ常に田植ル時ウ
タフカ重テ可ノ尋、

△けふの田の、田主どのへまゐるた、からももの、しらが
ねのよねのはちに、こがねゆりするて、

△奥山の、なまきの葉はきのふ刈かけ、ふかりかきのふ

△けふの田の植よきよ、苗のわけよきよ、さんごら

リ、上山殿ハ中平氏ヲ云カ、
△おらつらうこぎなりでも、上山殿のみいのよ、み

い、りたりれんが手にも、似たるかよ、

いの子ながらすゝりうかた、

△早乙女の、みめのよいは、笠をからにやこそ、一チ
で二く三く、四く五つ六七くの上は、めされぬか、
△十七八の小娘が、脇のほころびは、二十一とのこの
手のかよひ所よ、

右ハ楠目清次右衛門ガ筆録ニ出、見當リタルヲ、ニ記ス、
右ノ歌今ハツタハメニヤ、重テ可レ尋、
右伴ノ餘幡多郡有岡村法樂踊歌トイフモノハ、名
ヲ聞及ビタルノミニテ未ダ其詞ヲシラザレバ此ニ
ハ載ズ、其他ニモ漏セルモノアルベシ、重テ聞得タ
ランホド書加フベシ、

△ようさりや來ると云が、どこへによや、かゝさま麻
かくて、戸詰て戸御寐や娘ら、

補遺
○高岡郡仁井田五社大明神祭神渡シノ詞
舞大夫ヨリ

△早乙女と角力捕た、よもぎ原の中でよ、扇は落した
よ、太刀は忘れたよ、

△抑なんせんぶしうちう、大日本國王城より未申、
北海道土州高岡郡仁井田窪川兩郷の地鎮守五社大
明神、其外諸大明神諸大權現の宇豆乃廣前仁、一日
一夜乃御神樂有由承、天竺小金大夫子孫宇賀、父宇
賀、子供、數々初參申候、今日の注連はゆるしたび
給へ、

△土居の様の白えんに、白衣がでてある、もしも時雨
がするならば、たたみこみけふばかり、

△手苗をくれたは別のこころさし、ようさりやござ
れどの別のこころさし、

△よくさのあがり田にや、河さば買に、煮ても焼て
も、喰て見て味がよか買に、

○幡多郡上山郷茶摘歌
中平隠岐守重熊ノ領セラレシホド歌ヒシトナ

△男ほどめんどうや、包さげて田植る、女子程しんし
やうや、巻をはつて田うるる、

△如仰なんせんぶしうちう、大日本國王城より未西、
北海道土佐國高岡郡仁井田窪川兩郷惣鎮守五社大
明神、其外諸大明神諸大權現の宇豆乃廣前仁、立せ
給ふは神の化心にて坐ますか、ゆう所いはれをな
のり候へ、今日の注連御ゆるし申す、

舞大夫
△某勢州五十鈴川小金大夫子孫、宇賀、父宇賀、子供
數々引具し初參申候、今日注連御ゆるしたび給へ、
渡シ

△誠に勢州五十鈴川小金大夫、子孫數々引具し參る
なる、今日注連御ゆるし申、早々御入候へ、
渡シ

巷語編卷下終

御船唄留目録

卷上

- 皇帝 ○鑑くどき ○おふなぶし
- さその春 ○四季 ○八重菊
- 和歌の浦 ○年のよはひ ○白浪
- 今みよ ○鹿島 ○明石
- 芳野山邊 ○みすの内 ○虫のこゑ
- 十二やさん ○一夜二夜 ○都の君
- 都あたり ○秋はなを ○忍びきて
- ながれ ○石原 ○源氏
- 蘆の屋 ○さまは三日月 ○玉葛
- 玉章 ○土手の道 ○山谷かよひ
- 鹿兒島 ○お江戸養 ○さいもん
- 丹後但馬 ○おちよゝ ○浮世ぬめり
- 佐賀羅 ○龍田川邊 ○長崎
- なれゝ ○梅の古木 ○富士の裾野
- 花笠躍 ○さんさらり ○浅草
- 澤邊 ○上様躍 ○水戸さから
- 唐人うた ○ちよき ○たんへい

卷中

- 茶寮躍 ○白玉 ○忠度
- 風くどき ○月見 ○華揃
- 道中くどき ○大黒舞
- かふてい ○籠島 ○歌人
- すもふ ○上野 ○白雲
- 島くどき ○陸奥 ○月見
- 戀くどき ○加田の浦 ○初春
- 松くどき ○名作 ○祝儀
- 辨慶くどき ○太平樂 ○池田
- 三四季 ○いのり ○春の雛
- 都の君 ○都あたり ○薫物
- あつもり ○若衆揃 ○八島
- 熊野 ○戀盡 ○茶の本地
- 武藏野 ○おうむ ○源氏
- 御代永久 ○萬歳 ○名寄竹
- 十二月 ○寶船 ○名酒揃
- 大黒舞 ○須磨浦 ○淡路島
- 浦遊 ○霧よ節 ○東金

御船唄留卷上

○皇帝

- 長崎 ○春は吉野 ○四季雛形
- 山中節 ○八重菊 ○思は永し
- げんじ ○澤邊節 ○玉章
- 是々節 ○裾の節 ○梅古木
- 上野山 ○さゝなみ ○とくさがり
- 汐の満干 ○萩吹風 ○是の節
- 河島 ○生木節 ○住吉節
- ぬめり節 ○吉野節 ○うこん染
- 見るめ ○もにうづもる ○笠を節
- 唐人唄 ○茶々碗 ○白波
- 久形 ○沈麝香 ○秋花
- それそよ ○枝も彌生 ○さその春
- 永かれ ○櫻揃 ○五十三次
- 鹿島 ○連かすり ○ちよきかすり
- 平かすり

「やあら目出たいの、天の岩戸の明ヶ暮に、月もところになにしを、マキ影をうつして三股の、波も静に船さして、エン乗行末は駒形に、誰をまつちの山つづき、見れば心も隅田川、エン流にうかむ一葉の、舟のむかしは唐土の、エンくわてきといし強者は、文武二道の達者なり、エン或時庭に立出て、池の面を詠れば、エンヤヨエンヤコン サン「せい」と吹く秋風に、マキ柳の一葉散うかみ、エン波にたよふ其上に、いづくともなくさゝがにの、雲の上より落来り、エンいとほかなくも打乗て、エン汀に寄りし有様を、エン實にもと思ひ染めしより、舟を工みてつくり出し、帝え是を奉る、エン扱こそ舟のせんのを、君にすむと書とかや、エン皇帝是にめされつ、エン四海を安くこぎ渡り、エン御代治め給ふ事、エン一萬八千歳とかや、かゝるためしの思ひ、今に絶せん船遊び、エン八百萬代は限りなく嬉し、

○鏡へよみ
 「初春のゆきひおとしのさせながら、エン小櫻織となりける、エン扱又夏は卯の花の、エン垣根の水にあらひ草、秋になりての其の色は、例も軍に勝色の、紅葉にまがふ錦草、冬は雪氣の空はれて、兜の星の菊の座も、エン皆聲花におとしげの、思ふ敵はうちとりて、エン我名も高く總角の、エンつるきは箱に納をく、弓箭袋を出さずし、ふうき御代となりけるうれし、

○おふなをし

「此齡久しき、サン ヲキ千歳の春に、サン君の盃くみてとる、サン」この君は高砂、サン ヲキ尾上の松よ我は唐崎、サン一つ松サン」此常盤なる松の、みどりも春來れば、サン ヲキ今一しほの色まさる、サン」此我見て久し、サン ヲキ住吉の森岸の姫松、サン幾代經ん、

○さその春

「やんれさその春、花も都にとさめきて、エイ ヲキ長閑かりける霞の衣、袖をつらねて花見の群衆、さめさあへる遊山には、歌や連歌や酒宴に小うた、サン」こころでしげればソリヤ ヲキうきなのたつに、サン」ござれさんにやうの、ヤソリヤ ヲキござれさんじやうの野で、

ん、

○年のよはひ

「年のよはひは、二八斗の兒櫻、ヲキみめは楊貴妃、霧がやつ、サン」春の名残に此花を、ヲキ形見ともなれ散ぬ間に、君をいさめて、いよ花踊、サン」花をちらさで打太鼓、ヲキ心も澄で、エ面白や、サン」嵐山より風ぞ、はげしくて、ヲキ笠に木の葉の散かゝる、サン」いざや戻らんいよ我宿へ、ヲキいざや戻らんいよ我宿へ、花の散ざるその先に、

○白浪

「やんれ白浪の、打や鞆の草川柳、エイ ヲキ水にもまれて根こそ出ける、岸影に花や咲らん、ふしあをへ、エン太鼓の撥やかわ卯月、雨もはやしも五月雨で、頼む汀に田歌の音頭、此拍子を取てはやしなよ、エン勇みて植る面白や、サン」植へく早乙女、ハリ笠かふて着しやふに、笠かふて給はるなら、猶も田をばうよふに、サン」いかに早乙女、ハリ ヲキ四方の山々に、花の咲たを見たるか、サン」實誠見たれば、ヲキこがねのおはなも咲たり、エン扱もくサン」御代は目出度の、穂に穂が咲て色づく、ヲキあさだおくては、イヨエンコノ世の中

ソリヤんれ野でじげる、エンあまりしげればくる、もしれぬ、家路忘る、遊山かな、エイゆふべは、サン」はなと胡蝶はの本阿彌も目利はなりやるまい、ヲキどれが花やら、ヤソライヨエン 胡蝶やらしれぬへ、

○四季

「春は吉野の、ヲキ花散て、サン雲も霞て見あかん、サン」夏はかきほの、ヲキ卯の花や、サン 脚躑躅で見あかん、サン」秋は龍田の、ヲキもみぢ葉や、サン萩や海で見あかん、サン」冬は越路、ヲキ雪降て、サン霞みぞれで見あかん、

○八重菊

「八重菊の、ヲキ花の盛にてりそへて、吹きあかすみすの、籬のおり風、雲井の月も、雲もかほればうつゝなや、鐘も八聲の心知れ、サン」色も常盤にかたらしの、ヲキ松と竹との直ぐなるに、御代は幾久堅の天の戸よりも、出る日の、長閑に照らすあづまうた、

○若の浦

「若の浦、沙やき衣、ヲキ港も近く、波打寄る、沙を汲、寄來る波の、ひまを汲、サン」をりをへて花も櫻川、ヲキ源清き流にうかひ、花すくわん、いざ打寄てすくわ

さいよへ、

○今御代

「今みよを廻りて見れば、ヲキ千とせのかたせにひく小松、イヤ初音ゆかしき山郭公、菊はうつろふ紅葉の、散や霞のさらくくと、又來る春も花盛、

○鹿嶋

「我は田舎の順禮でござる、音に聞へし、イめぐり鈴鹿山、エン ヲキ坂の下なる八乙女も、神樂笛とて、面白や、エンヤヨ、サン」誠やらナ伊勢の二見へ、ヲキ ソリヤみろく御船が着た、イヤサン」艦船には、ナ伊勢もイ春日よ、ソリヤ ヲキ中は鈴鹿の御社、エン吹て登るぞ宮司、神に祈は土山の、エン水口に石部とは、エン草津の前の宿の名よ、エイ我身の上も曇なく、エン鏡の山に近江路の、エン矢し、背の浦に着にける嬉し、社の大に、天竺のサ盤間からそりや十三の小姫がよれまくい、やよれまかばな、たたくもまけかしそりやろくつ、けかよれまくい、の文句あり

○明石

「明石の浦に月さへて、ヲキ波の鞍の調をしめて、打手の音の拍子もよしや、花に寄べの浦のたへ、サン」富士の高根に雪降て、ヲキ田子の浦風寄せ來る、船の波うつ音の拍子もよしや、磯に寄邊の浪枕、

○芳野山邊

「芳野山邊の賤の家に、マキ山風霞のさらりさらり、
ほろと降夜に目が覺、逢ぬはつれない花ごころサン
戀は千尋の底もなや、汐の満干のそなたの心、恨か
ねてはをしほくき、數書く言葉もらすなよ、

○籬の内

「籬の内なるそなたちも、マキなびくもしれ、靡かぬも
しれぬあいたの、文の内見ねば見たし、見れば思ひの
増鏡、移るはつれない花心、

○虫の聲

「虫の聲々よわ夜にます、身は空蟬のから衣、きて
見る人もあらざれば、袖は夜露にしほりつ、
「たまに逢ふさへつれないのふりや、磯打波のよるく、に、夢
に逢夜の枕を待、おどろかす、寢覺に降る雨か霞の音
か、松風のさらりさらり、
ぬ戀に愛身をやつす、身をやつす、

○十二やさん

「十二やさんのマキやれこづまをひけば、あら磯波の
音の高さよ、ひそかにおよれ、若人知れば、さまざま身
も大事、サ「十七八はヤン座敷の餅、芍薬牡丹庭のかざ

サン「そふじやないものつれもなく、此君にこそ頼あ
れ、マキ青柳よりもエ松の雪折 エンヤヨエいつか
と思ひ寝のゆめに、

○都あたり

「都あたりの里々や、伏見深草とま八幡、エイたけた
の里マキいなの小笹のしげれい合しエン分れ行く袖の
數々や、祇園囃子のむらか、うかれ心と諸共に、エン
清水や嵯峨打過て、エン加茂川越る白波の、かゝる詠
はあらし、吉野龍田の花紅葉、散るを思へばかなしく
て、八瀬や小原のいやしきものは、ちんや麝香は持た
ねども、エンにのほふて来るはたきものよ、イヤサン
「四條五條打過て、エイいつしかマキさまにあふ坂の、
關のいわかど踏ならしエイ山田出るきり原を、駒にま
かせて行程に、大津打出の濱よ、山田矢はせの船に乗
る、コンサン「堅田りやうしのソリマキ妻にはいやよ、
月に廿日は沖にすむ、イヤサン「沙うつかいつの、ッ
リマキ朝かよひ、つまかめれそろすよ、磯打波に、エ
かゝる小歌に程もなくエ石山寺を伏拜み、エイ詠めあ
かん志賀の松嬉し、

○秋はなを

り、廿日かぎりかた、いつ迄も、ヤレ散ラであれかし、
今宵はさまの、マキおそいとをきやる、おこらやれさ
まよ、さしやうもかく、それでもせかは、さめさやの
かたなで、やれさまのお手うち、

○一夜ふた夜

「一夜二夜は忍び寐に、マキみよにもなればすみよし、
松はねごとにあらはる、
「とても浮名がたつなら
ば、マキまた咲世にはいつまで、さかて暮そふかうら
めしや、

○都の君

「我は田舎の者なるが、エン都の君もつれなくてエイウ
きなをマキながす龍田川、からくれなゐの紅葉ばに、
袖の泪はくらべこし、エイふりわけ神の數々に、思
ひ亂れて我ごとく、エイ雲井にもへて飛登、昔の歌に
も、サン「音もせで、マキ思ひにもゆる登こそ、エイサン
「なく虫よりもマキあはれとは、情の深き言の葉を、知
らで過行君さまの、エイむく程のかなしさは、千度
百度かきあやらしエイ其水ぐきのかいもなく、コンサン
「ふりのよい様に、ヤレ
ヤレ情のないはマキさへ行月にエン懸るむら雲、イヤ

サン「秋はなをを、夕間暮こそたいならぬエイマキお
ぎのうは風打そよぎエイ雲井に渡るかりがね、こへを
よさむにつぐるかや、賤が伏屋にうつきぬた、野邊に
數有虫の音、聞は淋しさまさりける、萬の上葉の、サン
「白露もマキ落つこぼれつ亂れつ、秋の夕べはるも
しらぬ、まして千草の花すり衣、月の光りは猶清し、
雲間もなしエイ折からサン「面白そろよ、またの空寝
をはかる笛の音に、寄り来るマキ庭は紅葉の下にす
む、

○忍び来て

「忍び来てヒヤマキ逢はで歸らむ其夜半の、寢られぬ
ものは秋風に、コン戻れば君に心を盡せしが、やみに
来てマキ夜半の煙の、月影に、廿日の月の入る跡にも
どれば君に心を盡しか、

○ながかれ

「ながかれとマキ思ふ其夜はながからで、いらぬさげ
をのふさのながさよ、サン「我國のマキ芝のいほり
もなつかしや、都なれども旅はういもの、

○石原

「爰は石原よなマキ小石原よな、心得てさせ長刀サン

「今宵さんじやうのワキ橋に寝て、笠をとられた川風に、」

○源氏(下巻げんじ巻)〇

「びんじなりやこそぬれてもかよひ、時雨いとわぬ、志賀の松はなりはないわへ、サン」浅黄小袖にワキ小づまに鹿の子、扱もびんじのなりふりは、なりはないわゑ、サン」黒小袖にワキ黒羅紗御羽織、扱もびんじのなりふりは、なりはないわへ、」

○蘆の家

「蘆の家のワキ笠やまどふあまやたく、思ひもこひも、夜るはもへつ、サン」思ふことワキ岩間にまきし松のたね、千代とちぎらん今ぞ嬉しき、」

○さきは三日月

「さきはミカワキ三日月よい、はかり、せめて一夜は有明に、サン」月はうらやワキうらめし闇ならよかる、おてをひきあふてぬめろふもの、」

○玉かづら

「思ひかけたよ玉かづら、ワキはのめく袖のうつりがは、サン」忍び車のくるくとワキ寄る邊のほたる、みだれ亂る、我心、サン」さまにもうた匂ひのふくさ、」

チヤ手綱、駒がいさめばいくちよ、しんぞそこからいくさへ、サン」戀の、島原ワキ人目しのは、伊達な羽織にくけ紐、シヨシヨ色に、心ひかれてたんどろ、しんぞそこからいくさへ、」

○かごしき

「よもの、ンかごしまへヤレワキ身共が殿子はやらぬよの、聞ばかごしまは女郎所、サン」夫でも行めすならワキやれせんなくせひとは留ぬよの、爰で身共にはひまたもれ、サン」隙をヤレたもるならワキやれ今日こにてたもれよの、明日はくろ日で日がわるひ、サン」殿はやれとりめすワキヤレ、つまた下りよの、明けて三月菊つむころ、サン」それまでは待たまいよの、二月桜葉のめぐむころ、サン」さつまつまヤレ三ヶ國、ワキヤレさめがふらばよの、しづが思ひと思しめせ、サン」我はヤレ行、ワキヤレ薩摩の山えよの、跡に花置く枝折かな、サン」枝もヤレ折るまひワキヤレ散らせもしよまいよの、早くこぎれよ散らぬまに、」

○お江戸養

「お江戸そだちかの、ワキお色が黒ひ、麻の布ならさらそふもの、サン」源氏袂衣の、ワキ伊勢物語、數の

「玉づきにかへりもなくて、ワキ數ならぬ、身とも思はじはしかの、うきふしやすき、よにすめる月のうら船こぎつれて、波のなみの寄るよるいさやあそばん、サン」くみてしる情も深き瀧つせの、ワキ水上清き流れの水を、むすぶ白糸、くる秋ごとの、たのしむ民の、ゆたかなる世のためしかな、」

○土手の道

「土手の道大門をで、かいて衆、ワキ江戸町揚屋町知せ、ちつと茶屋までよらしやんせ、いや、はつとべんぎち、されどきのどくなれどもけふは、初の客たち連れ衆もござる、サン」またの寄るせをよるせを、まつまつ斗といふ文を、ワキかぶる持て来るがつてんか、せいもんうそではない、のなはいはさ、そこで腹たつかいて衆、頭巾の持て来い、あみ笠いらぬは、ワイヤサわきへとほふといわれた、せんよまんよ、おくりおくりチイサかへるさばとのさいなして、情しらすはさすきぬ斗り、いこい、」

○三谷かよひ

「さんやまんと通ひの、ワキ道を急ば、馬に鞍置櫻川ニ

しよさつに戀の文、サン」龍田川ではの、ワキ紅葉をながす、我は君ゆへ名を流す、サン」扱もやさしなの、ワキ笠の虫は、しのぶ其夜は有明に、」

○さいもん

「そまはらい清め奉る、ワキさて、其日のしやうぞくは、えんこうそびらにうさかたびらを召されつ、チヤ、チヤ上へには四條五條のけさをヤン、ちやくしシヤ、上へには四條五條のけさをヤン、ちやくしとおわします、前ひき三寸には釋迦にだん、達磨のおたちある、サン」て、ほうよりさんだいは、よりさんだ、權じやの神たちのじちもない、小佛たちがた、りをなしやるとも、なん、なりませすまい、御祈念とぞうやまつてサン」朔行は山ノ宿新吉原のたからには、輕尻馬にかくれ笥籠、すは新町に揚屋町、淨橋こむろにやつはしる、サン」立出て下谷筋、東叡山の小櫻も、金龍山のとうれんぼ、殊にめいしよしけるは、この小ゑい、のぼんさまの長羽織、このけん、衆、されど孔子の、たまはく、よねんを念する友からは、必悪所へひきやれんと、たまはく、」

○丹後但馬

「たんごヤレ但馬の、ワキたんごたじまのおりや、た

のさぶらぶら、ヨハサン「それでヤレ来てさぶらぶらヤサ
マキそれさぶらぶら妻故に、ヨハサン「妻をヤレたもれ
のヤマキ妻をたもれの山中薬師、サン「七里ヤレ海道に
ヤサマ マキ七里海道にない妻をよの、

○おちよ〜

「おちよ〜とおとして置て、マキ壁に葛の葉のわき
心、サン「いつかいつまで籠枕たき、マキ何を便りにう
か〜と、サン「野越山越里打過て、マキ来るは誰故そ
さまゆへ、サン「今朝の別に空なく鳥の、聲のにくさを
らつ忘りよふ、

○浮世ぬめり

「浮世ぬめりのマキ伊達染小袖、サン「裾に牡丹の花も
散る、サン「見れば見渡すマキ竿さしやとく、サン「な
せにといかぬマキ サンサ我が戀は、サン「破れ菅笠マキ
しめ緒がなくて、サン「更に着もせマキぬサンサ捨ても
せず、サン「梅は匂ひよマキ櫻は花よ、サン「人はみめよ
りマキリサンサたい心、サン「今度ござらばマキ持来てた
もれ、サン「伊豆の山マキのなきの葉を、

○おちよ

「我は酒屋のマキ酒ばやし、サン「中をつれてかどに立、

サン「我をしのばマキ葦からしのへ、サン「笹をならさ
でマキ竹わけて、サン「しらで硯のマキそばに寝て、サン
「身をも染たよマキ墨染に、サン「我はゆく〜マキの
つまの山へ、サン「跡に花置マキ枝をるな、サン「枝も折
るまいマキ散らせもしよまい、サン「早くござれよマキ
散らぬまに、

○龍田川邊

「龍田川邊に船留て、マキ笠をとまを敷寝の楯枕サン
「伽羅のかほりを焼しめて、マキ君のきみの寝まき
の白小袖、サン「浮世清水の宿に寝てマキゆめも〜結
ばで波枕、サン「吉野山邊を分行けばマキ花にはなに
名残をしまる、サン「龍田川邊をわけ行ばマキ顔にか
ほに紅葉の散かゝる、

○長崎

「長崎の鳥はソリヤ マキ時しらぬ鳥ぞソリヤ サン「また
宵なが にソリヤマキうたふてソリヤ マキさまをもどい
たしゆらいなサン「あまかはの池をソリヤ マキ千尋と
おしやるソリヤ サン「それよりもソリヤ マキ深ひソリヤ
しづか思ひさしゆらいな、サン「長崎の女郎はソリヤ
マキ心よいに女郎でソリヤ サン「おゝ盃をソリヤもろふ

てソリヤ マキりうきうでかたるさしゆらいな、サン「か
のさまのものにやんまからくさつて、ソリヤサン

「かやせやんまとソリヤ マキよはソリヤ飛で懸るさ
しゆらいなソリヤ サン「長崎と琉球かソリヤかち地な
らよかるソリヤ サン「馬に鞍マキ置てソリヤいたり来り
しよしゆらいな、

○なれ〜

「なれ〜 茄子ソリヤ マキせどの家の茄子ソリヤなら
ねばサン「よめのマキあたゝ名のたつにヤコロン サン
「さよふけがたにソリヤ マキきぬたをうてばソリヤ月
見るサン「度ニヤコロンマキ吾妻あつまこひしやのヤコロン
サン「さやうからおこけソリヤ マキさかいからかけこ
ソリヤうまねど、サン「たまるヤコロン月になくおこけ
ヤコロン サン「吉野山をソリヤ マキ雪かと思ればソリヤ
雪ではサン「あらで花のふぶきじやの、

○梅の古木

「梅の古木にマキクニなせ駒つなぐへ、駒がいさめば花
も散るゑ、サン「人のゆいソキなした山時雨ゑ、くも
りなければ晴れてゆくゑ、サン「たごたんマキしよよ
こたこておはるへ、あられ中村はたごまざりゑ、サン

「野菊しら菊岩間の躑躅ゑ、さまを見るめは糸すすき
へ、

○富士の裾野

「富士のマキ裾野のひとと薄、サン「いつかマキ穂
に出て亂れあをゑ、サン「さまがマキこぬとて枕をなげ
ぞマキなげぞ枕にとがもなよへ、

○花笠踊

「そこなやマキ花笠ふりあげて、通れすこしはさ、お顔
が見とふござるとさ、サン「沖にやマキ見ゆるは丸屋が
船か、丸にさやの字の帆が見ゆるとさ、サン「若衆や
マキしのぶならお寺かたへ忍のへ、菊の下葉で夜を明
すとさ、サン「そなたやマキ百までおりやは九十九ま
で、ともにばる白髪のはゆるまでとさ、

○さんざらり

「花になりたやサンサマリ マキ牡丹の花にサンサマリ」舟
になりたやサンサマリ マキ妻よび船にサンサマリさてさ
らり、「松になりたやサンサマリ マキ千とせの松にサン
サマリさてさらり、「鳥になりたやサンサマリ マキ孔雀
の鳥にサンサマリさてさらり、

○淺草(◎下谷所蔵東金下界同シ)

「浅草のワキ出茶屋のお花よい女郎、サン、花ならばワキ一枝折てとろふものッロ、サン」行徳はワキ入はも出はもよけれどッロ、サン」皆人がワキ鹽場さまがやつるる、ッロ、サン」市川の女郎衆はワキお手があれそろッロ、サン」とふりかなワキ市川は繩の出所、サン」あれみさい、ワキ筑波の山の横雲、サン」横雲の下こそ我等が親國、サン」東金のワキ町家にかけて塗り笠、サン」あの笠をワキ我が子に着せて見たいよッロ、

○澤邊

「常世が佐野のワキ源太じやないか、おために焼ばヤア伽羅か八の木か、サン、向の山でワキさくけつむ女郎を、しめたよ、お手をさくけ諸共に、サン」今宵はきたがワキ明日の夜はしれぬ、待なよさまよヤア心盡しにへ、サン」向の森になにやらふける、山郭公初音ゆかしよへ、

○上様師(下巻所載縁下節ト異同)

エンエン」目出たのな、めでたのな、嬉し嬉し目出たのナン君様、あつたものではないわさてのホ、ン、若松よさ、ワキ枝も榮る葉もしげる、さまはてんとく「牡丹しやくやくじやエンエン」きりよのな、きりよのな、

○水戸さがら

「あかぬエイサンあかぬ古郷をふり捨て、サン」それ振捨るサン」花のエイサンワキ花のお江戸でつま定むサン

ソレそれ妻もてばへ、サン」今はエイサンワキ今は古郷の風もいやサンソレ風もいやへ、サン」お江戸、エイサンワキお江戸出てから芝口でサンソレ夫芝口でるサン」雨もエイサン雨もふらぬに袖しぼる、サンソレ夫袖しぼるへ、サン知らでエイサン、ワキしらで硯のそばに寐てエイサン夫そばに寐へサン身をもエイサン、ワキ身をも染たよ黒染に、サンソレ夫黒染にへ、サン」我はエイサン我は酒やの酒ばやし、サンソレそれ酒ばやしへ、サン」中をエイサン、ワキ中を結われてかどにたつサンソレ夫かどにたつへ、

○唐人うた

「あちやあわへらんやしやんでワキあちやあわへらんやしやんで、にもしゆんでこもてやそ、かんへそひきおんとろふ、らんちへあそぶサン」さんとうちんなんるりうつうなんへワキさんとうちんなんへりうつうなんへ、きつらんでわんやしやんで、ちんぶんかんちんらあへ、さんりやうおしいしんでちりやういしんで、しんぶんねふんね、ひやんろいぢぶてうでねきやめらんわあきやわくわ、きやんでいきやんすいあき、サン」ていざいざんよあそんでワキていざん

竹のたけのきりよのなん君様、あつたものではないわさての、ホ、ン、く「留り水さワキすます濁らす出ず入らず、さまはてんとく」牡丹芍薬じやエン、サン」なげだにななけだにな、扇あふぎなけだになん君様、あつたものではないわさての、ほんくといたかさワキ折め要に戀のちわふみ、さまはてんとく「牡丹しやくやくじやエン」さん條のな三條のな、今宵こよひ三條のなんきみ様、あつたものではないわさての、ホ、ン、く橋に寐てさワキ笠をとられた川風に、さまはてんとく「牡丹芍薬じやエン」あじまかな、あじまかな花のあじまかなん君さま、あつたものではないわさての、ホ、ン、くいなならはるワキたぐりよせうもの身が宿へ、さまはてんとく「牡丹しやくやくじや、エン」渡なかになとなかに、沖のおきの渡中なん君さま、あつたものではないわさての、ホ、ン、く「茶や建さワキ登り下りの船をまつ、さまはてんとく」牡丹しやくやくじや、

よるそゑんてりうづのつま、こんひくく「てやそ、りんつく」やくりんつ、はつかくてんによりんやりさんよ、

○ちよき

「ちよきや、チヨキヤ、ワキちよきや、ちよきや、きりきりや、キリくきりともなまなにもよぶサン」濱サンチン千鳥がよせくるケルコンくく「なみにゆられもまれてたんとりとんとろ、とろもんちにはねられてホ、たんくつるやらコンサン」あたんヤンくた、ちかの、きいごいごん、このしんきをソリヤたちソレイヨエ、コンエのちはまたノホンホ、ホンむらホホンヤホホサンササヤ、ちどりへ、サン」さまに逢夜の逢夜はワキまれに逢夜の、月に風はとんと氣の毒うらめし、しんきやつれたやサン」我が身はたひとへにワキ吹来る、コンコンく「梢の嵐か松吹風かや、さあとおとづれつまどに音するはカカ禿出て見よ、サン」さまじやござらぬゴザラマノンキキコイワキソリヤ風が、ヤエイロエ、ササ吹たよホ、うらエン、ソリヤホ、ホ、ン、めしよへ、サン」倍もよかれやワキきやうきよかれや、若衆はふりよくつやよく色白く、お顔の多くほや戀の種、サン」め

もとのしほかヤレはら〜こぼれかゝらば猶もよふ
 ごさんせう、さらりとしよてに猶も心コロトコヤン
 「すがたなりふりよければ、ンキキコイコヨキソリヤ
 聲もハエイロコノエ言葉もホホシナホ、ソリヤコ
 ノヤかにへ、サン」扱もめいよな角力じやマキひの下開
 山相撲の大寄、とつたる其手はぬけ身に引寄せ、サン
 「とめけそりじやかけそりじやマキヤくる〜」
 のくるまざりカ、かけおいなげ、サン」しぎの羽がへし
 マキかもの入れ首ホ、みつ引にへ、サン」京で一條下り
 てマキ二條堀川三條の河原でノ十六ノク七八なる振袖
 ふりよし伊達して、サン」小づまをちくとかいか、げ
 てハリ布サヨくりクリ〜あげてさらす、サン」越後布な
 らひろマキとのを待夜は力おひかへサン」かくしや柱
 じやマキしのぶ小部屋のつま戸のかきがね、しやんと
 かけたる柱は八角、サン」じやマキヤしか〜じや、
 かくのんきキ、サン」檜木はかしき中じやよ、かどのな
 いこそそへよければ、

○たんへい

「めでたのヤレヤン若松マキ枝も、ヤレイサン」榮る、ハエイ
 ノ葉もマハヨしげる「川じや、〜ヤレ是からしもはこ

いじやくるり〜まき揚る、渡ればしよう〜し
 よろ〜小川じや、ホイ」下はイヤよどがはのヤレそ
 こマキ深きフカキ思ひは、おれイヨコノひとりな、サン」て
 んちたいひの風ふかば、地には黄金の花もさくホイホ
 イうれしヨめでたのヤレ〜若松マキ枝も榮る葉も
 シイヨいしげる、サン」山〜谷〜
 底のなホイホイ芝のヤレいほりもヤレヤレなつかしマキ
 都なれども旅はアイヨイ、ういよへ、サン」かいたり、アイ
 ノホホイ是かコノいとまのノヤレヤレふみマキ手には、ハ
 イルマ〜とるまい、サナマナフイ、なまなかに、サン」一の谷の松
 のソノソノ、その木の下葉になイ〜ひとりヨノ順禮に
 アツ、足をアツ、やらいでつれを、アイヨイまつ、サン」い
 やでそろよホイホイ二十、ノ四五の六七まではヤレヤレ
 子はマキ花のハナノ盛りを子でや、アイヨイ、やつ、サン
 「なるかい、ホイホイナならぬか、ヤレヤレ、山マキなると、ヤレ
 ノ思へば、コノコノ、くたの、マノもしや、サン」山王の櫻の
 花に今を盛りにさきやみだれたる、その木のした葉
 にホイホイひとり、コノおなご順禮が、ヤレあしマシ〜や
 らいでつれ、チ、ハ、アをまつ、サン」み山のイヤミヤ
 奥なる太木じやがサもとはくちきでありめかほとつ

いたが、すへではつたがざり〜とまいたがサもしも
 風ふかばよなかに風にヨコノしなをか、ヤレたへマキ
 風にヤレイしなをかむつ折レに、

○茶室踊

「場をならさいのハマキならさぬばおはやサ踊はあり
 や〜茶室やさあ、サン」茶室やさといふておいて、一
 ツくどこふ、やれ舞たるは孔雀雲井に鶴の舞、マキエイ
 ミ子殿のお神樂にしやん〜〜よ八丁鐘に風
 車、小若衆たい頭に車引に大車、四枚かたに萬歳、サン
 「淀の川瀬の法華經の水車マキ誰を待つやらくるり〜
 るり〜〜く〜るり、チヤ踊はありや〜踊はありや
 ありや茶室やサア、サン」茶室やさといふてをいて今
 一ツくどこふ、音に聞き富士山見れば、三國一の名山
 でマキ高ふてまろふて、茶の白雪消へあらで煙り煙
 り、サン」聞ば麓に下りて、サガリテ麓に〜下りて、
 三保の松原清見寺ありや〜踊はありや〜茶室や
 サ、サン」茶室やさといふて置て、またもくどこふエイ
 エイ、夏はよけれどいやなものにはな〜、一にげ
 ち殿、毛蟲どのにひげ百足殿、藪の内なるくちなわ
 殿、とかげ殿、ほりホイヤ、サン」堀端のいもり殿、ぢし

んマキど〜雷、とんとやのいや〜くわばら臍かく
 セソコヤ〜サン」沖の渡中にかけて置たるそも船
 ヤキ金襴の幕をうち、紅の帆を懸て、サン」是こそ君の
 サツトコサ、ア踊船にしよふ、御坐船にしよふ、サハア、サン」松
 の下り枝に懸て置たる塗り笠マキ金らんの縁をとり、
 紅ひの緒を附て、サン」是こそ君のサツトコ、踊り笠にし
 よ、花笠にしよふ、サハア、サン」扱も目出たの若松さま
 よさマキ枝も榮る葉もしげる、アツ〜踊はアツ〜
 茶室やサ、

○白玉

「扱白玉と申せしは、いふにやさしき伊達マキ誰に
 見しよとて咲梅の、色の加賀笠、サン」ふか〜と着つ
 れて、つれて行く時は、知る人ぞ知る、白瀧も音羽も
 爰かや、マキ名取寺、むれつ〜遊ぶ京童、あふささるさ
 のしげれをば、サン」枝より落る春風に、空にしられぬ
 雪なれや、マキ友待貌の山櫻、サン」有難や大慈の誓違
 はすも、今此娑婆に慈顯して、あふぐも愚かや清水
 の、たへぬ詠は面白や、

○忠度

「花思ふ人すつる身を、マキ間路にまよふ鞍馬おり、音

になき渡る加茂川や、未だ逢瀬と聞からに、同じ蓮の蓮臺に、父諸共にいなり山、松にも花は藤の森、七瀬の川も八瀬渡る、流サシ涼しき石清水、實や浮世のはかなくも、一門の集りに、マキウきには神もなきものを、心づくしによませられしは、うらめしや、サン「めては山崎いせきとのいん、マキ實や賊に忠度は、頃は壽永の秋の頃、心の花か亂菊の、きつね川より引返し、サン「俊成の家に引マキ日比手馴し歌枕、まゐらせあげさせ給ふにや、昔ながらの山櫻、讀人しらすとかれしは、草の影なる父上も、さこそサン「本意なくおぼすらん、書集めたる芥田川、篋の小篋の一ふしも、ねられぬまゝにたどり行、月も宿かるこやの池、しばしと頼む須磨の浦、

○風くどき

「まつなら酒のヘマキなら酒ならば酔ふたさア、いづばいなサン「なら酒ならばエイナさらば名酒を、四季になぞらへ咄して見ませう、春は先咲く梅の酒とよ、三千年に一度に花咲實もなる、西王母が桃酒、せうらくかしやうの風吹は、花ふりとも名付たり、夏は涼しきかくの池とや、清水江川にてみづあわもり、秋はさ

やけき、月と争ふ白酒、せうと、いん芥酒、博多のナンケンあだものではないわさてのホン練酒はマキ何とねるやらとろりトトロリトとねる程にアコノコノコノアよふたさ、サン「コノよふたさの懸聲、菊の酒にも咄しがござるの、唐の事かとよ、しうのほく王の御時、慈童といし其人、てうあいの餘りに、枕を越へしとがにより、てつけん山へ流され、菊の園生にいよ住み給ふ、法華經の普門品の二の句をさづかり、菊の裏葉に書付給ふ、雨露の懸る音は、はら／＼／＼したる、そのした／＼りが留りて、コノ不老酒となりて、命ながへの菊の酒とや、我朝に渡りて加賀の名物、きて見る我等はよふたさ、あゝ一盃な、一盃ならば香をもふさふ、みかさ／＼と三度呼と、みかさでもせでちんたのわせた、ちんたなにせうそつちでのめ、しやんとさせみかさ、サン「ヤアしやんとしたこそみかさはよけれ、マキ除りちんたのしたるや、しやんとさせみかさ、さて／＼い／＼や／＼ヤア、サン「あいをしようとはそりやきま／＼よふな、どふした酒なヒンヤイ人にさすならコノキヤラコノキヤラ、したにをけ、よふたいやさそつちでせ、これ／＼おさへたコノサン「おさへたか

せうなら亭主やじが内なる香は何じや、マキ山鳥々々サン「山鳥ならばそこらでしめろ、マキまかせておけよコフ、サン「まかせがせうなら冬の氣はまたみぞれ、電に荒き酒をば、ひるの酒に暖め、酒にしやうちうすきたら、伊丹となら酒桑酒くわへて味淋酒忍冬酒のまじわりは蒲萄酒に究ると、げこも聲を揃へてとふイヤイヤやんと一同に寶命酒、四季をあさりといははおさめて、こゝでたるの口をさり／＼しやんとねぢあけ、新酒は内にか、マキいや留守じやサン「そちでせマキしん酒でしたをなやいた、サア、サン「したをなやさばさしわれふるもふた酒のるマキわれふる酒のよふたさア、一ばいな、サン「みよもにこらんすみ酒や、マキ御代も濁らん澄酒や、花のお江戸の名酒かな、

○月見

「又も御ざるよ我宿のエン垣根や春を隔つらんエン夏きにけりマキ見ゆる花もエン盛を毎か過はて、エイはや夢のま葉月なかばになりぬれば、心も友にさそはれて、海士の小船に打乗てエイ川口面に出ぬるエン所もせまき月見船、數をしられぬ人なれや、謠小歌に淨瑠璃エン三味線小鼓打ならしエンヤコノ、サン「顔にか

かりし亂れ髪よナサンマキいつにわすりよふかおもかげをエン酒盛半と見へぬれば、數ならぬ身をも恨みつツエン小船の内を見てあれば、年よはひをもうそう、二八斗と打見へて、花のやうなる若衆様エンそも誰人と尋ねれば、エイお名をばノサテ得もうすまい、しやんとさせられたまらせぬエンマキ花のお顔をつく／＼とエン目もはなされずながむれば、エイ「あの君様はエイ伊勢の濱養育マキめもとのしほが、エイソヤこぼれ懸るよエン今宵の月の御利生にて、まだまだ逢ふこと有べきか、今の思ひ、雲にかけ橋霞に千鳥、空飛ぶ鳥も手づかみに及ぬ、

○花揃

「三四季をり咲出る、花の其數尋ぬるにエン、梅花と咲ば天神のエン惜せ給ふは、梅は匂ひの年ふりて、すめる民とて豊、牡丹芍薬百合の花、花に心は撫子の、切沉丁花は枯ても匂ひ有エン人にはなれて菊の花、毎迄もとまりあれよ、さのみ急ぎ給ふなよエン花より外に心とめエン慰時は小歌にてコノサン「朝起きて髪結さげてやの、花つめばサン「花つめば若衆が招くやの、花もたまらぬエン「マキせんよ椿に岩つゝじ、水にことを

や杜若池の汀に八ッ橋何をめぐる女郎花コノサン誰
もけしッキ花色衣も程もなくエン人の心のかはるつら
さよ、花にさんしの歌のやく、花はとこれよりくれな
ひぬ、く、しくし兼たる紫の、所々やむら消て、庭の
村葉ぎはにうらがれてエン我身も人や知るらん 薨の
エン空よ、のぼる藤の花エン色こそ是は山吹の、むねの
蓮華は木蓮エン手鞠の花に凌霄花やエンそふよの花を
よそへつ、エン何れ花は水仙花コノ花にやあらん、

○道中くとき

「やんれ玉露の、道はイ満たる御代なれやエン曇らん
月の都より、花のお江戸の道づすからッキエン夜通れ
ども豈行自由自在に目出たふてエン名所を詠め古跡
を感じ、馬士に小歌をうたはせ、遊さんながらの道
とかや、泊々は馬繼の、京を立出よき道づれにコノ逢
坂のサン」關の清水で影見れば、ッキまごや引らん乗掛
の、馬は大津の浦を過エン草津に宿を借寐してしかと
一夜は石部の宿、里はサン」小里で山よせなれど、馬士
のッキ聲する水口をエン駒に打乗土山を、越る鈴鹿の
坂の下、關の地藏と伏拜みエン代は萬年の船山を、誰
が見てさへかたそうな、ありがたしやうの石薬師、し

ばし宿をばかりそめの、人の情にほだされて、五日は
た、ぬ四日市、天氣能ければ舟に乗エイ桑名の渡し、
都の歌ぞやろ嬉し、サン名所々々は宮につく、エン悉も
此神は、實や熱田の明神なれば、信あれば必富貴榮花
をイなるみかた、花のちりうの宿を過、人に心は關崎
宿に入ぬればイヤサン」馬かたがとろりくと馬追懸
てエンッキ花紫の藤川や、更行夜はもしらぐくと、赤坂
過てごゆの宿、笠をかたむけ田歌を上げてエイ早乙女の
植しき苗はいつの間にエンくろみてはらも吉田かな
エン名はふた川と聞ナ見ゆるふちせに有やなし、誰が
おしへて知らすがや、エンいまりきなり水に荒井川
エン舞坂通れば面白や、サン」さんざ濱松のッキ宿をす
ぐれば天龍川、エン渡しの舟に打乗てたんだおせく
おしてやれ、おして出船のノンエンコノ葉もしげる」お
免はづかしや、人のしな、爰は見附の宿とかや、エン風
吹くろ井を過行ば、このきし部に、ッキ波は掛川や、日
坂の巖餅ヤアねらん金谷の宿につく、かはる淵瀬に
大井川を、たれをり染て島田と名をば付つらん、松に
花咲藤枝や日敷積らば岡部の宿、そこで狸の腹被、
コノ拍子をとりにうつのやエンうつの山邊を過行ば、

かうな馬かたくつのねや、エンまりこの宿やたか、ら
ん、旅をするがの府中につかは、あたりに多き名所か
なコノまじりを過て行程に、おわつかさづに寐つ起
つ、すまは都か山井かんばらをッキヤ、富士の山を
ヤッキ富士の山は後にござるエンッキ三保の松原前に
見て、いつも遊山をする人は、エンよわ、吉原やはら
の宿エンぬまづと聞ばいにしへの、あやめまこもの御
里かやエン雲間もいつの月か、今宵三島の宿に
着く、御代をめでたふいつ迄もコノ治るサン」箱根のか
しの木坂をエンッキ越れば御江戸は程近や、あさの小
田原打過て、山は後に大磯、宿を過れば平塚やエン藤
澤戸塚を急ぎつ、道はいか程がやにつく、すいりを
ならし筆をそへ、エンまたいとけなき子供等が、いろ
はをかき流す宿の名や、かんながわエンかわさき品川
打過て、御代は萬年末代のエンお江戸に早く着にける
嬉し、

○大黒舞(御船唄留巻下巻)

「徳若に御萬歳とよヤ君も豊に御座すッキ新玉の年わ
かやきく、千代の春、上の清ければ、流れの末も濁
らで、民はたのもし、戸さ、ぬ御代の印かや、桐

に鳳凰舞遊ぶ、誠に目出たうさふらいける、サン」やん
らめでたやヤッキたのしやッキ花のお江戸の町々を見
れば、にぎめいた春めいた、棟に棟をならべて、かど
にかど松をし建、竹と松とのたけくらべ、人の笑顔も
にこくと、にぎめいて羽子板は小娘、弓矢破魔は殿
子よ、代繼は家の若殿よ、恵方参りの序でサン」花のお
江戸の名所々々をかぞへて、今ぞみよしの、ッキ里も
春めきて鶯の空に霞が關なれや、サン」夢に見てさへ
もの、よきにッキまして見初る富士見坂、あのよいな
りを筆とりて、寫るにして隅田川、サン」實に五文字や
七文字に、業平塚のやさ人をサン」武藏野に、忍ぶ
が岡と聞からは、誰白糸の瀧の水ッキ日は照りまさる
浅茅が原、なりよしふりよし色つれを、さそふ船路の
乗初め、誠にめでたふさふらける、サン」後の月見に
洗ぬ芋をッキ肌がわるいと名たて、たもるな、都女郎
衆の、きぬ、かづきサキねかつぎ、サン」誰か浅
草あさいとおやする、ッキさこそ深川ふかうござる
シヨクリそれかしやうかませうか思ひく、や、サン」川
竹の其道急ぐ足はやめ、ッキはや椎の木や三圍の漕げ
漕げ御船貳挺立三挺立をせトッコイ左の方は駒形よ、

サシ日本照れくッキ色里曇れ、照れば女郎衆もお色
が黒む、鏡が池に俤を移す斗や衣紋坂、こざつたッ
イ當年の恵方より、うはき太鼓を先にたて、とんてき
大臣ござつた、誠にはうはきにさふらいける、此君の
ふには、いちにいちのおよせで、に、二あがり
に、三に盃おつとりて、サシ幾夜のめどさのみあかぬ
ッキ扱もく面白や、大黒舞とはやしいた、實に治る
る御代ぞ目出たけれ、

此一冊は文化十三年三月十五日寫竟

原本官庫 萬年橋竹本俵人組

文政三年庚辰五月二十五日借人寫

蜀山人

一校畢

御船唄留卷中

○一番かふてい(上巻所載下同)

○二番龍島

サシ西の國にて名所舊跡尋ぬるに、音に聞えし龍島
の景を申さば、ッキ東表には何々や、シ櫻島御泉水に
は嶽が島、扱寺々を詠むれば、兒と若衆と職に手をか
け、むめをはんじて香聞し給得ば、長老達はまこと連
歌に交遊ばすと見へてあり、夕部になれば寺々のい
や、シ鐘の響にッキ花壇の花も、今朝吹く嵐にちり
をもせいで、同じく惜め、春の氣色で面白や、南に内
海、沖に小さき艇小舟、ほのかに見ゆるは、きやうさ
んこんきようへにたいしてふつくしや、うしにはひ
やのかねをも、かくの船にて通ふらん、月打出る島も
なく、いや夜はほのくとあけゆけば、渚に小舟數多
見へしは、湖落かしよの風吹ば、汀に寄れば物の上手
が、五色の糸でさつと繋いだは、夏の景色で面白や、
西を遙に詠れば、はやけん風、四方の梢も色付て、植
し早苗は、いつの間にかはらりとほに出で、秋の景

色で面白や、北を遙に詠れば、かふせき河の流、入江
の洲の崎の、濱の眞砂も雪かと思へし、冬の氣色で面
白や、うれし、

○三番歌人

サシ面白の、人の遊びに盡せぬッキものは歌の道
い、シ千早振ッキ神のみことの昔より、年は積れど
老もせぬ、和歌の道こそ目出度けれ、其後諸國諸神諸
佛のこけの道とて、素盞鳴尊出雲に宮造なされし時
より、世間の衆生にくわんもんの見せしめ給ふ、佛法
繁昌の御代なれば、かゝる目出度御代なれば、ないし
夫婦のかたらひのふちうなすこそ目出度けれ、和歌
の道まで三十一字に定めをく、數多歌人の其なちへ
と心は世にすぐれ、浪は明石の浦による、浪走る船、
三十一字のこのよみてりやうしと筆を持ち、柿、本
なる人丸や、天智天皇秋は龍田の葉をかりし、木々の
梢も紅葉して、色こく見ゆる山邊の赤人、阿部の仲丸
藤原や、貞ゆき忠岑兼輔は、歌の聖人につらね、小野
の小町に伊勢式部、紫式部心ひとしき赤染の、やれ右
衛門まさる丸大夫、曾根の好忠平重行平兼盛、うじの
喜撰にさんぎかふ、其外昔あまた歌人の言の葉を、今

に傳へて在原や、中將康秀歌の上手なり、末の代まで
も目出度は、詩歌管絃連歌俳諧和歌の道、いつもみう
ちはみちくして、酒宴たいしゆ、しげれ松山さいんと
うとふ小うたは面白や、このまことに、

○四番相撲

サシ抑も當代は相撲の其名を名所によそへ、ッキ四
季をまなぶ面白や、ともはるこれにせいよ、牡丹小
櫻や、空雪登る白藤や、こ芝邑も若之助、夏は涼しき
池の汀、こせきはやふねあまの浮船、唐糸で繋ぎとめ
たよ金碇、流れをとむるせきの早川、こやなぎにを車
こ車、かけてまわるは水車、簾のをい風とめな玉簾、
秋は稻妻、雲の絶間に七夕の、夢の契はまぼろしの、
ゑいやよゑいやこの、シ村雨ふらは、ッキいと戀
ひしきみの島や、冬は烈しき谷風が、吹ば岸うつ浪之
助、片男波にはあひつき、としはつもれど十七に、君
に一夜はありあけの、思ひつよき丸山や、たていしう
らいしねつてんもん、ゑんもんによしやつたともへ、
なをも名所は尾上唐まつ、高松にきりんもまくや、峯
の志賀にさいなみ、唐崎の一ッ松こそ名所なれした
に、

○五番上野

「我は田舎の者なるが、花のお江戸の上野ツク花の新御山、常所権現さまのや御建なされ、祝ひかしづき奉り、これへ参らぬ人はなし、お前に参りて鯛口で、てうと打ならし、心静かに伏拜む、また立寄て詠、七寶しやうこんのまき柱、玉の臺の玉籠、異香薫じて空に満ち、有難しとも中々に、申斗はなかりけり、右手にまはり、護摩堂にもさしかり、居垣鳥居の其中に、梅と櫻を植交、さても見事ややら見事、五重の塔をめてのこわきに打詠、東に阿彌陀釋迦堂、心斗と伏拜、下向どうにもおもひけば、ゑいやよゑいやこの、
 シ「祇園清水、筑波の嵐に、紅葉櫻もちりく、ゑいやよゑいや、ツク西を遙に見おるせば、あをみいでたるこの池の、由来を悉くたづぬるに、思ひ心に忍ばずが、池の眞薦の亂あし、菖蒲かるもにいたる、四季をまなびて面白や嬉し、

○六番白雪

「まだ白雪のふるとしに、春を知らずる爲の、ツク軒なき梅枝の、花の匂は去年よりも、詠まざる青柳の、糸くりかへしおしむとすれど春もはや、なかばの
 シ「陸奥あたりの者なるが、未だ都は音には聞けど目には見ず、さらば此春ツクゑいややつと思ひたち、破れ笠をも首にかけ、ゑいものうき杖のふしと、まだ夜をこめて旅立ちて、我を誰かと松島の、を島の海士の袂かわく日もなし、雨の日も足に任せて行く程に、山々峯々数知らず、憂世を厭ふ身のならひ、やれ我名をとりや名取川、これを名所と打詠、ゑい面白や、
 シ「名取川、その埋木現はるゝ、ゑいやよゑいや、紅葉々上のツク色に出づともと、是は昔の貫之が、詠し歌ぞと思ひやり、ゆくまも知らぬ旅なれば、ちがの鹽釜身を焦す、あさかの沼深き思ひは我ひとり、こがれこぬかと人の問ひし時、誰に語らん戀の道すがらの、さても尺八の人よ、

○八番陸奥

「あら面白のうき世かな、濃くも薄くも紫の、思ひ染めずやさるにても、ゑいかなわぬツクうき世なまなかに、身はあさ衣あさくして、染まりかねたる墨染、一夜斗りに思へども、蛇の貝の片思ひ、ゑいよしなき人に村雨を、絞る斗にふりゆけど、結びとむる方もなく、我と心を引かへて、一首歌にかく斗りゑい、
 シ「白浪のかゝる渚に夜をこめて、海士の子なれやともを定めずと詠し給へば、あとに戀のせめくれは、心よわくもたちかへる、深山がくれの薄紅葉、秋借老の鹿の音も、ゑい妻戀ひかね、聲をからして音をば鳴くゑい、
 シ「いつも出ぬ鹿がやれ、今宵出て鳴くは妻こひ兼て、やれ友を呼ぶゑい、ツクころふやかんのたく火だに、あたりの友をかたらいし、あた、我身はざくろの花は、花はせんさく實は一つ、ひとりごとこ寝の假枕、枕にかゝる亂れ髪、たれ取あぐる人もなくゑい、しかるに愚僧の詠歌、きくに付ても面白や、いといだに重きが上の小夜衣、我妻ならぬつまなかさねぞと、とは思へども身の上に、なれば更に思ひ切られぬ、叶

○九番月見(上巻所載ト同シ)
○十番戀くどき

「我は遠國旅のもの、ことし初めて吾妻下りを仕る、名所舊跡尋ね、ツク音に聞へし松島は、聞きしにまさる名所かな、さらば御船を漕いで、南表を詠むれば、七浦八崎やつヶ島とはこれとかや、中にとりわけ都に名を得し京ヶ島、二子島とはこれと軍治た鐘島、甲島をも打詠、つきみが崎より詠、浪にうつろふ月の影、ことしにたいせぬ磯濱の、島の小松をうち詠、そこ

○七番島くどき

頭は山櫻、咲ぞしほれいざ今日は、春の山邊に交りなん、ねぐらはなに花のかげ、かわとすぎし昔が思ひで、立去りがたきこのもとに、ゑいやよゑいやこの、
 シ「ひよすくよのほ、んほはいや、ツク日暮れば山吹の、
 シ「花のくよのほ、んほはいや、さかりに行く人はツクなをすぎかねて永き日を、きやうを暮して藤浪の、たつや彌生の曙の、たつ一聲のほととぎす、行衛を見れば有明の、月の光に卵の花色ヲ争ふ心地して、見る目も他かぬ我宿の、あをいつ、じのいろいろ、花桶の香をかげば、昔契りし君さまの、袖の句ひかと、思ふ心は深見草、忘れもやらで夏もはやそさま、

はぬ戀に身をやつす、叶はねばこそうき世なれ、このもの、

○十二番加田の浦

やんれお聞きやるか、深く契りしうき人に、立別れこそ物愛けれ、ツを哀をば誰かまつら船、焦れての流ぞ物愛けれ、いと我身の物う、西を遙に詠れば、君に淡路の山見えて、尙も戀ひ増す我身、いつの何時憂き人に、こがれまつへの濱と打詠め、加田の浦にもつきしまひ、なうしをて垢離をとり、三十三どの禮拜者、願くは君に一度は淡島のゑい、大明神と伏拜、ゑいやよゑい面白、ツをあ、今宵はこゝに假枕、寢てもねられぬ今宵かな、やれや若衆これを聞くからは、ひとし契らば薄く契りて末を遂げ、紅葉葉を見よ、薄いが散るか濃いぞまづ散るになりやうよ、

○十三番松くとき

鶴は千歳龜は萬歳、ツを松は千歳の代々を経て、葉色は同じ深緑、かゝる目出たき松は、異國大く我朝に、松は目出たふ祝はる、まづ正月には門松、あなたこなたと悦びけるゑい、君が代はツを久し

たれも心は利根にて、奈良物すれをお指しある、腰のまわり真鍮鍔をばほめまひぞそさま、

○十五番祝儀

やんら目出たいな、なによりもつて目出たきは、正月御悦ツを鶴龜に松竹、千歳も萬歳も、扱其外は限なし、代々御代をゆづり葉を、七五三御鏡、曇らでむかふ面影も、ゑいよゑいやこの、毎も常盤の若緑、ツを榮ひさかふる國々も、鳥も一つに豊なる、戸さゝぬ御代ぞ目出たけれうれし、

○十六番辨慶

やんれ舞ふたるはくしやう雲井に鶴舞、ツを神子殿御神樂にしやんこくよ、こ若衆大頭に車ひきにをぐるましまいかたて萬歳、シの川瀬の法華經の水車さ、ツを誰を待つやらくるくと、ありやりや治る御代じやとゑ、シ治る御代なゑい、な、そもや辨慶が由来を、くわしく尋ねて見るに、ツを熊野の別當べつしんが其子にて、そだつ所はイ比叡山、人にすぐれてヤンすさまじく、頬骨あれて背高く、髪逆さまにはへあがり、一度聞いては十と悟る、文の學びに暗からず、茲に一つの悪事がござる、二つ兩親に見

かるべきためしにはゑい、シかねてぞ植しツを住吉の松面白やゑい、松の名木多けれど、なをも其名は高砂の、松の緑は君が榮ひさかふる目出たきは、攝津播磨の堺の松とよ、和田の笠松高野山にはさんこの松とよ、志賀唐崎の一つ松、いまにたへせぬ名所かな、音に聞えし越前しをこし松とはこれとかや、加賀の國には安宅の松とよ、はるく尋ねこゝに駿河のや、三保の松原清見寺、ことに北野の老松と、すくな御代に住吉の、松は常盤の色ふかし、千代の年経る春ごとになを色まさる姫小松まつは、

○十四番名作

諸國國々名作を、凡かすく尋ぬるに、ツをまつ一番には、大和の國に鍛冶始り天國よ、常麻しんかに千壽院、ゑいやよゑいやこの、京のうちにて三條小鍛冶頼の一統、粟田口には吉光よ、備前鍛冶とて多けれど、菊一文字ちやうけ、兼光ひこて三原、備中ものハ青江一統多けれど、次家親子にますはなし、筑紫の國に豊後行平政常よ、鎌倉ものには政宗よ、弟子はさまく多けれど、よし平殿にますはなし、志津や左文字や則重、これは昔のはやり、今の當世の若衆は、

捨すんと捨られて、三つ御山の兒や法師をあひ手にして、腕押首ひき刀業、四つ讀物はふつ、りはつたりきらいで、五ついらざる武遊だてが御好で、六つ武藏坊辨慶と名をつけ、指た刀は三條宗近、鍔は鐵しんしやう阿彌がうつたる角鍔、貫抜指によこたへ、小唄節でをすとの、今は伏見に墨染の、衣着やるは、なをいとくしきいとしへ、七つ長刀は柄も八尺及も四尺、八つ山伏姿にさまを引かへ、兜巾すかけ錫杖を手に持て、こほうらい祓ひ清め奉る、さて其日の裝束は、いつにすぐれて華やかなり、肌には黄無垢白無垢めされつ、まつた上には、四條五條の袈裟をちやんく着しておはします、こきねんがあやまつて、九つ茲や彼處に、千人斬があるとの、十でよいやさ十で當時鞍馬に住居をなす、小冠者小腕のさきの勝負は、いかな事もなか、たんだシふれふれさ、我ふるつまはゑ、ツを我ふるつまはよいやさ、シ御代も濁らぬすみだ川、ツを御代も濁らぬすみだ川、花の御江戸の名所かな、

○十七番太平樂

天下太平國土安穩、抑人皇百九代の、今日にあす

に太平樂と治りて、こすへ繁昌の御代なれば、千草靡
き飛ぶ鳥も君に従ひ奉り、きらい高麗中に及ばず、け
いたん國に至るまで、日本に靡かぬ者はなし、諸國
國々大名の、家門ならべ棟つゞき、門外に駒のたてど
も無きやうに、四方のかため玉の戸は、光り耀く金
銀のゑい、こゝん色をなすとかや、げにやたゞきけん
しやうの樂も、御代にはいかでまさるべし、ゑいやよ
ゑいやこの、

シ「松の葉はとしをふるほど色まさる、葉色は共に深
緑、巖のツク」かたに入る龜も、千代万代は限りなし、
祝ひは君がためしがの松、

○十八番池田

シ「ゑいや池田の宿を夜はほのツク」ぼのに立出て、天
龍川の早瀬をも、心すこくも打渡り、其いにしへの西
行は、また越ゆべきと思ひきや、命なりけり小夜の中
山なかなかに、忘れて過ぎし都のともがらと、思ひ井
筒の今日も亦、ひま行く駒の足早め、行く間もあらぬ
大井川、氷かさまされば藤枝や、ゑいやよゑいやこ
の、シ「花と見つゝも打過ぎて、宇都の山邊のうつら
つに、ゑいや夢にもツク」人に逢ぬなりけり、月も今宵は

清見濁、三保の浦葉の白波、かたみに袖をしぼりつ
つ、末の松山かくやあらん、わかみたいのうき鳥が、
原より見れば富士の山、やれすその雲引晴れて、また
時ならぬ白雪の、積る日敷をふる程に、駿河の國を打
過て、今宵は三島にやどりつゝ、音に聞えし箱根山、
あがりて詠れば、ほのかに見ゆる山の面影打な
がめ、家隆の歌は面白や、ゑいやよゑいやこの、
シ「あけばまた越ゆべき山の峯なれやツク」エイ空ゆ
く月の末の白雲と、かんじ給へば東雲の、立より見れ
ば箱根山、つゞら折なる細道を、たどりて小田原
宿に、今宵は假寝して、聞けばお江戸は程がやうれ
し、

○十九番三四季(上巻所載花揃下同)

○廿番いのり

シ「ゑいやいのりをかくる弓矢、わたひかは心もくれ
は鳥、あやのつゝみも音に立ちてゑいやをるに
ツク」木々のあけ暮に、哀み誰か夕貌の、露の思ひはせ
うちやうせゝの思ひ草、ひいてあがる石龜も、身を捨
川にとき染て、うらみ葉葛の夕まぐれ、めぐりた
すの羅生門、たれを松風村雨の、月の朝靨日にそへ

て、くねる思ひは女郎花、たいとしは松の山、姿を
見れば白髪と、をふなりつ、年は老松の哀れむつの玉
葛、かけてめぐるはくるま、いつも心はすみだ川、ゑ
いやよゑいやこの、シ「鳴神かツク」雲の絶間に落され
てゑいや、シ「内裏の門にツク」夕立ぞするやよ、ゑいや
ゑいや面白、雲の絶間の月影を、ふたり静に詠れば、語
る枕は邯鄲、夢はをしをの山嵐、吹ば花散る櫻川、波
の船橋打渡り、永き日かきまくれければ、鐘もさやけ
き三井寺、庭の芭蕉も破れ、あたり淋しき野の宮、森
に響くはふし太鼓、天の羽衣かさね、雲にあがるは雲
雀山、山は音羽の峯つゞきゑいや、登ればこれも高砂の
松は、

○廿一番春の籬

シ「春の籬に吹風も、軒端の梅の匂ひ来て、一夜に
ツク」落る瀧の雪瀧のつゞみの白糸を、里の碓に打そ
へて、つれなく色はみわの山、登ればこれも高砂の、
松に藤とのさきをへて、雲もあをへの空なれや、また
葛城の峯越えてゑいや、誰か宿はかしわ崎、心うかひの
燈火に、雨にわけけるゆみやわた、ゑいやよゑいやこ
の、シ「雨露をツク」脈はで来たる簞虫もゑいや、

シ「玉虫ゆへにツク」袖はぬれぎぬ、ゑいやよゑいや、
面白、波のよるにも汐汲みて、波にみわりとなりぬら
ん、こゝにいづゝと思へども、つれない色はろうたい
こ、これとかにはしは杜若、のりはゑぐちのせいがん
寺、頼む佛のはらなれや、行衛ひろき道もりの、めぐ
るや鳥のうらづたひ、立かへりそめ立いで、今日も
今日もと紅葉狩、人をとむる關寺、鐘も采女の道成
寺ゑいや、四方浦々の詠めして、西行櫻にうす霞、薄き
はのちの花がたみ、いきやう柳に糸柳、靡く姿は楊貴
妃の、心君に引かへて思ふ、

○廿二番都の君(上巻所載下同)

○廿三番都當り(上巻所載下同)

○廿四番薰物盡

シ「やんれ大内の山の桐壺夕煙、ほのツク」ぼの明く
る新玉の、たなびき渡るやエ霞、なを九重の花の宴、
松は緑の色をへて、青梅飛梅みをつくし、女三の宮か
楊貴妃か、ゑいやよゑいやこの、シ「花の雪ツク」薄紅
の八重櫻、シ「誰が手枕のツク」有明の月、東雲渡る鶯
の、末の松山かくやらん、浪はこすとも、契りたがへ
ぬ七夕の、君が綱手の浮舟に、流るゝ月の十五夜の、

りんかみやうけつさめごと、うきめつは芝船の、焦
 れてしほる濡れ衣、天のたきさし、鹽釜浦こそかわれ
 須磨めかし、吉野龍田の紅葉の賀、身はそれならぬ玉
 葛、人に再びふたもとの、すきの嵐の夕時雨、霜夜ま
 がふ白鷺の、川風寒き友千鳥、潮々の網代木わが戀
 は、もへたつ斗り埋火の、くゆる思ひに君の姿、幾夜
 とめてもとめ飽かぬそさま、

○廿五番あつもり

「シ」己はあつまの者なるが、西國順禮と志す、急げ
 急げ、ツク「シ」は攝津國のこまの林に着ければ、げに
 程近き裏山の、かの行平、こゝに三歳は須磨の浦、つ
 れなき人になれ衣、來て見よたみのいたまより、この
 月も「シ」やんとろかよのんやれよわ、
 ツク「シ」よはの月だにも、影は二つに鳴海海、これはいに
 しへ行平、忘れ形見に残し置く、松にかとりの狩衣
 は、かけて思ひのますか、今のすまゝで残すかと、思
 へば實につきせぬ名所なるもの面白や、西へといく
 田一の谷、昔語の跡よ、こゝは兩家の戦、平家帝都の
 くわうく去て、西海の波濤に趣き給ふ、中にとりわ
 け救盛は、都の花を見捨てつゝ、跡に名残は惜どり、

友もなききに唯ひとり、こやの生田の露しもと、清て
 末代名を残す、形見の石は昔むして、露しんくくとを
 ふる塚、實なるかやいにしへのおふ、かの救盛の石塔
 を、物哀れにぞ伏拜、しほやたるみを早過ぎて、覺束
 なくもをふくらをたどり、夜半も明石灘、其名に聞し
 人丸の、三十一字の言の葉をえい、
 「シ」ほのくくとツク「明石が浦の朝霧に、鳥がくれゆく
 船をしぞ、思ふ君には淡路島、るヶ崎二見あひの浦、
 末を榮て住の江、其名は雲井に高砂の、松は榮て深
 緑、この木蔭に、

○廿六番若衆揃

「シ」やんれ見たよさま、うちを見たらよ、ツク「さま
 にとりては主殿様、小太夫様に左源太さま、心ひかる
 る弓はちや、いつも情を汲かわす、さす盃の織部さま、
 まだもまさりの様がある、花にたとへば散も惜き、月
 なたとへば曇もつらき、とかく言句に述べられぬ、さ
 まの姿にしくはなし、其外四季になぞらへて、まづ初
 春は、咲やこの花をもとめに、鶯のいとまつひとく
 ると、さへする聲の面白や、夏は涼しき汀の池に、鳥
 之助このめかに松うへて、千歳契る其風情、秋は稻葉

に風ありて、田むらゝにいろすいをりならべても
 る人も、我衣手にうく露の、こひすみとや思ふらん、
 大冬にもなれば山林に、つもれる雪の面白や、えいや
 よゑいやこの、シ「かんく」枯木に花がツク、咲やさか
 めか左近さま、其外玄蕃に掃部様、吉次吉内さん三
 さま、情の露の玉之助、光耀く月の夜に、小唄胡弓に
 三味線をもませて、いと心浮かるゝに、うきもつ
 らきもわんざくれ、人げんはんのさひおふ平之助さ
 ま、藏之助、武藏殿にあらねども、さすがかけてたの
 むよはこの、

「シ」來ふか小傳次こまいか小傳次、ツク「とても來まい
 なら待まい、われを待ちませまいと思へども、思ひに
 焦れてあこがれていや、シ「忍び來たは我をツク」のふ
 せふらんらほひのふせはいら、露の情に預らばな
 んほ、

○廿七番八島

「シ」我は遠國草深き、芝の庵を立出て、今度初めツク
 「四國行脚とこゝろさす、いづくも山のならひとて、
 登りかすかの山道、しどろもどろと行くほどに、旅に
 やつれし身のならい、我名誰かしらかたの、蘆のかり

ねの夢の間に、人目をつゝむは屏風が浦と、そこで旅
 人小唄にてゑい、シ「爰は諸社坂合は谷か、ツク「岩を
 傳へば皆佛ゑい、國に都を、爰に忍ぶにちごが嶽、や
 わた山より見渡せば、しろうく天のふ一の宮、春日の里
 に坂田川、龜田池のひ打過ぎ、こゝは讃州芝戸の浦、
 ゑい、名ばかり残す房崎の、濱田の里にしんし田島、
 近き後に山里、空ははげしきや、くりが嶽にかけ登
 り、麓に洲崎寺、立寄しはしこ、やかしこの、古きし
 ゆせきを讀誦して、八島きけば中々に、こまといにし
 へ源平の、船と渚の戦、沖は平家の御陣より、弓矢を
 とるは能登守、續く味方は大殿諸卿、菊地原田にまつ
 らとは、船を渚に寄せもるゝ、陸は源氏の御陣より、
 駒かけよせて奥州の、佐藤兄弟次信に、龜井片岡伊勢
 駿河、武藏海尊三保の谷は、鏑をけづり戦し、沖にま
 ばらのあひつき、沙の干がたの荒磯に、寄せ來る浪の
 音そへて、物凄まじき壇の浦、心を盡し肝膽し、それ
 をいかにと尋ねるに、君の御運な次信よ、名は高松に
 とゞめ置く、今は名の方に、形見の石に葛衣、きて見
 よゑいやゑいこれはゑい、愚僧のつらね給ひたひし歌
 候、

「惜むともツク」よも今まではながらへし、身を捨てこそ名をば次信と、よみしも断や、げに名惜む弓取は、誰もかくこそあるべきと、跡をわびしく打ながめ、首も今も末代も、天下泰平國安穩、國ものどかに治りて、御陣ひきたの浦づたひ、齡久しき鶴は、松はみどりにて、齡は君がため志賀の松は、

○廿八番熊野

「シ」ゑい熊野へ参るみつ山、凡參詣申さんと、今日思ツク「ひ立つ旅衣、幾夜かさねて木の下に、このひどり「順禮がやれ足ツク」足をいよゑい／＼それやすめ、いけひ松原はる／＼と、あたをすぐればはきぐちの、おともかすかに先もまた、道々もさびし枝の松原、前は海北は松山風ありて心淋し、旅はうど、の里なれば、音には聞きてみつ／＼きの、せつ那も心とまらねば、げに程近き鳴川の、爰はもとよりみたらせの、瀬々の川なみ音無の、渡船に棹をさす、そこで順禮つらねけるゑい、シ「思ひ立ちツク」今日来てこゝをみ熊野の、瀬々の川波音は鳴川と、向ひに越せば音無の、里に程なくつきしかば、抑御山は昔天竺まかた國より歸てうあり、今此宮にねんじられ、日本大山權現

と、この悉くも現はれて、衆生濟度の御神を、念じ新に伏拜、かゝる目出たき宮たちを、めぐりめぐればにやく王寺、こもりの宮にひきやうやしや、ひじりの御宮諸社の明神、五代王神十五社金剛、諸社と現じて立ち給ふ、神の御位ちうそふ權現と、三保の社に、峯の四十末社の神々を、貴賤あらたに念誦して、日もせんせつに傾けば、いづくも旅はうひのじよ、何につけても我故郷の芝の、

○廿九番戀盡

「シ」やんれ世の中に、戀はさまざま／＼多けれど、品を七ツに昔よりツク「見る戀聞く戀逢はぬ戀、逢ふての後は別れじやと、恨むる戀に音高く、いやシ「人目つゝ」みはツク「忍ぶ戀、さて雲に掛橋なかへたて、及ばぬ戀の物憂さに、うつゝ心の夕ぐれ、さも美しき女郎、二八斗りの御齡、薄き化粧に眉黒く、黄無垢白無垢紫、羅綾の衣に色かさね、佇み給ふ御風情、光源氏のいにしへ、女三の宮か柏木の、右衛門の督ときこえしは、ゑいやよゑいやこの、シ「情の袖やツク」下簾、解けて逢瀬の中となる、ためしをひくや大網の、目にもたまらぬ我涙、おそふのたもとを引分けて、夢は其まゝ覺

にけり、こはそもいかで幻か、何となり行く憂き身ぞと、心も空になら柴の、芝の庵を立出て、しどろもどろと淺草や、觀音さまへも参りつゝ、饅口ちやうと打鳴らし、十のれんげをもみ合せ、大慈大悲の御誓ゑい、枯たる木にも花咲けば、いかで此戀叶はじと、さも念頭に祈誓、七日籠を仕る、あら有難や御夢想に、戸帳の内よりかく斗りゑいやよゑいやこの、シ「哀れなりツク」たとへば思ふあましも、叶ひ得給とゆく程に、ほどの夜にてはありけれど、あらたなる御告、はつと思ひはいつの間に、迷ひの道もうせはて、悟る心やをのつこしん、即佛煩惱即菩提の御示、かゝる尊き神こそ頼めや頼めさしも草、我世の中にあらん限りはな、そのま、

○卅番茶の本地

「シ」そもふとふたびは、國も豊に住ければ、ゑいむやく、ツク「爰に茶と酒のさしき論とぞ聞えける、夫御茶の由來を聞けば恐なる、天竺のきは、八萬四千の其藥、おほへたりしが弟子どもに、六萬二千と傳へ、二萬二千の藥をば、教もやらでむなく、其悲や念力が樂となり、木はかたしよに生ふ出る、しかる處に寒熱を

よく／＼調へ茶園と名付く、其御代に、我朝までもふれたる榮華の事なれば、さらばすき茶を始めんと、皆金銀の坐鋪建て、これへ／＼と招じける、茶の湯道具十二色、思なりとよ十二神、樂師をひやしきはと云人誰やらん、これは樂師の本地なり、我等出る坐鋪には、何さよ酒と呼れしに、推參するこそ無益とて、色眞青に怒らるゝ、奈良のかふりにといめをく、双方諸白顔に、錦荒井川進み出てぞ申ける、我等根本尋るに、天竺天輪かのしやう玉の御時、天より甘露ふり來り、かほど名譽の甘露、延命水となづく、其御代にまかしやり夫人な是を見て、酒を造り給が始にて、去程に酒と云字はさんづいに酉と書なり、其時にしこと云人是をき、釋迦佛にも傳申せば夫よりも、新羅國に渡さるゝ、夫より日本まで、神變奇特の酒を、これをしやいし、うしするともがらは、利根さかしく智慧深く、いつより顔は色づきて、心は春の花咲、そこで一首の歌をよむゑい、シ「茶と酒のツク」文字は二重にかわれどもゑい、シ「落れば同じツク」谷川の水ゑい、興さめ顔のさしきろゑん、我等が先祖凡限りなし、十萬佛土の化身とて、酒にあまたの奇特あり、ひ

と目も知らぬ旅人に、なるゝも酒の威徳なりうれし、

○卅一番武藏野

々々やんれ武藏野の花の盛は春秋よ、夏にかへらぬ
さかりツク咲くやこの花冬ごもり、いまを盛の枝ご
とにゑい、心をよするはちやくめ、くめのうねはしか
けてのみ、思ひ渡れど甲斐もなく、君が来もせで其
色、何たがへたるうこん染、夏の

々々短夜のやあらいやツク君だに來こねはの秋のよ
しりも、ゑいさんさをやさんさ、長太夫ゑい、ならひ
なければ市之丞、左内内膳内記様、心まがわすみな人
ゑい、思ひをよする六之助、契りし人はいざ來んと、
思ひにわれは焦れ忍び來たは、われをのふせふらん
らほひのふせはいら、露の玉之助、月は宿れど世の
人の、心は闇に鳴海渦、潮の満干はそなたの心、恨み
恨みてよしやた、君こそ我につらくとも、浮名を
たてし身の科に、思ひ駿河の富士の山ゑい、山ほど我
は思へども、薄き情の君さまや、ゑいやよゑいやこ
の、シ「一夜限か三三四五夜もござれの、ツクあたら
し船の船頭どのいや、殿のつかさのみるめをも、はじ
ぬ心に昔を思ふ、草の庵の夜の雨、涙なそへぞほと、

て、ほのかに照す月も日も、光りやわらぐしるべと
て、塵に交る國民の、窺いとど賑ひて、事ふる御代ぞ
目出度けれうれし、

○卅三番源氏

々々ゑい何れの御代のことやらん、光源氏の物がた
り、ツク桐壺は、き木空蟬、葉にうおく露の木がくれ
に、忍びくりに滞る、袂は、我宿のゑい、離に咲ける
夕貌の、花の露をやかすがのゑい、若紫のすり衣、
きて見るからに山々の、末摘花にかわらじな、秋も半
の紅葉の賀、ゑいやよゑいやこの、シ「花の宴なるい
よをわれかみをなんほんほ、花の宴なる我身かな
ゑい、ツク「葵柳に花散里の、須磨や明石の荒磯に、それ
と斗りはみをつくし、絶えず香する松風、はや薄雲も
消へはて、果敢なく見えし朝貌の、花の盛も過ゆか
ばゑい、シ「朝貌もツクなにはかなしと思ふらん、人
をも花のさこそ見つらんと、思ひ音にせし手枕の、か
りの初音に驚き、萩の上葉の露みれば、笠のかげや篝
火、見るに飽かぬ藤袴、花の匂は梅枝のゑい、こと珍
しき初春に、若菜を摘みていふうみの、としふりゑに
し東屋の、其いにしへの柏木や、音にのみ聞く横笛、

ぎす、初音にまして聞きたきは、瀧井三ざか打あげ
て、うたふ小唄に淨瑠璃、胡弓に小鼓笛太鼓、鐘や羯
鼓を打鳴し、踊る衣裳をよく見れば、越後晒に、しま
に洲崎に松の葉をつけて、藤の花のたよくと、あつ
ちらこつちらすじりもじり、きり、つとまかつては
る、か、つた所が面白の山崎下りや、行くも山崎もど
るも山崎、心のとまるも山崎ゑい、貴賤羣衆の人々
は、心慰さむ斗りなり、かゝる目出たき御代な、民も
豊に榮つ、うたひさかもり舞遊ぶうれし、

○卅二番おふむ

々々凡和歌の道むつの衢をあらはせり、神代ツク昔
八重垣の、妻ごめ歌の流くむゑい、今にんたいに及で
は、甚起る風俗の、長歌短歌に、旋頭折句はい諧根本
かいや、
シ「おふむかひしかくわいふんか、ツク幼きよりしも
つがた、詠めは濱の眞砂路や、花になく鳥井の蛙、松
吹風や浪の音、何れか歌の數ならん、ゑいやよゑいや
この、シ「月は更科櫻は吉野、富士の高根を三保の浦
ゑい、足柄箱根葉のいふなきにゑい、吾妻のかたを詠
れば、御代は經れども武藏野の、いつも若草咲き出で

音もなつかしき鈴虫の、振鈴がたき世の中に、いつま
でかくて宿りけん、嵐はげしき浮船の、流れゆく身の
はかなさは、たゝかげろふの今日までも、あるにあら
ぬ身の露の、幻とだに消やらで、思ひいとあり明
の、つれなく見えし曉の、夢の浮橋とんとろとんとろ
とて渡られぬ、足がしどろで渡られぬ、色もたいなる
いにしへの、紫式部が言の葉を、思ひ出づればなつか
しや、そよま、

右御船唄卅三番者向井將監以秘書寫正書寫畢
文化十五戊寅年四月十五日 中根正峽

御船唄留卷下

○一番御代長久

「御代長久、民も豊に住みければ、ツク、いざ打寄りてうたひさかもり遊ぼもの、シ、池の汀に鶴とな龜が、ツク、あゝ鶴とな龜がうたひさひびり舞遊ぶ、さひぶりなくうたひツク、うたひさひびり舞遊サ、君は千代ませな御代の松に、イ、ツク、あゝ御代の松に、いづもかわらぬ若緑、シ、かわらぬな、いづも、ツク、いづもかわらぬ若緑、サ、し竹かん竹は竹の竹よ、ツク、あゝ竹の竹よ、代々を重ねて末長く、シ、重ねてなく、代々を、ツク、代々を重ねて末長く、

○二番萬歳(上卷大黒舞ト同シ)

○三番名寄竹

「君が代は、天の羽衣もまれにきて、ツク、なつともつきぬ岩根松、四季折々に咲代る、花見がてらに來る人を、引連立つて武藏野の、花の盛は吉野に、中にも一重櫻に、シ、八重櫻、かすの千草も多けれど、中にもやさしき系族の、花よりも名はしほらしく、河骨澤瀉

花菖蒲、八重山吹に美人草に戀草の、サ、桔梗かるかや蘭菊の、ツク、さつと開いた花川戸、遊船に打乗り、艦舳早めてさつさをせやれをの、吹た波間に、シ、都鳥、いざこと問はん、ツク、女郎花、はや見るうちに眞乳山、心ひかる、かの方へ、人目を忍ぶあみ笠に、色のシ、かあかさき連てつれてツク、土手の繩手を詠め行く、面白や憂を忘る、色里の、五町の君の數々に、春はまづさく梅枝の、

○四番十二月

「松竹の、かけて羽根つく手毬とる、ツク、ぶりくぎつてふ、手にふれて、シ、玉をうち出の濱戸や、ツク

「七種薺、とんどやあふきかるた寶引、きさらぎの初午参りの土産とて、すやつほく風車、彌生になれば、シ、雞合とり、く、ツク、雞のく、な、殿子の妹背ごと妹背ごと、ゑい、二八あまりはおとなみびて、シ、色に出るや櫻色、

「梅や椿の花よりも、卯月のけふの御祭りに、名残惜きはせんたん端午へ、端午くくへ、端午の節句へ、蓬菖蒲に、サ、甲を軒端にかざらせて、

「打合々々うちつれて、竹馬踊はおもしろや、りんりんからく鈴つけて、世繼は殿のく若殿よ、ますます御目出たいよの、この殿の今度入郡に來るは何を土産、シ、國をとり毛のをふす鍵この、ツク、長柄をやつとんく、やつとこくや、シ、をふ立てろツク

「下馬の陣札ひと踊り、ひま行く駒の足早め、はや祇園會の夕涼み、螢シ、來いとて水結ぶ、ツク、袂涼しき夏衣、一夜明れば初秋の、盆の踊りは伊勢踊りく、きけん十七寅の歳、参る薬師は寅薬師、さつさとふりやれ、さつとふれくふり袖の、さて初冬や神無月、つくや亥の子の餅花を、小春の名にやをふらん、霜月はうぶ神の、

「はたけだけく師走には、ツク、をこの餅を朔日や、シ、雪ころがしや雪まろめ、ツク、四季折々の戯に、鬼の來ぬ間と歌ひしも、思へばくこの神の、昔なりける今の世に、せんたんこの大明神、

○五番寶船

「目出た樂しや、ツク、千代もかわらぬ幾代久しき寶船をめぐふよ、夢ちがひの猿のふた、邯鄲の枕や夜光といひし、其玉を他の耳にをしあて、千代萬歳を聞ぞかし、昔シ、もろこしツク、漢の武帝の其時に、反魂香をたきそめて、沙焼く海士のたきさしや、匂ひふくむる我袖やくへ、

「吾妻からげのツク、沙衣、誰引連てもしほ草、シ、霞むそなたに初梅かほる、ツク、ござれ初午指切しましやう、ござれさまといよの、彌生始は楊貴妃櫻、雛も妹背もたのもしく、さてく見事な卯の花や、由縁残せし其紫の、ふうと争ふ山吹色いろく、さつさへさつき初めの頃とかや、蓬に甲を飾立、

「さて水無月になりぬれば、ツク、色ある里におせや

れおのこ、をしておわらぬ文の頭、七夕祭やれこひ歌の色紙たのもしく、ともへ須磨や明石なだるい、更科、

シ「菊の下葉にうもれても、露のやさしさは、ツを、るいげに九重の神無月、えい男子の悦ぶわらんべがゑい、わかひらしき染模様、此納る、

○六番名酒揃(上巻所載風くどき下同)

○七番大黒舞

タシ「嬉し目出たの大黒殿な、ツを、えいと踏た俵に、中によねだち思ふよにいれて、舞する人をやしなを、にんくにつこひさ、にこりくにつくくくと、さ笑ふたゑ、惠比須三郎殿は、釣棹をかたげていや、烏帽子狩衣しやんと著て、神酒に酔ふたようろくあぶない、がてんじやあぶのてならぬゑ、船漕寄せて釣をくたればのふ、あら面白や、ひいてはひいくは、ひいてしやくるとツころを、ついとあけて見れば、さてこそ御目出たいよの、布袋殿はなせに寶くらべの子供達、ゑいえはえいとを騒いで、袋のくちを開いたく、子供衆くも、ちとそちらへ寄らんせの、わしさいよりやすりやなんすかしのこへく、六つ無

病息才に、七つ何ごとないやうに、八つ屋鋪をからりと廣げて、九つ小藏を建るくく、よしきやうへそんれはさあのえいやらへ、シ「あれはさのへ、そんれは誠についたとき、ツを、三澤の澤の澤邊をつきたてて、皆金銀の坐鋪を建て、數多福神集つて、すでに酒宴な始まりて、シ「ふくろく神な立上り、いざや着に舞をもはじめ、末の松山なみはこすこすんと、ツを、とんと唄いてさいめきて、千秋樂と目出たけれ、

○八番須磨の浦

タシ「須磨の浦には名所がござる、ツを、一に關守二に友千鳥、三にもしをひしはま御船、月の影こそ名所なれ、この浦々シ「いよさまよゆふたツを、あよほんにく、愚の沙汰よ、月の影こそ名所なれ、此浦々シ「伊勢の浦には名所がござる、ツを、一にはしやい二に玉津島、しやんとしたこそ名所なれ、この浦々シ「いよさまよゆふたツを、あよほんにく、愚の沙汰よ、しやんとしたこそ名所なれ、此浦々、シ「吉野川では櫻を流す、ツを、龍田川では紅葉を流す、橋の上から文とり落す、水にふたりの名を流す、このきのどく、シ「いよしもよゆふた、ツを、あよほ

んにく、愚の沙汰よ、祭ふたりの名を流す、このきのどく、

シ「戀は世の中盡せぬならい、ツを、いつもかわらぬ色千歳、山雲はさへゆく、西をば空へ歸るみちのく、袖かほるこのきぬく、シ「いよわけよゆた、ツを、あよほんにく、愚の沙汰よ、かへるみちのく袖かほる、このきぬく、

○九番淡路島

タシ「淡路島なる氣色みれば、ツを、島なるく、氣色見れば、かやうちどりの月かけて、須磨の關守このねぬは、かくりはかりへ、シ「須磨の關守ねぬ、ツを、寢ぬばかりく、え、

シ「色に通ふか花紫の、ツを、通ふく、か花紫の、かれぬ思ひ葉お千代にとへば、菊の下露この露ばかりばかりく、え、

シ「菊の下露く、ツを、露ばかりく、え、

シ「松の下葉の入目を待たて、ツを、下葉のく、入目をまたで、裏の戸山の紅葉はのこす、あまの釣つり船、このよるばかりく、え、

シ「海士のつり船、夜るツを、よるばかりく、え、

シ「人目忍べば色には出さで、ツを、忍べばく、おもわく斗り、しん底の身はいとしゆてならぬ、他人ぶりぶりすりや、このなをいとくしいとしゆへ、シ「他人ぶりすりやなを、ツを、なをいとしゆゑ、

○十番浦遊

タシ「戯れ遊べゑ、ツを、戯れあそべゑ、濱の真砂もかすも千秋、シ「萬歳と唄ふた、ツを、うつや鼓の拍子もよしや、てん手拍子も揃ふたへ、ゑいこのゑ四海、四海波風しづまり民も民も豊に、住吉さまの岸の姫松目出たさアさよ、歳は積れど高砂の浦、いつも姿はいよわかの浦、加田の浦より詠めはまさる、

シ「鹿島浦からツを、寶船がついたゑ、櫓舳を早めて浦浦を詠めん、シ「須磨の浦には名所あり、ツを、一に關守二に友千鳥、三にもしほをひしは濱御船、月の影こそ名所とは、やれようゆたへゑいこのへ、今宵々々一夜明石が浦の、サム、音にのみきく房崎の浦、ツを、海士のいとなみ藻に住む虫や、磯の小貝のしほらしき、あけて夜あけてほのく、と、さ面白、サム、あの人丸の鳥帽子貝、ツを、春の詠めは櫻貝に梅貝、蛸たいらげにし

さアざい、シよ、いす貝よるてう片せ貝ツク、妹背貝こそたのせ貝、しやんとせさしやんくくとる、かすの小貝に色ではないが、そうこのなサム、螺貝の音、シ「をほめたとな、ツク、詠めくらして一坐連立て、シ、引連々々、ツク、連立て、人々歸る濱路の面白や、

○十一番霧よ節(上巻所載上機踊ト略同シ)

シ「ああたりはこりやまことにナたまり水さ、ツク、すまず濁らすです入らず、さまはてんとく、牡丹芍薬じや、サム、あい、途なかのな途なかのな、ツク、沖のや沖のとなかにく、なき道、よいとしよ、シ「このあたりは誠にナ茶に立て、さ、ツク、のぼり下の船をまつ、さまはてんとく、牡丹芍薬じや、シ、あいるじまかなあじまかな、

ツク、花のや、花のあじまかく、なきみち、よいとしよ、シ「此あたりは、こりや誠にないとならばさ、ツク、たぐりよしよのみがやどへ、さまはてんとくと牡丹芍薬じや、シ、あい、三條のな三條のな、ツク、今宵や今宵、三條のく、なきみちないとしよ、シ

「このあたりはこりや誠にナはしに寝て、さ、ツク、笠を取られた川風に、さまはてんとく、牡丹芍薬じや、シ、あい、目出たのな目出たのな、ツク、うれしやあ嬉し、目出たの目出たのなきみち、よいとしよ、シ「このあたりはこりや誠になはかまつよさ、ツク、枝も榮る葉も繁る、さまはてんとく、牡丹芍薬じや、

○十二番東金の(上巻所載淺草ト略同シ)

シ「東金のツク、町家にかけてぬりがさな、あよおんこへ、シ「あの笠をツク、我子に着せて見たかろな、あよをんこる、シ「淺草のツク、出茶屋にお花よい女郎な、あよおんこる、シ「花ならばツク、一ト枝折てとろものな、あよをんこる、

シ「あれみさへツク、筑波山の横雲な、あよおんこる、シ「横雲のツク、下こそ我親里な、あよおんこる、シ「親里かツク、夜の間近くに近くなりよな、あよをんこへ、シ「行徳はツク、いりはもではもよけれどな、あよをん

こる、シ「みなんかツク、鹽漬でさまがやつれとな、あよおんこる、

シ「市川のツク、女郎衆くはお手があれそよな、あよおんこる、

シ「どおりこそツク、市川の繩の出所な、あよおんこる、

○十三番長崎(上巻所載ト同シ)

○十四番春は吉野(上巻所載四季ト同シ)

○十五番四季の雛形

シ「四季のいよしも雛形、ツク、春は花色梅櫻牡丹芍薬藤の花、

サム、色もいよしも染たよ、ツク、さても見事な花並、

シ「夏はいよしもくれい、ツク、夏は涼しき水葵、菖蒲

罹麥百合の季、シ「扇はいよしもなりしに、ツク、清き流れに季復、

シ「秋はいよしもじ白に、ツク、秋は八重菊蘭すゝき、

紅葉亂る、女郎季、サム、鹿もいよしも染たよ、ツク、笛

による鹿つまこゆる、

サム、冬はいよしもじ黒に、ツク、冬は時雨にぬれ小袖、

五尺手拭江戸鹿子、シ「帯はいよしも伊達染、ツク、結びさげにははづれゆき、

○十六番山中節

シ「妻をたツクもらば山中薬師、シ「七里かツク、い道に無い妻を、

シ「我をしツク、のば、やぶがらしのへ、シ「笹をなツク、らさで竹わけて、

サム、こゝろこそツク、まかにこまものかれは、シ「佐渡

の金、

ツク、山こゝに在り、シ「我は酒屋のさかばやし、

シ「なかをいツク、はれて門に立つ、

○十七番八重菊(上巻所載ト同シ)

○十八番思へば永し

ツク「思へば永し夏の夜は、ツク「あけよ今宵はひとり寝の、明けよ今宵は来ぬからく、君が来ぬから兎も角も、シ「鳥に恨みは待夜の事よ、ツク「うたい今宵はひとりねの、うたい今宵は来ぬからく、君が来ぬからともかくも、サム、龍田土産に紅葉はもろたへ、ツク「それもすいた秋のころへ、すいた、それもすいた、シ「橋の上なる御若衆様のへ、ツク

「裾に牡丹の花が散へ、牡丹の裾につたんのいよこの
る、

○十九番げんじ(上巻所載源氏ヲ参照)

「源氏なりやこそツケ」濡れても通ふ、時雨いとわ
ぬ志賀の松、かんかなりんかへ、シ「濡れても通ふ、
ツケ」時雨いとわぬ志賀の松、かんかなりんかへ、

「浅黄小袖にツケ」小松に鹿子、さても源氏のなりふ
ふり、かなりかなりかへ、シ「こづまに鹿子、ツケ」さて
も源氏のなりふり、かなりかなりかへ、

「白小袖にツケ」こしまき羽織、さても源氏のなり
ふり、かなりかなりかへ、シ「腰まき羽織、ツケ」さても
源氏のなりふり、かなりかなりかへ、

「黒い小袖に、ツケ」黒羅紗羽織、さてもげんじのな
りふり、かなりかなりかへ、シ「黒羅紗羽織ツケ」さて
も源氏のなりふり、かなりかなりかへ、

○廿番澤邊節

「今宵の間に、ツケ」ひとり来るさまは、澤邊の螢や
あ、光頼むぞへ、

「澤邊の螢ツケ」さわべの螢やあ、光頼むぞへ、シ「む
かいの山でツケ」なにやらふける、山ほととぎすやあ、

れ〜としやん〜、つうてれすとんと、

「我は野に咲くツケ」ぬしなきこれ〜〜、花
よ折らばとくをれな、何もちりてれと、とんと散らぬ
まにゑ、とつうちりてれと、ちりてれ〜、としやん
〜つうてれすとんと、

○廿三番裾の節

「富士の裾野のツケ」一本すいき、いつか穂に出て
みだれ合を、シ「穂に出ていつか、ツケ」いつか穂に出
て亂れ合を、

「なんとしたやらツケ」今宵はふりやる、誰が横矢
をいれたやら、シ「何と横矢を、ツケ」入りやりよとま
よ、したる約束無にせまい、シ「約束したる、ツケ」し
たる約束無にせまい、シ「いつかいつまでツケ」吉原風
に、何をよしみに吹かりよもの、シ「よしみにツケ」な
にを何をよしみに吹かりよもの、シ「こひとゆたとて
ツケ」ゆかりよかの、道は〜四十五里波の上、シ「四
十五里ツケ」道は〜四十五里浪の上、

○廿四番梅古木(上巻所載ト略同シ)

○廿五番上野山

「上野山登れツケ」ば下るいしつりに、とんよの石

初音ゆかしきゑ、シ「何やらふける、ツケ」山ほととぎ
すやあ、初音ゆかしきへ、

「あの君さまはツケ」七夕の契りをふよわまれて
や、浮名たつ斗り、シ「逢ふ夜はまれでツケ」逢ふ夜は
まれでやあ、浮名たつ斗り、シ「今宵は来たが、ツケ」あ
すの夜は知れぬ、待つなよさまよやあ、こゝろづくし
のゑ、サム「待つなよさまよツケ」待つなよさまよやあ、
こゝろづくしのへ、

○廿二番是々節

「雨はふるとてツケ」走りて、ツケ「これ〜
これ、見れば雨も降らいで、なにもちりてれとん〜
とこひかふるゑ、つうちりてれとちりてれ〜とし
やん〜、つうてれすと〜ん〜と、」様が来ぬとて
ツケ「枕なこれ〜〜」投げた、投げた枕にな何
もちりてれとんとと科はないゑ、とつうちりてれと
ちりてれ、ちりてれとしやん〜、つうてれすとんと
と、サム「わかしゆ忍ぶにツケ」いよてらこれ〜〜
これ、したを菊の下葉にな、なにもちりてれと、とん
と夜をあかすへ、とつうちりてれとちりてれ、ちりて

つりに袴がやれた、はかまぬにとんよの、シ「戀の鳥
原ツケ」ひと目忍ば、伊達な羽織にくけ紐にゑいこ
のへ、駒か、駒がいさめばいくちよ、しんぞそこら
いくさへ、シ「風吹ば東ツケ」え靡けならの葉に、とん
よのならの葉に、かゝるわもじを折々にとんよの、シ
「さんや通ひに、ツケ」道を急ば、馬に鞍置きさくらが
は、ゑいこのゑ、こまが〜いさめばいくちよ、しん
ぞそこらいくさへ、

○廿六番さゝ浪

「さいなみよする海づらや、ツケ」鶏照る比叡の山
よりも、向ふかみでつきみれば、志賀唐崎の松の
色、ひくや小松の千歳ふる、老の姿も白髪も、神の宮
居はいくひさし、

サム「渚によする海づらや、
ツケ右同断

○廿七番とくさがり

「木賊刈ねの其原や、ツケ」さ伏屋にふせば掛ケ橋
の、とんとろと〜ろと渡に、夢の寐覺のとこや、をば
捨山の、さつさ、月の入部にやどからん、
サム「戀は信濃の其原や、

ツケ右同断

○廿八番潮の満干

※シ「汐の満干にやれツケ」この子が出来て、我子ながらもしほらしや、シ「ながらも我子ハツケ」我子ながらもしほらしや、サム「源氏狭衣やれツケ」伊勢物語、数の書冊も戀の道、シ「お江戸そだちかやれツケ」お色の黒い、麻の布なら晒そもの、シ「布なら麻のヘツケ」麻の布なら晒そもの、サム「淀の川瀬のやれツケ」いよ水車、誰を待やら来る〜と、サム「待やら誰を、る、ツケ」誰を待つやら来る〜と、

○廿九番萩吹風

※シ「夏の夜にツケ」萩吹風もそよ〜と、通ひ来て、うす紫や萩の色、いざや詠めん藤ばかり、桔梗かるかや女郎花、

○卅番是の節

※シ「是のいよこのツケ」座鋪はこれの、坐敷は目出たいざじき、サム「鶴といよこのツケ」龜とが、鶴と龜とが舞遊ぶ、シ「中で、いよこのツケ」千鳥が中で千鳥が酌をとる、シ「五尺いよこのツケ」手拭、五尺五尺手拭な

よ〜と、シ「ふちにそりや ツケ」まかれてたよ〜と、

○卅四番ぬめり節(上巻所載浮世ぬめり同ツ)

○卅五番吉野節

※シ「吉野の山そりや ツケ」雪かと思ればそりや雪ではシ「あらで、うしやこれのツケ」花の吹雪じやのうしやあこれの、

此以下上巻所載なれ〜ト同ニ付略ス、

○卅六番うこん染

※シ「うこん染かや恨めしや、ツケ」あ、逢ひたらぬ書き足らぬ三尺手拭、いよれつもれつゆりかけて、ひかはお靡きやれのさまよ、さまはしげ〜しゆよゆたかのこしけ〜ござれよとにかくに、

シ「文をやりたが返事のないは、ツケ」さまのむじつか使のなんか、さりとては、御縁のないゆへかさまよ、

さまはしげ〜しゆよゆたかのこしけ〜ござれよとにかくに、

とにかくに、

○卅七番見るめ

※シ「みるめのツケ」浦に月冴て、波の鼓の波の鼓の、調をみてうちての、音も拍子もよしや、岸によるへの浦

が染て、シ「染もいよこのツケ」染めたよ、染めもそめたよ江戸鹿子、

○卅一番河島(上巻所載鹿島同ツ)

○卅二番生木節

※シ「金の生木を一本ほしやのへ、ツケ」植て育て、やれ、さまにやろいや、サム「植てそだて、やれさまにやろいや、サム」さまが船やら龜崎沖にのへ、ツケ「千鳥がくれにやれ帆が見えるいや、シ「かくれに術のゑツケ」千鳥隠れにやれ帆がみへるいや、

サム「お國女郎衆は西國順禮かのへ、ツケ」むねに木札のたへやらぬいや、シ「木札のむねにのへ、ツケ」むねに木札のたへやらぬいや、

○卅三番住吉節

※シ「大坂出てからツケ」住吉さまへ、松にねほれて現はる、シ「まつにソリヤ ツケ」ねほれてあらはる、シ「花がみたくばツケ」吉野へござれ、今は吉野の花盛、シ「今はソリヤ ツケ」吉野の花盛、

シ「表短かのツケ」さらさのねまき、恨みながらも着ておよれ、シ「うらみそりや ツケ」ながらも着ておよれ、シ「松になりたやツケ」播磨の松に、ふちにまかれてた

づたへ、

○卅八番もにうづもる

※シ「藻にうづもるやあいやあ、ツケ」玉柏、あらはれてだに逢ふ事の、無いは恨みのかす〜に、浮名はよそに龍田川、顔に紅葉のちりかゝる、

○卅九番笠を節

※シ「笠を忘れたのツケ」駿河の茶屋で、空がくもれば思ひ出す、シ「空がくもればのツケ」思ひ出すの、あたたくもれば思ひ出す、シ「聲はすれどもツケ」姿はみえぬ、さまは深野のきり〜す、シ「さまは深野のツケ」きり〜す、あた、深野のきり〜す、

○四十番唐人唄

※シ「ろすかさはいおなりすんやおなりやツケ」まよいのみるなのしやこのひるなのやついや〜にいかんなにろうきツケ」さあるゆきちやうらにきよまはころやてうさいてうちはいらるりやふんねにさんはいろちんもちやくんもすみやもてんもあんはからうさいるらせんつうさめうとまやしの入るうすさんはいへ〜るやはりやこんはりさめとまいろちんやちやちんもはなやつふれふれ〜シ「らき〜てツケ」す

いしやゑんきやそりやすいふきやうすいふけうはい
みさいゑんしんきやうつシ「かふてかんかツク」かふて
しんかみはしやのはひちらきよひさらきよはひみさ
いゑしんきやうつ、

○四十一番茶々碗

タシ「茶ちやはんへらかしゆんでツク」ちや茶はんへら
かしゆんでみもしゆてこもてあそくはんへそひをと
ろ、ちんへあそふてちさよゑんて、ちさるゑそ
ゑんてよつのつまこんひこひてあそはんつ、や、
りんつうはつかくれんよかはんやい、さああんゑ、

○四十二番白波(上巻所載下同)

○四十三番久形

タシ「やんれ久形の、光長閑き春の日にツクヒ」ゑいし
づ心なく立出て、四方の山々見渡せば、ゑいやよゑい
やこの、シ「花に短冊付やるはよいかくツク」主の有
身の手をとるゑ、年の齢を尋ぬるに、二八あまりの
兒櫻、みめは楊貴妃きりがやつ、目元にこぼるゑ、鹽が
まやゑい、召たる小袖は何々ぞ、淺黄櫻にかばざくら
ゑい、紅絹紅梅な緋櫻を、衣紋ざくらに召るゑ、時は、
賤が心は三味線の、細りて三の糸櫻ゑい、忍ぶほいな

犬ざくらゑい、年ふりたりし姥ざくら、後世を少し
も願はぬとゑい、墨染櫻に普賢草、彼敦盛一の谷にて
討取しゑい、熊谷ざくら、奈良の都の八重一重ゑい、
げに九重またと逢ふ、まいこの君に逢ふたか、

○四十四番沈麝香

タシ「やんれ沈麝香匂ひ薫こんたんなツク」ゑい梅檀の
林にけんきよくをこふ、はしこもちの日の、に、柳
をさする雨の夜、じんのうちしきふせこの煙、深き情
はたどりの木のそらだき、丁子白檀花の露に兵部卿、
かんせう龍腦とうちん香、しほやの煙なつとまめに
桶、さてはそつとすいくろさ、梅の匂を櫻花にやどら
せて、君とうち解けて、ふたり眺よなら心よかるのゑ
い、徒にシ「日をは送りての、物事に油断して時を失
ふ、

○四十五番秋花(上巻所載秋はなを下同)

○四十六番それぞよ

タシ「やんれそれぞよと見へぬ深山の木々の枝、ツク
ゑい櫻は花にぞあらはるゑ、一夜二夜と相馴、みを
も染たよ住吉の、松はねごとと願はるゑ、ゑい誰か云

初て我が戀は、人はしなくしき絶て、枕よりし知
る人も、ゑいあらしと思へど我が戀は、おそし早しと
浮名たつ、シ「君は紅やそりやツク」君は、紅おりやそ
りやおりや、緞子衣そりや幾重、つゝめとやそりや幾
重、つゝめどやんれ色に出るゑい、とかくにシ「人目
にはの、つんと切れたる振をしてツク」忍べしのばり
よいつ迄も、

○四十七番枝も彌生

シ「枝も彌生よいよさて、異國ツク」凡本朝に、かゝる
詠めは住吉の、松に小鳥が巢をく、何れ雀が住みよ
かるらんと、いつも葉越に月見ればゑい、たちくるく
ものふるまい、げにも思ひ初めしよりゑい、たくみて
沖を眺れば、須磨や明石の浦波、お、遙々愛に住吉
の、千鳥シ「鷗に物問へば、われは立つ鳥波に問へ、ゑ
いおもしろやいつ見てもゑい、替らぬものは松の葉
よ、笠をなそらさでなよさてな、みてもとろゑい
よゑ、

○四十八番さその春(上巻所載下同)

○四十九番永かれ

タシ「やんれ永かれと思ふ其夜は短うて、ツク」ゑい晝

寐坊はいらぬ下手の長談義、されどお聴聞は有がと
うて、殊勝で煩惱菩提、さらし即涅槃ゑい、善悪不儀
と聞からは、八宗九宗に隔なく、人の心は唱經に催し
さシ「ひとり寝の長枕、ツク」きりても捨よかや南無三
寶、いゝや待てしばしのゑい、ふたり寐かしよとのゑ
いさまかや、シ「こぬとてややつとこちや、枕な投げ
ぞ、ツク」投げぞ枕にゑいよゑい、さらさ答はとがも
ないぞゑ、

○五十番櫻揃

タシ「やんれ鶯が聲にひかれて見ればみしツク」ゑい花
なりけりや初櫻、くるゑ、春に又咲出る、花の錦の糸
櫻、彼岸ざくらに普賢草、ゑい御法の花とも云つべ
し、大山人に薄ざくら、ゑい色よき花の枝に枝、一重
ざくらに八重ざくら、花を風の吹時、といてちらすな
かばざくら、ゑい花なき時の鹽がまは、濱で見事な櫻
かな、小夜ひめの小ざくらの花をもりいやなるか、姥
ざくら散をくやむか咲かねて、いつも盛は遅ざくら、
咲ときは花の敷にはあらねども、ゑい散るには洩ぬ
山ざくら、老をなぐさむ花見の酒宴、うたへば心も若
木の櫻さ、シ「よし野の山をゑい、雪かと思れば

さ、ツケ「雪ではあらで花の雪吹じやの、ゑい土産にッ
「花は折たしの木は末若木、ツケ「離れがたなきざんざ
木のもとさんよる、

○五十一番鹿島(上巻所載ト同シ)

○五十二番五十三次(上巻所載道中くどきト同シ)

○五十三番進かすり

※シ「阿州の國ではゆのつが名所よ、ツケ「ゆのつはし
りで、一里南を眺むれば、ゑいじやうらく寺を伏
拜、そのやもふずに、桂川とて都大工かや建や置れし
水車、半町ばかりは、たがひちがひに、くるりくや
あ、くるりくやと巻あぐるや、水のはいきにこゝろも
すいしき、左表を眺ればゑい、ちうてん松原櫻馬場を
打眺め、やれ色松もふさは赤黒松、御代の松とて三
本ござりしがのそれをかたどり、御代は末代よのほ
ほんうれしか、

○同

※シ「川じやくよ是川下は、淀川大和川山城川とて
ツケ「昔由來の川なれば、行と戻れども渡ればちよろ
ちよろ川や、橋の其下こますなよ、小石ころりんころ
りんくよと巻上ぐる、川下さがりて流れおふ、つるは

おふ、つるくよあぶないよの川下は川、

○五十四番ちよきがすり(上巻所載ちよきト同シ)

○五十五番平がすり(タシ不同)

※シ「目出たのまたのいよほんくよ若松、ツケ「枝も
榮る葉も繁る、タシ「よかれくよなかなりかん、
女郎よければまたのいよほんくよひ、ツケ「こひも
言葉も品やかに、

※シ「あら面白や三十三間堂の茶やがうちにはや、さ
いつさくれつ、まいれやこのこせうしゆ、たらまんだ
ら福徳ひんする辨才天皇、なかにもござりますよの、
かゝなりかん、女郎よければ、またのいよほんくよ
ひ、ツケ「こひも言葉も品やかに、

※シ「遠近寄せる浪よせくる波に、千鳥がゆられた
たとさ、かゝなくよんとりなくまいと、またのいよほ
ほんほとよ、ツケ「ないて後には時鳥シ「うらの書院の
小松の小枝に、百舌鳥がとまりてなきりりんやきり
きりくよともなかななくよんとりなくまいと、また
のいよほんほとよ、ツケ「ないて後にはほといきす、
※シ「都順禮が御伊勢へ参とて、下向のおりからふん
しや、伊勢の川上は四十五里、奥なる松の木からこ

ろ散、ゆれたらふんつるゆれたらふんちりするてれ
て、聞入りんか、女郎や順禮かの、いよほんほ足ツケ
「足をやらいて連を待、するくよとも行きすてな、
※シ「狭細道でもとのふるくよ、つまにおふたとなか
かみめ、かん女郎よければまたの、いよほんほこ
ひ、ツケ「こひも言葉も品やかに、
※シ「志賀のお寺のやぶれ小鼓は、はつたかはらぬか
生かわで、うつたか打たぬかかふうてとシ、かゝうて
と音もせでの、いよほんほ夢、ツケ「夢にあだ名もよ
もたゝじ、

※シ「所にきこえしはの志賀の唐崎なる、ひとつや二
つの松の木、からころしやかすりもちりゆかんだ、
松の木からころちりゆれたらふんちりするてれて
聞入りんか、女郎や順禮かの、いよほんほ足、ツケ
「足やらいて連を待つ、

※シ「早ま通ひの六挺、小早に船拍子を揃て、あさのお
まいのさんほがせとをも、小室こひしきとなうたふ
てなのりてこぎやるは、ゑい此こんやくしに小娘さ、
こせん女郎こうさんかゝりか、こんころ松にこんち
よろへ、かつかつはかつになつなはかくはすんへ

の、いよほんほろでツケ「船ではやらいで唄でやる、
シ「我はひくくよひくならば、山下じや木の根もかや
の根も、里へ下りて内の嫁御もたの草も、おかたいた
つまりんず細帯さらりとなげ、いざや若衆達寄せや
集めて、おれが音頭で鼓太鼓にしよに羯鼓に笛鼓、け
れけんにからころちやうらひららたんほ、
ゑいやさらりやささんくさ、ゑいそれくくひ
くならば、ひかば靡きやるまいかの、いよほんほ
枝、

ツケ「ひくに靡かぬ草もなしシ「するくよとも行や過
ないまはてき女郎、おまへさまの國名を申さば、扱在
國は中川、奥なる檜出格子の、瓦葺の隣の小糸の小娘
さ、姉は妹より心よし、じやのかかみめかん女郎よけ
ればまたの、いよほんほこひ、こひも言葉も品や
かに、

※シ「淀を下れば橋もと磯島、扱はもりくちよの、備前
やら島のまいからのほほん、殿は此夜船によ下
りに、またのいよほん不召ツケ「殿は車で都まで、
タシ「九州九ヶ國番東八ヶ國、五畿内五ヶ國、橋はさま
ざま數多ござるが、二度の御陣にやゑつひいつひか

れつひとつも残りし、いや住吉様のな、神は四社の
ん、此おまへにまたのいよほ、んほそり橋、

ツク「誰か掛ケつる橋なかぞりにタシ」新宮北山茅原中
なる松木柱に墨打て、てうの掛たるかな角四角かく
柱に、またのいよほ、んほかどツク「かどのないこそ
すへよけれタシ」おちよほちよほ、さまは形はひ
よどりげんじか盤若か、扱は二疊敷のなお伽とき
くしゆかいな、か、なりかん女郎よけれ、またのい
よほ、んほこい、

ツク「こゑも言葉も品やかに、
タシ」京の三條の河原で、十や六七が、袂ををくとか
いからげて、腰にしなをやつて、ふつてふりくたて
てな、か、晒す布、越後布ならの、いよほ、んほしろ、
ツク「殿を待つ夜はちから帯、

タシ「此度此度肥後守の御内なるや、子に誘ふれて、
熊野の山へ参りた、新宮七里八里九里や十里、奥なる
山から谷から、あれからこれまで、ゑいやさらりさ
ら、ゑいさらつとそろ、引出したは松の木の大木じ
やが、もとが七抱半で、長さが三十三尋の、根じきの
筋木のゆがみ木で、いかなる上手な抽山大工も、是角

に消ともこりや角にはゑなすまいとな、角四角かく
柱に、またのいよほ、んほかど、ツク「かどのないこそ
すへよけれ、

タシ「なんのなか、さなのな、消十郎戀にすりや、き
みけんくるく、またかいかいおしなや、音すれ聲
すりや、さい六ッかすつへりするとも、こうたりうた
いこて、れすねしきりきさ、さい六かちりするとも、
我等が若ときや、戀とも忍ばれたるかな、か、なりか
ん女郎よければ、またのいよほ、んほこひツク「こゑ
も言葉も品やかに、

タシ「しよんなしよなぐり坊主が、檀那の方にてあき
経讀とて、けはなついてゑいよむは、なんととなか、
をほつんか、あすから檀那にやおらいやじやよの、
いよほ、んほ御所、

ツク「しげくござれば名もた、じ、
タシ「女郎たよかれ、な、こわきに見てあれば、おん
目めとにころりんく、ころかしやるさなり、かん女
郎よければ、またのいよほ、んほこひ、ツク「こゑも言
葉も品やかに、
タシ「よかれ、な、か、なりかん女郎よければ、

またのいよほ、んほこい、
ツク「こゑも言葉も品やかに、

文化五戊辰年五月

右御船唄五十六番(一不)番者向井將監以秘書竊正書
寫畢

都合八十九番也

文化十五戊寅年四月十五日 中根正映

御船唄留卷下終

吉原はやり小歌そうまくり

○さかなはうたづくし

- 一 ゆくすゑ廣き武藏野の、廣き惠のく〜おりなれや、
- 一 まきの戸よりて、明石の月を見つ人心、天津乙女の隔てなく、思ひ思はず物語り、長き夜すがら幾秋も、
- 一 くるく〜く〜とめぐり合ひ、はやよのさまにいつか逢瀬の浪枕、
- 一 あめが下皆うるほひて、二葉の松もはるそへて、千代の初に〜、
- 一 君が代の久よかるべきためよにも、かねてぞ植よ住よこの松、
- 一 山鳥誰を恨みて墨染に、淺き契に相馴染めて、中々今は中々に、
- 一 人買船か恨めしや、連も賣らるゝ身じや程に、靜に漕ぎやれんたとの、
- 一 昔見し月の光をしるべにて、今宵や君にし行くらん、

一 淺き契に相馴染めて、中々今はすむまじきぞ我ころ、

一 あの君さまに久しうて見れど、白玉椿色もかわらぬよ、

一 あの君様はなめの木の育ちゆなれど、落ぬめなしの木よ、

一 情の花は逢ふ時ばかり、別れになれば萎れしほるる、

一 昔も今も戀する人は、身につまされていとしう御ざるよの、

一 十五や六の坐敷のかざり、芍薬牡丹庭のかざりよの、

○あふみかはりぶし

一 これから見れば上野が見ゆる、湯島淺草隅田川、あらしにつよく笠かうてたもれ、うるの編笠を、

○れんぼのかはり

一 君は五月雨思はせぶりや、いと焦るゝ身は浮舟の、浪にゆられて島嶼千鳥、れんれれつれ、

一 夕べ〜に身は淺草の、露をふみ分けあの吉原に、しどろもどろと君ゆへたどる、れんぼれれつれ、

○一節切

- 一 よしの、山を雪かと思れば、雪ではあらでこれの、花の吹雪よのこれの、
- 一 なれ〜茄子、背戸や茄子、ならねば嫁の名のたつにこれの、
- 一 君があそばす尺八を、其名は誰かつつけらん、一よぎりとは恨めしや、千代萬代の代をこめて、心のたけはかはるなよ、ふしく〜鳴れば名のたつに名のたつに、
- 夢の通路ひらく〜すし
- 一 一人の身を、露の命といふ事は、つるには野邊におけはなれ、もゝのこび有る姿をば、けふとけのらに捨てられて、からは浮世にとまれども、こんな冥途にゆく道の、あら淋し此旅の空、誰に問はまし道芝の、露か涙か恨めしや、とは思へども二世かねたるしるしには、憂きも幸きも君と我、同じ冥途の苦しみは、ともうけへは恨めしや、
- ほそりつくし
- 一 ほそりのやれでこ、ころは大和の壺坂、其節なをすな美濃のたにぐみ、おしやればまことに、のふさて

美濃のたにぐみ、

一 われも他國よ、貴所さまも又他國よ、たへがい違に、のふさてお目をくださアリよ、おしやればまことに、なふさてお目をくださりよ、

一 城の御門で今朝見た、又若衆は筆かな墨かな、のふさて硯、

○ひきよく

一 天下泰平長久に、治る峯の松風、雛鶴は千歳ふる、谷の流に龜遊ぶ、

一 桐壺の更衣の、比翼連理の契も、定めなき世のならひとて、夢のうちぞ悲しき、

一 たそや此夜中にまされいた、戸をた〜くは雲井の雁金か、水雞のつくる聲々、

一 恨めしき我縁、薄雪の契か、消にし人の形見とて、涙ばかりや残るらん、

一 行くれて旅の道、浦ぞ淋しき浪の音、歸らうと鹿のなく聲に、我も夜すがら泣きあかす、

一 武藏の野邊に月の出べき山もなし、町よりいで、町にこそ入れの、

一 行平の事を松風に問へば、村雨ごとに涙ばかりよ

の、
一あの君さまはいなりの紅葉色、薄けれどはまにふ
かくきの、見れば心もさへくくと、

○すいむし

一恨めしの鈴虫松虫、なくべき原ではなきもせで、君
さまとわれとの間を、きれんやきれあれきれき
れ、ちんからころりと鳴くの憎さよ、

○葛の葉

一我戀は葛の裏葉のきりくす、恨みてはなき恨み
ては鳴く、

○人目の關

一思へども人目の關にとめられて、心斗通ひきぬら
ん、

○ばうの津

一名の立つ惜さに出て見れば、庭の雪にあとあり、是
こそ形見よ、雪消なく、
一ばうの津の中の妹脊はかはるとも、君もかはらじ
我もかはらじ、

○かたばちかはりぶし

一方ならぬ思ひをすれば、枕も開けよ夜こそ寝ら

れね、

一さす盃は三世の奇縁、二世まで契るさす盃、

一短夜の月よ、語りも足らぬ山ほととぎす、初音戀ひ
しや、

一あこがれて我はさきよの花よ、情に一夜宿をかる
かや、

一夢の間のうき世死んではいらぬ、お情あらば命あ
るうちに、

一あらなつかしの松虫の聲や、聲きく度におりん戀
ひしや、

一つれなき君に相馴染て、浮名は龍田思ひ深草、

一恨みのあるも思ひのあまり、思はぬ君には恨みな
や辛や、

一空飛ぶ鷹は常盤へ行くか、我等も故郷都こひしや、
一破れた橋は渡るが大事、主あるさまを引が大事よ、
一寺々の鐘は撞きても鳴るが、縁つきぬればならぬ
ものかな、

一見れば見渡す棹さしやといく、なせに我戀といか
ぬぞ、

一聲は聞けども姿は見へじ、君はふかみのきりく

す、

○雲井のろうさい

一文はやりたし我身はかゝす、物を云へかし白紙が、
一思ひ捨つるな叶はぬ逆も、縁と浮世は末を待て、
一花は散りても又春吹くが、君と我とは一ざかり、

○吉原かはりぶしのり

一花を芳野と見る人の、戀路に迷ふさんやのはて、情
に思ひ染め川や、末を高瀬と聞くからに、同じ初瀬
の浪枕、君諸共に稲葉山、まづかへはなの藤波や、
かはち八橋おりを得て、われは思ひにやせわたる、
わかれく泉の玉川や、さればせんじゆの誓にも、
枯れたる木にも花さきや、わかさは二度と無きも
のをと、何歎くらん思ひあかしやと、御利生あるこ
そ嬉しけれ、めてはわか山せいしゆの君、げにや誠
に千話事の、ころはよし田のなりのすへ、心の定家
家隆のもとに行、日頃でなれしはやり歌、参らせ上
させ給ふにより、三味線などにのせられて、ながう
た貫く玉葛、掛てぞ頼むと思ひしに、西をたがせに
薄雲や、さこそ紅葉出ぬらん、あゝ面白や、焦がれ
焦がるゝつしませんじゆ、いくた坂田のかりぶし

○かはり美人揃へ

一まん代とも千代の代ながし松前の、縁の若き常盤
にて、岸の藤波濡れく、こむらさきそふ花の香
を、初山吹の花衣、こよしのかはる一ふしに、離々
の忍び戀、敵に語るなわががいて、やしを山いろお
もはく三味線、ぬしかづの恨みの玉葛、たまかに見
ゆる外山のだけや流れん、泉なる深き姿玉川や、た
かせの浪と成ぬべし、西を遙にながむれば、相摸せ
んじゆによし田の里、きよ原高をいなば山、正つね
坂田生田のもり、吉野初瀬に花さきよ、河内に八ッ
橋かよを花、花のさそふほととぎす、あたら初音の
とがは告ぬぞ恨みなり、こがばいさく、こがば浮
れんつしま舟、うかれてさんやに着にけり、
一源氏狭衣あやめもいやよ、君の姿を花と見る、
一君は照る日かわりや降雪か、見れば心の消へく
と、

一思ひ出す夜は枕とかたる、枕もの云へ焦がるゝに、

一 表みじかの更紗の小袖、恨みながらも着ておよれ、
 一 枕屏風に書き置く程に、戀しかるときや起て見よ、
 一 すくぐまいもの形見の小袖、馴し昔が薄くなる、
 一 神や佛を恨むは輪廻、過去の因果に是非もなや、
 一 君を見たさに行きてはかへり、何の因果の末じや
 やら、
 一 夢に見てさへそさまの事と、はらと泣いてはきへ
 ぎへと、
 一 逢ふた其夜の明六ツ鐘を、まつりかへたや暮六ツ
 に、
 ○ かぶるおもわく踊
 一 思ひ別かるゝ其曉は、とりもはらくわれもなく、
 一 涙で曇る今宵の月は、思ひしやまの晴やらす、
 一 袖の振合せさへ他生の縁と、聞くに泥んや枕を並
 べて、打解けておいて、思ひし事を今語らひで、ま
 たも逢瀬は不慮でそろ、
 一 月日かけてかわらじと、契りし中をくやしや、ます
 花あれば見捨らるゝ、
 一 浮世にうつろひやすき君は恨みぬ、數ならずなら
 ぬ身ぞうらめしき、

一 あらしの外に友呼ぶ千鳥、君呼びかへせ小夜更け
 ぬ間に、
 一 としたけて見るも二世までの契り、幾千代なれや
 小夜の中山、
 ○ かはりぬめり歌
 一 君が来ぬとて枕な投げぞ、投げそ枕にとがもなや、
 一 狩場の鹿はあすをも知らぬ、戯れ遊べ夢の浮世に、
 一 千早ふる神のまへての鈴の音、神樂乙女のさつさ
 つの聲、
 一 衣紋つくるひ通へども、相見るとは程を経て、逢ふ
 は優曇華嬉しやな、
 一 見ぬ返も夢うつゝとも思ひしに、いま見こがるゝ
 そもじなるかな、
 一 誰初めし戀の道、如何なる人も踏迷ふ、秋の夜もは
 や明易や、獨ぬる夜の長の夏の夜や、
 一 名には似ず自波たてる隅田川、見ても見他かぬ吉
 野ざくら、
 一 みしやう以前が遙かにましじや、なにの因果にし
 ばへ来て、
 一 すくぐまいもの形見の小袖、馴し昔が薄くなる、

一 てんと八幡此上からは、立つや浮名は無にせまい、
 一 うつゝか夢か幻の身を持ちながら、遊べやうたへ
 酒のみで、
 一 浮世に住めば思ひの増すに、月と入ろやれ山の端
 に、
 一 ちらりゝと花めづらしき、雪の振袖ちらと見そ
 めしより、今は思ひの種となる、
 一 菊のませ垣ゆいたてられて、今は中々すいらぬぬ、

右此歌は直之以正本令板行者也

江戸さかい丁

中島屋伊左衛門板

津村節

津村半九郎ぶし色くどき

○水づくし

地若水のとしの初めの御嬉び、不老不死の薬水、かめ井の水の萬々歳こそ目出度けれ、其上佛の説きし法水にて、愚痴無痴の泥水などを救はんために、砂糖水のおまき教を説かれたり、されどもこゝに地獄の使と聞こへたる、女のはぎのしろ水にて、真如のうちはにこり水、行く水の數かくよりもはかなきは、思はぬ人を思ふものかな寒の水の、解けぬ心が憎ござる、うた軒の玉水とくくござれ、しげくござれば人がしる、地行てはかへりかへりては、また行き通ひしに、人の氣をくむ井戸水や、いつの頃よりなれそめて、逢ふ夜はとけて雪の水、君と我とはびん水の、またいつの世にか逢坂の水、あいの山ぶし山々の谷の清水は、夜毎に落つれど名もたぬ、地泥水のわれは、一夜でゑごすかゝり水の、とても濡れたる袖じやもの、とうし九條の尼寺の水で、一期さるまいとの誓詞をかゝ

れて、灰にもやして關御井の水よ、瀧の水にてうたりよば、一生外へもらすな漏さじと、心涼しき糺の水よ、おつときたくわかさの水よ、うた水はでくくるな、しんくのく、わかさの水よ、しほ水のあ口したるはめづ口にて、笑ふるくぼになたまり水さ、

○くさばなづくし

地もの、名も所によりてかわるなり、浪花の草は伊勢の濱萩、されば江戸にさんや新吉原、京を島原さて大坂を、ひさごともいふ瓢箪の町、これを合せて三國一じや、戀になりすましたシャン／＼、しやんとたちたる面影の花、ことに其名も逆の池に、しげるあやめの花紫の、深き色香に心をよせて、これぞ此世の美人草なりと、見るとわが氣も浮草の花、散らぬさきにと硯をよせて、かすの玉章はやかきつばた、はぎのさつきとふたりはこゝの、口なるほど水仙花なる、禿ひそかに口口ふとよんで、きさま頼むと背中をふわと、うつない手で撫子の花、あいうけとる言葉の花も、さす所ぞ氣も刈萱さ、筆のすさみもにくからざりし、かへし見るより身もふるはれて、心いよ／＼石竹の花、けふはあをいかあすは葵かと、日ぐるまにかよ

ひ、君とわれとが其中々は、もはや連理の枝もつれあい、芥子のすけとて子までまふけ、朝はあさがほひる女郎花、牡丹芍薬菜種によれる、蝶か花かとそだつる中に、口はさがなしわきより人が、けいせいいくつの子とな名のたつにさ、

○髪づくし

地ふりわけ髪、昔男にあらねども、戀はしがちとぬれ髪、風になびくかやなき髪、たをやかなりし姿を見ては、たがたまのをもちいみ髪、かなわぬ戀のちから草、うたにかたむく烏帽子髪、涙にくれてかく文の、山城のこわたの里に、のり馬髪はありながら、君を思へばかちはだし、待かねる身を忍べとて、相圖の帯をさげ髪、寝亂髪の睡言に、いまのまことをそへがみと、心の底をあらひ髪、はやきぬくのうつり香残すにら髪、わが黒髪も白髪までと契りしに、世はさか髪

○町づくし

地あさましや、人げんのめぐる間は二十五うん、たま

たまうけがたきしやうをうけ、今この婆婆にきたはま、隨縁真如の浪たゞよふな町、あとひきかへすかぢき町、妄執の煙をかづく尼崎町、發生のしなさま／＼の浮世小路をふり捨て、たゞ一心に悟を開いて、佛になるはしやうにん町、しばの庵に世を軽く、草の枕にふしみ町、ふがくふもじは十ツとくにて、皆せんもんのだうしゆ町、冬は鼠の薄布子、夏はすいしき平野町、なげぶさても地命はもろき水の淡路町、旭にむかふ秋霜の、とけて流るゝ瓦町、すてし古郷は備後町、願ふやさきにはすれずば、六字のまとの安土町、ろん論しやくちうやかた書は、みな新板の本町、貧にをこんのならざれば、たい手のうらの米屋町、がくもつくるもぶつぞうも、渡りしもとは唐物町、上りまだいとけなきわが孫の、地久太郎町に手をひかれ、參る御寺は久寶寺町、つくりし罪の報もこわしはくろ町、ひんによの尼の順慶町、一燈の光かゝやく安堂寺町、功德は廣大無邊にして、世界にみちる鹽町、此世は假の宿とかや、佛の國のありがたき、無量かうとて長堀、誓の綱にもらさで救う鰻谷、さて魂棚や魂經や、手向け

にむすぶ清水町、さては施餓鬼に大寶寺町、それうち
過ぎて、墓のゆふべに参りて見れば、無縁堂には群集
して、かはりくになかねうてばな。

○宮つくし

地心だにまことの道にかなひなば、祈らぬとても、神
の徳こそわが君が代に、花はなけれど名は住吉の、岸
のひめまついくよを重ね、阿倍野過ぐればはや大坂
の、清水見おろすやするの社、西の海づら見て生玉
や、神も繁昌所もさかへ、葦の片葉もそよ／＼にし
を、なびき／＼て蓮池すしし、蓮華色よく咲き亂れし
は、今はきのふの昔と聞けば、あすは必ず高津の宮
居、すぐに稻荷と伏拜み、天満天神北野の社、西にと
をときさく花さかる、いはら住吉柳の枝に、よれつも
つれつもつれつよれつ、御殿の社、さては難波の稻荷
といふは、むかしながらのも、しきなれや、座摩の神
樂の笛すい太鼓、三ツみつ寺、てんと八まんかごやり
ましやう、かごやりましやうとな今宮へさ。

根本半九郎おし

大坂ばくろう町中橋かど

つむら長左衛門直のうつし

池田屋徳左衛門板

今道 都踊くどき

きん上神おろし おどりくどき
ふしみもろこし おどりくどき
曾我箱づくし おどりくどき
おちよ青物づくし おどりくどき
中兵衛 夕霧阿波の鳴門 おどりくどき
中將姫開帳 道念ぶし
奈良土産みつ足おみつ心申
戀のみだれ髪 おどりくどき
浮世枕づくし音頭くどき
怨靈のうた 祇園町はやりうた
戀の車づくし おどりくどき
元服曾我
天狗ぞろへ おどりくどき
好色あやつり女
かわり世話づくしくどき

今道 都踊くきど

○きん上神おろし おどりくどき
加茂に上下大明神、稻荷祇園に松の尾のまつこのしよ
大明神、龍田は此花さくや姫、後家は物すきさく
卯月、卯月八日は花より團子、ほんにまことにせん
だんご／＼ゑ、住吉四社の大明神、天満は天神彌三郎
があとめでんするほ、高津生玉大明神、七不思議とは
龜の井の、千代に八千代を、昔のむすまで目出たさ
よ、かげも山崎岩清水、左手は八幡の八幡宮、たかき
お山に愛宕山、さがれば火打の権現かや、うた「愛宕参
りに袖をひかれた、これも愛宕の御利生かや、おもし
ろや有がたやな、釋迦はやり彌陀は導く一筋に、こ
こを去る事遠からじ、濁らぬ御代は清瀧の、淀の川瀬
の水車、くるり／＼／＼／＼またくる／＼／＼、きん
り／＼たよ／＼と、浪にもまる、川柳、うたひしだれ
柳は風にもまる、都の牛は車にもまる、と／＼と
どろきの、五尺手拭節「橋をいよこのかけやれ、橋を
かけやれ舟橋を、げにまこと忘れたり、近江の國に

日吉山王二十一社、さるは山王まさる目出たき、いは
猿聞かざる見ざる目元に、とんとすとんとこけざる
がおとろはとも、浮世ぐるひぞ面白や、うしろに高
き比叡山、王城の鬼門のまもりつゝ、悪魔を拂ふ雲水
の、誓あたらにましませば、此度の物の怪を、平癒な
さしめ給へとて、肝膽くだいて祈る印のあらありが
たや、今は心もうきく〜と、しかもほうへい諸共
に、たわむれ遊べる。

○伏見もろこし おどりくとき

上京籠、あだし世の、人の心は仇なれや、なをしうつろ
ふ花の色、梅が香をともし、谷より出で、里なれぬ、
禿そだちの昔より、通ひきなれし戀衣、袖よりも
る、我思ひ、只一文字屋に圍ひおく、もろこしといふ
名にめで、はる〜こ、に東福寺、思ひなしかは知
らねども、長くも渡る竹田川、いと〜思ひは深草の、
うつら〜の小夜更で、稻荷のおがむ藤の森、われと
笑顔のゑびす町、鴛籠も程なくつきしかば、みすを揚
屋の箱梯子、のぼる浮氣の亂酒、一聲二節三筋の糸に
はり上一ふしを小唄、つらひ〜と思ひはすれど、顔
が見たさにあこがれて、來たをソレナそうとはしら

で、よしやよそに移らふ濡衣なれど、色深くも思ひを
めたエ、夕ぐれいそぐな床の内、深き思ひの移香を、
今一たきとす、むれば、せうもうだきに次ぎせる、吸
付煙草立煙、よれつもつれつむすば糸屑の、戀に染
たる色目をば、さがなき口にかける、親への聞え
あし引の、山だちともならざれば、せめて便をヤン
ソッハエ、たよりくるわのわたりにて、いやしきしよ
さにさまをかへ、人は何共いはへへの、ゑりの薄きは
剃刀の、はのあすの夜も又の夜も、く〜物と思ひ
寐の、いと〜思ひは増鏡、見ればおくれ毛ばら〜
と、さつさ時雨のな薬屋の霞、音もせで来てふり心、ふ
るは涙かわが思ひ、しがらみかけてせく袖の、なき面
影の今は、や、是非なくわびて墨染の、萬日寺のじん
せうを、聞きて心がほそ〜と、思ふ伏見を恨みつ
つ、いつそ此身は死出の山、しもくで鐘をた〜き上、
涙ながらに廻向して、口説き事こそあはれなれ門説經
「み山ながくれのおそ櫻、花はちりても又もさく、鳥
は古巢にかへれども、二度かへらぬわが思ひ、たかせ
につみて行水の、大坂ぶしにのせられて、大坂籠、ゑい
ゑい〜昔語となる唐土の、ことし十九のまだ春の

花、盛りすぎずに開きもやらで、比は二月末つかた、
命まつこの死日を極め、廿八日夜のあけ方に、終に平
兵衛が手に掛り、伏見の野邊の朝露と、消えて思ひに
沈むる。

○曾我箱づくし おどりくとき

京ぶし、たはむれ遊べ世の中は、世話を忘れて雀百、お
どる心が薬箱、箱根の寺の兒の名も、箱王といふわん
はこもの、學問心にそますして、頑箱さへふみくだ
き、あら〜こと箱しならいて、刀箱をばこしらへて、
しやんと小腰にはさみ箱、うちかの少將が文箱が、戀
といふ字のはし箱と、なつて廊へ通ひ箱、かね箱もた
ぬ大盡も、いきかた一ツの千語箱に、間夫とよばれて
くらがりに、ちよつと假寐の屏風箱、しのび〜に扇
箱、かたりつくさぬみじか夜も、あけてくやしき玉手
箱、すいてしんじよのくら箱も、門説經、みだれ心や亂
れ髪、とけぬ名残に泣きはがす、おしろい箱こそ哀
れなり、後のあしたの筆箱は、過しごげんの嬉しさ
の、かほりは残る香箱に、くゆる思ひをしきし箱、
三かつ籠、ちや箱ひくのもこりや君ゆへと、契る言の葉
本箱ならば、百夜通ひしたためしあり、あすの夜もござ

れゑ、

○半兵衛青物づくし おどりくとき

京ぶし、夢うつ、うつぼのなりのやき鹽と、からき首
尾あひ抜けいで、かたにかけたる毛氈を、染かんで
んと入や見ん、さし身とならん身の果を、心いり酒い
らたでに、うち命も今宵一文字の、名残の鐘をきくら
げに、まだあさつきの干蕪、ちらり〜とみつぶき
に、移る影さへとめかぬる、門説經、としはさ〜げの嫁
菜をば、いつをナけふとも思はせず、姑に心をつく
づくし、青梅好む腹帯も、とけぬ思ひと茄子かと、う
と〜悔むもあはれなり、一、目見つばの頃よりも、
ほうれん草とつてたのみ、ふばこに入れしまきうば
の、ふでくりかへし〜、わさびとしたるへんじを
ば、松たけの香をしいたけに、くさの枕はにくから
で、海ぞうめんの底までも、根深とかわす契りさへ、
うた、とても此世はかりきにて、ありとも見へぬほう
さいの、せめて未來は蓮の上、何のはぢかみいといな
く、救給へや浮世念佛、南無阿彌陀、なまいたんぶつ、な
むあみだ〜、すいきの涙と諸共、なくは冥途
の鳥かる。

○夕霧阿波の鳴門 おどりくとき
戀風や、その扇屋の夕霧も、秋の末よりふらくくと、額をくくる紫の、ゆかり藤屋の伊左衛門、うさんらしくも吉田屋の、かどに紙子の大へいも、七百貫目のなれの果、清十郎、じたいそれがしは大坂の生れ、ちいとこそなふてこんななりになられた、地、奥の坐敷は阿波の客、あはと鳴戸の金銀を、砂の如くにまきちらし、しこなし顔にひんとして、ふつてふりたつ夕霧が、心も知らず伊左衛門、迦陵頻迦のおん鳥と、人の實はないものと、むつと顔にて立歸る、袖にすがりて夕霧は、恨があらば聞きませふ、子までなした中なるに、まだ傾城じやと思ふてか、門訛、ほんのナ夫婦じやないかとて、身をもみなげ、ば伊左衛門、恨みはれゆく月の宴、揚屋夫婦の才覺で、里の世繼をとり戻し、勘當ゆりて夕霧の、身請もときに扇屋の、末廣びろの御祝言、千代の松坂こゑたる、

○中將姫開帳 どう念ぶし

修行した寺の御開帳、貴賤群集の絶間なく、京の上から下のはて、中將姫のおすきとて、殿の餅もねり供養、けふの菩薩の音楽の、音もてんつくでんがらく

と、雷どのもお不動も、茶屋が家名を豆腐酒、御經に巻た猿の焼で、一ぶ八くわんもうけつ、こまと楊弓大當り、見世物市を飾りしは、かの義經の鳥渡、これにはいかでまさるべし、中で美人と夕顔の、花のお光は三ツ足で、にくやさ、げとおない年、小野の小町に楊貴妃の、片足損した如くなり、こゝに戀路を四條なる、およそ世界の野暮太郎、鳥羽繪うつしのまれ男、ちらと見るより鼠鳴き、大振袖をひきがへる、君をば送り狼で、わんと一口くどけども、のふこわやとて三本の、足に任せてにげかへる、野暮はいくばくだまされて、いで此無念はらさんと、手せいで用意をしたりけり、まづ大將の御出立、肌には麝香の腹巻に、がらん鳥の鍔着て、兩頭蛇の上帯し、蛇頭の中を着、どうも云はれぬをし鳥や、せつば造の太刀をはき、唐獅子と名付けたる、あらくまのから駒に、めい、鳥のさしものを、山嵐にふきそらし、りすのさいをふり立て、真先かけて出ければ、あとより續く猪武者、やまかづきのあばれもの、あつばれ手がらをしやうくと、さしまふた亂れ足、備前の國の徳利子、おなじく舎弟狐童子、浮に浮いておどり出で、きやつめをとつてお

さへたら、餘でおかじとぬめりゆく、世は萬年の龜ばらや、富士山の大雪も、うらが力でけし介、三ごく一がんどうじ丸、瓜の蔓にけし介、せなかにばけぬ六字丸、にんぎょう輕業大女房、都合其勢うそ八百、矢倉太鼓を打たて、鶏合せの時つくり、錢は戻りとよりければ、今はおみつも叶はじと、かの三本の足早に、ほんふ都の假名、いなば因幡の國までも、おつかけて行くべきと、尻焼猿の身もだへに、こびんをかい

○奈良土産三ツ足おみつ心中

音頭、月夜の鳥ゑいこの、今度奈良の大佛堂供養に、老若男女参詣す、貴賤のゆき、の人、旅がけの芝居なる、見せ物あまたの其中に、三ツ足の娘こそ、奈良で心中したはとて、奈良の京は扱置で、都の評判とどりなり、参詣しゆじうの道すがら、話を聞ば笑止やな、猿澤の前の町、つき米屋の助九郎とてありけるが、ひとり娘のおいとこそ、こ米の時より育て上げ、きりやうすぐれし生れつき、美人といふも愚かなり、たとへ繪にはうつすとも、筆にはいかで及ぶべき、見る人聞く人心をかけぬはなかりけり、文玉章をぞ通

はしける、助九郎此事を聞くよりも、しよせん縁につけんとして、おなじ町なるなら酒や、吉三郎と名にふれて、きりやうは此世にまれ人の、角前がみの戀ざかり、おいとが婿にもらひかけ、おいとを養子の約束が、兩方の親達盃すんで、婚禮の道具ごしらへ最中なり、吉三は堂供養寄進の手傳に、袴を着し毎日出けるが、いつの間にかは彼三本足のおみつに戀心、互にかはるなかはらじと、くち木のきやらよ、たとへ死なふと生きやう共、縁のきづなは切らぬぞや、わしが男じや女房じやと、互に起請を取かはし、水洩らさじの其中に、吉三の祝言目を極め、今日よあすよとありければ、戀にはさわりのあるならひ、吉三は心亂れ髪、おみつにかくと知らせける、おみつは涙のせきくるは、心はうとくうとろ米、氣も村上の三年米、馴染をかけし其中を、るんのつき米悲しやな、吉三さまをば米ふみ付て、ようし娘と極めさんすは、わしが心をかますに、いれて、おさめ米になります、かけすじの心中のほどは、つきぬきの上白米の讃岐米、むまい娘と目利をさんす、うた、どうで女房にやもちやさんすまい、ひねな事じやと思へども、わしがこなさんもち米と、思

ひしうちちに氣の毒や、おやぢさまにひいひい、わしとの縁はあき田米、養子娘は百兩の小判、遣ひかねとて敷金もちて、くるくくる心、わくくく、おいと来るならば、もはやわしらはならざかや、此手しゆびのあさましければ、生きてかいたなき身の果を、思ひ定めて候ふぞ、と涙ながらに立出る、吉三は袂にすがりつき、そさま死なせて物思ひ、共に消へんと歎きける、おみつは此よし聞くよりも、さては左様の御心中、忝なき御情、來世で長くそひません、必ずかはるなかはらじと、二人手に手を取くみて、猿澤の池へ歩み行く、心のうちこそ哀れなり、くどき事こそ悲しけれ、あうけ難き躰を得て、いつを今日とも思はこそ、あそこやこの開帳場、萬日法會の人達に、面を晒すのみならず、旅の空なるうき身を、いかなる因果の報來て、かたはといひやいはば(忍)といひ、此心中は何事ぞやと、流啼こがれて泣きければ、音頭「吉三は時刻今なりと、死出の旅路のいそぐ道、念佛もふしや、南無阿彌陀佛」と、すでにあやうき所へ親達聞つけ、すいた娘は女房にもたしよ、かのおみつをば嫁にもらうて、二人のしゆじう連て歸りて祝言あつて、堂供養の其

中に、はや子が三人出來ました、大きな出臍じや雷に、用心めされと話を聞は、是はまことか中々まこと、看板出しても偽じやぞ、あちらでもこちらでも、嘘をつき夜の鳥ゑい、

○戀の亂れ髪おどりくとき

京ふし「戯れ遊べ戀風や、ぞつと時雨のぬれ衣、其名をあげし美男草、花と呼ばれしこの身をば、今は浮世の亂れ髪、めうがと呼びし戀中も、皆仇し野の草枕、きのふと暮れて今日と過ぎ、ともに涙の増鏡、ありし其夜の戀衣、あなたの盃こなたの玉章、輪廻の花は散らすして、聲おかしくも拍子とり、いろふし「小唄祭文一ふしに、なづみし鹿の戀衣、紅葉をしだく笛の音に、女をつなぐ男山、はあのほればアさつ、くだればアさつ、さつさつ三ぶ六三くだりに、これも浮世の男山、贈る玉章かすくの、されどもつきの戀の山、門訛致「つもる憂き身の思ひます、ついにふかく床にふし、あとや枕のとひぐさや、なじみの人の立よりて、今一度と聲をあげ、呼べと叫べど甲斐ななき、花の香を咲きやらで、都の名残夢として、消へしめうがの物語、げに世の中は戀の浪、思はぬ冥途の旅衣、た

どる心の竹の杖、たき節、思ふに甲斐なき死出の道、ひとり行く身はことほりの、地心の婆に残りしは、わが名をとひし人さまの、其面影のなつかしく、戀路に迷ふ此身をば、なをし一けの手向草、頼む心の忍ぶの、あなたへ走りこなたへ迷ふ、めうぐわのはつと煙のたちのぼる、たどるとすればはてしなき、三ツ瀬川原や白玉の、夜はほのくとおけ鳥、此世の名残惜きとて、恨み鳥のむら鳥、月夜鳥に聞の夜に、鳴ん鳥の聲もなし、背の鳥に朝がらす、かわいくなく鳥、かわいとなきしとりくは、これも都のとりか

○浮世枕づくし音頭くとき

つれなくなりし夕間暮、硯に向ひ筆そめて、いでや此世の中々に、枕の品こそ多かめれ、夜のおとこの御まくら、東まぐらの曙の、旭の色もにほやかに、光源氏のいにしへは、葵の上の膝まくら、御息所の物思ひ、野邊の早蕨崩出る、胸のほむらに焦れゆく、身は浮舟と夕顔の、一夜をいかに長まくら、君ゆへならば嵐ふく、野邊も厭はじ草枕、まつが根まくら磯まくら、音するものは浪枕、夜の衣をやあられせなれば、夜の

衣をかへしては、戀しき人を待宵に、うた、ねなれや肱まくら、高麗唐土の名にし聞く、かの都那の假まくら、夢かうつ、か世の中の、何にたとへん朝ぼらけ、宇治の川波絶々に、あらはれ渡る浮橋や、海士の小舟の楫まくら、梶の葉歌や七夕の、年に一夜の思ひだに、互ちんくちがひのお手、うち、がいのお手枕、しつよい中節「名残は更に月の夜に、鳥が鳴けばもいのおしやる、れいせい節「月夜鳥はいつもなく、いましばしとすがりつき、袂に露の袖枕、戀が積りて口舌事、つむりをとんくはり枕、解けて亂れし黒髪、なかに巻込む小枕や、く、り枕に木枕を、賤が伏家にするとても、ふたりかば憎からじ、たき節「かのみちのくの忍ぶ摺、亂れ初めにし戀衣、今日はな焼ぞ若草の、妻諸共に旅まくら、宿かす家の浮れ女が、顔に白粉塗枕、夜毎にかはるうきまくら、つらき枕はよしなしや、新枕ぞむべなれや、花染絹に伽羅の香を、かけてくゆらす籠枕、それ戀路の歌枕、ねもせで迷ふたへ、

○おんれうのうた 祇園町はやりうた

花は散りても春はさく、死して歸らぬ死出の間、迷ふ

戀路のむごやつらや、どうよくや、ようも殺した其苦
 みを、今ぞ語らん涙川、いとし男の其言の葉に、可愛
 可愛と偽りごとを、まことと思ひおりや一筋に、辛い
 勤もそれはそのく、そりや苦にならで、靡はなれて
 罪なき花を、いつかくと氣のせく事も、皆仇花とち
 り行く此身、今くる花に目がくれて、よふは樂む心の
 憎さ、とかく死んだがさりとは因果、死んで花實のさ
 かぬとは、花みの死んで、死んで花身の咲かぬとは、
 わが身の上に白雪のこる、積る恨は戀の山、ともに奈
 落に連行かん、男の黒髪引たて、ひき寄すれ
 ば、さながら浮雲雲の浮きあし、よちりくくくく
 よちり、くるりくるくくく、くるりくるくくく、
 西に逃げゆく東に立おんれう、東西南北に立ち、てん
 のうつせばわれ一念の、宙宇に迷ひひそうでんま
 で、くまなき有様、男は氣も消へ心も消へて、うろう
 ろとうろたへまはり、ありしねまきをかぶれば、引と
 りくくにげつくくりにげつ、あなたへ廻りこなた
 へ廻り、扱こそ戀路のまことの姿、思ひの淵に沈むぞ
 と、大地をかつばと踏ならし、高橋が姿は夢と消て失
 せにけり、

や、賀茂の祭の見車は、千代の苦むす石車、小野の小
 町に通はれし、四位の少將のきざぐるま、戀の思ひを
 あふせの車、これを木遣でひく地車は、軽いと重いと
 かけて見て、おもひは沈むるい、

○元服曾我

見みるそめしもはや三年、すぐる月日は多けれど、君
 に逢ふ夜は幾度か、内とのものにせかれては、瀧津涙
 や流れん、思ひの淵はそこひなく、よどむと人は白
 浪の、さるんかごのとつとめとて、外の客衆に逢ふ時
 は、さすがよそにはみちのくの、ちかの鹽釜ちかよれ
 ど、あらゆる神もしろしめせ、許さぬものは下紐の、
 關の戸かたきつれなきに、親しむ人もうときはいと
 ど遠ざかり、またき秋の風あれて、千草原もかれく
 に、たれにすがらん道芝の、露の此身の置所、かたさ
 まならでよすがなし、むまれむまる、世々かけて、か
 はり給ふなかはらじと、結ぶ誓の額髪、あまつかさし
 の花よりも、わけてめかれず詠めしに、しづ心なく散
 らさんな、これや五葉のかすならん、とは思へどもと
 この姿、今日ぞ定まる誓を、おもへば、目出たや
 と、しまだにさし、櫛をとり、髪搔わけて月代は、鎌

賀茂の河原の夕景色、東の森に音を鳴くや、蟬の小川
 の水せきて、こゝに立をく水車、米をしらげに月のか
 す、一だんく二だん三だん、だんく揃へて十二か
 ら、落ちゆく水の音までも、をのづからなる歌のこ
 る、小うたなへこやなかねのそれは、とつこいそれそ
 れ化粧の水、涙で袂をしやなどは、小袴をしやんとと
 つた殿子、せめてとの子を一夜も二夜も、一夜もござ
 れのあね子とのよ、都女郎衆にやおとるまい、それ
 さつ、扱其末は遙なる、淀の川瀬のゑいからさき
 や、花は咲いたまことに水車、さ、誰をまつやらくる
 くるとき、さんくあさんく、これも輪廻の小車
 や、浮世はうしの車道、とばはつかしに捨てゆく、か
 たはぐるまで門置敷、わがわるひ、人の心でさかぐる
 ま、かはりぶし、うこんの馬場の日和の日、物見車の下
 籠、ばつとあげたる風車、たきぶし、かの業平の戀風
 に、いつかは君と我中を、扇車の折を得て、忍車の通
 ひ路に、深き思ひは糸車、賤がたまきくりかへし、
 糸の車の末長く、あめつち車ひらきたる、花見車の永
 き口も、きのふは今日と早たちて、げに光陰な矢車

倉風の今様に、鬘うすからす厚からず、烏帽子下よく
 はからはん、わらはにまかせ給へやと、くしげの眉だ
 れたふやかに、いと静にそり給ふ、

○天狗揃おどりくとき

まづ筑紫には彦山のふせん坊、つらくあいせんそま
 が嶽、大とり山にはじやまん天狗、村雲坊、あめを横
 ぎるつちかせ、ぬんきぬきに金毘羅、白峯太郎天狗
 いづなの三郎、播磨に室山鬼が崎、紀伊にやき山、み
 らいさんかんのくらは、日輪坊月輪坊、霞がくれの
 霧太郎、和泉の境にみうらん坊、河内に生駒金剛山、
 みねの坊せん坊、大峯葛城釋迦が嶽、吉野の山に
 はこのくくく小櫻坊、比叡に大だけ川坊、比良の
 峯には、降り積む雪の面白や、峯の白雪旭に解けて、
 今は谷々落し水、駿河のうちには富士太郎、加賀に
 白山つるぎふらんの神通坊、出羽に羽黒のさんかう
 坊、扱又都に愛宕山、太郎坊次郎坊、鞍馬山にはそら
 じやう坊、近江に伊吹のつ五郎、そふして日本六十
 餘州に、じやまんかまんの大天狗、小天狗木の葉天狗
 に至るまで、或は雲間になき雷の、踏む脚下はぐわ
 らくく、どろくぐわつたりびつしやりほん、三

千世界が其中に、また、く間にかくめぐる、あら恐ろしやこわや悲しやぞつとする、さてもさて、物凄じきるい、

○好色あやつり女

くものゑにあれたる駒はつなぐとも、二道かくる仇人を、頼まじとこそ思ひしに、人の偽末知らで、契り初めけんくやしきよ、煩惱こくの三つの綱、つなわれぬるぞ悲しけれ、まづ遊女の其かみは、漢の李夫人のくしとかや、さて吾朝にわたりては、鳥の千歳和歌の前、江口の君を初とし、今は替名のさま、か、かの兼好の筆の跡、めといふものを持つなとて、云ひ置れしもあらまほし、音頭、いよ、好色盛にて、まづ太夫といふよねは、これかんだうの身うへにて、助六紙子の姿なり、さて天神と申せしは、おろかの沙汰よ恐でござる、廿五夕のよやよさり、しよつくりしよがいな、音頭、かこひはんやに引舟や、局禿にいたるまで、意氣地をみかく粹の水、流を汲みて水茶屋の、娘と名付し色女、親の茶屋にふたせあり、素人顔なる白人や、妾ものとしてしつぽりと、小唄、じみで蓮葉できやしやもじて、質をこで一夜の薄情、舞子にこせはそひも

のよ、にかい蓮葉と申せしは、田舎の庄屋の物思ひ、上り土産の紙ぶくろ、はつたい焼米あら麥や、煎茶煙草木綿糸、旅の勞れをはらさんと、風呂屋のさるがかく垢は、よれつもつれつゆだてみこ、すはい針賣鹿子結、うすひきおちやない釜はらひ、八瀬の大原の賤の女が、戀の重荷に肩をかし、いたゞき連た柴賣が、あふささるさにながむれば、はちたゞき、ふなおか山の夕煙、絶ぬ涙を哀なる、とかく菩提に身をあらはして、ほうかいほんのう錢次第、こうた比尼人はつちばい、手を引もどすはたごやの、おしやれ、の下女、用あり顔なる部屋廻り、紙屑買や草履賣、おはらざしなる旅でだち、鈴ふりかけてさ、やきて、しもべ男をちやかざる、小うた、西國順禮、胸に木札のたゆるまも、お、わしにお客のたゆるまも、音頭、杓さし出して拔参り、松原二條の夕ぐれは、すそや袂にすがるゑいゝゑい、この袂にすがるゑい、

○かわり世話盡くとき

雀は百になりても踊忘れぬ、夜目遠目笠の内、すぐちがゑくばいと、ころに水たまる、させいほうせい傘、こりや人に貸すな、傘しわんぼの柿の種、一文惜みの百

いるいゝな、たんだ戯れ遊べ、

知らず、借る時の地蔵顔、なす時の開麗づら、地獄の沙汰もかねがさす、地獄の沙汰もせにがさす、とかく阿彌陀はせにほど光る、娑婆で見た彌次郎の、死んで花身の咲くものか、うでなしのふりすんばひ、梟の背だくみ、午(鶴丸)の真似をする鳥、雁が飛べば又石龜もぢだんだ、石の上にも三年居ればあたゝまる、すぎわひは草の種、かせぐに追付く貧乏なし、貧すりや鈍する、ちやうはんがあてのゝみ、雁は八百矢は三本、開の夜のつぶて、牛にひかれて善光寺まわり、長者の萬燈貧女の一燈、提灯に釣鐘、膝とも談合、たちよらば大木のかげ、暑さ忘れりやかげ忘るゝ、ほろみその夕立、出る杭がうたるゝ、やぶにまんぐわん、藪から棒、かべに馬をのりかけ、負ふた子よりもやれだいた子よ、孫をかほりゑのころ飼やれ、犬骨を折ると應にとらるゝ、親に似ぬ子は鬼子なり、瓜の蔓に茄子はならず、青柿が熟柿とぶらふあはれさよ、猿も木から落つるは、落つるのつるゝ、おつるの南無三寶、上戸のひたひぼんの前、下戸の建たる殿もなし、飲めやうたへや一寸先は開の夜、夢の浮世じや何のその、めつたに騒げや、踊れ、戯れ遊べゑいゑ

今道 都踊くとき終